
ねじまげメガロマニア

草津 辰

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ねじまげメガロマニア

【Nコード】

N8521R

【作者名】

草津 辰

【あらすじ】

12月に入って1週間。大学二年生の主人公は学校に行かず、六畳一間のボロアパートで日々を浪費していた。そんな彼が普通の人間と違うのは「死にたがり」であること、そして「触れたモノを動かす・治す超能力」を使えること。彼は行きつけの骨董屋で異質な人形と出会う。その人形が普通の人形と異なるのは「人間そっくり」で「触れた人間を殺す呪い」を施されている点だった。彼は喜び勇んで、死を運ぶ人形との同居生活を始める。なんの因果か大御所都市伝説までやってきて、話の影にアンドロイドも見え隠れ。メガロ

マニアって関係あるのか、一体なにを捻じ曲げるのか。そして、オカルトなのに怖くないのは大丈夫か。小規模に、なんでもあり気に進んでいく、「死にたがり超能力者」と彼を取り巻く人々の物語です。

第1話 死にたがり与人形

私をなにかにたとえるなら、地球外生命体。広い地球のなかで私だけがのけ者にされているのだ。強烈で明確な仲間外れ。私と、そのほかの人の間にある、どうしようもない境界線は、決して越えられず、かき消すことなどできない。普通と異常は相容れない。

そうだった仲間外れは、冬の季節になるとよりはつきりと、この身に染みわたる。寄り添う相手のいない冬ほど、寒々しいものはない。吐く息のむやみな白さは、どす黒い孤独をより浮き彫りにしているように思えた。

私は六畳一間の部屋で毎日、こんなことを飽きずに考えている。殺風景な部屋を見渡しても、机と本棚など特に目立つものはない。ずいぶん新鮮さと輝きを失くした大学二年生の私。幾多の希望と、おおいなる自由を手に入れるがために入学した大学には十二月に入ってから行っていない。つまり、今月に入ってから、一度も出席していないということだ。いわゆる自主的休講である。なぜそれにいたったか。

すれちがう誰しもが、どこかの誰かと甘くて青い春とかいうものを年中無休で傍若無人に謳歌している大学で、私のような十年間着続けたセーターのようにくたびれた人間が明るく健やかに生きていけるはずなどないのだと。病むのは当然だと。甘ったるい青春に対する反抗心をはらわたの中で煮えくりかえしながら生活することに疲れてしまったのだ。

あやふやで、ぼやけた私の存在は、自分の中ですら臍げで、脆い。明日も生きている自信がない。とりあえず、自主休講丸一週間を迎えた記念に、良かったことでも挙げてみよう。

レポートのことを考えなくなったのは、大きな精神安定を私にも

たらしたことだけは確かだ。それから、面白味は一切ない授業を聞いて人生をすり潰すという無駄を人生から削減できた。そしてなにより、学内にあふれる甘ったるい空気を吸わないでいられるということが幸福でならない。どうにもやはり、私はあらゆる意味で色恋に適性がないのだろう。それはずっと昔から変わらない。

私は優雅な休講貴族。散歩に出てみるのもおつなものだ。一年生の時にバイトをして購入したモコモコファーのジャケットを着て、部屋から出た。行きつけの骨董屋にでもいこうと思ったのだ。限りある時間は有効に使わなければならない。

いきつけの骨董屋、紫陽花は私の住む、耐久年数を超えに超えて久しいと思われるオンボロ屋敷、双葉荘から徒歩五分という近さにある豪邸のような骨董屋だ。休講貴族といっても、甘くない外気ならたつぷりと吸っていたいものだ。だから私はよく散歩に行く。

それも今日が最後だ。空を飾っている茜色の夕日がやけに美しく感じる。

考え事を脳内に張り巡らせながら歩いていると、もうついでにしまった。腕時計を見ると、三分しかたっていない。自然と早足になっていたらしい。焦っているのか。

紫陽花の店先では普段通り、誰が買っていくんだと疑問に思わざるを得ない、私の背丈ほどある狸の置物がわがままボディを披露していた。狸君のかなり立派なメタボリックおなかに触ると、冬の空気にさらされているせいで氷のように冷たくなっていた。紫陽花の看板息子である狸君がおなかを壊さないかが心配でならない。

店内に入ると、雑然と並んだ多種多様の商品と少し埃っぽい空気と、すでに顔見知り以上の関係であるオヤジさんが出迎えてくれた。オヤジさんは坊主頭に青いバンダナを巻くという勇ましいファツションに身を包み、どこかの国の奇怪な木製の人形についた汚れを雑巾で懸命に拭いている。

「おう、兄ちゃんか。どうだア、これ、買つかい？」

ぐい、と私の目の前に突き出された人形は到底魅力のあるものではなかったので多分、私とは相性が悪い、とオヤジさんに伝えると、オヤジさんはそうか、と一言つぶやいて残念そうに人形の掃除を続けた。ちよっぴり胸が痛んだ。

私はほとんど倉庫のような店内をぐるりと一周する。

背もたれの壊れた妙な造形の椅子。

割ったら確実に怒られそうな壺。

極彩色の模様が描かれた怪しげな仮面。

天井の隅には蜘蛛の巣。

いつも通りの紫陽花だった。しかし、なにか心にひっかかる。気のせいだと振り払うには、箆笥の角に小指をぶつけたときの痛みのように強烈な心のひっかかりだ。もう一周してみよう。

そして二週目も半分に差し掛かった時、私はある一つの変化に気が付いた。

いつもは骨董品が繊細なパズルのように積み重ねられている場所に、なにもないのだ。山のような骨董品がなくなった代わりに、そこには薄暗い通路が続いていた。私の脳内レーダーがなにかあるぞと叫んでいるので、その不埒な叫びに今日ぐらい従ってみる。

通路の先には紫陽花の常連である私が見たことのない骨董品がゴロゴロと転がっていた。しかし骨董品パズルにふさがれていたのに予想していたほど埃っぽくない。もしかしたらオヤジさんが掃除をしたばかりなのかもしれない。もういくつか寝ると正月だし、大掃除でもしていたのだろう。

通路の壁には棚があり、そこに並ぶ目新しい骨董品を手に取りつつ、しげしげと眺める。手のひらサイズの赤い蛙の置物はなかなか可愛さだった。赤い肌に浮かぶ黒い斑点と、ぎよろりとした黄色い目玉がプリティ。

オヤジさんに見つかるまえに通路から退散しないと怒られるだろうかと戦々恐々しつつ、奥に進んでいく。埃は全然ないけれど、通路を進むたびに怪しげでジットリとした空気が私の肌に張り付いて

くるようになってきた。普段ならあまり吸いたくない部類の空気であるが、今日という日には、この怪しさが絶妙にマッチしている気がして、私の足は減速することを知らず、歩を進めていく。

歩きなれてくると、蜘蛛の巣や憎き虫どももいないので通路の方が私的には快適かもしれない。私の敏感な鼻が感じる古びた木の匂いも心地良い。

直進、左折、直進、右折、ずっと直進、直進。私は一本道を進んでいく。

こんなに紫陽花は広がったのかと改めて感心するほど、通路は長く、果てがないように思えてきた。この長く薄暗い通路の先にいたい何かがあるのだろうか。地下百階まで続く紫陽花の迷宮でもあるのだろうか。心ふるえる冒険が待っているのだろうか。もしそうだとしたら方眼紙と鉛筆を忘れてしまったことが非常に悔やまれる。地図を書けない今の私が迷宮に挑むのはよしておいた方がいいだろう。楽しみと生存率が半減する。

少し前に熱中したゲームの影響が如実に脳に現れていることに恐れを抱きつつ、少し疲れてきた足を手でもんで、また歩き始めた。紫陽花の最深部を目指して。

ちなみに通路の初めの方で私と運命の出会いを果たしたプリティ赤蛙は私のジャケットのポケットに在住している。オヤジさんから許可がでたら永住してくれても全く構わない。

私の左右にある棚に沢山あった骨董品は、通路を進むほどに少なくなっていく。そのことを少し訝しがるも、私はそれを打ち消すように蛙君をポケットの上から撫でつつ木の床を鳴らしながら歩く。もうこの子以上の運命の出会いは見えないだろう。

直進、右折、ずっと直進、右折、直進、左折　　びたり、私の足が止まる。息をのむ。

ここがおそらく紫陽花の最深部。長く果てのないようにも思えた通路の終わり。行き止まり。おそらく世界小心者ランキングがあれば間違いなく上位に食い込む私の心臓は、激しいビートを刻んでい

た。

暗がりに薄ぼんやりと浮かぶ輪郭。左右の柵には何もなく、通路の突き当りに居る存在だけに私の意識が注がれる。注がざるを得ないほどに、その存在の気配はどろりと濃い。

あれは先ほどから私が常に感じていた、肌に張り付く空気の生みの親かもしれない。二十メートルくらいの距離が私と謎の存在の間に置かれている。心臓の鼓動が耳にうるさい。

少しずつ、半歩ずつ、一歩ずつ。私は突き当りに近づいていく。はやる気持ちが私の心臓をながしるにする。うるさい。バクバク、バクバクと命の音が騒がしい。

後、五歩、五歩だ。五歩であの輪郭を確かめられる。ぐつ、と歯を食いしばり、もし何が起きてもいいように鉄の鎧のように強固な心構えをしながら踏み出していく。

一歩、二歩、三歩、四歩、五歩。

うわっ、と小さい悲鳴が口から漏れた。あれほどガチガチの心構えをしたにもかかわらず。やはり小心者ランキング上位ランカー（自称）は伊達ではない。紫陽花の謎の通路。その奥にあったのは、心躍るような冒険の舞台への階段ではなかった。かの有名な物語の英雄、桃太郎も大歓喜の金銀財宝でもなかった。

人間。ひとりの人間だ。

通路の暗さのせいで全容を詳しくつかむことはできないが、うつむいた人間が突き当りの壁にもたれるようにして座っている。私の肌にぺたぺたとくっついてきたのは、この人間の無念や未練だったのだろうか。近づいてみても呼吸音も聞こえないし、生気も感じないのだ。もしか、にわかには信じたくはないが死んでいるのか。

だとしたら犯人は一人しかない。ポケットを探るも、携帯がない。忘れてしまったようだ。私はジャケットの内ポケットからライターを取り出した。決めつける前に、真相を確かめなくては。

カチン、と音がして百円ライターの明かりがともる。普段はゆらゆらと揺れる頼りない光が、今は真相を究明するために欠かせない

ものになっている。小さな火のおかげで、通路はかすかに明るくなった。

私はしゃがみ、光を座っている人間に近づける。そして見えたのは赤い着物の長い袖。振袖だろうか。背丈も小柄。うつむいているせいで顔は見えない。黒く長い髪の毛が床に垂れている。この人間はどうも女の子らしい。おそらく、人生を歩き疲れることもまだ知らないほどに若い。じわりと、胸に怒りがこみ上げる。

……もしこの子が死んでいたら、私はきっとあなたを許せないぞ。オヤジさん。

私は、ライターを持っていない手を女の子にそつと近づける。体温の有無を確かめたい。頼む、生きていてくれ。君は死ぬには早すぎる。指先がうなじに触れようとした、その瞬間、

「そいつにさわんじゃねえ！ 馬鹿野郎！」

伸ばした手が反射で縮こまる。後ろを向くと、ライターのちっぴけな光など比べものにならない懐中電灯の強い光が私の目を刺激した。光源を片手に肩で息をしている大声の主はオヤジさんだ。

着物の女の子に近づくと前に私が立っていた場所ですどく私を睨みつけている。その迫力には有無を言わさないものがあつた。私に通路を荒らされた怒りか、秘密を暴かれかけている怒りなのかかわからないが、いつもの穏やかさがオヤジさんから消し飛んでいるのはわかる。

「オヤジさん、この子、オヤジさんが……」

内心で恐怖と格闘しながら、言葉をひねり出した。でてきた言葉はひどく震えていた。

「……ここは俺の店だ。それ以外にあると思うか」

雷が脳天にずばりと落ちてきたような衝撃が私の全身を駆け巡る。「警察に連絡します。いいですよね、見つけた以上、俺は黙っていられません。ちゃんと、この子に謝って、罪つぐなって、そしたら、また紫陽花に帰ってきてください」

「なに言っただやがる、そんなことすんなよ。わかるだろ」

この人は、本気で言っているのか。私のなかにあった、オヤジさんへの信頼が崩れていく音が心臓の鼓動に混じって聞こえてくる。ガラガラ、ガラガラと、私の心は急激な変化に耐えられず、なかば工事現場の瓦礫のようである。あまりにも唐突な出来事に目頭が熱くなってくる気配を感じる。

「わかりませんよ……年端もいかない女の子を、こんなカビ臭いところに閉じ込めて……。これが罪じゃなかったら何を罪というんですか」

「……うむ。そうだな、それは間違いなく罪だろうな。執行猶予もつかんだろう」

オヤジさんが神妙な様子でうなずいた。

ああ、もうオヤジさんとコーヒを飲めないのか。煙草を吸えないのか。

よりによって今日、こんなことになってしまっなんて。

「じゃ、外に出て電話……します。邪魔するのなら、オヤジさんを殴り倒しても！」

「……ああ、好きにするといい。邪魔なんてしねえ。警察も息せき切って来るだろうさ……その嬢ちゃんが、兄ちゃんの言う、人間だったらな」

人間だったら？ 違うというのか。じゃあコレはなんだ。いったいなんだ……あ。

「この子……売り物、なんですか」

「ああ、そういうことだ。まったく……腐敗臭もしてないだろうに。すぐわかれ、阿呆。人形だよ。その子は」

そんな馬鹿な。人形。これが人形だというのか。ならなぜ。

「なぜ触ったらダメなんです。そんなに怒るほどに大切な人形なら、なんでこんなところに」

私がそう尋ねると、オヤジさんは顎に手を当てて、目をつむった。そして目の代わりに口が開く。

「……………よくあるだろ。骨董屋に一つはさ。『いわくつき』って

やつが。その人形は、ありていに言えば 呪われている。その子に触った奴は全員、いいか、全員だ。死んでいるんだよ。そういう触れ込みだ。ほれ、よく兄ちゃんの周り、見てみな」

オヤジさんの懐中電灯が僕の横にある棚を照らした。

そこには、びっしりとお札が貼られていた。そのお札たちは私には読むことのできない文字で書かれているが、冗談で書かれたものではないことを察することはできた。

「そいつが俺の店に来た時……もう二十年くれえも前だ。俺が兄ちゃんみてえに若かった頃、お金はいくらでも出すから、どうか預かってくれと男がその子を持ってきたんだ。呪いのことも聞かされたが、骨董屋を始めて間もなかった俺は飛びついたさ。金はあっても困ることはねえしな。」

んで、都合よくこの建物には延々と続く倉庫があった。預かってもいいが触っちゃならねえもんなら、お前さんが倉庫の奥まで運んでくれや、って言ったら男はもう、すごい笑顔になってな。すごいって言っても大笑いしたわけじゃねえぞ。心の底から安心しきった笑顔だよ。そうとう追い詰められてたんだなあ」

「それで、その男の人は」

「……死んじまった。関わった人間として墓参りに行ったよ。そのあと、神社に行ってお札を買いまくった。気休めかもしれないが、ないよりやました。気は休まる」

触れたら死ぬ。そういう呪いがある人形。だから、この通路にはどこか違う空気が充満していたのか。人形の異常な存在感も納得がいく。

事態の正確な認識が済むと、オヤジさんへの申し訳なさが泉のように湧き上がってきた。

「すみません、オヤジさん。勝手にオヤジさんを犯人扱いして……」
「がっはっは、と豪快にオヤジさんが笑う。」

「いいさ、気にしてない。若いころは思い込みも激しくなけりや、人生面白くねえよ」

オヤジさんが許してくれたことに私はほつと息をついた。

だが、湧き上がるもう一つの感情を私は止められそうにない。

呪い。死ぬ、呪い。いわくつき。

「あの……この子っていくらで売ってるんですか」

「ん？ 値段なんてつけてねえよ。捨てるにもさわねえし、お祓いしようにもそれはそれで呪われそうだしなあ……引き取り手がいるもんなら喜んで、つてとこさ」

オヤジさんは深いため息をついた。そうか、それならちようどいいい。

「じゃ、俺がもらっても問題ないですか」

「ごとり、とオヤジさんの懐中電灯が床に落ちる。そのまま転がって、私の足元にやってきた。煌々と、暗い通路を照らすただ一つの明かり。」

「ばつ、馬鹿言っでんじゃねえよ。兄ちゃんを死なすわけにいかん」「死にませんよ。俺、そういうのへの対処とか呪いとか勉強してるんです。対策もばつちり、どんとこいですよ。ね、オヤジさんの心配事も減るし、俺はこの子を手に入れられるしで、良いことしか起こりませんよ」

「しかしな……」

「もしやばそうだったら、お祓いに精通してる友達もいるんでそいつを頼れば大丈夫です。お願いします、この子を俺にください！」

私は立ち上がり、腰を直角に近いほど曲げてお辞儀をした。まるで義父に娘を貰い受けることを彼氏が請う場面がごとき誠実な礼である。

「……わかった。でもな、絶対、手遅れになる前になんとかしろよ。自分より若い奴の墓、参るなんて御免だからな」

答えるオヤジさんもなんとなく父親の風格のようなものを漂わせていた。

「はい、ありがとうございます。じゃ、オヤジさんは先に戻ってください。移動の途中でこの子に触ると、まずいでしょう？」

オヤジさんは迷うそぶりをまだ見せていたがすぐに、ああ、と眩
き通路を戻っていった。オヤジさんの足音がゆっくり遠のいていく。
そして、もうこの通路には、私と足元のこの子だけ。

今日、この日に、

命を投げ出そうとしていた私と、
命を奪う呪いを持った人形だけ。

声を押し殺して、私は笑う。力を込めた腹が震える。もはや、こ
れを運命と言わずになんと称したらいい。ずっと考えていたんだ。
ただ死ぬのでは、つまらないと。この二十年間生きてきて、負った
傷の分、疲れた体の分、この世界から解放される方法くらい面白味
のあるものにできないかと。生きていて楽しめなかったのなら、死
ぬという幻想を見ていたいと。

そんなときにこの出会いだ。

私はこの出会いのためだけに生まれたのかもしれない。

私は懐中電灯をつかんだ。人形を照らす。着物は年月を経て汚れ
てはいるが、その真つ赤な色彩は薔薇のごとき妖艶さを有していた。
今すぐに動き出しても不思議に思えない。動いたとしても、きつと
それが自然のように思うだろう。

激しい興奮を抑えつつ、私は、そつと、やさしく彼女の頬に触れ
た。まるで人間のようにその肌はやわらかかった。

触れた。

私は彼女の呪いにかかったのだ。死への線路に立った。もう、途
中下車はできない。このまま地獄の何丁目かまで連れて行ってくれ。
地球外生命体には地球はつらすぎたんだ。

私を救済してくれる彼女の顎をくいと上げ、顔を見る。いわゆる
日本人形のような、筆で書かれた顔ではなかった。服が和装なドー
ルと言ったところか。精巧な作りで、表情は目を閉じ、安らかに眠
っているように見える。天使とか巫女とか神聖なイメージを沸かせ
る柔らかで清純な顔だ。

とても人を殺す風には見えないが、オヤジさんは嘘をつかない。

冗談を言う時の癖も出ていなかった。間違いは、ない。……けつこ
う可愛いとか、思っている場合ではないのだ。相性は、良いにこし
たことはないけど。

私は彼女をおんぶする。彼女の着物に住み着いたカビの臭いがけ
つこうすさまじい。呪いより、こちらの方がきついのではないか。
仮にも女の人を模したモノにくさい、と直接的に言うのは気が引け
るので、個性的なスメルと言うことにする。ああ、一歩歩きたびに
揺れる彼女の袖から匂い立つ個性的なスメル。芳しいスメル。これ
が俗にいうフェロモンというものか。もう私はメロメロである。

通路は一本道だったので迷う心配もない。増えた荷物も蛙君と人
形だけなのでたいした疲れも感じない。人形である彼女の重さは人
間とはまた違った重さだった。体温のない肉体から伝わってくるの
は冬の空気と同化したような冷たさだ。あんな暗がり押し込まれ
て、さぞ寒かつたろう。けど、もう大丈夫だ。もうすぐ、この長い
通路から出してやれる。

歩き続けて、一時間ほど経っただろうか。私は暗い通路から出た。
店内の電灯の明かりが闇に慣れた目に優しくない。目をしばたかせ
て回復に努める。オヤジさんはいつもコーヒーを出してくれるカウ
ンターに座っていた。

「おお、無事に出てきたか、兄ちゃん」

オヤジさんは吸っていた煙草を灰皿に押し付けながら言った。

「ええ、呪い、即効性はないみたいですよ」

「あー……。呪いな。ほんとに何とかしろよ。変化あつたら俺にも
報告しろ。良い医者を紹介してやるから、心も体も任せろ」

「わかりました。その時はお願いします」

私は彼女を落とさないように気をつけてお辞儀をする。彼女の髪
が私の顔の横に垂れた。

「はあ……。なんだかな。その子に呪いがなけりゃ、お前らまるで兄
妹みたいだぜ」

「はは、こんな綺麗な妹をもつたら大変でしょうね、色々」

妹か。私は妹に殺されるのを望む兄ということになる。なかなか病んだ家族だ。

「せいぜい変な男に連れて行かないように気をつけるんだな。まあ、逆にそいつが男をあの世に連れて行っちゃうかもしれないけど」

私は苦笑いを浮かべた。オヤジさんは気が付いていない。今、まさにその事態が起きていることを。この地球上で一等変な男である私が彼女を家に連れ込んで、そして連れて行ってもらうのだ。あの世へ。私の魂胆をオヤジさんは知らない。

そうだ。家に帰る前に聞きたいことがあった。

「さつき赤い蛙の置物、持ってきてちゃったんですけど、いくらですかね」

「ああ、あの毒々しいのか。いいよ、あんなもん気に入るのは兄ちゃんくれえだ。もってけ」

「ありがとうございます……大切にします」

「んだよ、かしこまって。冥土の土産じゃねえからな。生きるよ、兄ちゃん」

私は自分でもどのような形を作ったのかわからない歪んだ笑顔をおヤジさんに向けて、紫陽花から出た。おそらく、もう二度とこの敷居をまたぐことはないだろう。

第2話 致死量の希望

外はもう夜の様相。冬のせいで日の沈みが早いのだろう。雲のない夜は月が綺麗だ。

道中、まばらな人目を適度に気にしつつ、私は自宅に戻った。双葉荘の住人と鉢合わせしなかったのは幸運だった。私の究極の自分勝手に他人を巻き込むわけにはいかないし、逐一、これは呪いの人形だから触ってはいけないと説明するのも面倒だ。

なにはともあれ私の部屋に新たな住人がやってきた。私は彼女を畳に下し、壁に寄りかからせた。明るい室内でまじまじ観察すると、彼女の異様さがより際立った。これが人形だと一目で思える人間がいるのかというほどに、彼女の容姿はあまりにも人間すぎるのだ。部屋で対面している様子を住人に見られたらあらぬ噂が立つレベルだ。まあ、私はこれから死ぬので関係ない。

そこで気になるのが、私を殺してくれる呪いとはどういうものなのかということ。今わかつているのは、触れたものを殺す、即効性のあるものではないという二点。二十年間、暗い通路に放置されていたからインターネット上に有力な情報があるはずもなく、オヤジさんの話の通りなら手掛かりはすでに死んでいる。完全に手詰まりだ。呪いがなにかということを知ることができない。だがそれは、私が地球内生命体だったならの話。

私の話は現実とかいう憎らしいものから大幅に乖離する。この世界で夢とか魔法とかいわれる超常現象の類を私は所有している。

だから呪いという曖昧な概念も全肯定する。

あまり使いたくなかったが、仕方あるまい。

私は彼女の前に座り、右手を彼女の頭にそつと置いた。大丈夫、いつも通りに。触ってみて得た直感では、私とこの子は抜群に相性がいい。きつと今まで試行してきた作業のなかで一番やりやすいはずだ。

右手に神経を集中させ、脳みそを急速回転させる。一分と経たずに頭のどこかで、歯車が噛み合うような音が聞こえた。いい感触だ。成功したという確かな手ごたえを感じる。私は彼女の丸く形の良い頭から手を放した。少し緊張しつつ、私は姿勢を正す。

一拍おいて、彼女の閉じていた瞼が持ち上がり、透きとおった大きな瞳があらわになった。

「あなたは、わたしをおぶっていた方ですか」

小さな鈴の音を思わせる澄んだ声が呆然とした調子で話す。彼女の声だ。

「そう、体の調子はどう。変な感じとか、痛みとかはないかな。俺も感覚でやっているから不安が残るんだけど」

「はあ。特には。いえ、わたしは人形のはずでは……。なぜわたしが寒さを実感するのです。あら……。話せるだけでなく手も自由に動かせるとは驚愕の境地ですね」

そういつて彼女は自らの髪を慈しむようになでた。雅やかなしぐさは和装とよくマッチしている。

「わたしにやすやすと体をゆるす時点でただの殿方ではないと思っただのですが、仙人様なのでしょうか」

彼女は小首をかしげる。

「俺は仙人じゃないよ。不真面目な学生かつ超能力者、みたいなもんかな」

「ちようのつりよく」

「そう、けっこう便利だぜ。こつやつて物言わぬ物に質問ができるしな」

「わたしと話したかったと……。物好きな人」

「はは。褒め言葉として受け取っとく。それに実際好きだからな、

物」

私はきよとんとしている彼女の目を見つめて言う。

「さて、キミは俺をどうやって呪い殺してくれるんだい」

彼女の眉間に皺がよる。私が呼び覚ました動作は滞りなく、彼女の感情を表現する。

「……あなたは死を望んでいるのですか」

「うん。だからキミに触れた。もうしんどいんだ。歳だけ大人になって、手に入れた自由も持て余し気味だ。生きている間、人と違い続けた俺は終わり方も大多数とは異なるべきだろう。だから一種の娯楽さ、これは」

私は煙草を啜え、火をつけた。けほ、と彼女がむせたので焦って携帯灰皿で消火活動を行う。

「ごめん。この部屋で他人への気遣いなんてしたことも、ないから、つい」

「いえ、わたしは人形ですし、どうも煙草の匂いは嫌いじゃないみたいです。すこし驚いただけ。死が……娯楽、ですか。やはり変わっていますね……あそこから連れ出してくれた恩人を邪険にはできません。殺してしまう前に、教えてあげます、わたしの呪いのこと」
彼女は弱々しい笑みを浮かべた。やるせなさ、のような表情。

「ありがとう、じゃあ頼む」

「はい、では……わたしは『触れた人間を殺す呪い』を施された人形です。この呪いは、今までわたしに触れた人を誰一人として殺し損ねていません。それほど強力な呪いです。あなたに入り込んだ呪詛は今、この瞬間もあなたを蝕んでいます。おそらくあと一週間もあれば痛みに悶え苦しんで、あの世行きです」

一週間か。それは困る。

「……できるなら今日中に死にたいんだけど、可及的速やかに」
「ふむ。可能です。……わたしを抱きしめてください」

おい。いったい突然、なんてことを言い出すんだ、この子は。

ただの呪いの人形だった頃ならあまり意識せずに済んだだろう。

けれども、今はもう私がただのモノではなくしてしまった。『イキモノ』にしてしまった。女の子を抱きしめるなんて私には分不相応である。第一、抱きしめ方もわからない。

「いや、なんか流石にそれは照れるんだけど」

私がそう言うのと彼女は素早くうつむいてしまった。

「ふ、不埒な意味ではありません。わたしの中にある呪詛をあなたに注ぎ込むことで侵蝕を早めることができます。密着が不可欠なのです、それには。そうすればすぐさま、死です」

彼女が両手の人差し指をつんつんしながら語る様子に嘘は見受けられなかった。いたしかたないか。呪いを扱う本人が言っているのだ。それに従うしかあるまい。むやみに鼓動を早める私の心臓よ、よく聞け。これが、お前が激しく動ける最後の時なのだ。思う存分暴れるがいいさ。

私は彼女の肩に両手をおいた。小さな肩は、その大きさに見合った微細な温もりを持っていた。自分でもよくわからない曖昧な能力。わかるのは、人形だった彼女が生きていること。それだけ。目の前の大きな瞳はしつとりと憂いを帯びていた。

「どうすればいい。俺は、その、慣れてないもんでね」

「ただ、この身をあなたの身に引き寄せてくだされば。あとは、おまかせください」

彼女の言葉にうなずきを返して、私は彼女を抱き締める。痛い思いをさせない程度の、ごく軽い力で。しかし、抱きしめる強さに関係なく、彼女と密着している事実は私を大いに動揺させる。カビの臭いさえ感じられないほどに。恥ずかしさから、私は目をつむった。「……では。後悔は、未練は、あなたの心のどこにもございませんか。今なら残り一週間の人生を謳歌するという選択をすることもできますよ」

「そんなもんがあつたら、キミを連れ込んだりしないさ。あ、でもな」

「はい、なんですか」

「俺が死んだあとな。キミは一人でここに残ることになるかもしれない。俺が勝手に起こしたんだから、俺が死ねばキミも自然と止まるかもしれないけど……」

「ご心配には及びません。もし残りましたら、わたしもすぐに後を追いますので。恩人を一人で逝かせたりはしませんよ。今は、この手で自分を壊せますしね」

彼女の声は、明るかった。その声はまるで、やっと死ねる、と嬉しんでいるように聞こえて。相性がいいのは、お互い死にたがりだったからなのかもしれない。

呪いをこめられた人形の思いの丈を想像することなんて私には到底できないが、彼女の苦しみを一欠けらだけでも理解できたらいいなど、死ぬ直前になって考える。まあ、彼女も一緒に来るのなら、あの世とか三途の川あたりでトークすれば良いか。

本当にそれらが実在するのかなんて私にはわかりかねるが。

「わかった。じゃ、先に逝って待つてる」

「はい、向こうに茶屋でもあるといいですね。わたし、もつとあなたと……」

「ん？」

「いいえ はじめます」

彼女の手が私の体を抱きしめた瞬間、部屋の電球が爆ぜた。六畳の部屋を暗闇が支配する。双葉荘前の道路を通る車の走行音も聞こえない。無音。圧迫感。私の耳に届くのは、彼女と私の息遣いと、私の鼓動。

次に感じたのは寒気。体の一番奥の奥の芯の部分を氷水にどつぷりと漬けられているような寒気。吸う息もうまく肺に届いてくれない。あらがえない息苦しさが私にのしかかる。呼吸のリズムが乱れに乱れ、興奮した獣のような呼吸になってしまう。

部屋がおかしい。

彼女が呪いを意識的に解き放っているからなのか、住み慣れたぼろい部屋に漂っていた人間味とか親しみとか、プラスの感情がすべて

て拭い取られてしまっているのである。

すべてがマイナス。感情の大恐慌、大暴落。赤字国債も齒が立たないのではないかと勘繰ってしまうほどのネガティブオーラが私の部屋を支配しているのだ。

これは、確かに死ねそうだ。楽に、ではなく、思い切り腹の底から苦しんで。

死よ、早く近づいてこい。私の魂を地の底まで持って行け。

独りの夜も、今日で終わる。私は目を閉じ黙り、ただ彼女の仕事が終わるのを待つのみ。

さあ。さあさあさあ。

「あ、あらっ……ふっ、ふんっ……ぬっ」

独りの夜も、今日で終わる？

彼女の様子が妙だ。相当力んでいるのか、私の体を抱きしめる強さがどんどん上がるも、一向に私は死にそうにない。恥ずかしさで死にそうなほど心臓は痛い、悶えるような苦しみも訪れないし、緊張と暗闇に慣れてきたら呼吸もだいぶ落ち着いてきた。今なら彼女に話しかけられる。彼女の表情が読み取れるくらいには目が闇に慣れてきたし、月が出ているのも幸いだっただ。

「あの、すぐさま死、のはずでは……」

「え、えっと、たちどころに死ぬはずなんですけど……お、おかしいな、えい、えいやああ」

彼女の腕にかなりの力が加わっていることが彼女の体の震えからしてわかるのだが、体格も小さい彼女の全力ハグは成人男性である私の肉体を圧殺するには全く至らない。抱きしめ殺そうとしているのではないらしい。では一体どういうことか。

「調子、悪かったり？」

私は彼女に尋ねる。彼女は私の腕の中でかぶりをふった。暗がりに彼女の長い黒髪が融けている。

「いいえ、呪いの調子は万全です……特技の電球割りも発動しましたし……えと……」

ばつが悪そうにしている彼女から視線を外し、私は無残にも砕け散り、畳の上に落ちた電球の残骸に目を向ける。あれ特技だったのか。心霊現象とかって、彼女の的に一種の宴会芸レベルなのだろうか。一番！ 呪いの人形です、ポルターガイストやりまーす、あの、自信ないんですけどお、皿の一つでも割れたら盛大な拍手お願いしやつす！ みたいな……とかくだらないことを考えている場合ではないぞ。

呪いは確かに発動している。しかし私は死なない。導き出される答えは。

「俺にはキミの呪いが、てんで効果ないってことか」これしかあるまい。

その言葉を口にした途端、私の腕の中の彼女が震えに震えはじめた。震度6強を観測するかもしれないほどのワナワナっぷり。

ひとしきり震えたのち、彼女は私からじりじりと距離を取り、壁際に戻っていた。目が点になり、頬には汗が浮かんでいる。口元を両手で押さえて止まらない震えと必死に格闘しているご様子である。私を見る彼女の目には、おびえとも動揺ともつかない色が浮かんでいた。

「そ、そそそそそんなばきやな」

あ、噛んだ……。由緒ある呪いの人形でもテンパるんだな……。ということとは、呪いが効かないというのは彼女にとって相当に変なことなんだろう。ちよつと落ち着きを取り戻させてあげないと可哀想だ。ここは微笑みつつ、敵意がないことをアピールしないと。

「あの、大丈夫？ 水でも飲む？ 寒いからほどよい以上に冷えるけど」

「いや、いやいやいや！ なんでそんな余裕しゃくしゃくなんです！ 動悸が激しくなったり、骨があらぬ方向に曲がったり、信じられない量の吐血をしたり、ふいに目が飛び出したりなどの諸症状はないんですかあ！」

彼女が並べたおぞましいワードの数々は今までの呪い例の一部な

のであるうか。

だとしたら、本当に恐ろしい呪いだ。

私には効いてないけど。

「なかつたし、今もないね」やんごとない事情ゆえの動悸の異常は隠すことにした。

「うつつ……末代まで祟れるくらいの出力だったのに、なにゆえ……なぜ死なないのです」

私は呪いの人形に睨みつけられているのだが、今にも泣きだしそうな彼女の表情に畏怖を感じるわけもなく、とりあえず傍にあったミネラルウォーターを手渡す。

彼女は水を勢いよく喉に流し込んだ。すると、幾分か気持ちも安定してきたのか当初のたたずまいが戻ってきていた。なんという回復力。彼女は小さな咳払いを一つして、

「なんとなく、わかつた気がします。仮説ですけど。……あなたって希望、持ってます？」

と私に言う。私と限りなく遠い言葉だ。

「とくにないね。将来の夢とかもない。絶望に近いものなら持つてる気はする」

「ああ、それです」

彼女はびしっと人差し指を私に向ける。

「え、なに、どういうこと」

「……わたしに込められた呪詛がなぜ人間を呪うか、わかりますか」「いや、俺は呪いを使う人でもないしな、わからんよ」

オヤジさんに呪いについて勉強していると言ったが、あれは嘘っぱちであった。

「対象を不幸にしたいから、絶望を与えたいからです。そういう風にできています。では、もともと不幸や絶望を持っている人にわざわざ与える必要があるでしょうか」

「……ない、かもな」

「そうです。放っておけば死ぬ人間をわざわざ殺す理由などありま

せん。不幸だと実感している人間に不幸を実感させてもそれは日常です、いつものこと、なのです。幸福や希望を日常にしている人間にしか、不幸は非日常に見えない。つまり、おそらくあなたが死ぬには、不十分なのです。希望の量が。だから……呪いが体を侵蝕しないのです」

「そんな、なんだそれ。俺は死ねない？ キミは俺を殺せないのか」
二十年待つて、やっと見つけた運命が手のひらから、さらりと零れ落ちて。そして、

「ええ、一週間たつても、一か月たつても。あなたが致死量の希望を手に入れない限り、無理です。すみません……ごめんなさい、恩を、返せません」

私は女の子を泣かせてしまっていたりする。さっきの水が彼女の目で循環して、塩気をふくんで目から落ちる。ぼたり、ぼたりと畳の表面を叩く水音。

人形だった彼女に『泣く』という行動を与えたのは私だ。珍妙で奇天烈な能力を持つ私などと出会わなければ、この子は一生、泣くという行為を実感せずに済んだはずなのである。

私はまた、やってしまったのだ。自分を救うがためにイキモノを泣かしてしまった。

もしこれから私が呪い以外のごく普通の方法で死んだとして、残された彼女はまた泣くだろうか。

出会って数時間の私のために泣く、やさしい人形は涙を流すだろうか。

私のために泣いてくれる奇特な、人形。

そんな彼女を自分勝手に外に引っ張り出して、感情を発露させるよう施して、

それで独りにするのか。

私は、人間を愛せない。そういった甘いものは知らない。私の人生は限りなくビターだ。

私は、モノを愛す。昔から物持ちがいいことがとりえだ。それで

いつの間にか変な能力を手に入れて、散々な目にもあった。惨い目にあわせてしまった。

それと同じことを私は彼女にしようとしている。辛い思い出を与えようと、している。これじゃ、呪いをかけているのは私ではないか。もう、他の方法で死ぬわけにいかない。

「あやまらないでくれ」

彼女は着物の袖で目をこすっている。

「で、ですが、死にたいのでしょうか？　なのに……」

「……死ぬのは延期にするよ。希望なんて、見つかるかわかんないけどさ。見つけるのも、まあ、娯楽と言えなくもないだろ、自分探しみたいで」

と言っても彼女が自分探しなんて知るわけがないか。

「ああ、あの思春期を乗り越えかけている青年が放浪の旅に出て、心身を追い詰めながら見失いかけていた自分自身というものを再認識して、長い大人の階段をのぼり始める」

「詳しいな！」彼女の知識レベルが把握できない。

「……ずうつと昔に、聞いたことがあります……するのですか、自分探し」

そう呟いて笑う彼女は、風が吹いたら羽のように飛んでいきそうなほど脆く見えた。

「ああ、もうしばらく生きてみるよ。余生みたいな感じでさ」

「そうですね……ええ、よいことだと思います。わたし、応援しますよ」

けれども彼女の涙をせき止めることには成功したので、よしとする。

私は考えなくてはならない。放棄していた、これからのことについて。死ぬはずだった予定が狂って生まれた、疑似的余生の間に私はなにをするのかについて。希望なんていうものを手に入れる方法があるのかについて。そして、私のために泣く彼女のことについて。よく思索する前に一度、頭をさっぱりさせたい。いきつけの銭

湯が近くにあるのだが、彼女を突然一人きりにするわけにもいかな
いか。

ふと、さっぱり関係で思い出した。私よりも先に洗わなければい
けないものがあつたではないか。私は押入れを開け、洋服が適当に
しまつてある透明な収納ケースを引つ張り出した。ケースのふたを
開け、暗がりのなか、手探りで厚手のトレーナーとジャージを取り
出す。

「ほら、これに着替えな」

彼女に手渡す。彼女は不思議そうに受け取り、私を見る。

「あー、いや。女の子に言いくいんだけど……その着物、すげえ
カビ臭いから。明日にでもクリーニングに出すよ」

彼女は着物の袖に鼻を当てると顔をしかめた。

「うは、確かにっ。かなり年季入ってますね、我ながら……でも、
着物のクリーニングって結構、お高い気がしますし。もしあれだつ
たら捨ててしまつても」

「そんなの気にすんなよ。これから一緒に暮らすんだからさ」

「え、一緒に。わたしと？」

彼女は意外そうに言う。

「あ、ごめ、嫌だつたらもう一度、紫陽花に置いてもらうか？ 金
持ちの屋敷レベルにデカいからオヤジさんに事情話せば一部屋くら
い貸してくれると思うし」

オヤジさんは私の能力を知っている数少ない知人だ。だから彼女
が動いているのも不思議には思わない。呪いを持つ彼女が暮らすと
したら、私の家が紫陽花だ。

少なくとも呪いを被うことが可能になるまでは。

「いやいや、いえ滅相もない。住みたいですよ、あなたさえ良ければ
常人の感性だつたら呪いの人形と一緒に住むなんてまっぴら御免こ
うむるはずなので……だつて、いわば人殺しなのですよ、わたし。
やっぱり、可笑しな人です」

彼女は眉を八の字にして笑顔を浮かべている。

「そうか？ キミは優しそうだから、別にかまわないけど。それに殺すのは呪いだろ。その呪いが俺には効かないんだ。キミを嫌う理由なんてどこにもない」

「あら……では今晚、枕元にそつと立っても嫌いませんか？」

「それはキミじゃなくても怖いから遠慮してくれ」

私たちは声を合わせて、他の部屋に聞こえないくらいの声で笑った。淡い月明かりだけを頼りにしている部屋の中で。

それは、私がこの部屋に越してきて、初めて、独りではない夜のことだった。

死のうとした日。私の『独り』は当初の予定と大きく違う、『呪いの人形との同居生活』という形で終わりを告げたのであった。

第3話 湯けむりと都市伝説

同居する話がまとまったところで、私は彼女に留守番を頼み、コンビニに電球を買いに行き、その足で銭湯へ向かった。紫陽花の深部を歩いた時に埃にまみれてしまったからと、彼女に「わたしの着物は洗うのに、あなたが遠慮してお風呂に行かないのは変です」と言われたからだ。そのありがたいお言葉に甘えることにしたが、暗い部屋に何時間も待たせるのは悪いのでサッと入ってサッと出ることにする。

双葉荘にはキッチンはあるが風呂はない。

だから必然的に双葉荘の住人は、『華^{はな}の湯』の常連になる。

双葉荘から徒歩三分ほど。湯冷めの心配もない。

のれんをくぐり、男湯の方へ進んだ。古く歴史のある銭湯なので番台がある。なので当然番頭さんも存在する。脱衣所の入り口で私は風呂道具一式を突っ込んであるプラスチック製の桶に入れておいた小銭を番頭さんに渡す。

「へい、どうも。あんた、なんか普段より早くないかい？」

番頭さんは私より年上（あくまで私の推測）のお姉さんだ。黒い短髪とギラギラしたツリ目が特徴的。全身から姉御風を無意識に吹かす特性を持っている（あくまで私の主観）。

「ええ、今日は少し早めに……」

にんまりと笑う番頭さん。

「ああ！ あんたにもついにコレができたのかい。もうこれじゃ隅に置いとけねえな」

番頭さんはやにやしながら小指を立てて、私に見せつける。

「ええっ！ いや、ちが」

「うんうん。そら良いわ、あがったらフルーツ牛乳おごってやるよ。双葉の人らには内緒で」

腕を組んで爽やかに笑う番頭さん。

その爽やかさは全く見当はずれなのだが。いやしかしありがたいな……フルーツ牛乳はありがたいな！ いやまで、待つんだ。釣られなくてはならない。ああ、でも美味しいだろうな。格別だろうなあ。フルーツ牛乳……いや駄目だ！ 彼女についての噂は極力立てない方がいい、我慢だ。何を隠そう、私は我慢強い男ランキングでも上位ランカーなのである。

「いや、違いますっ！ 恋人なんていません！ オゴラナクテいいです」

片言になった。

「えっ、ほら……だって、そのコンビニの袋って、そういうこと……だろ？」

なぜそこでほのかに顔を赤らめる。どういうことだよ。電球だよ。これは電球だよ。

「俺にできると思います？ 俺ですよ。よく見てください、この身から間欠泉のように噴き出ている禍々しい負のオーラを……彼女できてハッピーな奴に見えますか」

番頭さんよ、とくと再確認するがよい。生誕から今日に至るまでずうっと春とは無縁な男の姿を。私は全身全霊の負のオーラを放つたが、番頭さんは意に介さず、

「……見えるね。なんかあんだ、ちよつと目が違う。雰囲気つっぴかな、なんか違う。恋人じゃないにしても良いこと。あつたんじゃねえか？」

そういつて微笑んだ。目？ 雰囲気？ 自分ではそれらの変化に全然自覚がない。

「ま、深く詮索はせんよ。アタシの気分がいいから素直におごられとけ、お得意さん。ああ、電球、預かつといてやるからよこしな」
「あ。どうもすいません」

私は番頭さんに電球を渡す。はいよー、と和やかに番頭さんが受け取る。良い人だなあ。

「……いや、ちよ、待て、気づいてたんすか！ 袋の中身！」

「たりめーだろ。ほれ、この袋スケスケじゃねーか。アンタをからかうのはアタシの趣味だ」

「趣味悪いっすよ！」

「知ってるよ。でもさ、辛いんだぜ言うの、アンタに恋人ができたなんてさ……嘘でも」

ええっ、番頭さん……。そんなまさか。いじらしい密かな恋心を私に対して……。

「冗談だ」私たちの声は寸分狂いなく重なった。

番頭さんの豪快な笑い声を背にして、私はとっとと脱衣所で服を脱ぎ、風呂に向かった。あの人は恐ろしい。あの短い会話の中で私の心が七転八倒以上したぞ。しかし、あれで一部に番頭さんの熱烈なファンも居るといふのだから世の中わからない。

風呂から上がり、服を着た私が脱衣所の入り口に行くと、番頭さんに声をかけられた。まだなにか私をからかう材料があるのだろうか。

「そんな怯えた目になるなって。もう冗談は言わねえよ、今日は。それはいいとして、あのさ、ひとり暮らしの人間が突然原因不明の死を遂げるって噂、もう知ってるか？」

「いや、聞いたことないですけど。怪談かなにかですか、それ」

番頭さんは腕を組んでしかめっ面になり、うーんと唸った。

「いや、アタシも詳しくは知らねえんだけど、こないだお客さんから聞いたんだよ。ちよっと真剣に聞いてくれな。アンタにも無関係じゃないかもしれねえ。」

そのお客さんには病気にも無縁で健康だった友人がいたんだと。そのうえ人格者で、恨みを買うようなタイプでもない誠実な人だったらしい。

その友人と飲んだ次の日に、居酒屋で借りたお金を返すために友人の家に行ったら、玄関の鍵が開いてたんだ。それでお客さんは普段通り、断りもなく友人の部屋に入った……けど呼びかけても、返事がない。リビングにもトイレにもいない。念のためベランダも確認したけど、そこにもいない。お客さんは最後に寝室の扉を開いた。そしたら……つい昨日まで元気だった友人がベッドの上で血まみれの死体になっていた……って。

凶器も、傷もない死体だったから毒の線で捜査が進んだけど、それも無駄だった。体内からなにも検出されなかったんだ。事件性がなく、死因心臓麻痺として、謎が残されたまま捜査は終わった……これがアタシの聞いた話。けっこうゾツとするだろ」

不安げな顔で番頭さんが語った話。謎を残した結末は、まるで都市伝説のようだ。友達の友達、知人の知人など間接的に広まっている怪談や伝承である都市伝説。お客さんから番頭さんを介して私へと伝わったこの話は、はたして本当なのだろうか。

「なんだっけ、死んだ友人の携帯には、非通知の着信が何件か入っていて、もしかしたら、マリーだかサリーだかの仕業かも……ってお客さん言ってたんだけど……わかるか？ アタシはとんと、オカルトにはうとくてさあ……ロボットとかは好きなんだけど、あ！」

そういえば昨日のニュース見たか、どっかの会社がアンドロイドをさ……と熱い口調で脱線を始めた番頭さんの捕捉で、都市伝説度が強まった。お客さんが犯人だと疑ったのは、マリーでもましてやサリーでもない。

おそらく、メリーさんである。

捨てられた人形が自分を捨てた人間を恨んでつけ回す、とかそんな内容の怪異談だ。

メリーという名前の人形を捨てた人が、メリーと名乗る誰かに何度も電話をかけられ、近くの公園、マンションの玄関など、ほとんど近づいてきて、最後は……あなたの後ろにいる。と捨てたはずの人形に呟かれるというオチが一般的だ。しかし、話の中では友人

は死んでいる。無傷かつ血まみれで。犯人がメリーさんだとしたら、どうやって殺したのだろう。

「……っとすまん、つい別の話に夢中になっちまった。つまりさ、アンタも一人暮らしたしさ、気をつけるよ、もし怖くなったらココにいつでも泊りに来いよな。アンタは昔からのお得意さんらしいし、じいちゃんもきつと喜ぶと思うから」

「そう……ですかね。じゃあ、なにかあつたら駆けこませてもらいます」

確かに私は昔から華の湯に出入りしているが、じいちゃんの顔を最後に見たのはいつだったか。記憶の中にあるはずの顔は、過ぎた時間というモザイクに阻まれている。

「おうさ。帰り道寒いから湯冷めしないように寄り道すんなよ」

私は華の湯を去り、双葉荘に着いた。

部屋に入ると、なにかがゴソゴソと蠢く音がしていた。彼女がなにかしているのだろうか。

しかし室内によく目を凝らしても彼女の姿はない。耳をすますと微かに水音が聞こえた。

ああ、トイレにいるのか。トイレが共同でないというのはすばらしいな、双葉荘。しかし、人形である彼女がなぜトイレにいるのだろう。そんな疑問を覚えつつ、私はキッチンの蛍光灯を点けた。白い光が明滅して安定した光源となる。

さて、冬は手洗いうがいをキッチンとせねばなるまい。致死量の希望を手に入れるには健康に気を遣うのも重要だろう。そう呑気にかまえていた私の目に飛び込んできたのは、

シンクが肌色というなんとも奇怪な光景だった。私の脳の処理が追いつかない。私の記憶が正しければシンクというものは、くすんだ銀色をしているものだったが。

「おかえりなさい」

「シンクが喋った!？」

否、シンクには彼女が収まっていた。全裸で。どうしてこんなことか。

「ごめ、ごもごめんさい！」即座に私の脳の言語野が壊滅的ダメージを受けた。私は全速力で彼女の詰まるシンクとは反対の方向を向く。

「え、いや冷静に、わたし人形ですよ。自主的水洗いさせてもらっています」

謎素材で出来ている彼女の情報。水洗い可能 NEW！ いやいやいやいやいや。

「そいつそ、そう、なの」

正直に断言しよう。私は彼女の体など二秒も見していない。彼女の体と認識する前にことが発覚したのだ。私は決して入浴を覗いた破廉恥野郎ではない。

「カビ臭い着物脱いでもそのまま着たら、あなたの服に臭いがうつってしまうかと思って。楽しいですよ、水浴び。ものすごく冷たいけど」

朗らかに話す彼女。

楽しいと言っても脳裏に焼き付いている彼女の様子は、小柄なボディを体育座りフォームに変形させてシンクに収め、蛇口から水を垂らしていただけなのだが。丁寧にシンクを使ってくれたように辺りに水が跳ねたりもしていなかった。……今度大きい金盥かたらいでも買ってあげたら喜ぶだろうか。

それから約十分後。突然の風呂騒動は厳密な協議の結果、明日より金盥風呂を導入（これには彼女の眼がさんと輝いた）、彼女の入浴中には私はトイレにこもるか出かけるという取り決めがなされ、なんとか無事に終息した。

部屋には新品の電球が人工の明かりをもたらしてくれている。

彼女はトレーナーとジャージに着替えて、タオルで髪を拭いていた。

「キミ……む」

いまさらと言えばいまさらなのだが。

「あのさ、キミって名前、あるの？」

彼女の髪を拭く手が止まる。

「ありません。わたしは誰にも可愛がられたこと、ありませんから地雷を踏んでしまったようだ。彼女の声のトーンがマリアナ海溝よりも深く沈んでいた。大切なぬいぐるみや人形に命名するという話は良く聞くが、彼女のように触ったものを殺してしまうとあれば名前をもらうのも不可能だったということか。

「……それじゃあ、俺がキミの名付け親になってもいい？」

コクリ、と彼女が首肯する。

「んー、……めちゃくちや安直でもかまわない？」

「はい。ポチでもタマでも」

「駄目だろ」

それでは同居人というよりペットになってしまふ。

「大和撫子……着物……黒髪……」

「おお、安直というか斬新というか」

「違うって、特徴だよ、特徴。うーん、和装の女の子だから……和、

わ、わ、のど、のど」

「のど」

「あ……和風で、花みたいに綺麗だから、和む花のどかって書いて、和花

とか、どう？」

「わ、わたしが綺麗というのには同意しかねますが……和花、です

か」

「嫌、かな？ ネーミング、超苦手なんだよな」

「いえ……好き、です。それに名前を付けてくださったことに大きな意味があるのですよ」

彼女 和花は噛みしめるように言った。

「えへへ、はじめて。名前。大事にします」

和花は今日一番の満面の笑顔になった。そしてそのまま畳に転がり天井を眺め始めた。唇を観察すると、の・ど・か、と声に出さず

に何度もつぶやいているのがわかった。どうやら本当に気に入ってくれたみたいだ。なんだか、こそばゆい気持ちになる。

モヨモヨした気持ちと格闘していると、机の上の携帯電話が振動し始めた。

「……俺の電話が鳴るとか……」

正確に言えば震えるだが。

「えーっ！ 電話なのですか、それ。随分とちんまいですね」

「ちんまいけど色々できるぜ。音楽も聞けるしテレビも見れる」

「！！ な、なんと……すこぶる面妖な……」

面妖日本代表に選ばれてもおかしくない呪いの人形をすこぶる戦慄させた携帯を手取る。

ディスプレイには非通知着信の文字。非通知……番頭さんの話が私の頭をよぎった。すこし身構えて通話ボタンを押し、スピーカーを耳に当てる。

第4話 お嬢様は深夜に踊る

「もしもし……」

電話に出るも、相手の応答がない。

「あの、もしもし？」

またしても返事がない。これはただの間違い電話だろう。私は電話を切った。

「間違いならそれでいいのに、無言とか不気味だ」

それに、目覚まし機能以外で私の携帯が鳴るなんてかなり不気味である。

「うおっ」

間髪入れずに次の着信。非通知。出る。

「もしもし？」

『できうるならば正義の味方を望みます。汝は正義ですか、悪ですか』

痛い子だ。限りなく重体に近いぐらいの重傷をハートに負っている痛い子だ。なんというか中学二年頃の古傷がうずく感じ。

「俺に質問をする前に名前くらい名乗ってくれませんか」

『なりません。秘密結社×名前を出す＝死。なりません』

「あなたが秘密結社所属っていうのはわかりました」
プツ、ツーツー。

切られた。死んだのだろうか。

なんとなく嫌な予感がするので携帯を持ったまま待機する。十秒くらい待つと、予感が的中した。またしても非通知。電話の主はきつとこの十秒間に弁解を考えていたのだろうか。

「はい、もしもし。情報漏えいに定評のある秘密結社の方ですか？」

『もしもし』

……明らかに声が違う。別の人だ。さっきの電話は淡白で義務的な感じだったが、この声には感情がこもっていた。紫陽花の通路に充満していたジツトリとした空気のような。

「どちらさまですか？」

『私、メリー……』

「メリー……さん？」

番頭さんによって私に回ってきた都市伝説と、同じ名前。しかし、私は決して人形を捨ててはいない。モノを大事にすることを信条として長いが、人形は特に大事にしてきた。生まれてから一度も人形を捨てたことはない。都市伝説も間違い電話をするのだろうか。

「あら、メリーって」和花がそばに寄ってきた。

「え、知り合い？」

和花は首を横に振る。

「知り合いではないです。けど、同類かと。そんな匂いがします」

和花と同類。呪い系統。人形。メリー。疑問の空白が埋められていく。電話口に立っている相手は、都市伝説となっている子なのか。

『……私、メリー。今、紫陽花の前にいるの』

この口ぶり。本当にその子のものである。というか近い。このままだと私はどうなるんだ。物語は後ろに立たれ、咳かれて幕を閉じるが、これは現実だ。そのあとも続いていく。

「和花、メリーさんの都市伝説ってわかる？ 色々な終わり方とか」

呪いの人形である和花なら知っているかもしれない。

「都市伝説ですか。うーん、ああいうのって人に伝えるときに、飽きさせないように工夫されているんですよね。伝説を広めたいわけですから面白くないと。ですから語り手となった人々の試行錯誤の影響で多様なオチが生まれるのです」

「なるほど。じゃあ、メリーさんが主人公の後ろに来て終わる以外のオチを教えてください」

やはり和花はオカルト関係に精通しているようだ。ありがたい。

「ええと、よくあるオチとしては……うん、死にますね、主人公。刃物で刺されたり、首ちょんぱされちゃったり」

「えっ、死ねるの!？」

「なんでそこで喜ぶんです。というかだめですよ！ 自分探し！ お忘れですか！」

不満げに腕を組む和花の頬がむくれている。

「す、すまん、つい……となると生き残らないとな」

『私、メリー。今、スルーされた上に電話口でイチャイチャされたから激怒したわ』

「すまないメリーさん！ ちょっと話中なんだ！ 保留にしとくな」

『え、ちよ、まち』

「和花の呪いって人間以外に効果はあるのか？ それで撃退できるかも」

「ふむ。なにかと戦ったことないから、判断しかねますね……あ、でも電球割りを生かせば。あなたへの呪いの余波で割れるくらいですから、指向性を持たせれば強力になるかもです！」

よし、和花の言葉を信じよう。今、命を狙われている私にできるのはそれくらいなのだ。他人に命を狙われるというのはこつも不安をかきたてられるものだったのか。だが今の私には強い味方のどかがいる。もう怖いものなどない。

「もしもし、メリーさん。こっちは準備できてる。来るなら……そうだな、ちよつとばかり、覚悟、した方がいいぜ」

『私、メリー。突然のバトル展開に動揺を隠せずにいるわ。ちなみに今、華の湯』

「おう。あとそつから二、三分歩いたら俺の家だ。双葉荘の二階な、迷うなよ」

『……案内感謝するわ』

「あ、あとな、今日外寒いだろ。もし体が冷えてたら、華の湯で温まってから来たほうがいいよ。この時期に風邪ひくとつらいからな」
『……ここ、フルーツ牛乳はあるのかしら』

「あるある。超うまいよ」

「プッ、ツッ、ツッ……」

「切れてしまった」

銭湯とフルーツ牛乳のコンビに釣られるのは万人が持ち得る普遍的真理なのだな。

「なんだか必要以上に優しくくないですか。普段も女の子にはいつもそうなのですか」

「ないない。人間はあんまり得意じゃない。人形、モノだから大切にするんだ」

「むっ。命が危ないという状況の原因にまでそれは適用されちゃいますか……難儀な人」

「そう？ ふっっ、ふっっ」

メリーさん入浴中の時間を利用して双葉荘の横にある駐車場まで煙草を吸いに行くことにした。煙草は一日一本と決めてるため、そんなに中毒というわけではないから我慢は苦ではなかった。待ちぼうけになる和花には私が愛用しているPSPを与えておいた。簡単な操作説明を添えて。私もゲームなどが趣味でなければ摩訶不思議物件である双葉荘からすぐさま脱出できるというのに懲りないものだ。

やはり外はジャケットがないと厳しい。風の冷たさ私の頬に襲い掛かってくる。今日は煙草を吸わずとも白い息を吹くことができる。寒さに耐えかね、ジャケットのポケットに手をつ込むと硬い感触。蛙君だ。

オヤジさんにもらった蛙君を片手に持って電灯の光の下で眺めていると、双葉荘の前を右往左往している人影が目に入った。

人影は双葉荘の前に面する道路をせかせかと三往復ほどしたところでピタリと止まり、駐車場、つまり私の方まで歩いてきた。

駐車場に設置された電灯が人影を照らす。明るみになった頭髪は金色。軽く跳ねてふわふわと夜風にそよぐ金色の長髪は黒いリボンによって後ろに束ねられ馬の尻尾になっている。やけに夜に映える

瞳は暖炉の中で燃える炎のような色をしていた。服装はバリバリの黒ゴス。顔のつくりも精緻で外国のお嬢様といった感じ。体は細く小柄で人形のような……おっと私のデータベースに猛烈な心当たり。……キミが、メリーさん？」

「そ。駄目ね、湯冷めしてしまっただわ……これじゃ余計風邪を引きそうよ」

すまし顔で返事をくれたメリーさんはノースリーブを着ている。湯冷めしなくても風邪を引くこと受けあい。頬が赤く染まっていることを見るに無事に銭湯に入れたようだ。メリーさんの体も和花と同じように人間そっくりの謎素材でできているのかもしれない。もしメリーさんが球体関節のドールだったり、ぬいぐるみだったりしたら、動いているだけで恐怖する人間は少ないだろうから、華の湯も受け入れてくれなかったかもしれない。

「すまん。気温のことまで頭が回らなくて……ほら、貸すよ」

私がジャケットを差し出すとメリーさんは素直に着た。想像以上にブカブカでジャケットなのにロングコートのようになってしまっている。

「ふふ。紳士ね、嫌いじゃないわ。けれど」

フードのファアを弄るメリーさんの口から漏れだす言葉は、私の予想通りの言葉だった。

「もつすぐ、あなたは死ぬわ。殺されるの、私に」

「そうだろうと思ったよ。事前に噂は聞いてたしな、丁度、逃げる算段を立ててたところだ！」

私はメリーさんの細面にめがけて蛙君を勢いよく投げつけるフリをし、彼女がひるんでいる隙を逃さず、脱兎のごとく双葉荘への道を駆けた。逃げるが無敗の秘訣なのである。鉄製の階段をつんのめりつつも駆け上がり、ダッシュの勢いのまま二階の自室に飛び込む。

部屋にいた和花が玄関までやってきた。

「あら、早かったですね。あの、ザンギエフさんの攻略法を聞いた

いのですが」

「ん、そいつは接近戦命だから近づかれないようにすればいいよ。卑怯だけど、飛び道具連発とか。いやそんな場合じゃねえ！ 来るぞ、メリーさんが！」

「もう来てるわよ。鈍足紳士」

「うおおっ」

メリーさんが部屋の奥、窓際の机の上に腰を下ろしていた。組まれた細い足は黒タイツに覆われ、どことなくエレガントだ。気品の塊が六畳のアパートに居ることが不自然でならない。机に放置していた私の鉛筆をもてあそぶ姿でさえ絵になる。

「瞬間移動！？」

「違うわ。私、影が薄いから。普通に窓から入ったのにあなたたちが気づかなかっただけよ」

不敵に笑うメリーさん。その説明に微かな哀愁が漂っているのは私の気のせいだろうか。それから窓から入室は瞬間移動には劣るが、一応普通ではない。

「あなた、どうやってこのお方を殺すつもりですか」

和花はPSPを置いて凜々しく言った。

「教える意味がないわ。教えたとしても無駄ね。その紳士が死ぬのは確定した未来。いまさら時を戻すこともできない。詰みよ」

メリーさんは肩掛けのデカイ鞆の中から裁縫用というには大きすぎる刃渡り二十センチはある鋏をうやうやしく取り出して、和花に鈍く光る銀色の刃先を向けた。

「さて、貴女はどうしたいのかしら。その紳士と一緒に逝っちゃうっ」

「できません。今はまだ早すぎます。やらせはしません……はあああああ！」

和花は両手を合わせ、腰を落とした。んん、このポーズ、どこかで赤い鉢巻を巻いたマッスル武道家が行っていたような……いやまさか。

「呪動拳！」

和花の手に紫色の不吉なオーラが目で見えてとれるほどに濃縮されていた。その不吉オーラを和花はメリーさんに向けて撃ち出す。

「まんま波動拳だこれ！」

和花がゲームからインスパイアした必殺技はメリーさんの元まで真っ直ぐ飛んでいく。

「ふうん」

メリーさんは興味なさげに伝統の味、和花印の不吉オーラに向けて鉄を放り投げた。

ジュツ、と肉が焦げるような音がして鉄がオーラとともに跡形もなく消滅した。

「……和花、それ禁止な、理由……わかるな？」

「ええ、ばっちり」

撃ち出した本人も目を疑う威力だったようで顔が引きつっていた。どれだけの呪いをそのちっさい体に溜め込んでいるんだ、この子は。そのうち目からビームでも撃つんじゃないか。

「得物、さっきの鉄だけか、メリーさん」

「な、なめないで。あんなのなくても、へ・い・き、よッ！」

メリーさんは机から降りると鞆に手を突っ込み、小さいナイフを両手に三本ずつ指にはさんで持ち、振りかぶってこちらに向けて投擲してきた。風を切るような速さで正確無比に私に向かってくる六本の凶器。刺されば間違いなく大怪我……いやそれ以上。

「あ、でも」

さつと私の前に飛び出た和花は、両手を素早く前方に突き出し、不吉オーラを薄い長方形の壁のように引き伸ばして、ナイフを全弾受け止めた。不吉の壁に阻まれたナイフは鉄と同じ末路をたどった。「防御には便利ですよ、コレ」無邪気に笑う和花。

「とんだ強キャラだぜ、この子。」

「よし、その調子でメリーさんの凶器をすべて受け止めるんだ！」
消滅する凶器たちが可哀想だという思いはあるが、私はここで死

ぬわけにはいかない！

「うるっせえ！ 何時だと思ってやがる！ あア？ 大家さんに苦情タレこむぞボケ！」

ドンドン！ と叩かれるドア。ビリビリと鼓膜をつんざいた隣人の怒鳴り声に、三人は腐ってつぶれたミカンのように委縮した。すぐさま私が超低姿勢の謝罪の言葉を述べて対応し、なんとか事なきを得た。超怖かった。私の矮小な心は「隊長オ、限界であります！」と対応終盤ずつと叫んでいた。

私の陳謝が終了し、気まずい沈黙が部屋に充満しておよそ三分。立ちっぱなしの三人。

和花が気の抜けたようによろよろと正座をしてPSPの電源を入れた。現実逃避か、悪くない判断だ。私も続いて腰を下ろした。一人でおろおろしているメリーさんにも着席を促す。座布団も渡す。一緒に怒られた仲だ、しばしご歓談といこうではないか。

「あの……悪かったわ、夜に押し掛けるとか配慮に欠けまくりよね」「いや、このアパートバトルに持ち込んだ俺が悪い。駐車場でバトロるべきだった」

「あつ……ザンギエフさん……倒しました」

「よかったわね」

「おめでとっ」

「呪いが……呪いが効いたのかもしれない……力をこめたらコクリと」

どんな裏ワザだよ。大丈夫なのかそれ。

メリーさんの方に目を向けると、うつむいて鞆をゴソゴソ探っていた。気まずいんだろっな。私も大学の教室でやることがないとき鞆を掻き回していた。

「なあ、メリーさん」

メリーさんが鞆をあさる手を止めて私を見る。

花のことはどうなる。希望を探すのはどうなる。死って奴はどうしようもなく理不尽なものだろうか。

せめて、和花に金盃だけでも買ってやりたかった。

「……………なんてな。和花の呪いが効かないんだから、だろうと思っただよ」

「ど、どうして！ もう時間は過ぎたわ！ なぜ腕がもげたり、頭がひしゃげたり、白目をむいて泡を吹いたりして不自然死を遂げないの!？」

「驚きますよねー。何人も殺してきた呪いが効かないなんてー」

「の、和花さん、でしたっけ？ どういうことなの、彼おかしいわよー！」

肩をいからせながら錯乱するメリーを二人でなだめつつ、私と和花は事情を説明した。絶望して不幸が日常になっていて？死にたがり？には、呪いが効かないこと。そして私が死ぬために致死量の希望を手に入れようとしていることを伝えた。

「……………はじめて聞いたわ、そんな話。もうすぐ死ぬって言うても命乞いもなにもしないから変だとは感じていたけど。あなた狂ってるわね、狂乱紳士。死ぬために希望を集めるなんて発想、さすがの私も思い浮かばないわよ」

「まあな。それでさ、メリー、聞きたいことがあるんだ」

「ストツプよ、探究紳士。殺せなかったのだから災厄はおとなしく帰るわ。ごきげんよう」

「……!？」

「ごきげんようとつぶやいたメリーは私と和花の視界から雲散霧消した。ジャケットと共に。

呆然としつつ、メリーにするはずだった質問を和花にぶつけてみる。

「あいつも人形だよな。呪いによっては自律もできんのか」

「ふむ。なんせ都市伝説級ですからね。動いても不思議ではないですよ」

なるほど、この世には不思議があふれかえっているということか。私は自分の両手を見つめつつ世界の広さを想う。今まで見ていた世界の裏には私や和花、そしてメリーのようなモノがまだ沢山あるのだろうか。

「ま、とりあえず飯食べよう。パツと作れるのはラーメンしかないけど、いいかな」

「おおー、話には聞いたことありますけど初めて食べます……ってそりゃそうですよね」

私と和花はラーメンを食べた。和花は箸を器用に使っていた。

それから布団を敷いて、和花を寝かせた。すうすうと定期的なりズムで紡がれる寝息が耳に心地よい。

にしても今日は盛りだくさんの一日だった。死のうとしたら呪いの人形と出会って、久しぶりに能力を使って、電話に出てみればメリーさん。

和花との出会いを起点にただの休講貴族であった私の日々が変わり始めているような。その変化がどんな場所に行きつくかはまだわからないが、見届けるまで生きてみるのも悪くないだろう。見届けているうちに希望を手に入れればいい。それで終わりにすればいいのだ。私は毛布を自分の体につけ、冷たい畳に寝そべった。

第5話 チョコレートサンデーにすればいいじゃない

窓から差し込む朝日は私にとって天然の目覚まし時計となっている。枕元にある携帯を手に取り時間を確かめると午前七時すぎだった。普段より早く起きてしまった。

寝ぼけた頭を抱えて立ち上がる。一度大きなあくびをするとぼやけた思考も少しだけ鮮明になる。和花はまだ布団で寝ていた。黒髪が乱れて掛布団からはみ出している。呪いの人形も寝顔や寝相は可愛いものだ。

まだ起こさなくてもいいだろう。私は朝食の支度を始めることにした。といつても米を炊いて握るだけだが。

そしておおよそ一時間後、起床した和花と二人で朝食。

「おむすび、いただきますー」

和花は私の作ったおにぎりを持って満開の笑顔。

「どうぞー。梅干し入りだぞ。種は取ってある」

「む、舌がなんでしょ、じわじわします」

「それがすっぱいって味だ。どんどんヨダレが出てくるだろ」

「ええ、噂以上ですね、これは……おいしいです」

もくもくとおにぎりを食べ進める和花。小さな頬が膨らむ様子は微笑ましい。それに合わせて私も自分の分を食べる。

おにぎりには熱いお茶と相場が決まっている。しかし客用の湯のみがないことに今気が付いた。箸は割り箸でよかったし、ラーメンはお椀とどんぶり、飲み水はペットボトルで事が足りた。今日、和花の着物をクリーニングするあてを探すついでに買ってやることにする。

「今日は学校行くから、和花、留守番頼むな。もし誰か来ても無視をつらぬくように」

「承知しました。勉強に励むのは良いことです。わたしは、おとなしくコレやっています」

和花の手にはDSが握られていた。ワンコと戯れるのがよっぽど気に入ったらしい。こうして、ゲーマーかつ引き籠もりという最凶ジョブへの一步を着実に積み重ねている和花を見て一抹の不安を覚えなくもないが、まあ、明るい和花に限ってそれもなかるうと私は私を納得させた。

デジタル愛犬ムサシとじゃれる和花を家に残し、久しぶりの学校へ。希望が大学にあるとは全く思えないが、不規則な生活をしていては遠のいてしまえばかりだろう。あくまで規則正しく生きねばなるまい。一週間自主休講のリバウンドがどれほどのものかも気になる。

一限目、特に変わりなし。教科書を読めば全く問題ない。

二限目、いつものように教授の自慢話で授業の半分以上が終了。問題なし。

三限目、大教室での授業。異変あり。

隣の席の見知らぬ女子が私の肩を叩いてきたのだ。

「あの、授業中、消しゴム貸してくれませんか」

「どうぞ」私は予備の消しゴムを渡す。

「ありがとうございます」

私は隣席の女子の顔をよく見ることもなく黒板に目線移す。ノートにひたすら板書するだけの授業は腕が疲れる。ただコピーするだけならせめてレジユメを配布してほしい。

シャーペンを握る指に力がこもり、だんだんと指の先が痛くなってくる。自分の筆圧が強いことは自覚しているが自覚したところでどうにもならない。

授業後、息継ぎなしで長い距離を泳いだあのような致命的な疲労感が私を襲う。サボった分、写すスピードが落ちてしまった。無理して授業に従属したので私の手首は満身創痍だ。

「消しゴム、ありがとうございます」

「ああ、いいえ」

「次、授業あります？」

なんだ。消しゴムを貸しただけなのにオーバーコンタクトのように思えるが。

「いや、今日はこれまでですね」

「あの、では、よかったです」

「ん」

その時、私の携帯に着信が入った。一言女子に断りを入れて電話に出る。

『もしもし、私、メリー。今あなたのいる教室の入り口にいるの』

「なっ、嘘だろ。なんでここが。尾行でもしたのか」

『私には追跡能力があるの。一度狙った相手は逃さないの。用があるから、来て』

隣の席の女子に当たり障りのないかるーい会釈をして私は大教室の入り口に向かう。同年代の女子と話すのは苦手なので正直、助かったかもしれない。

「おい、誰だよ、あの金髪の子。モデルか？」

「モデルにしちゃチビすぎない？」

「じゅ、ジュニアモデルのま、マリアちゃんに、似てる」

「けっこうかわいいい。妹にしたいかも」

入り口から廊下に出るとメリーを中心にして人ばかりができていた。たくさんの生徒がバーゲンセール会場で荒ぶる主婦のように押し寄せている。メリーの半径一メートル以外は人、人、人だ。

メリーのやつ、かなり悪目立ちしているようだ。あの恰好で大学に乗り込めば無理もないことだろう。たまに大学内でゴスロリを見かけないこともないが、メリーの場合、ハマりすぎているのだ。この衆人環視の中、合流するのだけは避けたい。

「紳士いー、なにをしているの、早く来なさいよー」

教室の入り口で立ち尽くす私に向けて手を振るメリー。ハイ、最悪のパターン到来。助かったとか抜かした奴は誰だ、私だ。

百個以上の目玉がギョロリと一斉に私を見つめ、注視し、鑑定を重ね、吟味してくる。

「おいおい。なにあいつ、あんな顔してロリコン？」

「やあだ、パツと見じゃわからないものなのね……」

「クソオオオオツ！ うらやましいイイイイ！」

「あのお兄ちゃんはないわ」

「うおおお…… 大学が今まで以上に生きづらい空間へと変貌を遂げていくよおっつっつ。」

「もう、なあーんか硬直してたからこつちから来てあげたわよ。今日の紳士ポイントシエントルはいきなりマイナスな感じからのスタートとなるわ」

わけのわからないポイント制度を持ち出してきた金髪のちびっ子に私は肩を落とす。

「プラスとかマイナスとかどうでもいいから……」

「あんなに減退紳士。そんなに萎れているとあつというまに枯れてしまっわよ」

「もうだいたい枯れてますよ。いいから、用があるなら早くしてくれ」
すみやかに、このねばっこい視線たちから逃れて一息つきたい。

「じゃあ、学食行きましょう。さっきブラブラしてたら良いところを見つけたの。ジャケットのお礼におごつてあげるわ」

くすり、とメリーが楽しそうに笑った。

メリー先導の元で大学内を進む。謎の美少女を一目拝もうとする好奇の視線と、犯罪者予備軍を見る正義の眼差しの両方にあてられて私の精神は早くも崩壊寸前である。

視線を撒きつつ命からがらたどり着いたのは閑散としたカフェテリア。メニューが総じて高く、美味いが量が少ないので普段からあまり賑わっていない。他の学食と比べてそれほど広くないため、寂しさ度が低いことが唯一の救いか。私も三回ぐらいしか利用したことがないが、内装がシックな雰囲気雰囲気で読書するのに丁度いい感じは嫌いじゃない。

「メリー、なに食うんだ」

メリーはシックな店内に空気を読まず鎮座する食券販売機の横に

展示された、なんの変哲もないメニューサンプルと物凄く真剣な顔でにらめっこしていた。

「……私、このチョコレートサンデーにするわ。あなたは」

「この寒いのにすげえな。俺は……うーん」

「チョコレートサンデーにすればいいんじゃない」

メリーの声があからさまに興奮している。

「はは、どんだけ推してんだよ、チョコレートサンデー。まいいや、じゃそれで」

「うん、先に席で待っててちょうだい」

完全に主導権を握られている状況に少し不安はあるが、平和なことしか利点がない大学内で突発的殺し合いが始まるわけでもないだろうし、まあそう心配せずとも平気だろう。

私はカフェテリアのはじにある、丸くて白い小さな二人掛けのテーブルに着席する。しばらくして、メリーが太陽も逃げ出すほど煌びやかな笑顔を浮かべて、お盆に作りたてのチョコレートサンデーを二つ載せてやってきた。貴族のようにかかるやかな動作で私の前にサンデーとスプーンを置いた。そして自分の席にも配膳すると、すんと椅子に腰かけた。ちょうど私と対面する形となる。

「紳士。これ、ありがと」

私が一度まばたきする前には何も持っていなかったはずのメリーの手に、昨日貸しっぱなしだった私のジャケットが握られていた。私は驚きながらそれを受け取り、着る。頼れる防寒着セーター様でも一枚はさすがに辛いものがあつた。

「今、どうやって?」

「女の子は魔法が使えるの。いわば魔法少女ね」

「ナイフを人に投げつける魔法少女なんて聞いたことねえぞ……」

「……細かいことばかり気にしていたら頭髪と早期にサヨナラすることになるわよ」

「余計なお世話だ。で、大学に乗り込む必要があるほどの用ってなに」

「ぐぬ。なんだかトゲがあるわね。学校に押し掛けちゃダメだったかしら」

「駄目に決まってるだろ！ メリー、キミは全然影薄くなんてないよ、逆も逆だ」

カフェまでの道中、メリーとすれちがって振り向かない男子は皆無と断言できるほどの注目率をメリーは誇っていた。どちらかというとなメリーは影の濃い人種だろう。

「ん……もう殺せないあなたには教えるけど、夜だけ、誰にも気づかれないことができるの。今の私は殺人ドールじゃない。しがない魔法少女に過ぎないわ……それよりあの子よ、和花さん。どうしてあの子、動いていたの……おかしいわ」

チヨコレートサンデーを幸せそうにほおばりつつもメリーは熱視線で私を焦がし続けてくる。本家本元、都市伝説様の目はさすがに鋭いということか。

「いや、それを言うならメリーも動いてるじゃないか」

「だって私は特別なもの。でもあの子は私とは違う、あの子からはとても重たい？ 殺す？ チカラ……それだけしか感じなかった」

「……殺す力だけ？」

「そう。おそらくだけどね、和花さんの機能は？ 殺す？ ことだけに特化しているの。あの器カッタに入れられるだけの殺意を目一杯ぎゅぎゅに詰め込まれている……そんな風かしらね。だから本来なら？ 動く？ とか？ 話す？ チカラを与える容量があの子にはないはずなの」

メリーはそこまで一気に話すとスプーンを置いた。そして、

「紳士、隠し事は好ましくもないわ。正体を教えなさい。あなた、ただの学生ではないはずよ」

この子、気が付いているんだろうか。その上での質問なのか。余裕たっぷりのメリーの顔はこれから私の口から出る言葉を予見しているともいう表情だ。

「俺はただの学生。けど、変な能力は持ってるよ」

満足げにふふん、と鼻を鳴らすメリー。

「やっぱりね。正直者は好きよ、紳士ボーナスポイントを贈呈してあげる。それで、その能力ってテレキネシスなのかしら」

「テレキ……？ なにそれ」

「あなたが和花さんに念力を送って動かしていたのか、ってことよ」「よくわからんけど……それって送っている間、ずっと集中しなきゃいけないんじゃないか？ だとしたら、それとは違うな。現に和花は今も俺の家で気ままにやっってるはずだ」

「……ふうん。じゃ、どうやって動かしたのかしら。和花さん、最初は動かなかったんじゃないの？」

「ああ、動かなかった。うーん。俺も原理は良くわからないんだけど……こう、モノに手を触れて集中するだろ、それで頭の中で力チツと歯車が噛み合うみたいな感覚があつて……動くんだよ、モノが。それを和花がどんな呪いを持って、どんな風に俺を殺してくれるのかを聞くために使った」

私は身振り手振りをを用いて懇切丁寧な説明をメリーに示した。

「はあ。それで死ねなかった無策紳士は和花さんの世話をしていると……お人よしね。私だったら役に立たなかった人形なんて……捨てるわ」

メリーは不機嫌そうに、吐き捨てるように言った。

「別に。俺が和花に断らず勝手にイキモノにしたんだし、あたりまえだよ」

そこまでメリーと話していた時だった。外が妙に騒がしいのだ。窓から外を見てみると、大学には相応しくない車両が何台も止まっていた。パトカーである。

「なあ、連続電話殺人事件の犯人として指名手配されている覚えはあるか」

「いいえ。人形を指名手配するほど、この国の警察は暇じゃないと思っわ」

じゃあなんだこの騒がしさは。悲鳴とも歓声ともつかない人々の叫びが聞こえる。なんだか妙な胸騒ぎが加速する。このままここに

いると、一生取り返しのつかないことになるような、そんな胸騒ぎ。これは希望の予感かもしくは。なんにせよ善は急げという。

「メリー、出るぞ」

「なに、まだ話の途中よ、どうしたの」

「話なんて後で家に来ればいいだろ。なんか嫌な感じがするんだ」

メリーと共にカフェを出る。人の流れを頼りに大学の中央広場に向かうと、メリーを取り囲んでいた烏合の衆たちが別のものを円形状に取り囲んでいた。その烏合の衆たちを観察すると、制服と重厚な装備を身にまとった警官隊が円の一番前面に配置されていた。どうやら拡声器を使って騒動の原因に交渉を試みているようだ。この様子を見るに、まだ色よい返事は得られていないらしい。

騒動の原因だが、周りの観客が気の毒そうに思う気持ちの欠片もなしに語っていた情報を繋ぎ合せると、『凶器を持つ変質者がひとりの女子生徒を人質にしている』という現状を把握できた。立派すぎるほど犯罪だった。明日の新聞記事にもなるだろう。変質者がどんな人間で、誰が捕らえられているのかは、屈強な警官隊の体に隠れて見えなかった。

「白昼堂々よくやるわね。逃げ場ないのに果敢なこと」

メリーがあくびをしながらあっけらかんと話した。青ざめた動揺の色も、人が死にそうになっている出来事を悪趣味に笑うことも、心配もない。無、だった。

「助けられないのか、キミの魔法で」

私はカフェでメリーが私のジャケットを手品のように出現させたことを思い出していた。あれは瞬間移動の能力なのではないか。同じことを人質に行えばあるいは助けられるのでは、と。

「無理ね、それに理由がないわ。見知らぬ女の子ひとり救うだけのことには命はかけられないわよ。いくら人形だってね。人間のあなただって、そうでしょう？ 紳士」

温度のない声で語るメリーに私は反論を返せずにした。それもそうだ。私はゲームの主人公のように無限の残機があるわけでもない、

敵を倒す凶悪な力もない。人生にコンティニューはない。結局はただの人間なのか。死にたがっていたくせに、女の子ひとり救えない。その時だった、烏合の衆をかき分ける老人が私の視界をかすめた。老人が掻き分けることにより円の集団は乱れ、阿鼻叫喚の聲が上がった。老人は鬼気迫る勢いで前進していった。その姿は無我夢中という言葉がしつくりきた。

『今すぐその子を放しなさい、あなたは完全に包囲されています』
警察交渉人のテンプレートが拡声器を介して私の耳に届く。

『危害を加えたら　　なんです、やめなさい！　　返し……』

警察交渉人の動揺交じりの怒号の後、途切れた音声に継いで紡がれた声は、

『放してくれ！　その子はウチの大切な看板娘なんだ！　たった一人の孫なんだよ！』

しゃがれた男性の声だった。長年使い古された声帯が精一杯に全力で叫んでいるような声。

その声にはひどく、聞き覚えがあった。まだ私が小さかったとき、大学生になるよりもずっと前にあの場所に通っていた時に聞いていた声。かすれているのにどこか温かい声。

「そうか！……あの声、華の湯のじいちゃんだ……」

顔はすっかり忘れていた。けれどこの耳はたしかにあの優しい声を覚えていた。華の湯の看板娘。となると捕まっているのは。

「あなた、なんといったのかしら」メリーの声。

「え？」

「なんといったかと聞いているの！　馬鹿紳士！」

ついさつき温度のない冷淡な声を転がしていたメリーの舌が灼熱の言語を転がしていた。そうか、詳しい事情は分からないがキミも私と同じ気持ちなのか。

「あの声、華の湯のじいちゃんだよ。番頭さんの前に番台に座ってた人。だから……捕まっているのは多分、番頭さんだ」

「そう……紳士、理由ができたわ。無理を通す覚悟はあるかしら」

私を燦然と燃える両眼で見上げてくるメリー。こんな小さい子に覚悟を問われて、

「あるさ、俺にできることなら何でもやる」

ここでうなずかないやつは即刻、男をやめてしまえ。

「いい眼ね。気に入ったわ。この報酬はあなたの家に無期限滞在で勘弁してあげる」

「はあ！？ なんだぞ」

怪しげに笑うメリーが私の手を握った。次の瞬間、私の体は空を飛んでいた。重力からの解放！ なんて甘い話があるはずもなく、私の体は逆らうことのできない力に引つ張られてどんどん自由落下していく。一度死ぬと決めている身だけに、なんでもする覚悟はあったがいきなりのこの仕打ち。心が痛まないでもない。気に入ったとか言つて、やっぱりメリーのやつ、私を抹殺する気だったか！

「のわあああああああつ！」

ドサリ、と私の体が地面に落ちた。すぐさま全身を這う鈍い痛みからうじて意識はハッキリとしている。ここはどこだ。地面のレンガ造りからして大学の広場。顔を上げると警官隊の皆様。理解が遅い私は数秒間呆ける。それは私を取り囲む警官隊もそうであったように、動くに動けないといったポーズで固まっていた。そう、呆けていたのは私と警官隊だけではなかった。私のすぐ後ろにいる太った変質者と泣き顔の番頭さんも、同じように呆然とした顔をして倒れている私を見おろし、いきなりの侵入者に戸惑いを隠せずにしたのだ。

「…………私、メリー。今、あなたの後ろにいるの」

そして私を宙に転移させた犯人の声が聞こえたとき、大柄な変質者が私の体の上にふらりと倒れこんできた。これがまた重たい！

あッ骨が！ ああッ！ 軋んでるッ！

「か、確保っ！ 確保だあああああ！」

……………あなたに、はたして理解ができるだろうか。変質者の暑苦しい体温を背中に感じながら身動きできずにいる貧弱な体を抱え、

雄大なサバンナを逞しい巨躯を揺らして駆け抜けるバッファローのごとき警官隊の獯猛な突進を決して回避できないという圧倒的恐怖が。もうね、アメフトとかね、テレビでも見たくないね。

「頑強な男たちの密集、密着、密閉パラダイスの中心にいて、鮮烈な逮捕劇が繰り広げられているのを意識の端に感じながら、私の繊細な頭脳は機能を一時停止させた。」

第6話 3色のマグカップ

目に飛び込んできたのは白い天井。鼻をくすぐるのは薬品類や清潔さの神経質な匂い。窓の外はオレンジ色の空。私はどうやらベッドに寝かされているらしい。

「……病院直行コースだったのか」

「ああ、よかった、ちゃんと生きてた」

私の横には番頭さんが座っていた。頬に湿布をつけていること以外は普段通りだった。

「怪我、してますね」

「ん、こんなもん、どうつてことねえよ。それより、あんたは大丈夫かい。驚いたよ、空から落ちてくるなんてさ」

正確には落とされたのだがメリーの能力を勝手にひけらかすのは良くない気がしたので言及を避ける。

「はは……体は大丈夫つばいです。つてか俺も驚きましたよ、番頭さん同じ大学だったんすね。もっと年上かと」

私は上半身を起こしながら言った。

「つたくナチュラルに失礼な奴……ふふ。三年だよ、経営学部の」「へえ。なんからしい、つすね。メガネかけて表計算とかきつと似合いますよ」

「あはは、まだムリ。パソコンは目下勉強中なんだ。でも野望のためには頑張るつもり」

野望。希望と似た響きの言葉だからか。それが何なのか気になった。

「番頭さんの野望つて、なんですか?」

「へへ、華の湯を越すげえスーパー銭湯にすること! だから経営

学を学びまくるんだ。じいちゃんに楽させてやりたいし、アタシは早く立派にならねーと。それとな」

番頭さんは細くて長い指を口に当てた。言葉に詰まったときの番頭さんの癖だ。それを見るたび同じ癖を持っていた可憐な女の子を思い出す。昔の話なのだが。

「アタシがそーやって野望を迫るのはさ、あんたのおかげ。あんたが助けてくれなかったら、じいちゃんを独りにしちまう所だった駄目だね、頭に血が上りやすい女ってさ」

それから私は番頭さんに事件の経緯を聞いた。

どうやら変質者は外部の人間だったらしい。はたから見ても明らかに拳動不審な変質者がとある女子にからんでいたのを見つけた番頭さんは最初、怪しいと感じつつも恋人同士かと思いをかけなかった。しかし、変質者が女子に手を出した時点で番頭さんのスイッチがオンになってしまったのだ。本能で行動するのが熱血系女子である番頭さん。走って接近し、変質者のケツを思いつ切り蹴り上げたらしい。

そうして怯える女の子をなんとか逃がしたのは良かったものの、代わりに番頭さんが変質者に殴られ捕らえられてしまった。厄介なことに変質者はナイフを所持していて逃げるに逃げられず、これは殺されるかもと大人しくしているうちに警察がわらわらやってきて番頭さんと変質者を取り囲んだ。

以上が、私が知らなかった事件の流れ。

ふう、と番頭さんはため息をついた。

「あと少しあんたが来るの遅かったら、あの野郎と心中されちまうとこだったんだよ。耳元でさ、何度も何度も。お前を殺して、俺も死ぬ、お前を殺して、俺も死ぬ……って。まださ、あの声が耳から離れていかねえんだ」

番頭さんは目をつむって両耳を手でふさいだ。いつもはその細い体より大きく見える番頭さんが、とてもとても小さく見えた。震える肩はひどく頼りない。

「お兄さんは起きたか？」

病室に入ってきたのは、じいちゃんだ。おでこに絆創膏を貼っている。人ごみに駆けこんだときに怪我をしたのだろう。

「うん、起きてくれた。じいちゃんは怪我平気なのか？」

先ほどの震えが嘘のようにパツと明るい笑顔になる番頭さん。

「こんなの怪我に入らんよ。お兄さん、本当にありがとぅな、おかげで孫を失わずにすんだ」

深々としたお辞儀をされてしまった。

「いや、そんな、頭を上げてください」

本当にお礼を言われるべきなのは、私ではなく金髪の魔法少女なのだ。あいつが居なければ、番頭さんを助けることは不可能だった。メリーはどこにいったのだろう。

「番頭さん、金髪の小さい女の子、見ませんでしたか。ゴテゴテした服を着てる」

「ああ、その子なら」

「私はここよ、紳士」

病室に金髪ポニーテールのゴスロリちびっ子が堂々と闖入してきた。

「ちょっと警察に捕まってたのよ。賞状とか何とか言ってたけれど面倒だから断ってきたわ」

私の傍まで来たメリーは少し疲れた顔をしている。

「アンタが紳士ねえ……いいとこ庭師じゃねえの」

「辛辣！」

「へっ、人をうんと年上に見立ててた野郎が言えるセリフかっての。……この子、昨日ウチに来ただけだな、まさか命の恩人になるとは思わなかったぜ」

番頭さんはメリーの頭をやさしくなでる。メリーはその手を受け入れている様子だ。なんとつかまるで飼い猫のように懐いているような感じ。表情も柔らかい。

「メリーちゃんたらすげえんだぞ。あの大男がアンタにビビってる

瞬間に、首をトンと一発。手刀でKOしたらいいんだ」

「ふふ、淑女のたしなみとして習得していた護身術が役に立ったわ」
かの都市伝説様は武道も嗜んでいらしたのか……なんて私が素直に思うはずがない。おそらく手刀だけでなく超常的な力で気絶させただらうが、余計なことを言ったら即刻殺すよ、という目つきでメリーが私を見ているので、へえー！ と小市民的なりアクションを返すだけにとどめた。するとメリーが、番頭さんが見てない隙に邪悪な笑みを浮かべたので、どうやら私は正しい選択をしたらしい。「とにかく、今日は二人とも本当にありがとう。些細なお礼になっちまうけど、ウチ来たとき色々サービスするよ。他にもなんかあったらなんでも言ってくれな。アタシ、もうすぐ事情聴取だかなんだかで警察のそこ行かなきゃなんだ」

メリーの頭をぼんぼんと軽くたたきながら番頭さんは話した。その声はトーンが低く、私の不安をかき立てた。私の網膜には番頭さんが見せた震えがまだ焼き付いていたのだ。

「えっと、番頭さん」

「ん？ どしたっ」

「……また夜に伺いますね」

ここで何も気の利いた言葉が浮かばないから私は駄目なのだということを痛感する。

「おうよ。メリーちゃんも良かったら来てくれな」

「ええ、ありがとう」

そして番頭さんと同じいちゃんは病室から出て行った。

残ったのは私とメリーだけ。無言の室内に空調の音がやけに大きく響いている。

そんな中、先に口を開いたのはメリーだった。

「ねえ、報酬のこと、覚えてる？」

私が空を舞う直前にメリーが言っていたおかしな報酬。私の家に無期限滞在。

「ウチに住むってやつか。なんで俺なんかと暮らすのが報酬になる

んだ」

率直な疑問をぶつけてみる。するとなぜかメリーの頬はほのかに赤く染まった。何故。

「突飛な質問ね、私はあなたと暮らしたいと言ったわけではないのよ。ただ……そう、落ち着ける場所が欲しいの、今回のほとぼりが安全な程度に冷めるまで」

「キミ、家とか拠点みたいな、ないのか」

「ないわ、根無し草よ。夜のうちは限りなく自由と言っていいほど好きに行動できるからそれで工夫して生活してきたの。助けるためとはいえ、今回は野次馬が多かったのがちょっとね。存在レベルが上昇したかもしれないの」

存在レベル？ メリーはときどき自分の言語で喋るから私の理解が追いつかない。

「ぜんぜん意味わからないって顔ね。あの衆人環視の中、常識人だけがあの場にいたとは限らないのよ。たとえば紳士の写真がネットにアップされていることもあるかもしれないわ。？ 怪奇、空飛ぶ男！？とか銘打たれてね。今頃あなたが世界中に情報として無限に増殖しているかも」

ぞつとしない話だ。それがメリーいわく、存在レベルの上昇。ようは知名度が上がってしまっているという意味か。回りくどいなにか古傷がえぐられるような……。

「……つまり、それと同じようにメリーも撮られていることがあるのか」

「そういうこと。というか私はすでに撮られてしまったの。私まで瞬間移動で近づくわけにいかなかったから、人ごみを押し分けたときにね。顔がバレてしまうと厄介なの。公園で昼寝もできない。私の安息と睡眠のために紳士の家に住まわせてもらうわ、いいかしら」

たしかに公園で美少女が昼寝は不用心すぎる。六畳の部屋に三人はちよっときつい、致しかたないだろう。寒い時期だ、人口密度が上がることに不満もない。メリーは人形であるし、私もやたら恐

怖はしない。

「しかし、男の家に転がり込むってのは……淑女界隈的にはオツケ
ーなのか」

「い、いいのよ。紳士はあまり男男してないから、ノーカンよ」

「なんじゃそりゃ……」

「なんでもいいでしょ、それより早く退院しましょうよ。和花さん
が待つてるわよ」

こうしてメリーという同居人が増えることとなったのだが、この
時の私は、自分が戻ることのできない坂道を転げ落ちていることに、
まだ一ミリたりとも気が付いていなかったのである。

どこも大きな怪我をしていなかったために、すぐに退院すること
ができた。私の意識が深い海の底に沈んだ原因は、肉体的ダメージ
よりも精神的なものの方が強かったのだ。しばらく、大柄な男とは
関わりたくない。

それから私はメリーと二人でショッピングセンターに赴いた。夕
飯のおかずを適当に買って、ご飯だけ炊くことにする。メリーが見
惚れていたので、鶏のから揚げを購入した。私も好きだ、気が合う。
続いてホームセンターに行き、和花の風呂事情を解決するための
アイテム、金盥を手にとった。シンク風呂のように狭苦しい思いを
させるのも嫌なので、和花が胡坐をかけるぐらいに直径が大きめで
底が深いものをチョイスした。腋に抱えてやっと持てる大きさ。メ
リーは金盥以外の荷物を持ってくれている。

あともう一つ買うものがある。湯呑みだ。だがいざ売り場に来て
考えると、私はもっぱらお茶とミネラルウォーター生活を続けてい
たため湯呑みで事が足りたが、和花とメリーは別のも飲みたいかも
しれない。汎用性が高い物の方がこれからは便利だろう。私はマグ
カップを人数分買うことにした。

二人で悩んだ末、私は水色の無地。メリーは黒い羊のシルエツト
が印刷されている白いマグカップを購入することにした。ここでひ
とつ、私はメリーに頼みごとを依頼する。私の中から揚げを一つ譲る

と言ったら、存外にあっけなく承諾してくれた。

レジで会計を済まし、人気のない階段に移動する。そして荷物が入った金盥を両手に抱えたメリーが誰にも見られていないことを注意深く確認してから、パツと私の前から消えた。

約十分後、金髪の魔法少女は私のもとに走ってきた。店外に転移してから来たようだ。

「しんしー、聞いてきたわ。『えっと、赤いのがあれば、あ、でも買ってくださいるのならなんでも嬉しいですよ』だそうよ。それと、あのタライ、ありがとうございますって」

「おう、サンキュー。助かったよ」なんか和花の真似が滅茶苦茶そっくりだった。

「から揚げ、忘れないでよね」肉のためなら危険も顧みない雄姿がまぶしい。

「ええ、勿論でございます、お嬢様」

「お、おじよ……なんかやけに言いなれている感がないかしら」

「昔、執事喫茶で働いてたことがあるんだ」

「衝撃の過去ね」

マグカップ売り場に戻り、白い桜のワンポイントのある赤いマグカップを手にとって会計を済ました。後は歩いて家に帰るだけだ。

メリーのおかげで荷物は和花のマグカップだけになったので、それを大事に扱いながら帰ることができた。

「おかえりなさい。ご飯、炊いておきましたよ」

玄関のドアを開けると和花が笑顔で迎えてくれた。出迎えてくれる人がいるというのが、無条件に嬉しくて、安心する。しかし無洗米ではない米を洗うのはしんどいこの季節、炊いてくれたのは非常にありがたいが、和花が炊飯機の使い方を知っていたとは驚きである。

「ありがとう、でもアレよく使えたな」

私は部屋の中に入り、キッチンの炊飯器を指差した。

「あ、さっきメリーさんに色々と教えてもらったんです。ありがとうございます」

和花は私の後ろにいたメリーに頭を下げる。

「べつにお礼を言われるほどのことじゃないわ、炊飯、ご苦労様」

「あの、私、はりきってよそいますよ」

「それは楽しみだ、じゃ飯にするか」

「はい！ お皿、お皿」

和花がご飯を準備しているうちに、私は買ってきたマグカップを洗うことにした。

シンクの前に立つと昨夜目撃した衝撃映像を思い出してしまっただが、それを振り払い、割ってしまったないように慎重に新品のマグカップたちを洗う。

「紳士、なにかあったら手伝うわよ」

「いいよ、メリーは荷物運んでくれたんだから、これで紅茶でもなんでも飲んで」

洗い終わったメリーのマグカップを布巾で拭いて手渡す。

「そ、そう。ありがとう」

「タライの中に紅茶パックとかコーヒーの瓶とか入ったビニール袋あるから、そつから適当に好きなもの出して。ポットはそこ」

私がメリーに説明してから一分ほど。メリーが炊飯器の横に置いてあるポットをおうとした、その時、黒髪ロングの不穏な気配。

「気をつけてっ！ メリーさんっ！」

「ふえっ!?!」

メリーは和花のいきなりの警告にビクツツと体を震わせた。

「それから出るお湯ってものすごく熱いですよ！ 触れたら大変でしたっ！」

米を準備しながら力説する和花。その声には実感がこもっていた。こやつめ、私の留守中にポットをいじったな。

「和花、今までさわれなかつたぶん、興味津々なのはわかるけど。危険はかえりみるように」

「はい、ごめんなさい」

「うん、素直でよろしい」

「び、びつくりしたわ……」

なんとか夕食の準備も整い、三人でテーブルを囲む初ディナーとなった。ディナーと言ってもメインディッシュである、から揚げ様の独り舞台に近いけれども。ううむ。山のように積みあがる、から揚げ様。荘厳である。取り分けるのが面倒くさかったただけなのだが、とりあえずメリーの白米の上に約束のから揚げを一つ乗せた。

「栄養考えると野菜炒めでも作った方がよかつたかな」

「え？ 紳士って自殺しようとしていたのに野菜の備蓄なんてものがあるの？」

「そういえばそうですね。お米も沢山ありますし……水とか電気も使えます」

白米をほおばる二人の視線が私に集中する。なんと説明したらいいか私もよくわかつていない。喋りながら整理していくことにする。「いや、そんな計画的なものじゃなかつたから……なんつーか、人とは違う死つていう選択肢は頭の中でチラついてたけど……昨日、今まで自分を止めてた糸みたいなもの、ふいになくなったんだ。それで、ここぞとばかりに」

「そうなの……紳士の事情や心情をよく知らないし、会つたばかりの私が言うのもアレだけど、ほんとスペシャル罰当りね……わあ、このから揚げ美味しいー！」

「ほんとですね！ 美味しいです！」

「あれ、俺の話題終わり？」

「終わりよ。うーむ、思わずシェフを呼びたくなるレベルね、これは……」

神妙な顔つきで、どんどんから揚げを胃に納めていくメリー。

「シェフですかー。洋風で素敵な響きですね」

「あら、和花さんて洋風に興味あるの？」

メリーが上機嫌な様子で尋ねる。やはり洋装のドールなだけあって、その分野の話題ではテンションが上がるのだろうか。

「はい、わたし、外国に行ったことないですし、服も着物だけなので。メリーさんの洋服、かわいいですね、ひらひらが特にー」

褒められてうれしいのか、メリーはモジモジしながら止めどなくから揚げを食べ進む。しかし、なにやら複雑なことを考えているような顔をした後、ピタッと箸が止まった。

「ストップ、和花さん。今あなたが着ているのってジャージ&トレナーよね。着物は？」

「ああ！」しまった……。

「なによ紳士！ 驚くでしょ！」

「和花の着物をクリーニングに出すのを忘れてた……和花、ごめん！」

部屋の隅にある、畳んだ着物を入れた紙袋が今朝見た状態のまま心細そうにしていた。

「あ、いやいや気にしないでください、わたしはこの服でいいですよー」

「いけないわよっ！」

メリーがバン！と箸をテーブルに叩きつけて立ち上がる。そして私の方を向いて眼光鋭く語り始めた。頬が上気して新鮮なリングのような色になっている。

「この子、どう見ても和服が似合う風貌しているのにジャージって！ 昨日からツツコミたくてウズウズしてたのよ！ もうちょっとなんとかしなさいよ！」

「な、なんとかって言っても俺が和服とか女物なんて持つてるわけないだりよ！」

メリーの気迫に負けて噛んでしまった……。

「だりよってなに！ 滑舌もなんとかしなさいよ！ もー、ダメダメ忘却紳士なんて頼ってられないわ、我慢ならない。和花さん！」

「は、はいい！」

メリーの言葉責めの矛先が和花に向かってしまった。和花は怯えたハムスターのようにすっかり縮こまっている。

「あなたもね、呪いの人形なら確固としたアイデンティティくらい持ちなさいよ！」

「あ、あいでんてい、てい？ ですかっ？」

「そーよ！ ジャージでトレーナー姿の人形が動いたってちっとも怖くないのよ、和装だからこそでしょ！ 今すぐにもその服は脱ぐべきと言ってもいいわね！ 脱ぎなさい！」

「うっうっ……」

言われるがままに、もそもそとトレーナーを脱ぎ始める和花……
つてまてまてまてまて！

「和花！ 脱ぐな！ 脱ぐんじゃない！」素直すぎるだろ、この子！

「はっ、はい！ すいません！」

トレーナー、元に戻る。ああ、一安心……。

「なによ、人形に欲情とか頭おかしいんじゃないかしら！ 私が脱がしてあげるわ！ 紳士は指をくわえて興奮しながら見ているといわー！」

「なに目を輝かせてやがる！ そういう問題じゃねえっ！ こら、この、落ち着け！ 明日は必ず出すから、クリーニング！」

私は和花に特攻を仕掛けようとするメリーを羽交い絞めにし、引きずられながら懸命にだめる。こ、この小さな体のどこにこんなパワーがっ！ まさか手刀で犯人の意識を彼方へと追いやったのはマジなのか。武闘派魔法少女とか偏ったパラメーターの振り方だな！

私が全力を出してやっとメリーの動きを沈静化させることができた。なによりなのは隣人が留守であったことである。あの怒り顔を二日連続で拝みたくはない。

「……ごめんなさい……ちょっと……トランス状態だったわ……」

「いや……いい……メリーが怒るのは当然だ」

「あの、わたし、脱がなくていいんですよね？」

震える声で話す和花に私とメリーは首肯で返事をした。

「でもやっぱりなあ……」

「ひっ」

「その舐めるような視線やめるメリー、和花の震えが尋常じゃない」

「ご、ごめんなさい……なんかこのままじゃ私に変態扱いされる流れね……」

「め、メリーさんはわたしのことを考えてくれているのですよね、全然、えと、その、変態などとは思っていないのですよ」

和花はにこり、と冷や汗を浮かべつつ笑顔を作っている。まぶしい、まぶしいよ和花。

「ねえ、あの子、少しばかり、いえ、かなりいい子すぎるわ……」

「あのいい子から服をはぎ取ろうとした自分を恥じるといいよ」

「ぐぬぬ……」

うめきながらメリーはいつの間にか真っ白な携帯を手にしていた。魔法で出したのだろう。私の隣で仁王立ちのまま携帯を操作している。和花はその様子を正座して見守っていた。

「私の得意先を紹介するわ。このままじゃ申し訳なくて和花さんの顔を直視できない」

「得意先って？」

「どんな汚れも即日落とす、最強かつ超優秀なクリーニング店よ。」

私の服、洗濯機で洗うと悲劇が起きるからよく依頼するの。あそこに頼めば型崩れの心配もいらぬし」

メリーの着ている洋服は確かにコインランドリーにぶち込むにはやたら高そうだ。にしても、どんな汚れも即日落とすなんてことが可能なんだろうか。和花の着物に生息しているのは二十年物のカビなのだが。

「ふふん、憂慮はいらぬわ。紳士と同じよ、その店主は」

「俺と同じ」

「そう、不思議能力者なのよ。あの店主の？手洗い？は早い・安い・

綺麗な三拍子。そんなの普通じゃないでしょ。今の時代、仕事道具が洗濯板よ」

「はー、服を綺麗にする力なのか。すげえな」

「紳士が思うよりずうっとすごいわよ、服マイスターね、あの人は洗剤も使わないのに依頼した洋服からフローラルな香りがしたときは、腰が抜けそうになったわ」

なんだろう、ものすごく利便性が高い能力でちょっと羨ましいかもしれない。その力があればコインランドリーにつき込むコインがどれだけ浮くだろうか……。

「まあ、店構えがクリーニング屋に見えないせいで客足は少ないとか嘆いていたけれど……腕はバッチリよ。連絡してもいいかしら」

「ああ頼む、助かるよ」

「でもでもメリーさん、それってお代が高かったりしないんですか？」

「だいじょうぶ、和花さんなら無料だと思うわ。あ、そのまま私を見ててね。はい、チーズ」

パシヤ。

「メリー、ステイ」

私はメリーの肩をつかむ。

「なによ」

「和花の写真をどうするつもりだ」

「送るのよ、店主に。美少女限定無料サービスやってるの」

「変態じゃねえか！ 手洗いが下心ありありとしか思えねえよ！」

「えっ、じゃ、写真！？ うわわわ、魂が抜かれ……てない……迷信……なの」

なぜそこでガツカリするんだキミは。

「べつにいいじゃない、無料はありがたいことよ」

メリーは私の顔に向けて和花が写ったディスプレイを押し付けてくる。

「あのな、そうじゃなくて……和花の意見を聞けっの」

「むむ？ わ、うあーっ！ わたしがっ、小さい画面につ！」

私の傍まで来てメリーの携帯を覗きこんだ和花の興奮度はうなぎのぼりだ。意見のいの字も出てくるか怪しい。

「なあ和花、知らないやつに写真送られるなんてやだろ？ お金出すからさ、やめとこうぜ」

「構いませんよ、写真くらい。どうして嫌なんです？」

実に真っ直ぐな意見の剛速球である。

「そりゃ、ばら撒かれたりとかさ、変なことに使われたり……危険がたくさんなわけで」

澄みきつた和花の眼を直視して汚い言葉を言うのは難しい。だが駄目なんだ、世間の男どもは淫靡な狼なんだ。愛娘をもつ父の気持ち、ちよつとわかりました。

「あー、紳士がいらぬ心配しているみたいだから言っておくけれど、店主、女の子よ」

「先に言えよ！ でも、じゃ、なんで美男子限定無料サービスじゃないんだ？」

「……趣味趣向は人それぞれよ。送ったわ」「ええっ！」

メリーは非常に裏のありそうな発言をしつつ、写真を送信した。もう私には、どうか和花の心にトラウマができてしまう事態になりませんように、と祈ることしかできない。

二十秒と経たずにメリーの電話が鳴った。店主による審査の結果、和花の着物は無料で引き受けられるということが確定した。メリーは和花の着物を手に持つと「すぐ帰る」と一言残し消えた。と思うと、また現れた。手には着物が無い。店主に無事届けられたようだ。はたして無事に帰ってくるだろうか。

あれこれ脱線しながらの食事が終わった。しばらく三人であっても

なく畳の上をごろごろした後、和花の風呂支度をすることにした。

キッチンの狭いスペースに三人が集合する。

「今回はコイツを使うぞ」

「でかつ」

「おおきい！」

以前、商店街の福引で当たった鉄鍋だ。一人用というより大家族でつつく鍋を作ることに適した大きさをしているので今日まで使い道がなかった。この鍋で湯を沸かし、金盥に注ぐこと二回。あつというまに簡易浴槽の誕生だ。石鹸やシャンプー、リンスなどは私のストックからプレゼント。タオルを畳の上に敷き詰め、その上に浴槽が設置されているので防水性も抜かりはない。洗面器と予備の湯を鍋に用意してタライの傍に置き、すべては整った。

入浴を始める和花を残し、和花の風呂を準備し終わった途端にピンク色の洗面器を抱えてうずうずしていたメリーと私は華の湯に向かう。

冷え切ったアスファルトを踏みしめて、田舎なせいでやけに澄んだ星空を眺め、たどり着いたのは毎日の終着点、華の湯。入り口でメリーと別れ、脱衣所に入ると、ささやき声が降ってきた。

「おう、来たな。今日は無料、牛乳類も好きなだけ飲め。けど、腹壊さない程度だぞ」

番台には昨日と変わらぬ笑みの番頭さんがいた。同じ内容を対岸に居るのであるうメリーにも伝えてある。病院で別れてから数時間もう回復したのか、それとも隠しているだけなのか。どちらにしても、この人は強い。

「ありがとうございます。でも……あの、大丈夫なんですか」

「大丈夫さ、今日は客の入りもいいし……あ、そうじゃねえか。大丈夫、大丈夫だよ」

そして私のつたない言葉の意味をすべて、すんなり読むのだ。

「そんなにアタシは弱くねえよ。はは、それよか、とつとと風呂入れ。外、寒かつたる」

いきなりガシガシと頭をなでられる。番頭さんの温かい手のひらのせいか、なでられ慣れていない照れくささのせいか、脳みそが急速に沸騰しそうになる。風呂に入る前からのぼせてしまいそうだ。

「メリーちゃんも早く温まってきな。そのヒラヒラした服、風入ってきて辛いんじゃないの？」

「ええ。けれどこういうのしか私は持っていないのよ」

番頭さんの手のひらが私を離れ、対岸のメリーをなでている。メリーがどんな顔をしているか私の方からは見えませんが、きつと幸せそうに笑っていることだろう。

昨夜に番頭さんとメリーの間になにがあって親密になったのか気にならないと言えば、嘘になる。しかし、私の方から聞くのは無粋だ。

お邪魔虫はとつと風呂に入ろう。番頭さんの心を癒すのはきつと私ではなく、ちいさな魔法少女なのだ。

第7話 あなたの名前は？

華の湯から出て、双葉荘に帰る。温かい風呂と番頭さんとの世間話でぬくもりを得た体は冬の外気程度じゃ簡単に冷えそうにない。背中にのぼせてグツタリとしているメリーを背負っているのもカイロ代わりになっているし、風邪を引くことは殆どなさそうだ。

「うーん。人形も体温を持つってのは……あらためて不思議だよなあ」

「私のボディはふぁんたじー……だもの……うう」

「ああもう寝てなさい」

自室のドアを開けるとシャンプーの香り。和花がドライヤーを使っている、なびく黒髪の甘い香りが風に乗っていたのだ。道具の使い方を口頭で教えれば一発で覚えるという、和花の飲み込みと適応力の高さには目を見張るものがある。もし人間だったら才媛として名をさせたかもしれない。その才媛は、私のパーカーとスウェットを着ていた……明日はパジャマを買いに行こう、申し訳ない気持ちになってきた。

和花はやたら大きい音の鳴る古いドライヤーのせいで私とメリーが帰宅したことに気が付いていないようだ。和花がドライヤーのスイッチを切ったのを見計らって声をかけると、ようやくこちらに気づいた大きな瞳が驚きの色を見せた。

「わっ、おかえりなさい。メリーさんどうしたんですか？ お布団敷きましようか？」

「ああ頼むよ。昨日よっぽど寒かったのか、反動でどうも今日は長風呂しすぎたらしい」

私は、ゆでだこ状態のメリーを和花が敷いてくれた布団に寝かせ、

シンクに向かい、濡れタオルを用意してメリーのおでこに乗せた。すると辛そうに歪んでいたメリーの表情がにわかに戻った。

和花に頼んでメリーの服を私のセカンドジャージ（通称中学ジャージ。カラーリングは青）に着替えさせた。私と和花はメリーが寝ている傍で座り、様子を見守っている。にしても都市伝説二名のアイデンティティがロストしているというのは奇妙な光景である。明日にはメリーが和花の着物を回収してくれるはずなので日中はオカルトめいた雰囲気が出てくるかもしれない。

「ま、和花は初対面からずっと怖くないけど」

「なんですカー、藪から棒に。怖がってくださいよ、いちおう呪いの人形ですよ」

「がーっ、と両手を振り上げて和花が襲い掛かるポーズを作った。

「ぜんぜん怖くねえ……」。

「ははは、ごめん。……和花、寒くないか」

「こくりとうなずく和花。」

「ええ、お風呂入ったので平気ですよ、嬉しかったです、タライ。はしゃいじゃいました」

「そりゃよかった。ん、ちょっと早いけど俺たちも寝るか？」

「はい、そうしましょう」

ふと部屋の時計を見ると九時を回っていた。うなっている人がいる傍で動き回るのは、可哀想だろう。だがここで、見逃していた解決できていない問題がもたげてきた。座ったまま固まっている私を不思議そうに和花が眺めてくる。

「どうしました？」

「布団がない」大問題である。

私の布団の上ではジャージ姿のメリーが気持ちよさそうに寝息を立てていた。体の火照りは収まったようなのでそれは良かった。しかしどうするか。昨日は私だけだったので毛布を使うだけで全然問題なかったのだが、和花に寒い思いをさせるのはいただけない。

「あ、ほらあの、布団に余裕ありますし三人で寝ましようよ、川の

字になつて」

「えっ、なんかそれは……」

「むー」うなるメリー。そのうめきは私が横に寝ることが嫌という抗議声明なのだろうか……。ささいに傷ついていると、メリーが布団の右端にころりと動いた。

「んー」メリーはぼむぼむ、と布団に空いたスペースを二回たたいた。

「ささ、メリーさんが待つていますよ。どうぞ、お先に」

「いや……和花だけ入んなよ」

「もう、風邪を引いたら困りますですよ。毛布だけで寝ちやうなんて、もうなしですから」

微妙に怒っている和花に急かされ、私は二人に挟まれて眠る格好となつたのだが、当然のごとく、全く落ち着かない。目をつむっているのに、睡魔が襲つてこない。過ぎていく時間がやけに長く感じる。

こんな風に、一つの布団に多人数で入るなんてことが人生の中で一度もなかったからだろうか。人間が寄り添いあう体温が、ここまで温かいとは知らなかった。落ち着かないけれども、どこか安らぐような。春の陽気のように心をもみほぐしていく二人の体温が、私の身体に満ちていった。

……もう思い出すことのできない、あの子の体温はどうだったか。あの子は私の体温で安らいだのだろうか。

布団に入ってから何時間が経過したのだろうか。眠ろうとする意思と無意識の思考がぶつかり合つて、なかなか寝入ることができない。体温以外は今でもはっきりと覚えているあの子。煩悶はんもんしながら私は寝返りをうった。そしておもむろに目を開く。

その時目に入ったのは、暗闇に潜む二つの点。その点は私の方をじーっと見据えている。暗がりに融ける髪の色は黒。和花だ。

「どうした？」

私は寝ているメリーを起こさないように、ささやき声で和花に話

しかけた。

「んと、目がさえてしまって、なんだか眠れないんです。変な感じ。人間の近くで、こんな気持ちで眠ろうとしているなんて。人殺しの人形なのに、わたし、あなたの隣で寝ようとしているんです。……普通の人形とかぬいぐるみって、毎日こうしているんですかね」

小さなささやきは複雑な響きをもっていて、和花がどんな気持ちでいるのかを掴み取ることができない。混ざり合う感情を無理矢理ひとつの言葉にまとめようとしているような、そんなとまどいだろうか。そういった感情を吐き出せるようにしたのは私だが、私が手を加える前からモノは感情を持っている。記憶を、思い出を、過去を持っていくのだ。

それを知ったのは随分昔のことだ。

では、それを知っている今の私は、とまどう和花になにができる。着替えてなかったジーンズのポケットを探ると煙草が入っていた。そういえば今日はまだ吸っていなかった。携帯で時刻を確認する。午前三時。この時間ならば人通りはほぼ皆無とっていい。うん。注意深く行動すれば大丈夫だろう。

思い立ったが即行動。和花の手を取り、玄関に向かった。

「外に、行くのですか？」

「ああ。がつつり深夜だし、人に会う心配もない。ちょっとさ、散歩に行こう」

今日　というより昨日か。一日、ずっとメリーと行動していて思ったのだ。私の家にひとりで留守番している和花は外に出たくないのだろうか。紫陽花から出て、私の家でしか過ごせないとしたら、それは結局なにも変わっていないんじゃないかと。

行動を制限され、閉じ込められる窮屈さは、私も嫌というほど知っている。だから、せめて夜くらいは。

寒くないように和花に上着を着せてから玄関のドアを開けると、深夜独特の静けさが私の身体をなでた。目の前の柵に手をのせて辺りを観察する。期待通り、人っ子一人いない。開けっ放しの玄関で

待機している和花に手で合図を送る。

ゆつくりと、和花が私の方へ近づいてきた。小さな歩幅で一歩、そつと。その姿が、まるで和花と出会った時の自分のようでないだか可笑的い。

「おお……」

私の隣で和花は夜空を見上げている。その口から感嘆の声が漏れた。この子はいま初めて、これを見ているのだ。やけに澄んだ星空。田舎住まいの特権。

「いいよな、これ。でもあんまり見ると首が痛くなるんだけど」

和花は慌てた様子で首を下げた。

「うつむ、これが星空。しかしこれは魅力的かつ狡猾な罠ですね、夜の散歩は危険がいっぱいということでしょうか……首の痛みに耐えながら、さながら訓練が如く闊歩するのですか。無事に帰れるのかいささか不安になってまいりましたよ」

「大げさすぎるって。歩きながらちよいちよい見ればいいんだよ」

私は和花の手を握った。

「動けるようになってから階段を上り下りするの、初めてだろ。外でこういうことするのは、ちょっと恥ずかしいかもしれないけど我慢してくれ」

「あ、はい。いえ、恥ずかしくはないですけど……」

和花はそういつて私の顔を見たと思ったら、すぐに玄関のドアの方に顔を向けてしまった。な、なんだろう、『恥ずかしくないけど』、単純に嫌です。『って内心では私のことを……。いい子世界選手権優勝候補者の和花に言われたら呪い抜きで昇天できちゃうかもそれから慎重に階段を下り、ふたりで夜道を歩いた。

和花は初めて自分の足で外を歩いていることに感動している様子。やはり、外に連れ出してみるという判断は好ましかったようだ。

しかし安心してもらえなかった。未知の世界への興奮のせいなのか、和花がなにもない場所で転んだ時には焦らざるを得なかった。地面衝突の瞬間にジャケツトをひつつかみ、なんとか鼻血がでる事

態にはならずですんだ。

ん……人形……血……。急激に胃のあたりがざわざわし、ひどい虫歯にかかった時のような頭痛が私を襲った。

「どうしました？ お体、悪いのですか？」

私の顔を見上げてくる和花。

「いや、なんでもねえ、平気だ」

ともかく、このままでは和花がまた転びそうなため、階段以外でも手を繋いで行動することにした。和花の手にふれると、頭と胃の痛みがちよつとずつ引いていった。

カラン、コロロン。カラン、コロロン。

人気がない深夜の道では和花が歩くたびに鳴る下駄の音がよく聞こえた。

呪い殺してもらおうとしている当事者の立場で、こんなことを考えるのも変な話なのだが。もしも、和花の体に巢食う呪いを被えるかなにかして、昼でも朝でもこの音を和花が鳴らせるようになれば、そうなればこの子は幸せなのだろうか。私の横を歩く和花の顔からは、深夜の散歩イベントに高揚している以上の情報を読み取ることができなかった。とりあえずいい気分転換にはなっているようだ。

そうして公園に到着した。双葉荘からそう遠くないここで私はくつろぐことが多い。規模も狭すぎず広すぎず、実に丁度いい。ブランコ、砂場、シーソーという定番の遊具たちが時間帯のせいでちよつとオカルトめな空気をもし出している。風に揺れているだけのブランコに怯えていた頃を思い出した。

昼間は井戸端会議中の母親や、縦横無尽に走り回る子供たちが散見されるこの場所も、この時間では私と和花だけが存在していた。和花をベンチに座らせ、その隣に座り煙草を口にくわえ火をともした。和花は道中で買ってあげた激甘コーヒーをちびちびと飲んでいる。

夜の空気に紫煙が混じり始めて少し経ったころ、唐突な言葉が隣からやってきた。

「あの、ずっと気になっていたんですけど。聞いてもいいのかもわかりませんが」

声の方を見ると、コーヒーを両手に持って不安げな顔をしている和花がいた。私は、ふう、と煙を上空に吐き出して、

「気になることがあるなら、すつきりさした方がいい。なんでも聞いて」

「……あなたって……本当に殿方なのですか？」

「げはっ……」心に突き刺さるご質問ありがとうございます。「男っす」

「で、ですよ。ごめんなさい」

「いいよ、いいよ。にしてもなぜ俺の性別を疑ったんだ？」

「いやその、昨夜、わたしとくっつくのを恥ずかしくておられたのに、さらりと手をつなぐのは……どこか不自然に思ったので、もしやと」

「そのもしやは無理あると思う……手はよくつないでたから。和花より小さい子とだけど、あ、もちろん俺も小さかった時にね。よく遊んだんだ」

「そうですね……あの、もう一ついいですか」

私はうなずいた。すると和花は三秒ほど悩んだ様子を見せてから話を始めた。

「……先ほど、表札を拝見したのですけど、あなたの名前がありませんでした。部屋のなかにもあなたの名前がありませんでした。……」

……あなたの名前、お聞きすることはできないのでしょうか」

驚いた。が、出会って二日にもなって名乗らない不自然さは、ごまかしきれないのも当然だろう。私は名乗らずに済めばそれでよいと思っていた。これまでもそうしてきた。

「……聞いてもどうしようもないぜ」

「たとえこう、ほんのすこし穿った名前でも驚きませんから、ご心配なく」

「いやうん、そういう系統ではない。でも聞くと聞かないとじゃ、

俺に対する和花の見る目が変わってしまったかもしれないって思うとな、情けないけど怖いんだ。だからあだ名をつけてよ、和花の好きな風に」

「わたしがあなたの名前を？」

「そう、俺がキミにつけたように。適当でも雑でもなんでもいいから」

「うーん……あ……お兄様！」

いきなりの妹属性付与に私は咳き込んだ。動揺をもろに顔にだし、煙草を落とした。穿っているのは和花の方ではないか！ 急いで消火活動をして、携帯灰皿に吸殻を収納した。

「ああ……もしかして、昨日の俺とオヤジさんの会話、覚えてたのか……」

「いや、もうあれは憶えてない方がおかしいですよ。呪いを知つてなお触ってきたとき、本当にびっくりして……そのままおぶわれての直後のことでしたから。今日も平気で手を握ってきてくださいますし、他にも初めてのことばかりで」

ぎゅう、と缶コーヒを握りしめている和花。スチール缶じゃなかったらつぶれてそうだ。溺れる者がかむ藁のように缶を握りしめて、和花は言葉を続ける。

「ええと……その」

悪すぎるタイミングで携帯に着信。どうぞ、という和花の指示に従い、電話に出る。

『もしも私、和花さんと一緒にベンチの裏の茂みに隠れなさい、早く』

早口で話してきた電話相手はメリーだった。

「メリー、なんというか空気を」

『いいから、早くしなさい』

メリーの言うとおり、腰くらいの高さがある茂みに姿勢を低くして隠れる。昼間ならば子供でも隠れられないほど葉っぱの隙間が空いている茂みなのだが、深夜かぎりのカモフラージュ率上昇により

絶妙な潜伏場所になった。私も和花も暗い色の服を着ているので、80%は堅いだろう。

「上出来よ、二人とも。いいと言うまでそこにいなさい」

「のわっ」「メリーさん」

完璧なカモフラージュ率を誇っているとも言えなくはない黒ゴスを身につけたメリーが、私と和花の目の前に現れた。そのせいで腰が抜けそうになった。何度もレポートを見ているのに、この時間帯に唐突に目撃すると、すこし肝が冷える。

そしてあたりに漂うのは、番頭さん事件のときに感じた嫌な雰囲気。

まさか一日一回この雰囲気と遭遇するとかそんなこと……。

「……紳士、昨日、やっかいな電話に出たでしょう」

私と和花は黙ってメリーを見つめる。

「いや、私のことでなく、やめて、その目線やめてちょうだい。あ

……来るわよ、あなたたちは無言をつらぬくこと」

メリーは茂みから離れると、シーソーの方へ歩いて行った。

そしてシーソーの真ん中に仁王立ちしている。絶妙なバランスで立っているのかシーソーは全く動いていない。やっつてすることは達人級だが、見た目は完全にただの不審者である。

ガチャリ、ガチャ、ガチャン。

ふいにどこかから聞こえてくる、鉄がこすれあうような音。耳をすませ、音源を目で探してみると、公園の入り口にそいつはいた。街灯に照らされている、銀色の西洋甲冑。鎧全体に施されている模様デザインがやけに複雑で俗っぽい。腰には鞘に納められた剣を帯刀していた。コスプレにしては妙な真実味を帯びている謎の甲冑はなにかを探すように首を動かしながら公園を歩く。

和花に動く甲冑について聞いてみたいが、言葉を出そうにも、私は完全にあの動く甲冑の雰囲気にもまれてしまっていた。メリーに忠告されなくても、言葉を発することなどできないかったろう。

闇を歩む銀色の甲冑。

その様子は得物を狩ろうとするハンターに似ていた。あの腰にあるドデカい剣で叩ききられたら、痛みで悶え、すっぱりとは死ねないだろう。すっぱり派なら日本刀をオススメする。

甲冑がシーソーに近づくと、メリーは依然仁王立ちのまま腕を組み、動こうともしていない。

という風に見えたのだが実際は違った。

私もとっさのことなので理解が追いつかなかったのだが、おそらく甲冑の隙間に鉄か何かをメリーお得意の魔法で食い込ませ、可動域をふさいだのだろう。甲冑は棒立ちのまま、動かなくなっていた。ギシッ、ギシリ、ギシイ！ 甲冑が身を必死によじらせる音が聞こえてくる。直前まで漂っていた風格がどこかにいつてしまわれた。駄々をこねる子供のようにもがく甲冑がメリーに気付いた様子は全くない。『夜は影が薄い』というメリーの謎特性が発動しているようだ。私にはバツチリ見えているので姿を見せない相手がある程度指定できるのかもしれない。

「ほいほい、終わったわ。帰りましょ」

がさり、と音を立ててメリーが茂みに転移してきた。深夜の公園に突如現れた怪奇、銀の甲冑を行動不能にしておいてきながら、何食わぬ顔で私たちの元に戻ってきたので、私と和花の開いた口がふさがらない。たまらず私はメリーに質問する。

「え、あれ放置なの、大丈夫なの、ほのかに漂っていたシリアスっぽい雰囲気は？」

「シリアスなんてほっときなさいよ。私の睡眠時間の方が大事よ」
とんでもなく理不尽なことを言い始めた。この子、ねぼけているのか。

「紳士がどうしても気になるなら、朝になってから調べなさい、かなり面倒なことになるけど。でも……紳士なら丁度いいかもしれないわ、うん」

メリーは私の返事を待たず、一方的に得心がいったというふうにならずいて、私と和花の肩に手を置いてきた。

次の瞬間には、もう私の部屋。靴下で畳を踏む感覚。ごく親切に私と和花の履物は玄関に転移させてくれたようだ。

わたしと和花は手洗いうがいなどをすませ、六畳間に戻った。すると畳の上に寝転がっていたメリーが立ち上がり、

「紳士、携帯のプロフィールを交換しておきましょう。電話の相手が私だってわかった方がなにかと便利でしょ」

「いや……俺の電話相手なんてメリーしかないようなもんだから別に」

「もう。いーから、女子のアドレスがひとつもない残念紳士へのプレゼントよ」

「……………とつとと交換しようか」

「いいなあ、ふたりだけ、ずるいなあ。はいてく」

布団にもぐりながら、ふて寝体勢に入った和花のつぶやきが聞こえてきた。

第8話 甲冑の中身と、悪魔な眼鏡

しかして私は徹夜を決行した。といつても公園から帰ってきて十分しか経っていないため、時刻は四時前。昨日は空飛んだり、入院したり、買い物したりなど盛り沢山だったが、これまで休講貴族として過ごしていたので体力ゲージはまだ有り余っている。大丈夫だ。私は使命感に燃えている。メリーが放置した甲冑をなんとかしないと、私の一服スポットが警察に占領されてしまいかもしれないのだ。そしてお母様方の井戸端会議がヒートアップし、子供は泣きだし、さあ大変。そんな事態は、いただけない。公園の平和は私が守る。

人が公園に来る前に事をすませなければ。ぐっすり眠っている和花とメリーを部屋に残して、外出の準備を完了させた私は公園まで走った。

すると、まだ暗い公園で甲冑が倒れており、もぞもぞと、しゃくとり虫のように動いていた。コンビニで買った懐中電灯で照らす。ふいに明かりを当てられて甲冑がビクツと反応した。鎧の隙間に細い木の棒がやたらと挟み込まれており、自力で鎧を脱ぐこともできないようだ。

「……大丈夫？」

「ぜんぜ、ん大丈夫じゃ、ない」

ぐずる、女の子の声。無理もない。私も深夜の公園で身動きできなくなったら間違いなく泣く。頭の全面を覆う兜のせいで顔は見えない。呼吸をする音が聞こえるので中にだれもいないという展開はまずないだろう。

私は甲冑の隙間に挟まっている木の棒をすべて引き抜いた。

自由を取り戻した甲冑が立ち上がり、私に頭を下げてくる。

「すみません。恩に着ま……わ、先輩？ 先輩ではありませんか！」
私の肩をつかんで甲冑娘が詰め寄ってくる。私の人生において後輩かつ、私のことを覚えていた女の子となるのかなり限られるというか、ひとりしかいない。久しぶりの再会がこれとは実に、残念極まりない。いやこいつなら？ 仕方がない？ の範疇に入るか。

「お前……どこで道を間違えればこんな姿になれんだよ」

「はっ！ 先輩のようなヒーローになるにはまず形からと！」

懐中電灯にあてられながら敬礼する甲冑娘。ヒーローか……。

「もういい、わかった。とりあえず甲冑を脱げ。このままだと変質者だ」

「それが、その、これ、脱げないんです。それで紫陽花に相談しに行く途中だったんですけど、こんなことに。先輩の言うとおり昼間は視線がやばいので、深夜に人目を気にしつつ歩いてたのに……ほんと、いったい誰がこんなイタズラを……」

甲冑娘はしゃがんで棒をしげしげと眺める。犯人は内緒にしておこう。それにしても、メリーはなぜ私の後輩を拘束したのだろうか。

私と甲冑娘は紫陽花の開店時間を店の入り口で待つことになった。狸君の隣で直立する甲冑娘は動かなければ紫陽花の売り物のように見える。

開店時間になり、オヤジさんが入り口のドアを開けて出てきた。

二日前に今生の別れをしようとした相手に再び会うというのは、想像以上に味のある体験である。

「よお、ちゃんと元気か、健康か？」

オヤジさんはニツと笑って白い歯をのぞかせた。私も笑顔で応じる。

「はい、あの子に直接聞いたら、俺には呪い効果ないみたいです」
あくまで現時点は。

「おお、そうか！ ようやっと肩の荷が下りたぜ……んで、そのプ

レートアーマーはなにもんだ」

三人そろって紫陽花の店内に移動し、甲冑娘がオヤジさんに事情を話す。骨董品に詳しいオヤジさんならあの鎧と兜をすぐに外してくれるだろう。

私の予想通り、オヤジさんはどんどん鎧を脱がしていった。残るは兜だけとなったのだが、甲冑娘が体育着の上に鎧を着こんでいたせいでビジュアル的に物凄くシユールになっている。というか変態。真冬に半袖短パンで甲冑を着こむとはさすが、体力馬鹿である。腕や足がしもやけになっている様子もない。こいつの身体の構成要素はなんだ、断熱材なのか。

「兄ちゃん、ダメだ。こりゃ、ずいぶん無理に押し込んだみてえだな。引つ張って取ったら頭がもげちまう。一度壊すしかねえ、後処理、頼んでいいか」

「命がかつてますし、了解です。任せてください」

オヤジさんは兜の後頭部にあるわずかな隙間にマイナスドライバーを入れ、てこの原理で兜を破壊した。バギン、と後頭部の鉄板がとれて、床に転がる。

甲冑娘が兜を脱ぐ。そして甲冑娘から、はれて体育着に戻った後輩がオヤジさんの手を両手で握り、ぶんぶんと上下に振り回した。

「うっひゃ　　っ！　助かったよ、おやつさん！　一日ぶりに直で空気が吸えるー！」

言いながら後輩はびよんびよん跳ねる。連動して後輩の紅色の長髪もびよんびよん跳ねる。

「そりゃよかつたな。最近見ねえと思ったらあいかわらず馬鹿で安心したぜ」

「ひどい！　学業とヒーロー業の両立は大変なんだよ？　多忙なの、馬鹿じゃないよ！」

「ああいや、嬢ちゃんの場合もつと根本的というか……なあ？」
そこで私に話を振って来るか、オヤジさん。

解説しよう。私の後輩は外見素敵、中身残念ということに定評が

ある。生まれつきの赤い髪はルビーにたとえられ、その絢爛な紅玉の持ち主はそれを身にまとうにふさわしい、童話のお姫様のような容姿の可愛らしさを誇っている。だがしかし、中身は断じておしとやかな姫ではない。高校生になってなお特撮ヒーロー物が大好きなやんちゃ娘であり、年頃の女の子なのにも関わらず、甲冑を着て街を歩く馬鹿者なのだ。

「まあ、あの姿で風邪になってないってことは……だいが手遅れでしょうね」

「手遅れってなんですか！ 先輩ってば、久しぶりの再会なのにつめたすぎです……むしろ私の名前も憶えてなさそう」

うなだれる後輩。

「たった数年でそれはないから安心しろ。さつて、とっとと仕事を
するかね……」

私は床にある金属片を拾い集め、無残にも後頭部を失った兜を後輩から受け取り、パーツを近くにあったテーブルに乗せた。そして鉄くずと化した兜だったモノに手を触れ、目を閉じる。精神を集中させ、耳からの情報を一切遮断し、世界との隔絶を図る。イメージする。鉄くずになったモノに、もう一度、存在の機会を。

？うまくいった？という確信が、私の身体を充足させた。私はゆっくり目を開ける。

刹那、鉄くずが光り輝き、店内が激しい光に一瞬照らされた。完成だ。

「もうかぶるなよ。また壊すことになる」

私はばつちり元通りになった兜を後輩に渡した。

「はい、すみません！ 大切にします。にへへ、先輩、まだまだ現役ですねっ」

後輩は兜をわきに抱えて私の手をぺとぺと触ってくる。握手大好き人間か、こいつは。

「現役とか引退とかないだろ、こういうのに」

私の奇妙な能力。モノをイキモノにすること。そして今実演した

ように、モノを？治す？こともできる。本来なら？直す？だが、私はモノを擬人化したほうが再生をイメージしやすいのである。後者の能力は私自身にはあまり使う機会がない。なぜならモノを壊すことを極力避けているからだ。

「じゃ、俺はこれから学校だから。お前はこれ以上奇行に走らずにとつと家に帰れ」

「帰りませんよ。私だって学校ありますもん。高一ですよ、ぴちぴちの。どうかな、私、グラマラスになりました？」

後輩は私の前で決めポーズをとった。戦隊物のポーズを臆面もなく決めているうちはグラマラスとは無縁だろう、と口にしようと思つたがスルーし、真面目に指摘する。

「お前、体育着で登校するつもりか？ 丸一日くらい鎧着てたんだろ、着替えたほうがいい」

「あ。そうでし……………」

黙り込んだ後輩は、よろよろとした足取りで店の奥へと消えていった。馬鹿でも女の子だ、言及は避けてあげよう。ちよつとした用事から帰ってきた後輩は、それはもう、すがすがしい笑顔であった。

私は後輩とオヤジさんに別れを告げて、大学へとやってきた。昼休みのため、学内の人通りが授業時間帯よりも多い。いつも通りの賑やかしすぎても、明るすぎてもいない学内の風景。ここで昨日事件が起きたとは思えないほどの平和ぶりだ。私は、この平和加減に解決した事件の余韻なんて噂の種にもならないものなのかと疑問を感じながら授業のある教室まで歩いた。

無駄に広い、いつもの教室。話を聞く気のない生徒が、教授の目が届かない最後列で合コンの打ち合わせをしていた。その声も無駄に大きい。大学生活を充実させようと努力している姿を多くの人にってもらいたいのだろうか。私は一度しかない人生を全力で楽しも

うとして、いる彼らの声に耳を傾けながら、真ん中あたりの列に座る。和花に殺されるために希望を集めなくてはいけないが、どう集めたものか相変わらずわからない。やはり彼らくらいの努力を毎日する必要があるのであるだろうか。だが、人間を愛せない私とその努力を行うのは絶望に限りなく近い行為だと思える。となると、これも違う、か。

私はため息をひとつついて、鞆から教科書とノート、そして筆記用具を取り出し、授業開始に備えた。

「隣いいかな？」

落ち着いたトーンの声が降ってきた。目を向けるとフチなしの眼鏡をかけた黒髪の好青年がにこやかに笑っていた。接客業のアルバイトをそつなくこなしそうな雰囲気である。

「ああ、どうぞ」

私が座っているのは本来三人掛けの椅子で、私はその右端の席に座っていた。私は真ん中の席に置いていた鞆を床に下ろす。

「俺は床でいいからよかつたら荷物置いて」

「すまない、助かるよ……っと」

彼は随分と重たそうなりリュックを背負っていた。大学に行くための荷物と言うより、三泊四日の旅行にでも行くのかというほどの大きさである。荷物を置いた彼は左端の席に座り、

「さすが、人助けのためなら空を飛ぶ人間は親切だね」

とリュックから教科書などを出しながら小声で言った。私の血の気が引いていく。つい彼の顔を凝視してしまう。眼鏡の奥で何を考えている。

「そんな顔をするのは、いささか変だ。ただ僕はふつうに見ただけ。きみが女の子と手をつないだと思っただけ、空に浮かんでいたのね。あれはどうやったんだい。どうしてきみは空を飛べた、あの子に秘密があるのか、なにか特別な装置でも使ったのか」

頭の隅で考えてはいた。あの転移の瞬間を目撃した人間がいるだろうということ。事件が起きていたとはいえ、病院でメリーが言

ったように、あそこは衆人環視の場だった。私のことを見た人間が皆無な方がおかしい。

「ほとんどの人が騒ぎに気を取られていたけど、僕は興味がなかった。どちらかというと、僕は他人がどうにかなるうと自分さえよければいい人間だ。だからこうして、きみの気持ちも考えずに一方的に話している。さあ、解答をくれないかい、きみはどうやって飛んだ？」

「……なにを言ってる、俺は飛んでなんかいないし。昨日は授業が午前だけだったからとつと帰ったよ」

「はは、嘘が下手だなあ。最初から学校に居ないとも言えはまだまだ……いやそれでも変わらないか。そうだね、じゃあ、証拠を見せよう。まずこれが一枚目」

彼はリュックからデジカメを取り出して操作した後、画面を私に向けた。その画面にはメリーに手を引かれて歩いて歩いている私の姿が映っていた。私は写真にうつる自分と同じくらい青い顔になる。

「で、二枚目」

画面には私が鳥になった瞬間がこれでもかと表示されていた。羞恥心がくすぐられる。

「もしも解答してくれないというのなら、この写真を僕のホームページに掲載するよ。根も葉もない噂に尾ひれをたっぷり付属させたテキストと一緒にね。さ、事象の根拠を聞かせてくれ」

「そんな、ただの大学生が運営してるホームページに載せたって痛くもかゆくも」

「僕のページのアクセス数は一日あたり二百万だ」

デジカメを持った悪魔が笑う。脳裏にメリーの言葉がよみがえる。常識人だけがあの場にいたとは限らない。言動から考えるに、こいつはおそらく非常識側の人間だ。

しかしどうしたものか。下手な嘘についても私の腕前ではばれるだろうし、事実を言えばメリーをつけねらうかもしれない。……いや、メリーなら魔法でこんな眼鏡デビル、軽くいてこますのではないだ

るうか。それにあの見かけに似合わない怪力と、大男を一発で気絶させる驚異の手刀をメリーは持っている。

「すまない、メリー、私はキミを信じているんだ。」

「俺といた金髪の子、あの子は魔法少女なんだ。それであの子のお得意の魔法……瞬間移動、つまりテレポートな。それを使って俺を空に飛ばしたんだよ。」

正直に話すことを許してくれ。

「嘘だね、きみは馬鹿か。魔法なんてものが正解として存在していないわけない」

「いや、いま言ったなかに嘘は一つもないぜ」

「……さつきみたいに動揺してないな。本当なのか、そんな馬鹿な、ありえない。科学的、学術的根拠を提示してくれないと僕は何日でも、何年でもきみにつきまとうぞ」

眼鏡悪魔のレンズの奥の眼差しがキラリと光った。本気だ、こいつ本気で私につきまとうつもりだ。いくら春が来ないからって、男を呼んだつもりはないぞ、神様。いやまて、いるのかいないのかわからない神様よりも、

「ちよつと待て、な、五分でいいから電話をかけさしてくれ」

「電話だと!? そんなことしてる暇があつたら!」

眼鏡悪魔はリュックを押しつけて私に顔を近づけてくる。興奮している青年のアップとか全然嬉しくない。

「頼むよ、授業までまだ十五分あるんだし、焦らずいこうぜ……」

私はプレッシャーにあてられながら携帯を操作して電話をかけた。プロフィールをもらっておいてよかった。十秒ほどコールすると相手が出た。

『は、はい、わた、私、メリー、ですけども、ななな、なにかし
ら』

なぜかメリーはしどろもどろだった。

「すまん、俺のいる場所、わかるよな。面倒なことになった、ちよつと来てくれないか」

『……なんだ。……残念ね、これから和花さんと格ゲーやるからパス。というより、お昼を食べたばかりであり動きたくないわ』
私の部屋で都市伝説たちが格ゲーか。こんな状況じゃなきゃぜひ参加したい。

「そのお昼のお金は誰が机の上に置いていったものか、聡明なメリーさんなら理解できますよね……。頼む、昨日のアレの目撃者に絡まれてるんだ。メリーの魔法を信じさせないと、毎日二百万アクセスの変なサイトに俺たちの写真を載せられちまう」
「きみ、変なサイトとはどういう見かな」

眼鏡悪魔が詰め寄ってくるのを空いている手で押さえる。

『そう……。仕方ないか。ばら撒かれる種はひとつでも少ない方がいいし。和花さん、ちょっといつてくるわね』

そこまでメリーの言葉が聞こえたかと思うと電話が切られ、

「はい、こんなもんでどうかしら」

机の下からもぞりとメリーが出てきて、そのまま机上に座り、優雅に足を組んだ。どや顔を決める魔法少女は本日も絶好調である。

もう私はこれくらいのことでは驚かなくなっているが、眼鏡悪魔はどうだろう。ちらと顔を窺ってみる。

「ははあ、やるね。ステルス迷彩か……。気配も呼吸も消すとはなかなかのエンジニアのようだね、ゾクゾクするよ」

したり顔でまったく見当違いのことを呟いて悦に入っていた。怖い、この眼鏡、怖い。

「ステルス迷彩じゃなくて、たった今、この子はこっちに来たんだぞ。待ってる」

私はメリーの携帯に電話をかける。ピリリリ、とメリーの肩にかかる靴から着信音。私は電話を切った。

「ほら、さつきは鳴ってなかったけど今は鳴ったし、話し声も机の下からは聞こえなかっただろ。なんなら俺の発信履歴とメリーの着信履歴も見るか？」

「いやよ。着信履歴は見せないわよ、ぜったい」

メリーはつややかなポニーテールを振り乱すように首を横に振り、自分の鞆を胸にぎゅうと抱きとめ、携帯を死守せんとする構えになった。確かに着信履歴は他人においそれと見せるものではないな。私はメリーに軽く謝罪し、話を続ける。

「とにかく、この子が俺を空に飛ばしたんだ。まだ信じられないか」
ハッ、と乾いた笑い声を出した眼鏡。

「信じられないね。そりゃ見事な潜伏には感服したけど、僕は全然納得してない。なんらかの装置を使って空を飛んだんだろ。テレポーションなんて漫画やアニメの世界、まさに空想だよ。この現実アルに存在していいわけがない。僕はそれらの存在を真っ向から全否定する。あれは娯楽として楽しむものであつて、現実世界と混同するものではないんだ。それくらいの分別はつく年頃だろう？ きみも、そして僕もね。もう子供じゃあないんだよ」

眼鏡悪魔はあくまで淡々とした口調で自身の論を展開した。話を聞いて驚く。奇遇にも、空想の存在を全否定するというこいつと私は対極の位置にいるのだ。私は呪いや超能力を全肯定する立場にいて、しかもその考えは根拠のあるものだ。なぜなら現実には、私自身が変な能力を持っているのだから。

だがどうすればこの悪魔は納得するのだろう。かたくなに空想を否定する人間に、空想の存在を実感させるには……だめだ、てんで思いつかない。

「もういいわ、紳士。この眼鏡さん、飛ばしちゃえばいいんじゃないかしら」

にんまり笑顔でとんでもないことを言い出すメリー。

「いやあれ結構痛いし、それにどこに飛ばすつもりだ。今日の大学は至って平和だぞ」

ドドドドドドドドドド。

教室の外からなにかが、大量のなにか近づいてくる音がする。それとほぼ同時に教室のドアが勢いよく開け放たれた。そこにいたのは、

「あつ、マジだ。いたいた！ 昨日の金髪ちゃん！ わたわたわたし、サイン貰おうかなあ！」

「やめてよ、金髪ちゃんは遠くから観察するのが掟でしょ。サインなんてファンクラブ会員の裏切り行為なんだからね！ 絶交だかね！」

「うきゃーっ！ 番頭さんとはどういう関係なの！？ 気になりすぎてあたしもう華の湯に行けない！ ひゃああ つ！」

「……番金か、いや金番もアリね、アリアリね……むふう」

女生徒二十人ほどの集団であった。鼻息を荒くして彼女らでしか通じない言語形態で話す彼女たちはたしか、女生徒オソリーの漫画研究部、『しらゆり』の部員たちである。去年の文化祭、あまりにも暇だったのでブースに行ったのだが、男子禁制ですう！ とか言われた記憶がある。俺、という一人称を出した途端に大勢に問い詰められたのは軽くトラウマである。受付で言っただけ……。「どこが平和なのかしら紳士。あの獣じみた視線、ちよびつと身の危険を感じちゃうわ」

「ああ、ファンクラブとか……知名度ぐいぐい上がってるみたいだな」

隣から携帯を弄る音がした。この状況でひとり楽しそうにしてる眼鏡だ。

「いやあー、ネットって恐ろしいね。漫研の掲示板に件の金髪のゴスロリがいますって書いただけでこんなになるとは。相当人気者なんぐぼおッ……」

「あなた少し黙って」メリーの容赦ない蹴りが眼鏡の腹部をえぐった。

そして机に顔を伏せ、悶えている眼鏡の携帯電話を強引に剥ぎとったメリー。その携帯の画面を確認するやいなや、メリーの白い肌がいつにもまして白くなった。いったい何を見てしまったのだろう。都市伝説にだって人権はあるのよ……と力なくつぶやいたメリーの顔は白から一変して真っ赤になっていた。気になる。

「なあメリー、それちょい見せぐえツ!?」容赦なしキックver.
2が私の腹に放たれた。

机に座りながらこの威力とか……地面で軸足のふんばりを効かせたら一騎当千も夢じゃないのではなかるうか。私の内臓が久方ぶりの衝撃にうづく。キックをかました本人はいまだ携帯にかぶりつき状態だ。眉間に皺を寄せて、頬を紅に染めながらも目はかたくなに画面から離れない。細い指はクリックを繰り返している。

「な、なにコレ、たった一日でこんなの描いたってわけ……なんなのかしら、その熱意をもっと他のものに向けられないのかしら……あら、なんで紳士まで苦しそうな、平気? おなか壊したの?」
大きな夕焼け色の目をぱちくりさせて、私を見つめるメリー。

「無意識の一撃かよ……」こいつ、絶対に武器使わない方が強い。
「きゃーんっ、私も蹴られたーい! そして見下して、罵倒して、さげすんで っ!」

メリーファンの女性一名が噴水のような鼻血を吹いて倒れた。ああ、初めて見た、興奮して鼻血とか出るもんなんだなあ。実際目を見ると、ものすごく病的な光景である。

「……しゃくだけど。紳士、私を抱えて逃げなさい、全力で人目のないところまで走り抜けなさい。このままじゃ死人が出そうよ。呪い以外で人を殺したくはないわ」

「おう、わかった」

「あと、眼鏡さん。意識があるならついてきなさい、あなたに魔法を使ってあげる」

メリーの言葉を受けて、眼鏡が机に着陸させていた顔面を離陸させた。そして、かけている眼鏡のずれを直しながら、話しはじめた。
「……ほう、それはありがたい提案だね。どんな奇術なのか詳しいネタばらしを添えてくれるとさらにありがたい……でも授業をサボるわけにはいかない。単位の方が大事だ。僕が単位を落としたら世界が終わるし、破滅するに違いない」

人をホイホイ脅迫してきた眼鏡悪魔のくせに変なところがクソ真

面目である。

「平気さ、一週間休んだって世界は終わらなかつたぜ。嫌でも続いてくよ、世界は」

「ふうん……きみって案外、不真面目だったんだね。……わかった、ついていくよ」

私は床の鞆を拾い上げ、メリーをわきに抱え走り出す。そして女子軍団がひしめき合っている反対側のドアから教室を出た。走り出す前に懸念していたメリーの体重は、和花より小柄ということもあって、あまり全力疾走の負担にはなっていない。一方、眼鏡はデカいリュックをしょいながらも軽快に足を回転させている。体育会系なのだろうか。

廊下を走り、校舎を出て、広場を駆け抜ける。

「待って、金髪ちゃん！ どこに行くのおおおおおお！」

非常にまずい。まずすぎる。漫研部員になぜプリンターがいるんだ。必死の形相で一人の部員が私たちに追いつこうとして来る。

彼女は漫画を描くよりも世界陸上にも出た方が賢明だと説得したくなるスピードだ。どうする、このままじゃ確実に追いつかれる。

「紳士！ 布かなにか、持っていない？」

私の右わきに収まっているメリーが早口で言う。

「布っ？ 布じゃ、ないけど、ズボンの後ろポケット、に、ティッシュが」

私は合間に呼吸をはさんで返事をした。かなりしんどい。

「上出来よ、貰うわね」

メリーは私のズボンからティッシュを取り出すとビニールから中身を出して、消した。

私が後ろを確認するとプリンターの顔一面にティッシュが張り付いていた。それはまぶたも覆っており、ふいに訪れた暗闇に大変困惑している様子で、なに？ なに？ と彼女は足を止めて顔をまざぐっている。

「うふふ、汗しつとりでなかなか取れないはずよ。さ、今のうち今のうち！」

「へえ！ 地味な嫌がらせっぱくて僕は好きだなアレ！ すごい速さで投げつけたんだねえ。ぺらぺらなティッシュが離れた相手の顔面に命中するなんて。きみ、野球選手にでもなればいいのに」

息ひとつ切らせずに並走している眼鏡がメリーに笑いかける。重そうなりユツクを背負ってこの余裕か、驚くべきスタミナだ。というかことごとく眼鏡はメリーの魔法を信じない。不思議がるどころか勘違いして、そのまま感心している。私がこれまで生きてきて、あまり出会ったことのない反応である。

私が走りながら右隣を走る眼鏡を見ると、突然、眼鏡は声を出して笑い始めた。

「くくつ、ははっ！ なにやってんだろうね！ 大学生にもなつて鬼ごっこか、くくく。普通の生徒は、普通に授業してらつてのに。」

はは、俄然、きみらに興味がわいてきたよ、さあ、もうちょっとだ、頑張れ不良少年！」

校門まであと五十メートルほど。

「少年つて、年じゃ、ねえけどな！」

学校を出て適当な場所に隠れれば、安心してメリーの魔法を使うことができる。それまで止まらずに走る。メリーが稼いだ時間を無駄にしないように、私は必死で足を動かした。

第9話 もう一つの現実

「はあ、はっ、ふう……まいたみたいだな。もう大丈夫だろ」

「お疲れ、冬なのにすごい汗だね。もうちょっと運動を習慣にしたほうがいいかもよ。きみ、ほっそいし」

眼鏡が私の肩を叩きながら話した。

「……一応散歩はしてるんだけどな、歩く範囲が近所過ぎたんかな……」

余裕の笑顔を終始やめない眼鏡が羨ましい。体力をつけるのも希望につながるだろうか。そんなことを考えていると、右腕で抱えていたメリーが私の背中をとんと叩いてきた。

「紳士、降ろしてちょうだい。ここまで助かったわ、ありがとう」

「ああ、足元気をつけるよ。なんだか空き缶とかガラスの破片とか落ちてるからさ」

私たちは学校近くの廃ビルに来ていた。夜になれば幽霊やヤンキーたちが活発に動き回るスポットとなるのだろうか、昼下がりの今の時間は一般人が寄り付かないし、あえて寄り付きたいとも思わない絶好の隠れ家となっていた。

私はメリーをそっと地面に降ろす。

ふわりと地に足をつけたメリーは、服のしわを直すしぐさの後、眼鏡を見上げた。

「さ、眼鏡さん。魔法を体験する心の準備はできたかしら」

眼鏡は余裕の表情でメリーを見下ろす。

「いいよ。僕はきみの一挙手一投足を観察して、魔法の種を暴いてあげる。もし僕がきみのトリックに気が付いてしまったら……事細かにネットに書き込むから、そのところはどうぞよろしくね」

そういつて眼鏡は携帯電話をメリーに見せつけた。この眼鏡悪魔の目的は一体なんなのだろう。非現実的なものを頑として認めない彼は、なにを思っているのか。

ピロリ、と電子音が鳴った。どうやら眼鏡は携帯で映像を撮影する気らしい。カメラのレンズがメリーを捉えている。

「へえ、単純紳士と違って素直じゃないのね。わりかし不快だわ、その携帯、奪っておけばよかった。紳士、転移する場所はあなたの家でいいかしら？ 和花さんが今頃まちぼうけなの、早く帰ってあげたい」

その提案はうなずかざるを得ないのだが、注意しなければならぬことがある。私は眼鏡に声をかけ、ぎこちない説明を始めた。

「今から俺の家に飛ぶけど、絶対に黒髪の女の子にさわらないでくれ。その子は呪いの……呪いを扱う子、そう、呪術師なんだ。それで触れた人間を殺す呪いをいつも身にまとってる。もしその子に触れたら、一週間で死んじゃう。だから」

「きみはなにを言っているんだ。殺す？ 呪いで？ また随分と胡散臭いね。きみの周りにはなんだい、そういうモノが寄ってくるのかい。魔法少女に呪術師……次から次へと、よくアイデアが浮かぶもんだね、尊敬に値するかも。ならなぜ、きみは死んでいない。さっきの口ぶりだと、同じ家に住んでいるんじゃないの？ 接触せずに暮らすことなんて可能なのか」

眼鏡の疑問はもつともだ。

私が生きているせいで、和花が持つ呪いの真実味が薄れてしまっている。

「……俺には効かなかったんだ。彼女の呪いが……だから一緒に暮らしてる」

「なるほど。うん、つまり、きみの大事な人というわけだ。心配しないでいいし、呪いとか言ってお脅かさなくていい。僕にも大事な人がいる。他人のモノに手を出したりはしないよ」

「……ああもうそれでいいさ。とにかく触れないようにしてくれりゃいい」

眼鏡くらいのルックスなら、そういう人がいてもおかしくないとは思うが、実際に言われると、ちよっとした劣等感をいだいてしま

う。和花は、私にとってなんなのだろうか。そして、死へいざなう同居人である和花は、私をどういうモノとして認識しているのだろうか。

「じゃ、行くわよ。手えだしなさい、紳士、眼鏡さん」

私と眼鏡はメリーの手を握った。いつもの飛ぶ感覚が来るのを待つ。

私がまばたきを終わると、すでに辺りは苔に覆われた灰色の壁でもなく、ゴミが散乱している床でもなくなっていた。住み慣れた我が家である。例のごとく靴は玄関に飛んでいた。

さあ、メリーの転移は上手くいった。これで眼鏡も信じるだろう。

「おかえりなさい、メリーさん、お兄様。……どうしたんです？二人とも、固まって」

赤い着物を着た和花が不思議そうにこちらを見ている。私が出かけていたうちにメリーがクリーニング店から着物を回収してくれたようだ。やはり和花は着物がよく似合う。いや、ちょっと待て、D Sを片手に、和花は何と言った。やっぱり、そうなのか。

「和花……いまなんて？」

「え、その、お二人とも、固まってどうしたのかなあと」

「だよな、すまん。それとただいま」

二人？ そんなはずはない。もう一人、厄介なのを連れ込んだはずだ。

「……うそ。あの感覚……全く受け付けなかった……」

メリーは呆然と独り言をつぶやいている。私の家に来ているはずの眼鏡が、彼の姿がどこにも見えない。なぜだろう。メリーが失敗した？ いや、魔法が単純に失敗したのなら、私とメリーもあの場に残るはずではないだろうか。となると、

「眼鏡自身に原因があるのか、これは」

私はメリーに尋ねる。

「おそらく、ね。私の力が全く、彼には届かなかったわ。不気味なくらい……見事に無効化されたわね。もしかしたら、彼は本当に本気で完全かつ完璧に、？非現実を否定？しているのかも。超能力者の紳士なら、この意味、多少はわかるかしらね？」

「ああ、そういうことか。それなら教えてもらったことがある」

完全な非現実否定。

それは、超能力や不思議なことの天敵である、と私は師匠から聞いたことがあった。師匠とは、私が子供の頃に師事していた超能力の師匠である。師匠から受けた授業の内容を一部思い出し、反芻する。

普通の人間ならば、自由に空を飛べれば、とか透明人間になれたらと、自らに凄い能力があれば便利だと一度でも、かすかでも思ったり願ったりするはずだ。能力だけではない。幽霊が本当にいるか、動く人形の存在は確かか、UMAやツチノコは実在するのか？世界に不思議なことはあるのか？と意識したり、考えたりするはずだ。そして、そこにある意味つけ込むことで、不思議や超能力というものは人間に影響を与える、と師匠は仮定していた。

言つなれば、
心のうちに、そういった不思議や能力への熱烈な願望がある人間が、

世間に根付く？現実を完全に否定？し 精神に根付く？非現実を完全に肯定？したとき、

常識を超えた能力 つまり、？超能力？を会得し発現することができるのだ。

そういつて、師匠は教えを説きながら空を飛んだり、透明人間になつたりしていた。

なら、その逆に

？非現実を完全かつ完膚なきまでに否定？して

？現実を揺るぎなく完全に肯定？する、普通じゃない人間がいたら、きつとその異質な人間に対して超能力を行使することはできない。どんな空想も、幻想も、その人間の現実に打ち消される。

そして師匠はその授業の終わりにこう言った。『もしそんな人間に襲われたら、仙人である私でさえ、そこらにいる人間となにも変わらなくなってしまう』と。

「仙人でも無理なら、都市伝説でも無理ってことか。ひとりで残された眼鏡がサイトに書き込まないといいけど……って言っても、もう遅いだろうな」

メリーの位置情報を即効リークした眼鏡が書き込んでいないわけがないだろう。あきらめるほか、なさそうだ。

「でしょうね。はあ、しょうがないわね。太刀打ちできないんじゃないあがくだけ無駄だわ。和花さん、ゲームやりましょ、今すぐくストレス解消したい気分なの……本気で行くわよ。見せてあげるわ、一時期小銭があるたびにゲーセンに通い詰めていた私の腕前……」

メリーは畳に座り、両手に赤いPSPを出現させた。

「わかりました。それなら、私も本気で行かさせてもらいます。ふふ、メリーさんに教えてもらった地獄コンボ……お見舞いしてあげますから」

メリーに相対するは白いPSPを持ち正座している和花。地獄コンボとは一体……。メリーと和花の間に飛び交う殺気は今からゲームなどではなく、人形同士の戦闘が始まるのではないかと疑うほどの迫力だ。私は気圧されながら、場に合わせ真剣な声色で尋ねる。

「あのさ……ふたりとも、買い物行くけどパジャマ……どういうのが……いい？」

「わたし……もしお願いできたらワイシャツ……着てみたい……です」

「私は……そうね、ネグリジェってわかるかしら……ワンピースタイプの」

ふたりとも私につられて重々しく話してくれたが、会話内容と声色の不一致加減が恐ろしいことになってしまった。

激しい仮想空間でのバトルを繰り広げているメリーと和花に留守番をしてもらい、私はいつものショッピングモールに買い物に出かけた。大学に戻る気はない。一度逃げた以上、今日はもう行かないと決めた。身に沁みついた休講貴族精神は、簡単には朽ちないのだ。学期末が恐ろしいが、まあ、それはツケなので、払うべき代償として受け止めよう。

私はまずショッピングモールの洋服店へと足を運んだ。

男一人で女物のコーナーに入るのはためらいがあるが、仕方ない。ええい、突入！ こう、可愛いのを選べばよいのだろう！ すぐ終わる、すぐ終わる。

ちよつと……なんでこんなに種類豊富なのだ。ネグリジエ……色とか素材とか多い……。

しばらく吟味しているのに……なぜだろう……店員が変な視線で見ているのは。

二十歳の男が女物を見ているのですよ？ 変でしょう？ あ、不味い、目があった。

うわ、近づいてこなくていいです、いいです、大丈夫です。一人で出来ます、大学生です。

来た来た来た来た　っ！ 店員のお姉さん超営業スマイル！
うわ、逮捕かな、これは。

……いや、新作のワンピースとか勧められても困るのだが……。
私はあたふたしながら、女の子にプレゼントするためのパジャマを買いに来たと、近づいてきた店員さんに告げる。すると親切な店員さんのめくるめくオススメ商品ガイドが始まり、私はそこから和花とメリーに似合いそうなものを選んだ。

パジャマを買った後、食料品を必要な分だけ仕入れ、シヨッピン
グモールから双葉荘に戻ってきた私は玄関のドアを開けた途端に、
手に持っていた荷物をすべて落とした。

グシャ、と断末魔をあげて卵が開封前にお亡くなりになった。

Q・なぜ私が突然荷物を落としたか？

A・部屋の真ん中で眼鏡が体を細い縄でぐるぐる巻きにされていた
からである。

「どうして……俺が出かけてた間に何が起きたんだよ」

和花が私の傍に来て、一円玉ほどの丸く平べったい小さな機械を
手渡してきた。機械の中心で赤いランプがちかちかと明滅している。

「あの眼鏡の方によると、？はっしんき？だとか。これを使って、
ここを調べたらしいです」

「……ああ。なるほど、あの時か」

廃墟に着いてすぐ、眼鏡は私の肩を叩いた。あれには発信機を取
り付けるといふ目的があったのだらう。そして転移先を突き止めた
眼鏡は私の家に不法侵入し、メリーに拘束され、今に至るといった
ところか。

「まあ、金目のものなんてゲーム機ぐらいだし侵入されてもかまわ
んのけど……それより、この発信機ってどこで買ったんだ？ 普
通の大学生が手軽に使えるものじゃないだろ、こんなの」

私はあぐらの姿勢で縄に巻かれている眼鏡の鼻先に発信機をちら
つかせる。

「はん。僕が買うわけがないだらう。自分で作ったんだよ。これく
らいパパッと製作できる技術がなくちゃ、武鎧重工ぶがいきゅうにも、ヨーゼフ・
ファクトリーにも就職できないじゃないか」

「ぶがい？ よーぜふ？」

和花が眼鏡の言葉に疑問を示した。眼鏡がレンズの奥の目を細めて、

「なんだ、この二社を知らないなんて一体どんな育ち方をしてきたんだい？ 両方とも、技術畑の最高峰だというのに。たとえばね、武鎧重工は先日防衛用アンドロイド試作型の稼働テストに成功したし、ヨーゼフ・ファクトリーの介護ロボは全国の介護施設にかかせない存在なんだよ。これくらいは理解しておいた方がいいよ」

「わあ、そうなんですか！ ロボとかアンドロイドとかって物語の中だけのものかと思っていましたけど、今じゃ現実にありえてるんですね。未来ですねえ、すごいですねえ」

どうやら眼鏡の話がハイテク好きである和花の琴線に触れたらしい。ずいといと眼鏡のそばに近づき、話を聞いたそうにうずうずしている。そんな和花にほだされたのか、眼鏡の表情が柔らかくなった。「そうだよ。人間は科学をもって、物語を現実にしたんだ。だから、僕は現実を信じる。いつか、僕の夢のためにも、現実には追いついてもらわなくちゃ困るしね。現実の発展を進めないと僕は、ずっとひとりだ」

「……よくわからんが、まあいい。俺とメリーのこと、もうサイトに書いたか？」

「書いてないよ。きみたちがステルス迷彩と加速装置を使ったせいで、僕はそれに追いつく必要に迫られたんだ。発信機のもとまで急いで走ったら、ふんじばられてこのザマさ。携帯をいじる間もなかった……」

結局眼鏡はメリーの魔法を信じないわけだ。それなら、

「なあ眼鏡」

「なんだい？」

「……ステルス迷彩と加速装置であつてるよ、それが解答だ、瞬間移動現象の。この前はステルス迷彩を起動させてから、反重力装置を使って犯人の頭上まで飛んだんだ。そのまま助けられれば良かった」

たんだが、すぐにバッテリーが切れてな、あのザマだ」

「……なるほどね。それなら納得がいく……どこで手に入れたんだい？」

「ちよつとした、科学的ツテがあるのさ……これ以上は教えられないな」

「たしかに……反重力装置を渡してくれる機関は詮索を嫌いそうだな」

眼鏡はなるほど何度もつぶやいて、得心がいったという顔になった。やはり、眼鏡の信じる現実において？機械？や？装置？などは？ありえるもの？という認識のようだ。双葉荘に住んでいる大学生がステルス迷彩なんて所持しているわけがないということ、ちよつと考えればわかるだろうに。このズレ加減、こいつも非現実否定人間じゃなかったなら超能力者になれたかもしれない。ある意味、非現実の無効化という能力を持っているとも言えるけれども。

私が考え込んでいると、眼鏡が話しかけてきた。

「なあ、このロープ、そろそろほどいてもらっていいかな。解答も得られたし、僕はもうきみたちに危害は加えないよ。約束する」

「ああ、そうだな。メリー、ほどいてやってくれ」

こんなに上手くいくと逆に不安だが、早く帰ってもらうことにこしたことはない。

「……わかったわ。はい、これで動けるでしょ」

メリーが縄を消した。眼鏡が解放された両手をぶらぶらと振って、立ち上がる。

「あー、腕が痛い……まったく金髪ちゃんの鞆を探ろうとしただけでこんな目に合うとは」

「へえ……し・た・だ・け？……もう一度縛りたいのかしら。いいわよー、リクエストにお応えしてアンコール、やってあげるわね」

再びメリーの手元に現れた縄。先ほどのロープではなく、荒縄なので、肌をこする痛さが何倍にもなっている。メリーは持ち前の怪力を発揮し、自分よりも背がだいぶ高い眼鏡を畳に押さえつけ、

ぎりぎり荒縄を巻きつけていく。一つ縛り終わったら、また一つと瞬く間に眼鏡が行動不能になる。

「やめ、やめっ、て、いたたたたた！」

両手両足をぎっちり縛られ、眼鏡が畳の上でもんどりをうっている。

「もうしわけない！ もうしない、しませんから、ほめてよ！」

「そうね……次やったら、かなり致命的なところをキュツ、つてするから覚悟しときなさい」

メリーが都市伝説に名前負けすることのないドスを聞かせた声で眼鏡に忠告すると、その直後に縄が消えた。どうやら勘弁してやったようだ。

「ふう、やれやれ、捕縛用の道具も持っているなんて……あれ？」

身体の自由を得た眼鏡は、胡坐をかき、和花の方を見て、

「きみ、髪の毛に埃がついてる、ほら」

和花の髪から、埃を取ろうとした。

「おまつ！ 和花に触るなっ！ 馬鹿！」

私が叫んだのも遅く、眼鏡の手は和花の髪にふれてしまっていた。呪い、触った人間を殺す呪いが眼鏡の身体に入り込んでいく。私は眼鏡の腕をとっさにつかんだ。

その私の腕を和花がそつとつかんでくる。

「慌てないで、お兄様、大丈夫、平気です。わたしの呪詛はこの方を侵していませんよ……すべて、この方の身体に入り込む刹那、打ち消されました」

「……そうか。すまん、眼鏡」

私は眼鏡の腕を放す。死の呪いすらも無きものにするほどなのか、この眼鏡の力は。

「いいや、約束を破って悪かったね。そうとう大事に思っているよ。うだ、この子のこと。ちょっと妬けるよ、僕の大事な人は、遠いところにいるから」

そういうと眼鏡は立ち上がり、メリーの傍に行く。

「今日は世話になったね、DS魔法少女さん。いつか本当に魔法少女になれるといいね」

「また減らず口を……私は本当に魔法少女よ。ほら、こういうこともできるの」

メリーは壁際におかれた眼鏡のリュックをさわると、リュックだけを消した。

「鞆を探られる乙女の気持ちを知るがいいのよ！ 駄眼鏡だめがね！」
残されたリュックの中身は、畳の上に広がる。

リュックの中に入っていたのは、よくわからない機械の群れ。何の装置なのか一見しただけでは判断できない機械の群れは、それぞれすべて太かったり細かったりする黒や赤のコードで連結されており、それらのコード群は一つの装置に集束していた。

その装置とは、『DS』。一般に広く普及している携帯用ゲーム機である。しかし、その原型はとどめてはいない。まるで集中治療室で安静を余儀なくされている患者のように、本体のあちこちにコードがつながっている。

「これは……なんだ？」私は装置に近づき、素直な疑問を口にした。眼鏡が私の隣に立ち、

「端的に言えば、僕の大事な人の……世界を形作るもの。その一部だね」

機械の正体と同じくらいに、よくわからない言葉を発した。世界を形作る。

「駄眼鏡、どういうことかしら？ このごちゃごちゃしたゲーム機が世界って」

メリーが眼鏡に尋ねる。

「そうだね。全部説明するのは面倒だから、実際に見せてあげるよ。電源を点けてごらん」

メリーが眼鏡のDSを手に取り、電源を入れ畳の上に腰を下ろした。部屋にいた全員がメリーの近くに座る。

「……？ いつもの画面が出ないわよ？ ずっと暗いままだわ。も

しかして私がリュックからだしたから壊れてしまったのかしら……」
自分から意地悪を画策したくせに反省が早いメリーである。語気がしぼんだメリーの隣に座る眼鏡が笑う。

「はは、しよげないで。あれくらいで壊れるものをリュックにいれたりするわけないでしょ。すこし待って、ロードに時間がかかっているだけだから」

眼鏡の言葉通り、画面が次第に明るくなってきて、現実と遜色ない街並みの風景が映し出された。太陽の暖かさや、風の具合までこっちに伝わってくるようだ。

「これ携帯ゲームってレベルじゃないぞ。まるで実写だ、すげえな」
私は感嘆の声を漏らした。眼鏡は得意げに笑う。

「ふふ、そうだろ。なかなか苦労したんだ。あ、金髪ちゃん」
眼鏡、私はメリーよ」

「駄眼鏡から昇格ありがとつ、メリーさん。そのボタンを押してメニューを出したら、携帯電話のアイコンを選んで、いばい工藤茉莉子っていう人に電話をかけてみて」

メリーが眼鏡の指示通りに操作をする。三回ほどコールが鳴り、
工藤さんが出た。工藤さんの声はスピーカーから鮮明に聞こえてくる。

『海尋みひろくん、どうしたの？ なにか用なのかな』

「用事というより、そうだね。茉莉を紹介したいんだ、ちょっと僕のところまでこれるかな」

『そっかあ……うん、わかった。はは、すこし緊張するなあ。じゃあ、ちよつと待ってね』

電話が切れると画面が暗転し、now loadingという文字が画面の右下に表示された。

暗転が晴れて、街並みが戻ると快活そうな少女がこちらにむけて手を振っていた。

「見えますかー？ 海尋くん、よくわからないから制服着てきたけど大丈夫だった？ 正装がいいかなあと思ってたね」

セーラー服を着た工藤さんが照れた様子で笑顔を浮かべた。栗色の肩先まで伸びた髪がほんわりとした印象。イラスト的可愛さと、写実的な可愛さがミックスされた美人さんである。

「大丈夫、ばつちりだよ。今日も似合ってる。紹介するよ、彼女は工藤菜子。僕が作り上げたゲーム、『I - d e a ^{イデア}』におけるヒロインであり、僕の大事な人だ」

「いやー、大事な人とか照れるなあ、あはは」

突如始まった惚気大会に私とメリーの動きが完全に制止した。一人だけ無邪気に笑い、惚気をもろともしなかった和花が意気揚々と眼鏡に話しかける。

「あのあの、海尋さん、ゲームなのになんで工藤さんと話せるんですか？」

「いい質問だね。和花さん、だったかな。人工知能ってわかるかい。僕が設計した人格と、不確定の要素をないませにしたプログラムが菜子の意思、自我を生んだんだ。

彼女こそが、僕が作り出した現実、そして彼女の住む『I - d e a ^{イデア}』は現実と同期して彼女の生活をサポートする。この仕組みによって、菜子があつちの世界で僕らと同じように生きることができるとね。どうこの世界を作ったかは企業秘密だから教えられないけどね」

「うむむ、り、理解が追いつきませんです……」

「駄眼鏡、話が長いわ」

「人工知能くらいしかわからなかったぞ」

私を含めた三人が頭を抱えていると、工藤さんが、

「えっとね、海尋くんの話大胆に要約すると、つまり、あたしはゲームの中にいる以外は殆どそつちの人間と変わらないってことかな。ちゃんと食べ物も食べるし、勉強もするし、睡眠もとる。家族だっているし、友達もいるんだ」

明るく話す工藤さんは幸せそうだ。なんだか海尋は物凄いものを制作したのではないだろうか。天才、というやつなのかもしれない。これはすでにゲームというよりも。

「そいでね、このハードの電源が切られてても、それはそつちからこつちが見えないだけで、この世界は活動してるんだよ。窓みたいなものなんだって、これ。海尋くんの家にあるホストコンピュータの中にあたしの住むこの世界があつて……うー、ごちゃごちゃ言っちゃったけどね、いわば、もう一つの現実世界の住人、それがあつてってわけなのです。うーん、伝わったかなあ」

はきはきと説明した工藤さんが、私が思ったことを述べてくれた。そう、これはたしかにもうひとつの世界だ。ゲーム機という媒体を介してはいるが、そのなかで人が生きて暮らしている。私は工藤さんにお礼を言つて、眼鏡の方を向いた。

「もしかして、現実を発展させるっていうのは……工藤さんをこつちに持つてくる的なことなのか？ そのために現代の技術を進化させたい、とか」

私がそう言つと、眼鏡が驚いたような反応をして、にやりと笑つた。

「そう、ほぼその通りだよ。見てわかるとおり、僕と茉莉の間には液晶モニタという乗り越えられない壁があるし、このままでは次元すらも違う。まあ、家に帰れば立体映像を映し出すこともできるけど、僕は立体映像では納得ができない。だから僕は武鎧重工か、ヨ一ゼフ・ファクトリーに就職してアンドロイドやロボットの技術を盗むつもりでいる。そして、今は『I - d e a（もう一つの現実）』で生きている茉莉（大事な人）を現実にも実体として顕現させることが、僕の人生の夢なんだ」

熱く語る海尋は一息ついて、
「だけど、あの二社には非現実的な噂がある。高い技術と内部を非公開にする機密性のせいなのか、都市伝説の温床になってるんだ。たとえば、惨たらしい人体実験をしてバケモノを作っているとか、人体に感染するコンピューターウイルスを制作してばら撒こうとしているとか、幹部の中に超能力者がいる……とか二社のどちらかなのか曖昧な噂がたくさんね」

技術最高峰の企業にまつわる都市伝説。これはオカルトというよりも裏社会系の話だ。そのせいだろうか。オカルト系都市伝説であるメリーや呪いの人形である和花は、海尋の話す都市伝説について詳しく知らないようで、ふたりして首をかしげていた。

「技術は欲しいが、僕は非現実的なことをしている会社に就職したくはない。だから、サイトを運営して、あらゆる情報を集め、より信頼できるほうの会社を選ぶことにした。今回は……きみらをネタにしたら、超能力者を抱えているって噂について集まりそうだと思うって行動してしまったんだ。迷惑をかけて、ごめん」

話を終えた海尋は、私とメリーに深く頭を下げた。

「あたしからも、ごめんなさい。海尋くんはときどき暴走してしまうからな……あたしがそっちに行けたら、ひっぱたいてでも止めるんだけど」

海尋の私たちへの執着は、工藤さんを現実化するために確実な道を進むためにとった行動だったのか。大事な人のために、悪いことでもする、か。それもひとつの希望かもしれない。なにかのために自分を働かせる原動力。それが、海尋にとっては工藤さんなのだろう。

「いいさ、俺は全然気にしてないし、実際、サイトにも書いてないんだろ？ だったら、実害はゼロだ。海尋が気に病むことも、ないと思うぜ」

なんだろう。モノを愛す私と、データを愛す海尋。なんだか親近感のようなものがわいてきているのかもしれない。だからか、会って間もないというのに、自然に好意を向けてしまう自分がいた。相手が、人間だというのに。

「メリーもいいだろう？」

私はメリーに確認を取る。数秒後、難しい顔をしたメリーが口を開いた。

「……まあ、穏和紳士の家に住めてるし……これ以上怒る理由もないわね」

「二人とも、ありがとう。きみらはこんな変人からまれて迷惑だったろうけど、僕は結構楽しかったよ。良い話し相手にも出会えたしね、あんなに興味津々な目をされると、話してるこっちが楽しくなってくるよ」

眼鏡は和花の方を見て微笑んだ。その微笑みはホストクラブのナンバー1と紹介されてもすんなり受け入れてしまうほどのもので、和花は顔を赤くして、

「き、恐縮です……」

着物の袖で顔を覆った。海尋の美形オーラにやられているのだろうか。まさか、このまま、わたしイケメンのところにお嫁に行くのが夢だったんですとかいう展開に……。

「はしゃいすみませんでした。あんなに、はいてくに興奮してしまつとは」

そういうことが。私はにわかにな堵した。

「暇なとき来て話してやってくれよ。和花も喜ぶだろうし」

「あ、あの、よろしかったら、ぜひぜひ聞きたいです！」

「そうかい？ わかった。次に来るまでになにを話すか考えておくよ。さあ、茉莉、帰ろう」

海尋がメリーの手に収まっている世界に声をかける。メリーはD&Sと、消していたリュックを出現させて一緒に渡した。

「メリーさん、きみのおかげで丸く収まったよ。まさかあそこでリュックの中身を出すとは思わなかった、ありがとう」

「あたしも、みんなに会えて面白かったよ。実は初めてだしね、海尋くん以外のそちら側の人間と話すのは……だからありがとう」

海尋と工藤さんはメリーに立て続けにお礼を言った。その途端にメリーの顔は赤くなり、

「べ、別に、私はあなたに仕返ししようとしただけだし。お礼を言われる理由がないわ」

早口で答えたメリーは、そそくさと海尋から離れて私の後ろに座った。お礼くらい、素直に受け取ればいいのに。律儀というか、意

地っ張りといっか……。

第10話 異常な治療法と両肩の温もり

翌日、今度こそ真面目に授業を受けるという意気込みをメリーと和花に伝えて、私は大学に赴いた。昨日、海尋と工藤さんの姿を見て、希望というものの輪郭をつかんだような、そんな充実感が体によどんでいる。ようは原動力なのだ、この体を動かし、明るい方向へと進みたくなる原動力。私はそれを見つけないといけないのだと思う。

今日の授業は三限目から。昼食後の授業なので、怠けた態度というか、まどろみの中にながら授業を受けている人が散見される、魔の時間帯である。私は去年魔の時間帯に絡め取られた反省を生かして、三限に取りたい授業があるときは午前に授業を入れないようにした。これなら家で昼を食べ、歩いて大学に向かう過程で胃も落ち着き、そのうえ目が覚めるといふ隙のない生活スタイルを実現できるのだ。我ながら、自分の聡明さに酔いしれたいくなる。

私は悠々と教室に入り、適当な席に座ろうとしたが、やめた。なぜなら、私の視線の先に、こちらに向けて手を振る海尋がいたからである。

私は彼の座るテーブルの右端の席に座り、あいさつを交わした。真ん中の席には工藤さんとコンタクトするための機材を入れているのであるうりユックがある。

「驚いたな、今日も一緒の授業だったなんて」

「そうだね。あ、そうだ、昨日の夜に送ったメール、読んでくれたかな」

メール？ 確かに別れる間際にメールアドレスを交換したが、私

の携帯、昨日鳴っていたらどうか。

「すまん、俺の携帯が鳴ることなんてめったになかったから、どうせイタズラ電話だと思って自然に無視したかもしれない。確認の癖もついてないし……」

私はズボンのポケットにしまっていた携帯を出す。

「深夜の三時に送ったのが駄目だったようだね」

「お前、それ生活リズム崩れすぎだろ……あ、あった。なにになに……え、海尋の家に招待してくれるのか？」

「うん、話しをするだけっていうのも、『おあずけ』してるみたいで和花さんに悪いしね、ちゃんと家にあるモノを見せてあげたいと思って。どうか、今日の夜とか空いてるかい？」

私の家以外の世界を見せることは和花にとつていい刺激になるだろう。私はメリーと和花に電話で確認を取り、海尋の招待に承諾した。

そして、その日の夜。私は海尋の案内の元、住宅街を歩いていた。私の住む町から電車で三駅移動した場所にあるここは、田舎臭さをまったく匂わせない。洋風建築が立ち並ぶ影響か、ただの道にすら都会らしい雰囲気漂っている。

「ついたよ、ここが僕の家」

驚くべきことに、住宅街のなかでもひととき大きな邸宅が海尋の家だという。やはり、ただものではない。

「さあ、手筈どおり早く中に入るう。二人を待たせるのも悪いしね」
私は海尋の家へと足を踏み入れる。玄関の扉は両開きで、その分、玄関も広々としていた。扉を閉めて、私が一息つくと、メリーと和花がテレポートしてきた。交通機関を使えない和花のためにメリーが一役買ってくれたのだ。

全員がそろったところで海尋が家の奥へと案内してくれた。そしてたどり着いたのが、高級家具でコーディネートされたリビングだった。シックな家具たちがその身を静かに部屋に委ねているように感

じられるほど、緻密で、繊細なルームコーディネートだ。アンティーク品らしいものをちらほら見かけて、私の心がわかに躍り始める。アンティーク、それすなわち昔から大切に扱われてきたモノ。愛おしくならない理由がない。彼らはどんな記憶を持っているのだろう。

「なによ、駄眼鏡のくせに豪邸じゃない。生意気だわ。もっと陰気な家に住みなさいよ」

「相つ変わらず、きみは和花さんと違って可愛げがないね。見てごらん彼女の姿を」

和花は煌びやかな装飾が施された振り子時計の振り子に釣られているのか、体をふらふらと揺らしながら、時計細工に見入っていた。目に映るものすべてが新鮮だからこそ、純粋な好奇心。ちいさな発見を重ねて和花の世界はひろがり続ける。海尋が呪いを打ち消す体質で本当によかった。

「……別に私は可愛い系じゃないし、あなたに言われる筋合いもないわよ、不届き眼鏡」

メリーは不満げに頬をふくらしながら、ぼすつと体をソファにうずめた。その感触が思っていたより心地よかったのか、海尋が見ていない隙にソファを手で押したり、立ったり座つたりを、音をたてないようにそつと繰り返ししているメリーは十分に可愛い系だと思える。どうやら海尋に注意を向けていて、私に見られていることに気が付かなかつたようだ。

「案内したいのは、この先なんだ。ソファにはあとでたつぷり座らしてあげるから、今は僕に着いてきてね、メリーさん」

メリーの動きが固まり、白い肌が羞恥に染まった。海尋のやつ、知っててスルーしていたのか。いつかメリーと海尋の意地悪合戦が見られたら面白いかもしれない。

リビングを抜けて、階段を上ると冷たい風が私の頬をなでた。なんとなく、嫌な予感がする。まさかスーパーコンピュータとか普通のコンピュータが所狭しに並べてある部屋がこの先にあつて、熱暴

走を避けるために一年中冷房を点けっぱなしとか……。

「おわあ寒い……」

海尋に連れてこられた部屋はほぼ私の想像通りだった。十畳はある部屋の四方の壁際では、金属製の無機質なラックに何台も並べられたコンピュータが緑色の光をチカチカさせて活動している。真冬だというのに、冷房が真夏ですら環境破壊を危ぶんでためらうほどの温度で冷風を排出していた。さすがにスーパーコンピュータは所有していなかったが、それでも相当な台数のパソコンが稼働していて、SF映画のワンシーンに出てきてもおかしくない部屋である。私の横にいる和花は、機械群がそこかしこにある情景に感動しているのか、部屋のあちこちを首の疲労が心配になるほど観察している。部屋に入って寒さに身を震わす私に、海尋が話しかけてきた。

「あはは、やっぱり普通は寒いよね。僕はもうなれちゃったよ」

低室温を軽く笑い飛ばしながら、海尋が部屋の中央にあるデスクに座った。私も和花やメリーと一緒に海尋の座るデスクの傍に行く。デスクの周りにも無数のパソコンがコードを蛇のように伸ばしてガリガリと読み込み音を奏でている。

そして海尋がキーボードを怒涛の速さでタイピングしたかと思うと、続いて机の上のリモコンのようなものを操作し、天井からスクリーンを呼び出した。部屋の壁よりすこしだけ小さいスクリーンは、海尋のデスクから正面にあるパソコンたちを隠した。

私たち三人の視線がスクリーンに集まる。黒い画面が表示され、昨日DSを介して見た風景が映し出された。元々リアルな描写のうえに、ここまで画面が大きくなると、スクリーンの中に吸い込まれてしまいそうになる。

「今日は大画面で『I - d e a ^{イデア}』を見てもらおうと思って。まだまだ紹介してない所がたっぷりあるからさ。こうすると家にいながら散歩気分を味わえるから、便利なんだよね。解像度もよりアップして綺麗になるし……」と、茉莉を呼ばないとね」

海尋は例の特製DSを取り出すと、ケーブルをパソコンに接続し

た。DSで操作するらしい。私はスクリーンに工藤さんが現れるのを待った。

「……おかしい……」

海尋がぼつりとつぶやいた。昨日メリーが操作した時には一分も経たないうちに工藤さんが現れたはずだが、なにかトラブルでもあったのだろうか。

「どうしたんだ、バグ、とか？」

「…… 茉子に電話したんだが、反応がない。…… もう一度」

海尋は手元で携帯電話のアイコンを選択し、発信の相手を選んだ。しかし、声の応答がない。ずっとこちらからのコールが鳴るだけで工藤さんが出る様子がない。スピーカーはただ、夜の住宅街の静けさと電話の音だけを出力している。

「工藤さん、今は忙しいんじゃないか？ お風呂入ってたりとか」

「いや、昨日からきみたちを呼ぶことを知らせておいたから待機してくれているはずだけど…… とうか茉子の裸を一瞬でも思い浮かべたら締め出すからね」

「エロ紳士はこれだから……」

はん、とメリーが鼻で笑ってきた。

「ちよつと待って、一方的な暴力だこれは。和花ならわかってくれるよな」

「ええ、お兄様はわたしの裸を見て恥ずかしがるとても純情な方なので全然心配ないですよ」

「え、ちよ、和花っ」ここでそれを出してしまいますか！ 弁護士！

「うわ、エロエロ紳士ったら前科もちなのね」

「なに、いわゆるラッキースケベってやつかい？」

私の株が大暴落していると、スピーカーからコール音が止んだ。工藤さんが応答してくれたようだ。海尋がDSのマイクに向かって話しかける。

「茉子、大丈夫？ 電話に出ないから何かあったかと……」

『……み……く……たす……おか……っちゃ』

ノイズに邪魔されて、工藤さんの声がとぎれとぎれに聞こえてくる。電波の悪い場所でする電話よりも、もつと聞こえづらい。

「どうした！ 茉子、茉子？ 聞こえるか？」

『助けて……街の……人たち……おかしいよ……暴れ……』

ブツツ、と通信が途切れる音がして、工藤さんの声は聞こえなくなった。

そして、スクリーンにはゾンビのように重い足取りで動く、人影が写った。

それは工藤さんではない。高校生くらいの少年だ。彼は歩みを止めると、手にした金属バットで電柱をひたすら殴りはじめた。正気の沙汰とは思えない。金属バットの衝撃では決して折れることはない、理性が欠片一つでも彼に残っていたら、こんな馬鹿なことはいないだろう。無表情に、ただ淡々と彼は金属バットをふるい続けている。

少年の傍では中年の男性がその場で円を描くようにぐるぐると後ろ歩きしている。酔っ払いというにも無茶がある、彼は全くの真顔だ。いたって大真面目に奇怪な動きを繰り返している。

彼ら二人の様子を見ただけでも、工藤さんの暮らす世界に異常事態が起きていることは明白だった。この拳動はデバッグ作業が十分なゲームに見られる、バグ、なのだろうか。いや、海尋の性格からして細かいバグすら見逃さず、とっくに修正しているだろう。となると、この事態の原因は別にある。

「どういうことだ……！ くそ、街の様子だけでも……」

海尋がキーボードを素早く操作すると、スクリーンに九分割の映像が表示された。

その九つ画面に、それぞれの惨劇が繰り広げられていた。

幼い少女が無表情のままその場で何度もジャンプしている場面。

主婦が食品の詰まった買い物袋を落としては拾い、また落としている場面。

まるで何者かに操られたかのように、キャラクターたちは無意味

私は拳を握りしめる。

……なにか、なにかできないのか……この状況で、
大事な人が危機に瀕している人間がそばにいる状況で。
考える、考える、考える、考える、考える。

希望の輪郭をつかませてくれた二人を悲しみから遠ざけるには
。

そのとき、私は、歯車が回り始める音を聴いた。

「和花！ キミの呪いってたしかゲームにも有効だったよな、ほら
ザンギエフ」

「は、はい、効きます！ けどゲームですから完全に殺す、という
ふうには。なんらかの改変が働くのだと思います。あの後もまたザ
ンギエフさんと戦えましたし」

「そうか。それでいい、それがいいんだ」

和花の迅速な回答に、私は、私の中の確信を強める。

ゲームもデータも、それはつまり？モノ？ではないか。

呪いが効くのなら、超能力も。

私はデスクの上におかれたDSを手を取って、工藤さんの言葉を
思い出す。

これは？窓？みたいなもの。

だとすれば入り口はここで間違いない。確信を固める。凝固させ
る。

強く、強く、肯定を構築する。歯車を回す感覚が体を巡る。

いくつもの歯車が噛み合い音を鳴らす。

いける。私は、完全に確信した。

「海尋、俺も加勢する。お前はそこで作業を続けてくれ、俺は俺の
やり方で、お前の世界を治療してみる」

「なにを？ 治療って、いつたい」

「地球外生命体はな、地球人とはちょっと違った治療法を知っ

てるんだ」

「ハッ……こんな、ときに、非現実的な話かい？」

ガガガガガ、ガガガガガ。話していても止まない、土砂降りのような打鍵音。

「そうだな……海尋、お前は非現実を否定し続けてくれ、その方が助かるやつもいるしな。でも俺は非現実を肯定する。俺は現実的な力をお前と違って持っていないから……こうすることしか、できないんだ」

私はDSを床において、腰をおろし、画面に手を触れる。中を治すには、中に。

「お兄様、ひとりで全部しようとするのは、なしです。わたしだつて、なにか海尋さんの力になりたいです。工藤さんを助けたいです」

とん、と私の隣にしゃがんだ和花が、私の右肩に触れた。その手のひらは冷房で冷えていても、私の胸はほっと温まる。力に変わる。そして、もうひとつの温もりが左肩を叩く。ふふん、といったもの調子で笑いながら馬の尻尾をゆらして、左隣にしゃがむちいさな、けれど大きな力を持つメリー。

「紳士、魔法少女がそばにいるのに、頼らない理由はないと思わないのかしら……お礼を言われて、そのままってわけにはね、淑女界限ではタブーなのよ」

ふたりの言葉が、心に染み入る。

ひとりで、なにかもかもを投げ捨ててきた私に、今までにない温もりをくれたふたり。

私の超能力が、そのふたりの願いをきかないわけがない。

私は師匠の言葉を思いだす。

超能力なんて、適当でたらめ。信じればできるし、信じなきゃできない、それだけ。

たったそれだけだから、ゆえに力が現実に打ち消されてしまうこともあるし、

強い能力を發揮できないときもある。けれど、常識のタガが外れ

た人間なら、

たとえば、そう。地球外生命体とかなら、普通に生きることはできないけど、

その分、異常として　　この言葉の先は、今は思い出していけない気がした。

回想から覚めた瞬間、強く白い閃光が、視界を覆う。私はたまたまず、両目を閉じた。

両の肩に確かな温もりを感じながら。

私はそつと瞼を開ける。瞳を通して、私の脳髄に伝えられた映像は冷房の効きすぎた部屋の床ではない。私は立っていた。夜の街角に。あの場所、ひとりの天才が作り出した、もう一つの現実世界、
「I - d e a ^{イデア}」に。

「できた、できたぞ……よし。和花、メリー大丈夫か？」

私の両隣にはメリーと和花が呆然と立ち尽くしていた。

「はい。すごい……本当にあの画面の中に……」

「……紳士、あなた……これも超能力なの？」

「俺のことはいいから、それより急ごう、患者は沢山いるし、工藤さんも助けなきゃならない。俺は見かけた人たちを片っ端から治療する。二人は俺の援護を」

「わかりました」「わかつたわ」二人は声をそろえて返事をくれた。頼もしい。

かくして私たち三人は行動を開始した。

この世界を、工藤さんを、海尋を救うために。

第11話 治療、進行、三人組

まずは道すがら、暴徒化していないキャラクターたちに触れて、正気に戻していく。

ウイルス感染でのデータ破壊、ならば私のモノ治療能力で治せるはずだ。

私は手始めに近くにいた金属バットの少年と、回り続ける男性を治療した。

「うあ、なんだあ、手が超いてえ。なんで俺バットなんて持ってた？」

「うええ、目が、回るるるる……」

短い集中じゃウイルスを消すのが関の山か。痛みまでは消せない。三半規管が狂いにくるっている男性を電柱にもたれさせ、私は正気を取り戻した少年に話を聞く。情報を集めないと、効率的に治療を行えないだろう。

「なあ、この町で人が集まる場所ってどこか教えてもらえないかな」「ん、人が集まる？ だとしたら夕飯時だし商店街の方じゃねえかな。あの道をまっすぐ行けば見えてくるぜ」

少年は道路の分かれ道の左側を指差した。

「わかった、サンキュー！」

しばらく道を走り、対岸まで行ける横断歩道が見えてきた。信号はまともに稼働していない。道路には無人の車が列をなしていた。白線と黒いアスファルトのコントラストの上では、大量の人間が踊り狂っていた。その横断歩道の先に、かのえ庚町商店街と書かれた商店街のアーチが見える。ここを通り抜けるしかないようだ。

横断歩道を渡る合間にも、私は治療を続ける。一、二、三……二

十四。横断歩道を占領して季節外れの盆踊りを開催していた人たちを日常に返す。

商店街のアーチをくぐる。そこは笑顔が飛び交い賑わっているはずの場所。

その面影はすでにない。

なぜなら　影のように体を黒く染め、赤く目を光らせた暴徒たちが私たちを睨み、今にも襲い掛かろうと、獣のようにヨダレを垂らしていたからだ。数十人の暴徒の手にはそれぞれ包丁、薬局の看板、防犯用のさすまたなどの凶器を携えていた。

「紳士、ここは任せて！」

メリーが開口一番、地面を思い切り蹴って、暴徒の群れに突っ込んでいく。

制止する間もなかった。が、制止する必要もなかった。メリーは暴徒が繰り出す斬撃や、拳を軽い身のこなしで華麗に避け、暴徒の懐に潜り込む。

そして暴徒はメリーに触れられるやいなや宙を舞い、そのまま自由落下のダメージを受けてその場にうずくまった。メリーが暴徒を飛ばす高度は、私るときより気持ち高い気がする。ゲームのキャラだから加減を緩めているのだろう。

私と和花はメリーが行動不能にさせた暴徒の近くに行き、治療をしながら前進した。治療を施すと目の赤い光も消え、正気に戻ってくれた。メリーが時間を稼いでくれているので、怪我まで治すことができる。

私が治療しているあいだもメリーは、アハハハ！　となんとも楽しそうに笑いながら暴徒を駆逐していく。転移させたり、直接キックをかましたり、魚屋から持ってきたタコを暴徒の顔にはり付けたりと、攻撃方法も多種多様。まさにD.S。ウィルスに操られているただの人間と怪力魔法少女じゃ、勝負する前に結果が見えていたのだな。メリーの背中では女の子らしく小さいものだが、敵をぶっ飛ばし、道を切り開いていく背中はとても大きく見えた。

商店街をメリーの先導でどんどん駆け抜けていく。そしてメリーが気絶させた暴徒を、私はどんどん治療していく。頭の中の歯車がぐるぐるとまわり続ける。

このまま治療を続けていけば、海尋の負担を減らして、工藤さんを守ることに繋がるだろうか。わからない。だけど、それでも今、私にできることはこれだけ、だからこれを精一杯。

私が決意を固めていると、なにかが、なにかがっ！

「どほおっ！」

背中を向けて吹っ飛んできた女の子が私の腹部に直撃した。痛みを耐え、なんとかキャッチに成功する。よくみると前方でメリーと戦っていた子だ。木刀を巧みに使って善戦していたはずだが、敵わなかったのか。私は女の子を地面に降ろし、治療をした。

「ふああ！」

「んのわあ！」

治療が完了するとともに、ジャージ姿の少女が目を覚ました。少女は眠り足りないと言わんばかりに、呑気にあくびをしている。

「はへ、商店街？ あなた、だあれ？ なんで私、木刀？」

少女は上半身を起こし、私にのしかかりながらふにやふにやとした声で語りかけてくる。髪から香るシャンプーの匂いが鼻孔をくすぐる。そばにいた和花は私から少女を引き剥がそうとしてくれるも、『人間に触る』ということを意識してしまうのか、少女の肩をつかめず、両手の袖をパタパタとしながら、

「うあ、あわ、お兄さまっ、お兄様押し倒されないで！ 気張ってください！」

涙目で応援してくれた。

「う、うん、あんがとな！」

少女は運動部にも入っているのか、寝起きで脳みそのブレーキが緩んでいるのか、かなり力強い。右手に持った木刀が私の脳天に振り下ろされたら流血沙汰必須！

私は少女を必死に両手で引きはがしながら、混乱した頭で説明す

る。

「えっと、キミはウイルスに操られて、そんでさつき治った！」

「そっかあ！　じゃー、寝てもいいよねえ……おやすう」

二秒と経たず、少女はスヤスヤと寝息をたてはじめ、木刀をコロリと手放した。私はこの隙に少女から逃れ、立ち上がる。

この子、ジャージを寝巻にして寝ていたところを操られたのだから、気の毒に。私は寝ぼけ少女が持っていた木刀を拝借することにした。私は武道の心得もないし、ほんの申し訳程度だが、なにかの役に立つかもしれない。

「よし和花、いこう」

「はい」

武器を手に入れ、攻撃力もアップしたところで、メリーを追いかける。二十メートルほど離れた位置にいるメリーは、襲い掛かってきた暴徒たちを全員八百屋にポイポイぶち込んでいた。いくらたくさん物を揃えている八百屋だからって、人間まで陳列しなくないだろうに。

私と和花は野菜と果物が無残に砕け散った八百屋のなかに入る。店内が、ふいに雨雲が通ったかのようにビチャビチャになっていた。メリーが暴徒を放りこんだ衝撃で野菜と果物のしぼりたてミックスジュースが店内を浸していたのだ。微妙に赤色成分がまじっているのは……ちゃんと治すから大丈夫。べたつく暴徒たちを治療していくのには、集中のほかには忍耐力も要した。

八百屋から出ると、商店街は静けさを取り戻していた。なぜか。暴徒たちが全員気絶していたからである。八百屋の前に気絶した暴徒が山ほど集まっていた。私と和花が八百屋にいる間に、引き寄せられてきたのかもしれない。

メリーがいつもの不敵な笑みを浮かべているので、最初からこういう作戦だったのだろうな。私がメリーに微笑むと、メリーはウインクを返してくれた。

「紳士、ハリーハリー」

「オーケーオーケー」

その場にいた暴徒の治療を終わらせ、入ってきたときは反対側にある商店街のアーチを抜けると、再び住宅街になった。

商店街から住宅街直通というのは便利だが、どうにも不思議な感じだ。ゲームだから理不尽な境目で地形が飛ぶのも納得だけでも新しいマップを観察すると、立派な門が建てられてたり、黒い柵を隔てて芝生が植えられた広い庭があったりと商店街のアーチをくぐる前の住宅街より、高級な雰囲気である。だが三階建てや四階建てが乱立しているせいで、家と家の隙間に暗い路地ができ、得体的れないナニカが潜んでいそうな気配がどろりと漂っている。高級な家の間の濃い影は不吉な空気をこれでもかと私に放出していた。夜ということで、なおさらに。

そんな高級住宅街を走っていると、和風のお屋敷からエプロン姿の黒い影が飛び出してきた。手には高枝切りバサミを持っている。

「和花さんをお願い」

メリーはすぐさま黒い影に飛びついて行った。

にしてもあの暴徒、こんな住宅街に一人で潜伏してるなんて、どうしてだ。隠れることが目的なら、飛び出さずに私たちがいなくなるまで待てばよかつたはず。

「なら別の考えってわけだ」

私はあたりを観察する。するとすぐそばに暗い路地。今までで一番大きな洋風建築がその路地を作り出していた。なにげなく私はその家の表札を見る。そこには、

工藤、と書かれていた。

「……っ！ この家の表札、工藤だ。この路地に逃げ込んだのか」

「そうですね……不穏な空気です。メリーさん！ こっちはです！」

高枝切りバサミ暴徒とマイハサミで渡り合っていたメリーが、和花の呼びかけに片手を振り、五秒後、メリーは私たちの元へ瞬間移動で戻ってきた。意識を失くした暴徒と一緒に。決まり手はボディブローでした。ハサミ関係ない。

私が暴徒を急いで治療していると、メリーが暴徒の持っていた高枝切りバサミを拾って、なにやら睨みつけるように観察している。

そして王子様に一目惚れをした乙女に勝るとも劣らない、大変可愛げのある表情で、瞳を潤ませながら、

「っあ、わあああっ……た、戦ってる最中から気になっていたけれど、やっぱり、やっぱりこれ……ずっと欲しかったメーカーのだから！ 『万能スペシャルサービス千変万化アタッチメント高枝切りバサミー！』」

うんちゃら切りバサミを両手で掲げながら、声色高らかにハイテンションで叫び始めた。ミー、ミー、ミー……と住宅街に黄色い歓声がこだましている。アタッチメントの前に、名前に色々付き過ぎで結局どんな高枝切りバサミなのか、わけがわからない。愕然としながら私が治療を続けていると、

「ほら私呪いがあるじゃない。通販の電話かけられないのよ……そのうえ住所不定だし、店頭で買うのはなんだか恥ずかしいし。ああ、貰っちゃだめかしら……。ねえねえ、こっちのモノって持ち帰れるのかしら、ワクワク紳士い！」

ガチャガチャと暴徒が持っていた高枝切りバサミを伸ばしたり縮めたり、頬ずりしたりしながらメリーが尋ねてくる。出会ってから一番女の子らしい顔をしている気がする。

「いや、なんでももらえる前提で話を進めるし、俺の呼び方がキミの感情になってんだよ、俺は新聞紙であらゆるオモチャを作り出すとできませんよ」

治療が終わり、黒く変色していた鉄暴徒が、ただの庭師の男性になった。

「ん、んん」

庭師は目をこすって、かぶりを振り、立ち上がった。私たちの姿を見てポカンとしている。

メリーはそんな庭師のエプロンを引っ張って、

「これ私にくださらないかしら。あなたがウイルスに操られている

のを助けてあげたのよ、ねえねえ良いでしょう?」

「ん……仕事道具だから無理」

「あつ……」

悲しそうなメリーの声。メリーから素早く高枝切りバサミを取り返した庭師は、エプロンのポケットから小さな鋏をとりだして、メリーの手にそつと置いた。

「こつちなら。ダイヤモンド砥石で砥いだからすごい切れ味だよ。太い枝もきゅうり同然」

「わあ……ありがとう、いただくわ」

照れつつ受け取ったメリーは満面の笑みで鋏を鞆にしまった。ただでさえ高い戦闘力なのに、新たな凶器をゲットするとは……。

メリーが上機嫌になったところで、三人で暗い路地に突入する。路地に入って最初の角を曲がると、見張り役なのか赤い瞳が四つ待ち受けていた。

みるからに格闘技を生きがいにしていそうな筋骨隆々暴徒コンビは、まるで狭い路地裏をふさぐバリケードのように私たちの歩みを妨害しようとしてくる。

こちらに猪突猛進に突っ込んでくる筋肉一号。あのタツクルを受けたら骨の二、三本はいつてしまえそうだ。急ぎ私は指示を出す。

「和花、そこ破壊!」

「てりゃあ!」

和花は祝動拳を筋肉一号の進路上に放った。月面のクレーターのよように地面がえぐれ、平坦な道にふいに段差ができる。その段差に筋肉一号は全力タツクルの勢いのまま引っ掛かり、期待通り盛大に転んだ。頭を打ったらしく、呻いてもがいている。私はすぐさま接近して治療を開始した。その間にも筋肉二号が私の方に襲い掛かってくる。ウイルス同士に仲間意識でもあるというのか。

私が身構えると、メリーのキックが筋肉二号の横腹を薙いだ。私に気を取られていた筋肉二号は不意打ちをうけた格好となり、路地

裏の壁に肉体を叩きつけられ、意識を失った。

「私を無視とは失礼千万よ」

「うへえ、えげつねえ……」

「えげつなさも人生の必須アイテムよ。早く治療を進めなさい」

「わかつてるって。サンキューな」

筋肉コンピを撃退した私たちはさらに歩みを進める。路地裏は一本道で迷うことはないが、定期的に暴徒が出現するので油断できない。気分はすっかりRPGのパーティだ。エンカウントが多すぎていささかゲームバランスは悪いが、こつちには強キャラが二人もいる。私はさながら、武道家と魔道士の影にかくれながら回復薬に従事する僧侶と言ったところか。どうやっても主人公にはなれそうにない。

「おいおい、あれは卑怯じゃないか」

私たちは歩みを止め、置いてあつた粗大ごみの影に隠れる。進路上に、どこで手に入れたのか知りたくもない銃器類を携えたスーツの集団暴徒がいるのだ。その数、見えるだけで九人。顔に傷があったり、やけに派手なスーツだったりするので、おそらくその道の人たちなのだろう。

「どうする、さすがに銃を連射されたらメリーでも避けられないだろう」

「そうね。あんな人数でばら撒かれると、避けるどこの問題じゃないわね。下手な鉄砲なんとやら、よ」

「数うちやあたる……数。あの、わたし、行つてきます！」

和花が立ち上がり、集団に向かつていった。和花に気が付いた集団は銃口を和花に向けて、殺意を放つ。激しい銃声が人数分続いた。しかし、和花は無傷。その意味を理解できない暴徒たちは弾薬を問答無用にぶつ放し、やたらめったら棒立ちの和花に弾丸を撃ち込む。「味方にとると心強いわね。当たるそばから粉微塵だもの……」

メリーが和花を見て、ポツリとつぶやいた。先日銃を消されたメリーだけに、言葉には当事者ゆえの実感があつた。紫色のオーラを

全身にまとう和花は、まるで鬼火のようだ。着物には破壊の後一つ見えないため、繊細なコントロールで体をオーラの膜で包むようにおおい、銃弾を防御しているのだろう。紫炎にくべられた銃弾は飲み込まれ、役目を果たせずに消えていく。

銃という楽器を使った暴力的な音楽会は、長くは続かなかった。弾薬は無限ではないようだ、ナイス仕様だ、海尋。地面には無数の葉莢がむなしく転がっている。殺意を解放する手段を失くした集団暴徒は装備を小刀に持ち替えていく。

だが、それも無駄だ。銃弾という障壁がなくなった以上、
「淑女に刃を向けるなんて、ナンセンスだわ」

メリーがそのまま隠れているわけもなく、集団暴徒は順繰りにメリーの魔法で打ち上げられた。地に落ちた強面の暴徒たちが体の自由を取り戻す前に、私は急ぎ、治療をする。

その場にいたすべての暴徒たちを正気に戻すと、路地裏に立ち込めていた空気が軽くなった。ウイルスの干渉がこの場においてなくなったせいだろうか。自分の行為が物事を前進させているかもしれない。その予測は私の身体を軽くした。何人でも治してみせる。

再びランダムに現れる暴徒たちをいなしながら進んでいくと、ひらけた大通りに出た。遠くの方に高層ビルが見え、商店街付近よりもかなり都会的になってきた。住宅だけではなく、コンビニも見かける。

あたりに暴徒化した人影もない。ここで少し休憩することができそうだ。

走りっぱなしは、かなりしんどい。戦い続けてきたメリーはもつと疲労が蓄積しているだろうし、和花も走るという行動に負担を覚えていいるだろう。こういう一度の休憩が生死をわけるかもしれない。私たちは立ち止まって息を整えることにした。

「工藤さん路地にいなかったな……」
「そうですね……」

和花の声のトーンが落ちていた。

「きっと大丈夫よ、こんな広いところに出れたのよ。きっとどこかに逃げているわ。そう信じましよう?」

メリーが和花にそっと笑いかける。

「そうですね……信じます」

暗い表情だった和花の顔が明るくなる。まるでメリーが和花のお姉ちゃんみたいだ。

「さて……治療を続けるにもここは人通りが少ないし、これからどこに行くかな……」

「紳士ってゲーム好き?」

メリーが真剣な顔で聞いてくる。いきなりなんだろう。

「好きだけど……」

「ならわかるでしょうけど、探索系ゲームにおいて大事なのは、マップを入手することよ。このまま当てもなく闇雲に走り回るのは、体力的にも時間的にもロスが大きすぎるわ。方眼紙にメモをとれるような地形でもないし、どうかしら」

「そうだな、それが先決だった。焦って戦うより、所持品の充実を目指すのが合理的だな……ってかメリーって格ゲー以外もやるんだ、方眼紙とかさ」

メリーは視線を下に向けて、

「……それなりに。和花さんは下駄で歩きにくくないのかしら、平気?」

「だいじょうぶです。走り方もメリーさんを見て理解できましたし。遅れはとりませんよ」

「そう、辛くなったら言ってちょうだい。私の肩、貸してあげるわ……物欲しそうな目で見ても、助平紳士にはボディタッチさせないわよ」

和花の手を握りながらメリーが私の顔を睨んできた。

「だから違うって、事故なんだよ、あれは!」

「言い訳は見苦しいわ、事故であれ、見たのなら事実よ。まー、紳士は若いんだし、お元気そうでなによりよ、まったく」

見たのは事実なので（ほんの一瞬だが）何も言い返せなくなった私は、交番を探すと意気込み走り出したメリーに手を引かれる和花の後ろを走った。

和花が一回振り返って私に、「本当に気にしないでくださいね」と困ったように笑いながら言ってくれた。天使は実在した。私は和花の隣を走ることにした。

人気のない通りを走りながら、ふと思いついたことを話しかけてみる。

「『I - dea^{イデア}』ってさ、日常を体験するゲームってことでいいのかな。人間しか出てきてないし。そのへん海尋に聞いとけばよかった」

「そういえば、ムサシくんみたいな動物も見かけませんね」

「どうなのかしらね。銃火器が出てくるのよ、かなーり、きな臭いわ。無意味に銃を出現させるゲームはないと思うし……日常系なら凶器なんて作る必要ないでしょ」

「そうだな……あー、なんか嫌な予感がしてきたぜ。大体こういう発言をした後にろくでもないことが起こったりすんだよな……定石だと」

「定石なんて蹴っ飛ばしてあげるわ」

「わたしも、消し炭にしてあげます」

「むやみに頼もしいなキミら……」

都会めいてきた風景が流れていく。地面がアスファルトの単純なものから、いつの間にかレンガばりでカラフルなものになっていた。銀行や弁当屋、クリーニング店が立ち並んでいる。普段ならば多くの人が歩いているのであろうはずの道も、すっかりゴーストタウン化していて、誰の声も聞こえない。

「お、あつたぞ、交番」

ゴーストタウンを駆けていると、真四角で小ぢんまりとした交番を見つけた。私の部屋と同じくらい大きさである。私たちは町の地形を把握するため、新たな情報を手に入れるため、交番に入っ

た。が、平和の使者、ポリスマンは留守。

「ここも無人か。ここらへんには人間を配置してないのか？」

「駄眼鏡、茉莉さんにだけ気合を入れて後はおざなりなんじゃないかしら」

ハン、とメリーが私の横を通り抜け、交番を物色しながら笑った。「でもでも、それだと工藤さんは普通に生活できませんよね。海尋さんが会っていない間も、この世界は動いているらしいですし……誰もいないお店なんて不便だと思います」

交番の入り口に立っている和花が言った。

「……どっかで待ち構えてるか、隠れてるのかもな。さつきも仲間同士で助け合ってたし、かなりの数を治してきたからウイルス同士であいつらはヤバイ！ って連絡してるとか」

私はメリーの物色を手伝いながら、話をする。二人で床のダンボールを探ることにした。

「ねえ、ウイルスまで人間のようにして話すのね、紳士って」

「んー。無機物を無機物と簡単に思えないんだよなあ。だからメリー、守ってもらってる立場の俺が言うのもなんだけどさ……怪我、気をつけてな。人形でも怪我は痛いんだから」

「なによそれ……あなた、私が化け物みたいな人形だってわかったのに一ミリたりとも怖がったりとか、畏れたりしないのね、やっぱりズレてるわ」

「そりゃメリーは化け物じゃないからな。友達だしさ」

「……ともだち、ね」

交番の床に置かれていたダンボールを調べていたメリーが、手を止める。ちいさい肩がプルプルと震え、金髪の尻尾もゆらゆらと揺れている。

「くふっくふ……ふはぁー、やっぱり変人なのね、紳士は。くふ、いい、意味でね」

くすぐったそうな笑い声をあげたメリーは調査を再開した。

「いい意味の変人って……。うーん、地図ないな……」

「そうね……機密っぽい書類くらいしかないわ」

「ちゃんと元に戻しとけよ、それ」

私とメリーが探索に手間取っていると、和花がおずおずと交番の中に入ってきて、そのままグレーの戸棚を開けた。私は和花の後姿を見る。和花は棚からなにかを取り出すと、こくこくと確認するようにならずにいた。

「お兄様、これじゃないですか？」

そうして私の元に来た和花の手には、『庚町タウンマップ』と書かれた紙が握られていた。

「和花、お手柄！」

「えへへ、よかったです……あの」

「ん？」

私は和花の黒い瞳を覗く。すると和花の目が水泳を始めた。ものすごい泳ぎっぷりである。目線がまったく合わない。

「あ、いいえ！ やっぱりなんでもないです」

両手を顔の前でふりふりと振って和花が微笑んだ。どうしてか頬が少し赤らんでいた。

三人で交番の中央にある事務機の周りに集まる。といっても狭いのでテーブルにそれぞれ寄っただけなのだが。

和花は丁寧な手つきで折りたたまれていたマップを机の上に広げる。開かれた姿を見てわかったのだが、マップは机の全面を覆うほどに大きなものだった。小さな町の地図ではないのかもしれない。なにか、変だ。

『転移マップ解禁を確認』

「えっ、はっ、ふえっ？」

和花が見知らぬ声に驚き、私を見て、メリーを見て、もう一度マップを見た。

マップを開いたとたんにガイド音声が始めたので、どうやらこのマップが喋っているらしい。未来的なアイテムだな。いかにもステルス迷彩に興奮していた海尋が好きそうなモノである。

『地区指定無入力を確認。お気に入り登録最上部の地区へ転移します』

「な、なにかわたし、とんでもないことをやってしまったような！」
慌てふためく和花をよそに、ガイド付きマップはぼんやり青く光り始める。

「待て！ お気に入り登録ってことは誰かが定期的に使ってるんだよな……質問良いか？」

私は机上のマップに話しかける。するとマップは光を急速に失い、
『質問を承認。転移を一時停止します。どうぞ』

「サンキュー。キミの所有者は誰かな」

『質問を確認。ユーザー・misato・makoの二名が登録されています』

みさと・まこ。マップは私の質問にそう答えた。みさとの方は誰だかわからないが。まこは、茉莉、工藤さんではないだろうか。このマップを使うために、私たちが走ってきたルートを彼女が駆けたのかもしれない。私はもう一度、質問をする。

「最後の利用者、それと時間は？」

『質問を確認。ラストユーザーはmako。最終転移はおよそ二時間前です』

私たち三人は目を合わせる。もう殆ど間違いないだろう。腕時計を確認すると、『I - d e a^{イデア}』に来てから二時間ほどが経過していた。工藤さんが追われているのを現実世界で見っていた時間と一致する。

私たちはなにを言うでもなく、うなづく。頼もしい少女たちの目はぎらぎらとしていた。

「最後に転移した場所に連れて行ってくれ」

『依頼を承認。転移・学園地区・実行まで・三秒前』

私が依頼するとマップが青く強い光を放ち、私は交番の中が深海になったかのような錯覚をおぼえた。私の視界は青一色に染まる。あまりにも眩しい光に、私は目をつぶらずにはいられなかった。

第12話 世界を犠牲にしてまでも

青い光に包まれ、数秒が経過した。

まぶた越しに感じる光がなくなり、夜の自室で睡眠時に目を閉じているほどの光の感覚しか感じなくなったので、私はそつと目を開いた。すると、そこにはごく一般的な学校の校門があつた。『私立漣高校』と校門のプレートに書いてある。学校の規模はそれほど大きくない。本当にごくごく普通。時間が夜というせいで、七不思議な空気が立ち込めてはいるが、とりたてて目立つ所のないシンプルな外観の校舎である。

私たちは校門を通り、校庭へと足を踏み入れた。砂利が敷き詰められた灰色の校庭には、おかしな行動を繰り返す人間も、獣のような暴徒の姿も見えなかった。

そこにいたのは、電脳世界で生きる少女 工藤さんだ。私たちが駆け寄ると工藤さんは警戒するそぶりを見せたが、すぐに私たちだと気が付いてくれたようで、その場にとどまった。見たところ怪我もなく、服装の大きな乱れもない。追われていた暴徒からは無事に逃げていたみたいだ。私は安堵のため息をもらす。

「よかつた、無事だったんだな」

「な、なんでみんな、みんなはあっちの人間だよ。どうして」

工藤さんは驚嘆の声をもらした。

「俺は超能力者でね。ちよつとズルをしたんだ。ゲームでいうとチートか。いや、俺のことはそれくらいにして……工藤さんはウィルスにやられてないのか？ 町はすごいことになってたけど」

私の話に目を白黒させていた工藤さんはかぶりを振った。

「えつと、あたしは海尋くん特別丈夫に作られてるから、なんと

かだいじよぶ。あの黒くなった人たちに捕まったらヤバかったかもだけど……ぎりぎりココに逃げ込んだのさ。ピンチになったらエリア移動はゲームの常識だよ、ってチートとか知ってるくらいのがーマーならわかるよね」

へへ、と工藤さんが笑う。おいにわかりますとも。ゲームくらいしか私にはこれといった趣味がないし。骨董品あさは言ったら引かれそうだし。

「でもどうやってここまで？ 暴れてた人たちすっごい沢山だったと思うけど……」

「ん、襲われたけど、和花とメリーが守ってくれたんだ。超能力者って響きはいいけど、俺はあんまりバトル向きじゃないからね、情けねえけど」

「そっか、いろいろあるんだねえ……」

工藤さんは和花とメリーを交互に見る。

「和花ちゃんにメリーちゃん、マッチョじゃないのにお兄さんを守るなんて、えらいぞー！」

そう言う工藤さんは笑い声をあげながら和花とメリーの頭をなでた。メリーは頭をなでられるのが好きなのか、まんざらでもないという顔をして大人しくしている。一方で、和花が触られることへの怯えの色を顔に出しているようだが、おそらく心配はない。

工藤さんに対して、和花の呪いは発動しない。もつと言えば、発動するはずがないのだ。あまり言いたくはないし、それに私は工藤さんを人間として認識しているつもりだ。しかし、厳密に言えば、工藤さんは、『生身の人間』ではない。和花に呪いを施した誰かもまさか『データ』でできている存在に触られることは想定してないだろう。よって、工藤さんの身体は呪いに蝕まれないはずだ。

「大丈夫だろ？」私は和花に視線を送る。

「はい」和花は緩んだ笑顔を浮かべた。

工藤さんは私と和花を見て不思議そうに首をかしげた。

「それで、みんなどうしてこっちに？」

和花とメリーの頭から手を放して、工藤さんが私に問う。

「超能力でウイルスにやられたみんなを治しに来たんだ。えっと、工藤さんの気に障ったらすまないんだけど、俺はモノを治療できる力を持つててさ……」

「あは、気にしないよー。あたしは海尋くんに作られたんだから、モノだって自覚してるし！ 逆に気を遣わせちゃってごめんね」

眉を八の字にして工藤さんが笑った。

「いや、そんな。謝らなくていいよ」

「ふふ。にしても、治療能力でウイルス駆除かあ。とんでもないワクチンソフトだね、お兄さん。あ、そだ、モノなら治せるんだよね。ごめん、これ治してほしいんだけど……」

おずおずと工藤さんが携帯電話を差し出してきた。ディスプレイやボデイのいたるところにひびが入っており、このままではまとも使用できる状態ではない。逃走中に破損したのか。私はそれを受け取り、治す。

「うわっ、まぶしっ……」

「はい、治ったよ」

損傷をすべて治療した携帯を工藤さんに返した。

「すごいね……新品みたい。ありがとう、これで海尋くんに電話できるよ」

工藤さんが携帯のボタンを操作すると、ワンコールで海尋が出た。『茉莉っ！ よかった、やっと、つながった』

海尋の声といっしょにすさまじい打鍵音が聞こえる。作業はまだ続いているようだ。

『増殖させるタイプのウイルスが激減したおかげで、なんとか無事に終わりそうだよ。そのまま学園地区で待機していて。外にはまだ増殖タイプと感染タイプがいるから、いまそこから出るのは危険だ。感染源を探して駆除するからそれまでの辛抱だからね』

「うん、了解。海尋くん、あのねこっちにね」

工藤さんが海尋への言葉を口にした瞬間だった。校舎の

屋上に何かがいたのを私は見た。そして、次に私が屋上に目を向けたときにはその姿はなく、

それは工藤さんの背後にいて、
私が知覚するよりもうんと早いスピードで、

彼女の腹部に銀色の細長い刃を貫通させていた。

日本、刀？

彼女の紺色のセーラー服が赤黒いシミに浸食されていく。月光に冴える銀色の先端からピチャリ、と工藤さんの中身が垂れ、すぐに銀色は回転をくわえて肉をえぐりながら工藤さんから引き抜かれた。「あ……う？」工藤さんは刺された部位をなでて、口から真っ赤な液体を吐いた。

彼女の肉体が制御を失って校庭に倒れる。

なにがおきて、彼女がどうなって、いまこれはゲームなのか、現実なのか。

そんなこともすつ飛ばして、何かのブレーキが外れて、残機0だとかどうでもよくて。

保身より先に体が動いていて、みんなを守るとか身の丈に合わないことを思っ

て。私は工藤さんに刃を突き立てた黒い影に、突撃し、勢いよく木刀を刺した。

ズヌル、と形容しがたい肉の感触が木刀越しに伝わってくる。そのまま私は痙攣する影を押し倒し、木刀を引き抜いて、ウイルス感染と私が負わせた傷を修復した。

「工藤さん！」

私はうつぶせに倒れた工藤さんの身体を仰向けに返ししながら名前を呼んだ。しかし彼女の返事はなく、虚ろな表情で、あ、あ、ううと痛みにもがく声を出さただけだった。

『その声！　なんできみがそっちに。そんな発明品まであるのか！』
つながりっぱなしの携帯電話から海尋の声が聞こえた。

『なッ、茉莉が重大な破損を負っている！？　なにが』

「……刺されたんだ、黒い影に、でも大丈夫だ、俺が治す。死なせない！」

私は工藤さんの上着をめくり、傷口を露出させた。とくとくと今も命が流れ出ている。

私は傷口に手をそつと当てる。工藤さんの身体が痛みという信号に従って震えている。

『馬鹿を言うな！ 世界はもう一度でも、なんどでも作ることができる！ でも茉莉は茉莉一人だけだ！ 唯一なんだ！ この世界を犠牲にしても僕はその子だけは守る、感染源を探すよりウイルスを除去するより僕は茉莉の修復を優先する！』

海尋は工藤さんの損傷で動転していた。言葉にいつもの冷静さが欠けている。それほどまでに工藤さんが彼にとつて、かけがえのない人なのだろう。けれど、世界は決して、二人きりでは、回ってはいくれない。

「やめるよ、そんなことしたら、彼女の友達が、家族が死んじまうだろ。世界が消えて、彼女だけひとり残って、ひとりでいたい何をすればいいってんだ」

私は集中を始めようとするが、海尋の説得に意識を持って行かれないでうまくいかない。

『僕がいる。彼女には僕がいるんだ。近い未来、こっちにだって連れてきて！』

「それまでは誰にも、誰の温もりにも触れられないで生きるのか、工藤さんは。そんなの、寂しすぎて死にたくなるぜ。それに家族が大切な誰かが死んで悲しまないような人間かよ、この子は。絶対違うだろ！」

『しょうがないだろ！ 僕は……いまだに全然信じられないんだ。きみがそこにいることも茉莉を治せるということも、ぜんぶ……』

私の手が工藤さんの血液で色を変えていく。校庭の灰色に赤い水たまりができていく。このままじゃ、工藤さんの命が！

「頼むよ、たった十秒だけいい！ この世のどんな奇跡も魔法も

呪いも信じなくていいから、俺を！俺だけ、信じてくれ！」

思いの丈を吐きだして、私は海尋に懇願した。この気持ちは通じるだろうか、非現実を否定する青年よ。たったひとつだけ、信じてもらえないだろうか。

『ぐ……………たず、けて』

腹の底からしぼりだしたような海尋の悲痛な声が聞こえたのを合図に、私の歯車は急速に回り始める。頭の中に金属がこすれる音が鳴りやまなくなる。集中速度がみるみる加速する。死なせない、私の目の前でもう、二度と、大切なモノを死なせはしない。激しい胃の痛みも、不快な頭痛もすべて、それを教えてくれる。これは、きつと体が死なせたくないと呼んでいるんだ。死なせるなと怒鳴っているんだ。案ずるな、私の肉体よ。任せておけ絶対に、この子を黄泉には行かせない！

そして集中が完全になった時、白い閃光が私の両手と工藤さんの傷口の接着面からもれて、まばゆくあたりを照らした。

彼女の腹に開いていた傷口は跡形もなく消え去り、もう血が溢れることはなくなった。生気をなくしていた工藤さんの顔にだんだんと血の気が戻る。が、意識はまだ戻らない。

「終わったぞ、海尋、工藤さんは無事だ。だからもう泣くなって」

『な、泣いていない。……………確かに、全部修復されてるね……………ありがとう、本当に』

「……………いいさ、俺は、ただ」

「紳士、会話の前に周りを見て」

メリーに従い顔を上げて周りを見渡すと、だだっ広い校庭は黒い人影で埋め尽くされていた。その数は目測で計ることができないほどの、絶望的物量。獣のいななき声がそこかしこで発声される。興奮しているのか、はたまた仲間を駆除されてきた恨みなのか。一歩も動けないほどのプレッシャーが獣たちから、こちらにむけて放たれている。

「大ピンチってやつかしらね」

メリーは自嘲気味に言つて、鞘からナイフを取り出し、かまえた。
「しかし生き残らなくてはなりません、ここでは終われません」

和花が両手に紫炎を発現させる。だがいくら和花の破壊力が高くても、この数では……。

『……ふふ、ははははは！』

工藤さんの手元から、この状況に不釣り合いな声が聞こえてきた。まるで物凄く面白いコントを見ていて、それが愉快で仕方がないといったような、明るい笑い声。

『一か所にこんなに集まるなんて、愚の骨頂だね。いくら徒党を組んでも無駄だつてことを世界の創造者が教えてあげよう　異物排除作業を開始する。きみたちは動くなよ』

海尋の声が途絶え、校庭が複数の太陽の光を浴びているかのような明るさに覆われる。今は夜だというのに。これは、頭上からの強い光。

見上げると、空から数本の柱が降ってきていた。その柱は地面に近づくにつれ、自らの巨大さを私たちにうつたえてくる。いうなれば光の柱、極太のビームだ。天から下された罰のように、輝かしい光が黒い獣たちを焼き払っていく。

「はは……すげえな、こりゃ。圧巻だ」

「きれいですね……」和花は光に見惚れ、両の手の紫炎を消し、

「なにかしらこの必殺奥義。ハナっからこれ使いなさいよね……」

メリーはあきれた調子でふてぶてしく文句を垂らし、ナイフを鞘にしまった。

『一体一体にこんな大技が使えるわけじゃないか。ここぞつて時に使うからこそだろ。きみこそ、ちゃんと頭脳を使ったらどうだい？』

「ぐぬ……もどつたら覚えてなさいよ……」

光の軌跡には気を失って倒れている人間の姿があった。ド派手なエフェクトに反して、その光の柱はとてつもなく慈愛に満ちた、世界を守護するための兵装だったようだ。何本もの光はウィルスをし

らみつぶしに消滅させていく。おぞましい漆黒が失われていき、本来の多種多様な色彩が人間たちに帰ってくる。

そして黒い獣を一掃し、すべてを正常に回帰させると光の柱はもう、降ってくることはなかった。校庭を静寂がつつむ。

「ん……………」

工藤さんの瞼が持ち上がり、瞳があらわになる。意識を取り戻した工藤さんは、ぼやけた表情のまま、私の手のひらをそつつかんだ。

「治してくれたんだね……………」ありがとう

「こつちだって、助けられてよかった」

私も工藤さんの手を握り返す。データである彼女も、たしかに体温を持っていた。

「……………」いよっし！ かなりのウイルスを駆除することに成功した！

あとは感染源を見つければ……………」とここでできみ、いつまで人の彼女の手を握っているのかな？」

「す、すまん」

重量感のある海尋の声の迫力に負けて、私はパツと手を放した。

「あはは。手ぐらい、どうってことないのにねえ」

嫉妬する海尋とうつてかわって、工藤さんはケロリとしている。

『手ぐらいつて！ あのなあ僕だつて』

「だって、海尋くんはさ、あたしを現実に入れて行ってくれるんでしよう？ そしたら毎日、ううん、毎日じゃなくなつていいや。いま触れられないぶん、たっくさんデートしようね。色んなところ、見てみたいんだ、あたし……………」

工藤さんは手にしていた電話を耳に当てて、マイクにそつと優しく語りかけた。あたたかな声色は人の心をもみほぐす。海尋も例外ではないだろう。

『茉莉……………勿論だよ。たくさん見に行こう。必ず実現してみせるから……………それまでは』

私たちの周りに、甘くとろけた空気が漂い始めると同時に、メリ

ーが胸のわだかまりを一気に排出するような、大きなため息を吐いた。

「イチヤイチヤは他人の目がない所でやったらどうなの？ 見てられないわ……さっさと感染源ってやつを探しましょうよ。どうせ、この学校の中にいるんでしょーし」

メリーは漣高校の校舎をにらんでいる。

『そうだね、あれだけの馬鹿げた数を揃えてきたんだ。ここに何もないわけがない。僕も駆除作業と並行して他の場所も検索してみる。そっちの様子はモニタリングしておくから、なにかあったらサポーターするし、大船に乗ったつもりで。それじゃ、菜子は校舎のなかを案内してあげて。念のため電話はつながりっぱで頼むよ』

「うん、わかった。みんな着いてきて！」

工藤さんが校舎に向かって走り出した。私たち三人はそれを追いかける。

第13話 次元を越える、桃色のハンカチ

校舎正面の玄関から校舎に入る。暴徒も、人間も居ない夜の校舎の空気は冷え切っていて、外気を防いでいるはずの壁がとても脆いもの思えた。

非常時なので私たちは土足のまま、校舎一階に突入する。

下駄箱をスルーしモルタルの床に踏み込むと、前には壁があり、左右には長い廊下が続いていた。電力がストップしているのか廊下の天井に備えられている蛍光灯が本来の役目をはたしていない。そのせいで廊下の奥が見えず、まるで紫陽花の倉庫のような陰湿な雰囲気。困気が辺りに漂っていた。窓から差し込んでくる月光も妖しさをこねでもかと加味する役割を買って出ている。

「いやあー……あたしこんな遅い時間の学校って初めてだけど、このやなカンジ。学校に七不思議のうわさが根付くのも納得かも。怖いけど……でも行くしかないよね！」

むん、と胸をはり意気込む工藤さん。さっき死の淵に立ったばかりだというのに、その恐怖を乗り越えようと自分を奮い立たす気丈な姿は、真つ暗な校舎の中でも光輝いているようである。

「紳士、とりあえず……七不思議、巡ってみましょうか？ 理科室とか音楽室とかだとー、えっと動く人体模型&人食いピアノー？」
にへら、と私を見てメリーが嗜虐的に笑った。

「ハッ！ 俺を怖がらせようとしたって無駄だぜっ！」
ビシリと全力のウインクを決める私。ごめんなさいちょっと怖い
です。

「あはっ、お兄さんたら怖いって顔に出てるよ、だいじょぶ？」

「お兄様、お顔の汗が……足もふるえてますけど」

「怯懦紳士、かーわいい」
きようた

「いやほらあれ、走ったから、足はその、ちょっと寒くて、うん」
非現実を全肯定する私だが、それゆえに、幽霊が世界にいるのもありえる、と知っているので普通の人間より恐怖が増すのだ。しかたないのだ。なんとか二十歳まで幽霊を見ずに生きてこれたので、おそらく霊感はないのだろうけど。……こういうときにアイツが居てくれたらと、この場にいない人間を頼ろうとする前に、私は思考を前へ進めることにした。

「ほら、ゲーム的に考えるとさ、理科室とか音楽室って中ボスあたりが出てきそうな感じしないか？ あくまで通過点というか、かませっていうか……」

「もし人体模型でできても守らなくていいわね、ピアノが舌出してきたもオーケーなのね、かませくらい平気でしょ」

「よし、いこうか！ 連高校七不思議解明編の始まりだぜ！」

私たちは不安の種をつぶすために工藤さんの案内の元、学校の怪談めぐりを実行した。ウイルス感染源の手がかり、もしくは本人様に出会えるかもしれない非常に重要な調査だ。

「ふーむ。女子トイレって定番だよな。三番目だっけ？ 三番目だよねー！」

三階の女子トイレ前で元気ハツラツにはしゃぐ工藤さん。言うやいなやトイレに突入し、「だめー……ノックしても返事ないや。ただ鍵が壊れてるだけっぽいねー」

すぐさま戻ってきた。開かずのトイレ、クリア。次の場所に向かう。

やってきたのは音楽室。グランドピアノが検証ターゲットだ。「弾いたら食われるピアノね……ってこのメンバーで弾ける人が居るのかしら」

和花も工藤さんも手を上げない。

「じゃあ紳士、テキストに！」

「弾かねえよ、笑顔でねだられても弾かねーよ。つか見ためで考えたら、キミが一番弾きそうだから。ゴスロリ淑女なんだから楽器のふたつみつっ嗜んでたりしないのか？」

「お馬鹿紳士、畏に飛び込む愚かな淑女は地球上にいないわ。淑女を舐めないで！」

なぜか怒られ、結局勢いに流されるまま、私が畏にダイブすることになった。私はピアノのふたを持ち上げ、モノクロの色調が美しい、ヒンヤリとした鍵盤に指をおく。

「じゃ、テキトーに……」

私は演奏を始めた。物音ひとつなかった音楽室に、鍵盤楽器の音色が響く。

「おおーっ、あたしこの曲聞いたことあるなあ。なんかCMかな」「ピアノって綺麗な音ですねえ。体の中に自然と入ってくるみたいですよ」

「なんでまともに弾けるのよ……テキトーっていうか喫茶店で流れてても……あ」

「働いてたからな、ピアノのある喫茶店で。サービスの一環として弾いてたんだ」

「ぐぬ、さすが元執事……あなどってたわ」

「もと？」

「しつ、じ。ですか？」

一曲演奏し終わっても一向にピアノが牙をむき私を食らうことはなく、メリーのいらぬ一言のせい、工藤さんと和花に私が質問攻めを食らった格好になっただけで音楽室の調査は終わった。

私たちは音楽室からゾロゾロと廊下に出る。出鼻を二度もくじかれた私たちはすっかりテンションが急落していた。なおかつ私は、執事喫茶勤務の過去が女子二名にバレた件で、他のメンバーより気分が急降下している。

さて、問題の学校の七不思議はあと五つ残っている。だが、私は早くもこの真相に気が付いてしまった。

「あのさ、このゲームってあの非現実を全力で否定してる海尋が作ったんだぜ。七不思議って噂がこの高校にあるとしても、あいつがゲームにそういう要素を組み込むかね。七不思議なんて最初からないんじゃない？」

私の言葉に工藤さんがうなづく。

「そうだね。海尋くんオカルト真っ向から信じないからなあ。それにあたしも幽霊なんて見たことないし。やっぱ噂は噂なのかな」

「なんでわざわざ七不思議を探しているのか、その意味がソコにあることをわかってないのね」

メリーが腰に手を当てて、自信ありげに私と工藤さんを見ながら言う。

「ウイルスってこの世界をおかしくしているんでしょ。だから、眼鏡がつくるはずのない要素、それが感染源なんじゃないかしら。だからここで怪談や不思議なことが本当に起きたら、私たちの不思議探索は報われるのよ。人体模型が動いたら、それ。妖怪が現れてもそれ。ほんと、至極、わかりやすいでしょ？ ここだけは眼鏡を褒めてあげてもいいわ」

ということとは、

「七不思議のどれか、もしくはそれに近いものと遭遇しなきゃこれは終わらないのか」

「そうなるわね。気が付いてなかったの？」

「いや、キミがただ俺をビビらせて存分に楽しんでるのかと思ってた」

「んな性悪じゃないわよ！ こんな淑女をつかまえて馬鹿にして！ 馬鹿にして！」

むきー、と髪を振り乱して怒りだしたメリーを適当にいさめながら、次の場所に移動する。

二階の隅っこ、ジメジメとした美術室だ。中に入ると、その広さに驚く。普通の教室三個分ほどの大きさで校内に幅を利かせていた。

美術が好きで校長なのだろうか。

「美術室ってなんだったっけな。たしか絵が動くか、石膏が喋るとかそんなだったよ。あたしちよっとぐるっと回ってくるね」

工藤さんが美術室一周の旅に出てしまった。メリーは大きな黒板に興奮した様子で、なにか絵を描いていた。そんななか、私と和花だけが美術室にぼつんとなにをするでもなく立っている。すると、ふいに背中の方から、

「ねえ、お兄様。動く石膏がロボットなら幾分か素敵ですよ。石膏ロボです、弱点は衝撃。得意技は石の上にも三年余裕の忍耐力。かっこいいですね」

私の背中にピツタリくつつきながら和花が言った。

「和花、実はこの状況怖かったりするだろ……」

私の腕をつかむ和花の手が震えている。私と和花で工事現場の振動を再現できそうだ。

「いいえっ。そんなことは。わたしが怖がるわけありませんよ。むしろわたしを怖がって欲しいくらいですね。七不思議たちはわたしに恐れおののくと良いのです」

「モナリザの視線を避けるために人を楯にするような女の子を怖がる人は、もうそれ国宝級のレア度だよ」

「深夜にあの絵は怖いよねー、あたしもゾクツとする」

言葉と裏腹にさっくりと美術室を一周してきた工藤さん。黒板にチヨークで落書きしていたメリーも戻ってきた。なぜか知らんが淑女様は満ち足りて見える。

不思議は残り四個。

「はいここはとっておき！ 理科室です！ 昼見ても怖いスポットとして有名だよ」

今までの探索で何もなかったもので、私たちはさっさと本命どころに向かうことにしたのだ。昼見ても怖いという工藤さんの言葉に偽

りがないことは、部屋をぐるりと見回しただけで理解できる。

「うへ……ホルマリン漬けとか古びた骸骨とか人体模型とか……こ
こだけで七つの不思議をコンプできそうだな……」

「む……淀んでますね、空気」

「そうね、いよいよかしら」

和花とメリーが互いに顔を見合わせて確認を取っている。

その直後、

カタカタカタカタカタカタカタカタ。

薬品類が入っていきそうな棚が揺れ、中に入っているフラスコやビ
ーカーが、ガラス製品独特の音をたてはじめた。

「ポルターガイストで演出ね、粋なことするじゃない……早く出て
きなさいよ、細菌さん」

メリーが啖呵を切ると、部屋中の実験器具たちが、かたつぱしか
ら割れはじめた。ガラス片がどんだん部屋の床に積もっていく。こ
れは怒っている？ やはりウイルスに感情はあるのか。

「工藤さん、こっち！」

「う、うん！」

私はガラス製品が少ない個所を縫うように歩き、高い所から振っ
てくる細かな破片から、脱いだジャケットを傘のように使って工藤
さんを守りつつ、理科室から廊下に避難させた。

「ここで待ってて、俺はもう一度中に入らないといけない」

「……気をつけてね」

「すぐ戻るさ」

私が再び理科室に入ると、この部屋にあつた割れ物はすべてあま
すことなく割れていた。私は入り口の近くにあつたロッカーを開け
る。期待通り、モップが入っていた。校庭に置いてきた木刀と比べ
ると貧弱だが、リーチはこっちの方がうえだ。私はモップを両手で
持ち、メリーと和花の傍に行く。

「これを倒せばこの数時間の騒動も終わるはずだ。今までありがと
な、ふたりとも」

「お礼は倒した後にしてちょうだい」

メリーは右手にマイハサミ、左手に庭師に貰った切れ味抜群の鋏を装備している。

「来ますよ……今までの薄気味悪さとは、違う、濃い匂いです」

理科室の不気味な二大模型。人体模型と骸骨の模型が黒く染まり始める。ウイルスが、オブジェクトとして配置されているものの性質を浸食によって変化させているのだろう。動かないものを動くようにするウイルスか。まるで、私のようだ。

すっかり黒色に染まりきった二体の模型が動き始める。ゆっくり、じつくりと、体に生まれた？動く？という力を噛みしめるように。人体模型の表面には光沢のない黒い肌が生まれ、両目だけがわずかに露出し、こちらをじつと見ていた。

元来くすんだ灰色をしていた骸骨の模型は、その身をすべて黒色にゆだね、手や足の先から爬虫類のような鋭い爪が生え、人間であれば犬歯があるはずの部分には下あごまで伸びる肉を抉るための牙が存在していた。食べるための道具ではなく、殺すための道具として。

「紳士は人体模型を、私はあのケダモノを。和花さんは紳士を守って」

「わかった！」「了解です！」

メリーの姿が消え、視界の端に骸骨に拳を浴びせるメリーが映った。

私は目だけで笑い、こちらをじつと見ている人体模型を睨む。三対二の劣勢した状況下で笑みを浮かべている人体模型。相当な自信があるようだ。

私は人体模型に走って近づき、

「うらあつ！」

モップの柄で胴体を突く。しかし人体模型はその場にとどまり、微動だにしない。勢いをつけた一撃だったというのに、その衝撃がまるで最初からなかったことにされた。

私は反撃を恐れ、飛び退く。

「んなっ」

モツプの柄の先端が、なくなっていた。人体模型に目をやると、腹に大きな口が開いていて、白く病的に健康的な色をした歯がモツプの先端部分を咀嚼していた。

「物理吸収系かよ……てか……罪のないモツプ君を食いやがったな……！」

私は先端が食べられてしまったモツプ君を、素早く元の姿に修復する。部品が欠けているので、揃っている場合より集中力を要するが、仕方ない。私は直したモツプ君を床に置き、

「和花！ すこし人体模型さんに辛抱してもらおう！ あいつの腹に風穴を開けてくれ！」

「ガッテンです！」

和花は私と立ち替わるように、人体模型の正面に躍り出ると、右の拳に紫炎をまとわせ、大口を開けている模型の腹に、

「せやあっ！」

拳を突っ込んだ。いやらしい目つきで和花を見る人体模型はなおも余裕の表情だ。それもそのはず、奴はこの先の自分の運命を知らないのだから。運命を知らない無知な彼は、いたいけな少女の細腕を咀嚼しようと歯を合わせるが、

「……………」

当然、彼はその暴力の報いを受ける。わざわざ自ら飛び込んでしまったのだ。物質を塵へと変える、呪われた炎の中へ。歯はポロポロと崩れ落ち、理科室の床のガラス片と混じる。

「ごめんなさい、命かけてるので！」

和花は拳をさらに奥へと突き刺していく。

「ギャギャギャギャギャギャギャガガガガガガ」

人でも動物でもない、なにかの声が人体模型の腹から漏れる。人体模型はあがき、黒い腕を自分の腹の中をまさぐる和花に振り下ろそうとする。

「ぐっつ！」

私は和花の隣まで走り、黒い拳を左腕で受け止めた。骨にひびく威力。私は歯を食いしばり、人体模型の胸を思い切り蹴った。仰向けに人体模型が倒れる。

「お兄様！ 腕っ」

和花が私の腕に触れる。触れられたら痛いのだが、安心させるために笑ってみる。

「っ、へーきだ。ごめん、イヤな役回り押し付けて」

私は人体模型に馬乗りになり、顔色真っ黒の顔面を容赦なくげんこつで殴る。

ビクン、と痛みに人体模型が反応し、背筋が寒くなるほど嫌らしい眼が閉じられる。

「いまのは食われたモップ君のぶんな」

私はもう聞く相手の居ない説明をしながら、人体模型の顔に手のひらを寄せ、集中を開始した。普通の暴徒よりも深く、こびりついた油汚れのようにべっとり染みついたウイルスを駆除していく。駆除をすませ、元の人体模型に戻し、後で治すと心の中で約束し、メリーの方へ向かうことにする。私の耳にはメリーの悲鳴が一度も届いていない。ということは無事なのは間違いない。視線を戦闘音が鳴りやんでいない方に視線を向けると、

「お兄さん！」

ガラリと入り口のドアが開き、

「海尋くんから！ その骸骨は生け捕りにしてほしいって！ できる？」

工藤さんが海尋からの指令を伝達してきた。私は骸骨と戦闘しているメリーに声をかける。

「メリー！」

「わかってるわよ！ 生かさず殺さずってやつよね！」

ハサミで爪の攻撃をいなしていたメリーはゴシックスカートをひらめかせながら、骸骨の攻撃を避け始めた。

そして七回ほど避けられた所で、ついに痺れを切らしたのか、大ぶりな噛み付き攻撃を骸骨が実行した瞬間、そこに居たはずの魔法少女は消え、

「後ろよ、後ろ」

おきまりの常套句をつぶやくと、骸骨の四肢をダイヤモンド砥石使用の鋏で切断した。

体の支えを失った骸骨は落下し、うめき声をあげながら、床で虫のように蠢いている。

骸骨がメリーに敗北したのを見届けて、工藤さんが私たちの傍に駆けて来た。

『メリーさん、ありがとう。こいつは僕の方で色々調べさせてもら
う』

床に転がっていた骸骨が青い光に包まれて消えていく。海尋がどこかに転送したのだろう。そして三十秒ほどの沈黙の後、

『……うん、こいつが感染源みたいだね。僕の方で破壊したタイプと同じ構造だ……ふう……みんなお疲れ様。戦いは終わりだよ』

海尋から終戦の知らせが告げられ、張りつめていた空気が解けた。ウイルスの脅威にさらされた世界は、無事に守られたのだ。

私はウイルスの演出の犠牲になり、徹底的に壊された理科室の備品たちを根こそぎ修復してから、集合場所に向かうことにした。工藤さんは学校を回りたいというメリーの願いを笑顔で承諾し、メリーを引き連れて平和な漣高校を巡っている。それぞれ終わったら校庭に集合する予定だ。

和花は女子の中でひとり残り、私の作業を手伝ってくれている。

ちりとりと筭で散らばったプラスチックやビーカーの破片をかき集め、机の上に置き、一つずつ形成していく地道な作業だ。超能力とはいえ、何時間も集中し続けてきた私はかなり体力を削られているのだが、私は、この子たちを見捨てて帰ることなどできない。集中を持續し、破壊されたみんなの体を元通りにしていく。

「お兄様、これであらかた集め終わりましたよ」

ガラガラガラと机の上に新たなガラス片が並べられる。

「ありがとう、かなり助かる」

声だけで和花に返事をして、私は黙々と作業を続ける。

三十分ほど作業を続けて、やっと最後の一つになった。私は最後のフラスコを治療して、和花と一緒に理科室を出た。夜の廊下を並んで歩く。私の靴の足音と、和花の下駄が発する軽妙な音がする。

「大活躍でしたね、お疲れ様です」

「いや和花たちがいたからで、俺は」

私は和花の顔を見る。すると彼女は、

「卑下しちゃいけません。わたしは一人じゃ殺すこと、壊すことしかできないのですよ。壊れた物を治せたり、わたしを動けるようにしてくれたお兄様がいたから、わたしはこの世に生まれて……初めて人を助けることができました。希望を集めなきゃいけないのはお兄様の方なのに、いけませんね、わたしが希望をもらってしまいました」

ふふふ、と静かな声で和花が笑う。

「和花……」

「呪いの人形に希望を与える殿方なんて、きつとあなたくらいですよ」

そう言って、和花はにんまりと笑い、長い髪をはためかせて、先に走って行ってしまった。

私はといえば、立ちどまり、彼女の言葉を受け止めることに、必死だった。

ただ殺してもらったためだけに、勝手に起こしてしまった彼女に、私が希望を与えた。

あの言葉は和花の口から出たやさしい嘘なのかもしれない。でもそれでも。

胸が苦しくてたまらなくなるほど、嬉しかった。

私が入ってきた玄関から校庭に出ると、すでに三人が集まっていた。私は校庭の真ん中に集まる三人に近寄る。

「待たせて悪い」

「うっん、あたしたちもさっき来たばかりだよ」

「ねえ紳士、ここから出るにはどうしたらいいの。もうやることは終わったでしょう」

メリーが私に問いかける。

「そうだな、もう……どした和花？」

メリーの隣に立つ和花の表情がとんでもなく暗くなっていた。どうしたのだろう。肩も落として、すっかり元気がない。

「うう……なごりおしや……はいてく世界ともお別れですか……」

「まあ、そこは俺も気持ちわかるけど……ここは海尋と工藤さんの世界だ。邪魔ものが居座るわけにもいかねーだろ？ 家に帰ったらゲームやるうぜ、地獄コンボ破つてやるよ」

「むむ！ お兄様、それは挑戦状と認識してよろしいですね！」

「おうよ！ とことんやるーぜ！」

「はい！」

私がそういつて笑うと、和花も笑顔で返事をしてくれた。よかつた、和花が元気でいてくれた方が、私は嬉しい。私が彼女の感情を出力できるようにした、ゆえに、その生まれ出でる感情が安らかで温かいものであってほしいと、どうしても願ってしまうのだ。これからも、すこやかに笑っていてくれるといい。そんなことを私は思った。我ながら色々物凄く矛盾している気はするが……。

「そんじゃ、帰るか。多分そろそろだと思っただけど……」

「ひゃっ、わた、わたしの身体がスケスケ！ じよ、成仏なのですか！」

「ちよ、紳士。いきはよいよい、帰りは浄土つてどういうことかしら！」

「死んでないのに成仏したらこえーよ。二人とも、心配すんな、それ現実に帰っていくサインみたいなもんだ。もうここに俺が治すべ

き対象がないからな。一時的に増幅した超能力も、持続する必要がなくなった……って感じかね」

「あ、曖昧だねえ……テキストっていうか」

工藤さんが冷や汗を浮かべて、笑っている。

「そ、超能力なんてテキストなんだよ。俺も師匠の受け売りだけど……。ハッキリ、キツパリは科学様や工学殿がやってくれるし、テキストだから超能力、とか……まあ今回はそのテキストが少しでも役に立ててよかった」

話している間も、私たちの身体はみるみる薄くなっていく。工藤さんだけがハッキリと大地を踏みしめていて、なんだか相反する私たちを表しているように見えた。現実と非現実。この場ではそれらが入り混じっているのだ。

「あつ！ まって、あつちに帰るんだよね。どうしよ、ううつと。」

あ、これ……」

せわしくスカートのポケットを探っていた工藤さんが、私に桃色の可愛らしいハンカチを渡してきた。女の子らしさが正方形に爆発しているようなハンカチだ。

「海尋くんに届けてほしいんだ。ただのハンカチだけど、眼鏡拭きに、って」

『たすかる、家宝にする』

「うひゃあ！ そだ、電話、繋ぎっぱ……へへ……眼鏡、拭きまくってね」

『……拭きまくるとも』

ふたりの声が互いにつわずつっているが、これはきつと良い涙なのだ。ふたりとも未来を、希望を信じているから、互いに互いを信頼しているから。だからこそ、こういう涙を流せるのだ、きつと。このハンカチは二人の絆を具現化したものなのだろう。いかん、なんだこの気持ちは。モノと人間の真摯な愛は、私の心をギュウとわしずかむように大きく揺れ動かした。

「……工藤さん、そんじゃ、また画面越しに。これは、確かにあい

つに届けるからな」

現実の人間が電脳に入ったなら、また逆もしかり。今、私につかまれば、工藤さんは超能力で現実に来ることができる。実体としてでも、そうしないのは工藤さんがひとえに海尋の可能性を、夢を願っているからだろう。なんて強さだ。世界を、次元を越える想いが成就することを、祈らずにはいられない。

「うん。ありがとね、お兄さん」

涙目で笑う工藤さんの肉声を聞いて、私の視界はホワイトアウトしていった。

私たちは私たちの世界に帰る。

現実を信じる異世界の天才青年を愛す、一途で気丈な少女を電脳世界に残して。

第14話 「私」の名前と、狂気の計画

白い光が晴れて、真っ先に感じたのは、季節外れの機械的冷風。

次にとらえたのは、大量のパソコンが稼働する不規則なリズム。私
が立っているのは現実世界の海尋の部屋だ。つまり、無事に帰還を
果たしたということ。気が抜けた私は、冷え切ったフローリングに
へたり込んだ。全身に疲労の波が押し寄せてくる。

「うっはあ……ゲームキャラってよく何時間も全力で動けるよなあ
……」

今度ゲームをやる時はキャラクターを労わるようにしてあげよう。

「ほんとに体力ないんだな、きみは。ほら」

海尋がへたっている私の顔の前で胡坐をかいて、スポーツドリン
クを手渡してきた。寒い部屋のせいなのかキンキンに冷たくなって
いる。私はへたり込んだ体を起こして、海尋の対面で胡坐をかき、
もらったドリンクを一口飲んだ。

「……ふへえ、あんがと。そうだ、これ例の」

ドリンクと交換に、私は工藤さんから預かっていたハンカチを海
尋に届ける。海尋はそれを穏やかな笑みを浮かべて受け取り、そっ
とズボンのポケットにしまった。

「メリーさんと和花さんには……」

海尋は部屋の隅に配置されている冷蔵庫から白い紙箱を持ってき
て、ふたりに渡した。あの箱のデザインを見るに、

「白鐘堂しろかねどうのケーキ。気に入ってくれるといいけど」

「あ、あの白鐘堂なの？」

メリーが箱をしげしげと眺める。白鐘堂とは洋菓子の老舗であり、
毎日行列の絶えない名店である。白鐘堂のケーキは女子のハートを

捕縛して魅了し、がんじがらめにする超絶品なのだ。

私たち四人は最初に通されたリビングに移動した。中心のテーブルを囲むように備え付けられているソファに座り、それぞれがくつろいでいる。

私から見て左側のメリーと和花は仲良く同じソファに座って白鐘堂のケーキに舌鼓を打っていた。きめの細かい生クリームを舌にのせた和花が、あまりに美味だったのか腰を抜かしソファから立ち上がれなくなり、コクの深い高級力カオを使用したチョコケーキを口にしたメリーは無言で涙を流しながらパタリと和花の膝に倒れこんで気絶した。

恐るべし、白鐘堂。

「男にはあんまり理解できない領域だな、あれは」私は思わず苦笑いする。

「きみって男だったのか……」

正面のソファにいる海尋が、驚愕の表情で読んでいた本を絨毯に落とした。

「おま……工藤さんと手を繋いでた俺に嫉妬しといて、なんで性別に気が付かねえんだよ！」

「そこはほら、簡単にふれちゃいけないだろう。愛の形はそれぞれ違うんだから。それに、きみ、自分の名前、一向に名乗らないし。俺って名乗る女の子ってよくあるし。特殊な事情があるのかと思っ
てさ」

海尋は本をひよいと拾いながら私に弁解してきた。俺って名乗る女の子がよくある世界はきつと次元が違うと思われる。

「……お前が俺の名前きいたら散々馬鹿にしつつ吹き出すと思うから、ぜってえ名乗らねえ」

「ふうーん、気になるからチョコチョコイと個人情報ハッキングでもしてみるかな……」

海尋は本を手放し、テーブルの下から白いノートパソコンを出して、いじり始めた。

「やめっ、最低だっ、才能の無駄遣いすんなよっ！」

私は急いで海尋に近寄るが、ノーパソの画面には某地雷避けゲームの上級レベルが映っているだけ。うわ、一桁タイムでこれをクリアとか……いやそうじゃなく。

「ぜーんぶジョークだよ、きみには感謝してるんだ。きみが名乗ってくれるのをおとなしく待つさ」

静かに言う海尋に私は何も言えなくなる。

「そうか……」

「ふふっ……なんかきみを弄るのって楽しいかもしれぬ」

にやりとイケメンスマイルを作る海尋。残念、私は男。そんな微笑みにはほだされぬ。

「きめえ！ こいつきめえ！ まあじできめえ！」

心の底からの嫌悪感を三連発だ、どうだ、どうだ傷つくがいい！

「罵倒のレパートリーがすくないんだね、かわいいね」

背筋にあらが降ってきたような寒気を感じた。

「きめえええええ！」

私の絶叫に応えるように海尋のパソコンの画面が変化し、栗色髪の少女が映し出される。少女のジト目は、あきれてものが言えないという様を余すことなく表現しており、

「海尋くん、気持ち悪い」

工藤さんの端的な言葉の剣は、海尋の胸に深く突き刺さったようで、イケメンスマイルはたちどころに崩れ去り、今にも泣き出しそうな顔になる。工藤さんはパソコンに接続されたイヤホンから私たちの会話を聞いていたらしい。

「さらばっ……」

海尋は一言残してふかふかのソファに埋まった。部屋の中で正常に活動しているのが、私と工藤さんだけという事態になっている。和花はキーキにメロメロであるし、メリーは夢の中から帰ってきていない。

「海尋君はすぐに調子こくから一発ガッツン、と言っちゃっていい

からね！」

「いやあれは工藤さんだから効果があつたんだと思うなあ……」

みんなが正気に戻るまで工藤さんと他愛もない世間話をして、時間をつぶした。工藤さんは裁縫が趣味で、さつき海尋に渡した桃色のハンカチも彼女のお手製とのことだ。料理は苦手で勉強中だとか海尋とピクニックに行く目標のために頑張る、とはりきっていた彼女の顔はとても朗らかで、眩しかった。

一時間ほど経って、例の金髪がもぞもぞと動き始めた。

「んぬ？ 私はどこ、だれはここ？」

メリーが和花の膝枕から起き抜けに放った一言である。室内の空気が凍てついた。

「メリー……ベッタベタだな」

「メリーさんってベッタベタ」

「あたしでも言わないかも」

「足が、足が痺れました……」

四面楚歌の雰囲気に一瞬怖気づいたように体を震わせたが、すぐにいつものエレガント足組みの姿勢になり、夕暮れの港でひとり黄昏る水夫のようにメリーが言った。

「目覚めたら敵だらけ……白鐘堂のケーキは恐ろしいわね……」

恐ろしいのはチョコで気絶するメリーの方だろう、と全会一致の空気が漂ったが、誰も発言せず、メリーの言葉は島流しをくらった罪人のようにどこかに行ってしまった。

メリーの名譽が時間の経過とともにだんだんと回復し、私たちは夕食をとることになった。海尋はみてくれが良いだけでなく、料理の腕も抜群で、フランス料理のフルコースを味わうことができた。その味は絶品で、食べる前はぶつくさ文句を並べていたメリーが、一口食べた瞬間から、目の前の料理を胃に納めるためだけに生きていくかのように、出された料理を食べつくしていったほどだ。かくいう私も夢中になって食べていた。工藤さんが料理を勉強したいと思うのも無理はないだろう。彼氏がこれでは下手な料理を出せない。

時間もだいぶ遅くなり、もう終電の時間も過ぎていて、日付が変わっていた。私たち五人は世界救済祝賀会をおひらきにすることにした。

「メリーさん大丈夫？ 食べ過ぎたんじゃない？ そんなに僕の料理がおいしかったなら素直に褒めてくれればいいのに」

ソファに倒れこんでいたメリーが青い顔のまま、

「おいしかったわよ……海尋さん」

と初めて海尋を名前で呼びながら立ち上がった。

「次は中華がいいわ、思いつき辛口で」

「了解、また今度ね」

海尋はメリーの傍により、微笑んだ。出会った当初はどうなることかと思っただが、なんだかんだで仲良くなれたみたいだ。

「茉莉さんも、また会いましょうね」

『うん、もちろんだよ。みんなとまた会うのを楽しみにしてるよ！』
皿が所狭しに並べられたテーブルにちよこんと置かれているノーパーソから、工藤さんの明るい声が聞こえる。ディスプレイには工藤さんと、工藤さんの部屋が映し出されていた。さっぱりした性格の工藤さんらしく、簡潔にまとめられた部屋で、一見すると几帳面な男子の部屋といった雰囲気も持っている。が、ベッドに倒れこんでいるドデカイ白熊のぬいぐるみは彼女が女の子だということを如実に表していた。

私と和花もそれぞれ家主たちにお礼と、次に会う約束を済ませ、装飾が煌びやかな廊下を歩いて、両開きの玄関までたどり着いた。つい数時間前に見た扉だというのに、ひどく懐かしい感じがした。それもそつだ。夕食をとる少し前、私はこの世界ではなく海尋の創造した世界の中にいたのだから。

玄関まで見送りに来てくれた海尋と工藤さんにさよならをして、私たちは海尋家から出た。十二月の凍てつく空気が、私の気管を一気に冷やす。暖房で温められていた体が、みるみる冷たくなっていた。

「じゃーあ、帰りましようか。紳士も連れてってあげるわ、電車ないし」

私の前でエレガンスにくるくる回りながらメリーがいう。

「サンキュー。連れて行ってくれなきゃ、むせび泣くところだった」
冬の深夜に一人で三駅分歩くのは、あまりにもわびしすぎる。

「あ、メリーさん、ちよつと待つてください」

和花がメリーに声をかけた。私は隣にいる和花の顔を、なぜか見ることができなかった。

「わたしとお兄様を、あの公園まで転移させてくれませんか」

その声は、真冬の空気より澄んでいて、

「とても大事な、話があるのです。お願いできますか？」

温度をこっそり失くしてしまったような、なにかを達観したかのような声だった。メリーも和花の今までにない様子に当惑するそぶりを見せながらも、すぐにあきれたような、ふてくされているような、何とも言えない笑顔になり、

「……早く帰ってくるのよ、ひとりだと……布団が寒いから」

私の右手と和花の左手を握った。ギュッと、強く、小さな手が私をつかんで、その手の感触が消えたのを脳が知る時、もう視界は近所の公園になっていた。私と和花は、互いに言葉を交わすこともなく、ただ、静かに公園のベンチに腰かけた。

この前と、同じように。けれど、あの時とは、おそらく決定的に違っている。

私は、ジーンズのポケットから煙草を取りだして啜え、火を点けた。ふう、と天に向けて息を吐くと、黒い空に白い煙が吸い込まれていった。和花は黙って、私の動きを真似するように、夜空を見上げている。空には満天と言わないまでも、かなりの数の星々が輝いていて、私たちを見下ろしていた。

「いまなら、わたしは、お兄様を葬ることができます」

「うん」

そんな気はしていた。ここ数日は、ずっと人間と関わることを極

力避けていた私にとって、久方ぶりに心が大きく動いたり、多人数で食事をとったり、遊んだり、買い物に行ったり、空を飛んで人を助けたり、世界をひとつ救う手伝いもしたりと、色々ありすぎた。

一言であえていうなら、物凄く楽しかったのである。ほんとに。和花と出会ってから始まった日常の変化は私にとって刺激的で、どんどん私の身体を満たしていったのだ。新しい友達もできて、一人暮らしが三人暮らしになって、離れ離れになった後輩まで帰ってきた。

不思議なくらいに、私の日々は充実の一途をたどっていたのである。否定しようとしても、私の心は正直で、新鮮さと輝きを持った不可思議な出会いたちに、弾力を取り戻していた。

「失いたくないって、思えるようになってた。これが希望ってやつなのかな」

煙と一緒に、苦い言葉を吐き出す。

「そうです。そして、その失いたくない日常を人から奪っていくのが、わたしの呪いなのです。お兄様は……いまでも不幸が日常ですか？」

「いや、不幸じゃない、和花と会ってから楽しいことばかりだった。そりゃちよつと怖いこともあったり、大変なこともあったけど、今までの何も無い毎日とは、何もかもが違ったよ」

「……では、今でも、お兄様は死にたいですか」

「……そうだね。俺は、死なないといけないんだよ」

私は煙草を携帯灰皿に突っ込んだ。

「……死が娯楽、というのは嘘だったのでしょうか？」

「うん、出会ってちよつとの女の子に、殺してもらって、そのうえ俺の過去を知ってもらうなんて、いらぬ荷物を負わせすぎだろ？ だから嘘、ついた。……人形に殺してもらってという選択肢があまりにハマり過ぎてね、まいった」

「その荷物、わたしに背負わせてくれませんか」

空に向かって話していた和花の声が、ふいに私の右耳を狙ってい

た。私は和花を見る。

「どうして？」

「二十年ぶりに人を殺すのです、わたしは。それも自分の意思で動けるようになって、最初の人殺しなんです。その記憶をしっかりと覚えておきたいのです。理由も聞けないまま、殺してしまうなんて嫌です。それでは、動けるようになる前とにも変わりません。今のわたしは、あなたを背負うことができません。聞かせてください。あなたが死を考えるようになった、その訳を」

和花は必死の形相だった。改めて、ことの大きさを実感する。私は、命をひとつ、この子に背負わせようとしているのだ。ならば、散らす命の歴史を知る権利が彼女にはある。

「わかった、長くなるけど大丈夫か？」

「あたりまえです、わたしが聞きたいのですから」

硬い心とか決意がとろけてしまいそうな笑顔で、和花が言った。優しすぎる、この子は。

私の過去。

投げ捨ててきた、過去。

今も忘れることのできない過去。

それらを語るには、伝えるには、あれから明かさなければならぬ。

「海尋から聞いた話、あれ、覚えてるか？ 現代における技術畑の最高峰である二社」

「はい、ヨーゼフ・ファクトリーと、武鎧重工ですね」

「流石、良い記憶力だな。俺はその跡取り息子だ」

和花の口がぽかりと開いて塞がらない。私はかまわず言葉を続ける。

「武鎧、瑠璃。画数と因縁のやたら多い、ろくでもない名前、それが俺の本名」

「ふえっ、いや、へっ、ええっ!？」

「そんな驚かんでも、正式には跡取りじゃないからさ。ハイテク好

きの和花の期待には、応えられないよ。才能がなかったんだ、俺にはこれっぽっちも。アンドロイドを作ったり、警備用ロボットの機構を考えたり、その他会社を運営するための学問もろもろ……とね。武鎧の後を継ぐための能力がまったくなかったんだ」

「それで……お兄様は死にたい、と？」

「いいや、違う。会社を継ぐ全ての能力は、俺じゃない方に、あったから。年子の妹の方に」

「妹さんがいたのですか」

「うん、けど両親は、女に武鎧を継がせるとイメージが何たら、しきたりが何たらと言って……とんでもないことを、俺と妹に強制した」

私と妹が会社のためにと強制されたこと。

そこから、歯車が狂い始め、現在の私へとつながる。

私は記憶を過去に戻し、命の導き手である和花に語ることにした。

二十年前。

武鎧重工の跡取りとして、長男が誕生した。それが、私、武鎧瑠璃だ。初めての子供が男子だったことに、両親はいたく喜んだらしいが、私は赤子の頃の記憶なんて持っていないので知る由もない。私には生まれた当初から武鎧を継ぐための英才教育がみっちり行われた。

翌年に妹、浄美きよみが誕生した。女性ということで、優秀な婿養子をもらうために、ピアノ、バイオリン、茶道、華道、護身用の武術など徹底した花嫁修業が妹には課せられた。

それぞれの英才教育が続けられて、数年が経った。

だが、両親の願いもむなしく、私たち兄妹は与えられた教育をまったく物にできなかつたのである。連日講師を呼んで一日数十時間も勉強や実技に取り組んでも、花が開く様子は微塵もなかつた。それでも両親は意地か信頼かわからないが、私たちに教育を与え続けた。

ある日のこと、新任講師の手違いで、私と妹が逆の授業を受けた。私はピアノを演奏する楽しさを知り、妹は武鎧家の帝王学をみるみる吸収した。

新任講師は本来、罰せられる、つまり解雇されるはずだったが、夕食時に妹が「てーおーがくつて、おもしろいね」と一言置き、今日一日で教えられたことをスラスラ暗唱したことで、両親の目つきが変わった。その時の顔は今でもはつきり覚えている。何年間も探し続けていた宝物を手に入れた、そんな欲望と羨望に満ちた顔だった。私には一度も向けられたことのない、『両親からの期待』、だと、幼い私にも理解することができた。

それは私が六歳、妹が五歳の時の出来事である。私が小学校に入学する二か月前。

妹の才能が開花した翌日、目が覚めると、私の部屋は一変していた。ふかふかのベッドから這い出て、私は自室を見渡す。ぬいぐるみや、ドールとその住居がそこかしこに並べられ、壁紙は青からピンクに、絨毯も暗い赤色になり、どう頑張っただけでも、翌月小学校に入学する男子の部屋ではなくなっていたのである。

「わ、なんで？」

私は動揺を口に出しながら変化した自分の部屋を巡った。現在の私が住んでいる双葉荘の五倍ほどに広い部屋だったので、幼い身で巡ることがなかなか苦労だった。そして私は自室の探索をしながら、あるものを見つけた。それは、二十四時間前まで黒かったもの。そう、すっかり真っ赤になったランドセルである。

「……………」

誰かがペンキで塗装したんだろうかと考えた私は、ランドセルの表面を指でこすってみたが、革のツルツルした感触がなく、べつにランドセルの周りが汚れているわけでもない。真正銘、新品の赤いランドセルだった。私はその不思議なランドセルを持って部屋から出た。「お父さんに聞きたいけれど、どうして赤くなったのかわかるかもしれない」と思ったからだ。この頃の私は、父親は全知全能だと妄信していた。

私は部屋からでて、丁度廊下の掃除をしていたメイドに話しかけた。

「ねえ、お父さんどこかわかる？」

「あら瑠璃様、旦那様なら本日は終日予定がありませんので、お部屋にいらっしやるかと」

「ありがとう！」

私は屋敷の中を走り、父の部屋に向かった。

「お父さん、ランドセルが赤いんだけど……」

父はデスクで新聞を読んでいた。私の顔を見ず、父は言う。

「おお、瑠璃。明日からお前は女の子になるんだ」

「へ？」

「ちょうど名前も女の子みたいだろう。外見も女物を着れば問題ない。今日から髪を伸ばしなさい。伸びるまではウィッグをあげるからそれを着けるように。今日から勉強はしなくていい、その代わりに外出は禁止、わかったね」

父は読んでいた新聞をデスクに置くと、私を見て、ゾツとするような目で、

「浄美を長男として育てる。いいか瑠璃、お前は長女だ。女なんだ、いいね」

それは命令だった。優しそうな喋り方と裏腹に、父の声は反論を許さない語気をまとうていた。私は父の言葉を聞いて、何も言えなくなり、無言で父の部屋から出た。

とぼとぼと廊下を歩いてみると、浄美が遠くの方から私に手を振

ってきた。

「おにいちゃん！ どうしたの。元気ない？」

私の顔色が相当悪かったのか、近づいてくるなり、私の心配をし
てくる浄美。白いワンピースを着ていて、腰まで伸びた長い黒髪が、
さらさらと窓からの風に流れている。

「きよ、お兄ちゃん、じゃないよ。明日から僕、お姉ちゃんになる
んだって」

「どうして？ 女の子だったの？」

「うん、僕もよくわかんないけど、お父さんに言われたんだ」

「ふーん。あ！ あのね、キヨミ、お父さんに呼ばれてるの！」

「そっか、じゃあ早くいかなきゃね」

「うんっ！ またね、おにいちゃん」

ぶんぶんと手を振りながら、浄美は父の部屋に続く道を駆けて行
った。

それが浄美の笑顔を見た、最後の記憶だった。

その日の夕食に、浄美は姿を見せなかった。

ひとり家族が欠けた夕食が終わり、私は、随分ファンシーになっ
た部屋のベッドにいた。浄美のことがずっと気になっていた私は、
就寝前にいつも本を読んでくれる世話係のメイド、久恵さんに聞く
ことにした。

「ねえ、きよ、どうしたのかな……お腹すいてないかな」

「んー、すいてると思いますけど、女の子ですからね、強情にもな
る時があります。ましてや、大事にしてらっしゃった御髪をバツサ
リ切られたとなれば、反抗期先取りもやむをえませんね……」

久恵さんは私に読み聞かせてくれていた小説を閉じて、難しい顔
をした。

浄美が髪を切った。どうしてなのか、理由を私は知っていた。

「きよ、男の子になるんだよね」

「もっお聞きになられたのですね。そうです、『男女逆転計画』、
とおっしゃってましたよ。『瑠璃を完璧な女にするように』と命

じられてしまいましたので、明日から私は、全力で瑠璃様を女の子にしなくてはいけなくなりました。「ご覚悟を」

「勉強しないでいいってお父さん言ったのになあ……………」

「女の世界は甘くありませんからねえ……………」

うふふ、と久恵さんが微笑んで、ベッドの横にある電灯を消した。

第15話 醒めない夢で目覚めた力

翌朝から、私の生活は激変した。

まず指示されたのは？一人称の矯正？だった。

僕、と言っても、俺、と言っても駄目。

当時まだ『僕』だった私は、『私』にならなくてはいけなかった。女の子の服を着て、女の子の髪型にして、自室のおおきな姿見の前に立たされる。そして、

「わたし、私、わたし、私、私、わたし、わたし……」

ひたすら、呪文を唱える。何分も、何時間も。脳髓に刷り込んでいく。プリントする。決してボロをださないように、長男となった浄美の足を引っ張らないように。

『僕』を『私』に改編していく。女の子の服を着せられて、髪型を整えられた私は、どこからどう見ても、女の子だった。ゆえに、改編はスムーズに行われた。いや、行われてしまった。朝から夕方までつぶやき続けた私は、内心の声でさえ、『私』という一人称を使うようになっていたのである。この影響は現在にもつづき、治すことができていない。

浄美は髪をバツサリと切られ、ワンピースやドレスを着ることがなくなった。父の計画が実行に移されてから、妹はブラウスと短パンを着ていて、すっかり、私と入れ替わっていた。

私たち兄妹は、言葉を交わすことも少なくなり、別々の道を、この年にして歩き始めていることを共に感じていたと思う。持たざる者と持つ者が、正しい道を進んでいるんだと、小さいながらもわかってきたのだ。妹の目は、輝きを失くし、ころころとした笑い声を聞くこともなくなってしまうた。

私は、勉学の代わりに、この年頃の女兒が好むオモチャ、情報、ツールを与えられた。伸びきらない髪にウィッグを乗せて、その偽物の髪を結う練習をする。リボンを自在に結べるようになるには、久恵さんの指導がなければ不可能だっただろう。

髪をかきあげる仕草、笑い方、食事の時の料理の取り方、食べる量。同世代の女子よりも女子らしく、男子であった自分が塗り固められていく。女の子なら知っているであろう話題も、過去も、教え込まれた。

自分を改編する作業を繰り返す私が、唯一安らげたのが、久恵さんが以前のように接してくれる時だった。久恵さんはピアノがとてモ上手で、妹の代わりにピアノを弾いて以来、ピアノに興味を持っていた私は、久恵さんに教わったり、外出ができない暇つぶしに鍵盤を弾き続けた。

私は、まるでお城に幽閉されたおとぎ話の姫のようだった。未完成的のまま外に出て、計画がバレると困ると言われ、私は屋敷の中だけで過ごすことを余儀なくされた。その一方、浄美は本社の見学などで外に頻繁に出かけていた。私は浄美が羨ましかった。男の子だった頃は毎日外を遊びまわっていた私の肌は、すっかり白くなり、中身も姿も、どんどん、どんどん女の子に近づいていく。

しだいに、私は恐怖を感じ始めた。ここまで頑張ってきたのに、もし、今度入学する小学校でバレたらどうなってしまうのだろう。毎日丁寧に手入れしていた髪を切られ、それでも学び続けている浄美の努力も泡のように消えてしまう。

「怖い、怖いよ、怖い怖い怖い……こわい、よお……」

私は失敗を恐れ続けた。毎日、眠ろうとするたびに、泣いた。久恵さんが傍にいてくれても、涙は止まらなかつた。

私はだんだんと人を遠ざけるようになっていた。掃除係のメイドにも、にこやかな料理長にも、そして久恵さんにも私は恐怖を感じるようになっていた。常に誰かに見られ、女の子かどうか、採点されているのではないかと思いはじめると、もう私は自室に籠ることし

かできなくなっていた。

そして二か月が経った。

とうとうやってきてしまった小学校の入学式を、私は欠席した。父が、娘は病気で登校できる状態ではないといって、ごまかしたらしい。校長や担任の教師が父の手のモノらしく、私のことを女子として扱う準備は万端だと言われていた。

けど、それでも、私はただ、自分の部屋にいた。

部屋でぼーっとぬいぐるみを抱いているだけで、一日が終わることもあった。

食事をとらずに、倒れ、点滴を打たれたこともあった。

外には出られなかった。出ると失敗が待っているから。

私には自信がなかった。浄美と違って、才能のない私は、きつと計画を遂げられない。

精神年齢は、とつくに六歳児を越していた。人工的に形成された人格は、六歳の女兒にしては、女すぎ、また大人すぎた。それものはずだ、私を指導しているのが十八歳の久恵さんなのだから、六歳になれるわけがない。

変に大人びた私は、このまま、この部屋の中だけで一生を終えれば、浄美を傷つけることもないと思いつめた。そう思うと、より一層、私の足は重たくなった。私の手は鈍くなった。ベッドでどこを見ることもなく、ただ虚空を見つめ、久恵さんに濡れタオルで体を拭かれる行為に恥も何も感じなくなった。『私』は、女の子なのだから、と。週に幾度か、無理矢理浴場に連れて行かれ、髪を手入れされることにも慣れ切っていた。『私』は女の子だから、髪を手入れされるのも当然なのだ。

入学式をスルーし、二か月。

女兒用の服にも、女兒用の部屋にも、女兒用の話し言葉にも、すっかり適応していた頃。

かすかな自信を手に入れた私は、自室の近くの廊下なら出歩くことができるようになっていた。廊下の窓から恋しい外の風景を見る。

すると、屋敷の門のところに人影が数人いることに気が付いた。よく観察すると、それが何なのかわかった。

浄美が友達を屋敷に連れてきたのだ。何人も女の子たちだ。浄美はもともと器量がよかつたうえに男子として私と同じように教育されていたから、同年代のどんな男子よりも、男らしくたのたろう。父の交友関係は広い。幼稚園に通わず、独自の教育を与えている武鎧家は、父のコミュニティのおかげで幼稚園に通わずとも十分すぎるほど他人と触れ合うことができる……ただし妹は、だが。目に入れても痛くないほど可愛かつた妹は今、きちんと跡取りの弟となり、どこかの会社の社長令嬢たちをエスコートして、未来へつながる交友を紡いでいるのだ。たくさんの、友達。

友達、というものが、どんなものなのか知識では知っていた。けれど、私には友達がいなかった。窓一枚、ガラスを隔てた向こうの世界で笑う浄美は、友達を得て、笑っている。

私は自室に戻り、友達を実感できていないことを嘆いた。

しかし、嘆いても現状が変わらないことを悟っていた私は、久恵さんに頼んで買ってきてもらったテレビゲームで遊びはじめた。

数か月前、男の子であった自分が遊んだことのなかつたテレビゲーム。女の子になつてしまった私がこうして男の子らしい遊びをしていると、懐かしさというか、失っていたものを補填できるような気がしたのである。お気に入りの猫のぬいぐるみを自分の横に置いて、ゲームをし続けた。ヘッドフォンをして、気配を殺して、私はいないということアピールする。どうか、どうか、浄美の友達が私に気が付きませんようにと。

「ここにいてのってだあれ？」

祈りは届かなかつた。コンコン、とノックの音がする。

「姉さんがいる。今は勉強してると思うから、いこう」

「そーなんだ。わかつた、いこ、ジヨウくん」

パタパタパタと廊下を走る音が聞こえて、私は深く息を吐いた。

ドア越しに聞こえた妹の話し方が、様変わりしていたことに打ち

ひしがれた。

本当に私たちは逆転しているんだということを、まざまざと思い知ってしまった。

私はコントローラーを床に置き、そのまま床に寝そべった。そのまま目を閉じた。

いまいる世界が、夢ならばいいのにと願いながら。

夢は醒めることを知らなかった。当然である。この現実には夢などではないから。

季節は夏になっていた。女性として生き始めてから半年。八月の厳しい日差しも、外に出られない私には関係なかった。

男から女に移行する教育もあらかた終わり、私は変化の乏しい毎日を過ごしていた。

六歳児には過ぎたおこずかいをもらうも、その使い道は限定されていた。家の中においてもできるもの。そして、同年代の男の子がやっていたようなもの。ひとりでも退屈しないもの。ゲームにばかり、私はお金をつき込み、ひたすらに幻想や空想をむさぼり始めた。

髪は随分と伸びた。ウィッグを着けなくても地毛で女の子らしくなれるようになった。

自然に女らしい仕草をできるようにもなった。むしろ女らしい方が日常になっていた。

私は屋敷を探索するくらいには自信を持てるようになり、ドレスの裾をはためかせながら、屋敷を散歩することを日課にしていた。ゲーム以外にこれといった変化のない日々は、やはり退屈だった。自分もゲームのキャラクターたちのように魔法が、特別な力があれば、もつと面白いのに。そんな風に延々と夢想しながら、自分の生きる現実を歩いた。

屋敷をぐるぐると回り、応接間の前を通った時だった。

ガチャリ、と応接間の扉が開いて、見知らぬ誰かが部屋から出て

きたのだ。

男とも女ともつかないその人は私をみて、にやりと笑い。

「可愛いらしいお嬢さんですね。まるでお人形さんみたいだ」

女とも男ともつかない中性的な声で、そう言った。初対面の人に『お嬢さん』と言われたのは男女逆転計画が実行されてから初めてのことだった。なぜか私は顔が熱くなり、頬の赤みを中性的な人に見られないように、すぐにうつむいてしまった。

「ああ、その子は娘の瑠璃だよ。最近本当に女の子らしくなって、将来が楽しみだ」

父が応接間から出てきた。どうやらこの中性的な人と話していたらしい。

「瑠璃ちゃんですか。恥ずかしがり屋さんなのかな」

中性的な人は私の前でしゃがみ、視線を合わせようとしてきた。

そのうえ、頭をそつと撫でてくる。その手の加減は明らかに女の子を労わる手つきで、私はおかしな充足感と安心を得てしまっていた。「んー、もっと顔をよく見せて欲しいなあ。なんだかね、インスピレーションが湧いてきそうなんだ。駄目かなあ、瑠璃ちゃん」

ふにやりと、人の中身すべてを柔らかくしてしまいそうな甘いさやき声に負けて、私は恐る恐る、顔を上げた。すると中性的な人は、にこりと笑い、じつと私を観察するように、顔を見つめ始めた。

「ふふ………うん、決めた。決まった。恥ずかしがり屋な瑠璃ちゃんにとつても素敵なお友達」を作つてあげよう。いいですか？

武鎧さん。といつてもすでに作る気満々ですけど」

「かまわんよ。きみが一度その目になったら、止まらないことは知ってる。娘の『友達』を作つてやってくれ。どうにも引つ込み思案でね、この年でもまだ友達がいないんだ。娘の心の支えになるんなら一向にかまわんさ」

私は父の言葉に、痛みを感じながらも、『友達』という言葉に胸がときめいて仕様がなかった。『友達』を作るってどういうことなんだろう。私は胸の軋みに耐えかね、その場から走って逃げてしま

った。

一目散に自室に駆け込み、ぬいぐるみの山にダイブした。綿や毛糸のもふりとした感触が私の身体を包み、『友達』への期待感を胸いっぱい膨らませて、そのまま山の中で眠りに落ちていく。ご飯もいらぬいほどに、体全身で、今日はじめてあつた他人に期待していたのである。ひとめで女の子と認識されたことも、今までの苦労や苦しみが報われたようで、とても嬉しかった。久方ぶりに幸せな気持ちで一日を終えられた。

それからの日々は、いまだ見ぬ『友達』を想像したり、どんな話をしようかを考えたりする時間が増えていった。年相応の感覚を取り戻した。友達。久恵さんは友達というよりお姉さんだから、本当にはじめて、私に友達ができるのだ。どうしよう。なにをしよう。それを思うだけで、幸せになれた。その子に聞かせてあげようと、ピアノの練習にも熱を入れた。今までは暇つぶしだったピアノも、目的が存在すると、上達の早さが段違いだった。その子のためのセトリストを作れるほどに演奏できる曲のバリエーションが拡大していく。久恵さんも熱心に指導してくれた。

そして季節をまたぎ、冬になった。窓から見える景色もすっかり一面、白く彩られていた。夜になると屋敷の庭にある巨木に施されたイルミネーションが、光り輝く。

クリスマスが近づいていたのだ。

『友達』を待ち続けていた私は、クリスマスになにかが起きるのではないかと期待していた。毎年、朝起きたら枕元にプレゼントが置いてある不思議な日。毎年増えた宝物。

私にとって『友達』というものはその宝物たちと同じだった。

きつと、今年のクリスマスは奇跡が起きると、信じた。

曇る窓に指で落書きを描きながら、その来る日を待った。

友達を迎える準備をしてきた私に死角はない、後は待つだけなの

だ。

緊張で眠れない日々をやり過ごし、当日前夜がやってきた。

「久恵さん、今日ね、きつと今日、友達が来るんだ、楽しみで私、眠れないかもしれないよ」

ベッドにもぐりこみながら、すぐそばの椅子に座る久恵さんに話しかける。

「明日の朝が楽しみ……」

久恵さんの顔は見えなかった。電灯を消していたから。あの時、久恵さんはどんな顔をしていたのか、大学生になった今なら想像できる。だが、当時の私は眠りから覚めた後のことばかりを気にしていて、本当にそれだけを思っていた。夢想するうち意識がまどろみ、瞼が閉じられた。

翌朝。私が目を覚ますと、枕元ではなく、寝そべる隣に柔らかい感触があった。

「ん……」

久恵さんが寝ているのだろうかと思った私は、首を動かして隣にいる人の顔を確認する。

「……だれ？」

そこにいたのは久恵さんではなかった。

雪のような色の髪が陽光に照らされていた。仰向けに、目を閉じて寝ている、長い睫の女の子。頭にはカチューシャのように青いリボン巻いていた。顔つきと背丈から、私と同じ年くらいのものであった。

私の胸の鼓動が激しくなっていく、奇跡が起きたのだと、確信して。

「えつと……ねえ、朝だよ。起きて、ご飯食べよ？」

私はどきまぎしながら言葉を紡いだ。しかし、女の子は返事をしなくても、目を覚ましてくれなかった。

「あ、まだ眠いんだね、ごめんね……」

私は女の子を残して、料理長のところへ朝食をもらいに行った。二人分欲しいというと、料理長は快く用意してくれた。「友達ができたの」というと、「そうか」と料理長が笑ってくれた。いつもの笑顔とちよつとだけ違っていたのがすこし気になった。

パタパタと、廊下を走る。友達が、生まれて初めての友達ができたんだ。私は顔のゆるみを我慢できなかった。体中がむずむずして、なんともいえない幸せに包まれているような気持だった。

部屋に戻っても、彼女はまだベッドで寝ていた。ずいぶん寝坊助さんらしい。

私はソファに埋まり、ゲームをやって、彼女が起きるのを待つことにした。

何時間たっただろうか。窓から差し込む明かりはすっかりオレンジ色。

夕方になったというのに、彼女はまだ布団の中だ。いつになったら起きてくれるのだろう。

私が疑問を感じ、彼女を起こしに行こうとした時だった、

コンコン、とノックの音がして、私の部屋のドアが開いた。そして八月に出会った、あの中性的な人が微笑みながら、私の部屋に入ってきた。

「どうだい？ 気に入ってくれたかな。瑠璃ちゃんの友達」

私は突然現れたその人に言葉をかけられず、ソファから動くこともできず、ただその人を見つめた。

「瑠璃ちゃんの名前からとってね、青いドレスを着せてあげたんだよ。目なんかはそのまま瑠璃色だしね」

「え……？ どういうこと、ですか？」

「ん、聞いてなかったの？ ボクはね『人形師』なんだ。お人形さんを作るのがお仕事なんだよ。あまりに瑠璃ちゃんがボクのイメージにぴったりだったから、久しぶりに本気を出しちゃった。人形だけど、姿形はもう、ほんと人間のまんまだよ、すごいでしょ？」

「人、形……？」

「これから未永く、『友達』として仲良くしてあげてね、それじゃ、ボクはそろそろ行かないといけないから。お手入れの仕方とかは漆原……そう、久恵さんだっけ、その人に教えておいたからね」

ボタン、と部屋のドアが閉じられた。まだ、耳の中で人形師の声がこだましている。

手入れ、目が瑠璃色、姿形は人間のまんま。

あの人はなにを言っていたんだろう。

友達に手入れも何も、姿形も何も、『人間』なんだから、『友達』なんだから。

そんな言葉は必要ないし、関係ないんだよ。

私は、ベッドに近寄った。

息をしていない友達を、起こすために。

「ち、がうもんね。人形じゃないもんね」

なにをしようか、どんなことを話そうか、考えていた毎日。

「ねえ、ほら、起きて、朝ごはん、いまからじゃ晩御飯になっちゃうけど」

私は友達の身体をゆすりながら、呼びかけ続ける。

「あ、あのね……私ね、ピアノが弾けるの、キミのためにね、練習したんだよ」

指が痛くなるまで、朝から日が暮れるまで、この覚えの悪い頭が覚えてくれるまで、

「がん、ばったの、ずっと、聞いて欲しかったんだ、待ってたんだ、ずっと……」

それだけを支えに、それだけを目標に、それだけを信じて、信じつづけていた。

「それだけ、だったの……私が、楽しかったこと……生きてた意味も……」

六歳にして半端に精神年齢を高められた私が、ただキミのことだけで年相応になれた。

「会いたかったの……初めての友達に……ねえ、起きて、起きてよ……！」

懂れていた、『友達』という、私の生きる意味。

私は友達の手をぎゅうつと握った。その手に体温はなかった。

こんなの、おかしい。違う、絶対に違う。違う違う違う違う違う違う違うチガウチガウチガウチガウチガウチガウチガウチガウチガウチがうよ、こんなの、ありえない。

私は零れ落ちている涙を乱暴にぬぐった。

認めない、やっと会えたのに、

「いまは動けないだけなんだよね、わかってる。ほんとにキミが動ける』ってこと」

だってキミは、

「私の……っ！」

ガリガリガリガリ、ガリガリガリガリ。

頭の中で何かの音がする。痛い、痛い、頭が熱い。

「なに……この音……いた、い」

片手でおでこをさする。頭の中身が、掻き回されているような、不気味な音。

不気味に響く音、けれど無音だった私の部屋で、その音はまるで福音のようにも聞こえた。

古い歯車が軋み合って、無理矢理に回っているような音がしだいに、綺麗な音になって、頭の痛みが治まるころには、私の手のひらに温もりが出現していた。それは決して、握り続けた私の体温ではなく、ついさっきまで息をしていなかった、彼女の体温だった。

閉じられていた、瞼が持ち上がり、彼女の瑠璃色の瞳があらわになった。

「あ………おはよう」

私は目を覚ました彼女に声をかけた。

「ん……呼んでいたのは、あなたなのか。おお、声が出せる。布団……やわらかいな……わたしの身になにが？」

彼女は体の感覚を確認するように、上半身を起こして布団を握ったり、枕を叩いたりしている。

「……どうしてずつと寝てたの？」

私の問いかけに、彼女は動きを止めて、私をみた。

「寝てたとは？ わたしは人形だぞ。本当ならこうして動く方がおかしいのだぞ」

私を訝しむように、形の良い唇にそつと手を当てながら彼女が語る。私が何も答えられずにいると、くくく、と彼女が声を押し殺して笑った。

「まあいい！ 動けることはいいことだ。どうやらあなたが瑠璃ちゃんなのかな、話はずつとお父さんに聞いてたからな！」

繊細そうな外見にまったく似合わない豪放磊落な喋り方、その反発する要素が見事に融合した女の子は、私の手を両手でひつつかむと、にへへ、と無邪気に笑った。私もつられて笑っていた。

「そうだ、早速わたしに名前をくれ！ 名前を付けると愛着が増すらしいぞ」

らんらんと鼻歌を歌いながら、左右に体を揺らし私に名前をせがむ白髪の少女。

「えー……名前……」

友達の名前を考えるとという作業は非常に難航するように思えたが、彼女の長い髪と頭にある青いリボンでなんとなく、かの有名な童話の少女が浮かんだ。

「アリス……とか」私のネーミングセンスはいつの時代も安直であった。

「えーつと……べつにわたし不思議な国とかいけないけど大丈夫か？ 夢、こわれないか？」

本気で心配そうに彼女が私の顔を覗き込んできた。

「こ、壊れないよ！ そんなに子供じゃないもん！」

そういつつ、すっかり読んだことがある。あるというか、つい最近も読み返したばかりであった私は、変にムキになってしまった。誰かにこういう激しい感情をぶつけたのは初めてだった。心臓が、バクバクした。

「あははは！ ごめん、型にハマってる深窓の令嬢って感じがして、からかいたくなって……まあその、今日からわたしはアリスだ。よろしくな、瑠璃」

これが、私の初めての友達、アリスとの出会いだった。そして同時に、私が超能力者として覚醒した瞬間でもあった。

アリスの活動は、私の周りの大人たちを驚かせた。大人たちといっても、久恵さんと料理長にしかアリスが動き出したことを知らせていない。アリスの手入れの仕方を聞いたはいいけれど照れくさくてできそうになかったし、料理を一食分増やしてもらう必要に迫られて、最低限な重要人物にはアリスについて説明することにしたのだ。二人とも寛容な心を持っていたのか、実際にアリスが動いていたのを見たからか、話はすんなり通った。

家族に対して私をはじめて手に入れた個人的秘密。それがアリスだった。

しかし秘密にしようにも、アリスはいささか元気でおてんばすぎた。

ある日、一緒にゲームをやっていた時のこと。

「るーりー、お屋敷ってこの部屋よりずっとと広いのだろう？

走り回ろうよ、一緒に。そう、鬼ごっこことかさー」

私の隣でコントローラーをせわしなく操作しながら、アリスが言った。

「だめだよ、アリスが動いてるのを知ったら、お父さんがまたなに言ってくるかも……」

「んー、わたしは大丈夫だと思うがねー。だって瑠璃の父とは一度も顔を合わせてないから、あちら様はわたしを人形だと思わんっ、

「この、このこのお！」

アリスの操作するキャラクターの粗ぶった攻撃を、私の自機がすべてスマートに防御する。ゲーム漬けの生活を送っていた私と、やり始めたばかりのアリスでは全くと言っていいほど勝負にならなかった。だから私はあえて手を抜いたりして、自分の勝率が七割を超えてしまわないように気をつけた。一度勝率十割を叩きだして、アリスを泣かしてしまつてから反省しているのである。男であった頃の本能が生きているのか、女の子を泣かしてしまうと妙な罪悪感があつた。

「いい考えだと思えますけれどねえ。瑠璃様、このままですと私よりもスレンダーなガールになる可能性がなきにしもあらず。ちよつとここらで食い止めたいですわね、ここらでアリスちゃんに鍛えてもらつてはいかがでしょうか」

私の部屋の掃除をしつつ、ちびっ子二人の対戦を観戦していた久恵さんが、わりかし真剣な調子で語つた。

「うるしいは良いことを言う！ ふふ、そつと決まれば鍛えてやるうぞ。さあさあ、ゲームは終わりだ、いくぞ瑠璃！」

「えちよ、ちよつ！」

それから私は、強引に廊下に連れ出され広大な屋敷内を一日かけて一周する、武鎧家耐久マラソンをアリスの手によつて行われ、三途リバーの一步手前までいきかけた。庭師の人や、掃除係のメイドたちに見られないように機敏に、そして奇怪に走り回つたので通常の数倍は疲れてしまった。けれど、全力で走ることの楽しさを、久しぶりに味わうことができた。

「どうだ？ 体動かすつて楽しいだろ、なんせ、わたしが楽しかったからな」

掃除メイズ（掃除メイド軍団の愛称）が廊下を占領していたので、私とアリスは手近な部屋に隠れて、息を整えていた。

「ん、う、うん、楽しいけど、苦し……」

私は床にへたれこみながらアリスに返事をした。

「ふふ、わたしもだぞ、ちゃんと苦しい。これが人間の感覚なんだって、毎度感動してしまう。瑠璃には感謝してるよ、ほんとに」

「なんで私に感謝してるの？」

私が隣にしゃがむアリスに質問する。アリスの白い頬が赤く染まる様子は、雲一つない夕焼けのように美しく、私は、つい見惚れてしまった。

「んー、まだ無自覚か。それならそれでいいさ。いつかちゃんと、瑠璃が瑠璃で気が付いてくれたら、そのときに礼をするから」

いつものように口に指を添えながら、アリスは微笑んだ。

「？」

「そう不思議そうな顔をするな、下手をすると私よりも乙女チックだからやめてくれ」

アリスは私が本当は男だということを知っている。私が友達に隠し事があるのは落ち着かなかつたから、アリスが起きて三日目に打ち明けたからだ。ネタばらしをした瞬間のアリスが本気で腰を抜かしていたことに、私と久恵さんは声を合わせて笑った。もちろん、口外することは禁止とも伝えてある。伝えなくても、彼女は他人の秘密をばらすような人物ではないだろうが。

マラソンを実行してからは、アリスと屋敷内で遊ぶことが多くなった。一度かくれんぼをやってみたいと張り切っていたアリスに押される形で、久恵さんも含め三人で実行したが、小さい子供二人にはあまりにも屋敷が広大過ぎ、久恵さんを見つけることができなかつた。当の久恵さんは屋根裏にいた。天井から首だけでできたときには、私とアリスは二人して気を失った。

「いや、メイドとしてはですね、こう、瑠璃様を護衛するように仰せつかっておりますので屋敷のありとあらゆる通路、隠し部屋などは把握しているですよ」

久恵さんはこう言っていたが、それはおそらくメイドの仕事の範疇を越えていた。

そうして平穏な日々が過ぎていき……女として再構築されてから

二度目の四月を向かえた。小学一年生の時に学ぶべき学習内容は久恵さんからコツコツと教わっていたので、学業面での心配はなかった。それに、初対面の『人形師』と名乗る人から『お嬢さん』と思われていたのも私に自信をつけさせていた。

そしてついに、父から外出の許可を貰えるまでになったのである。

第16話 どうして、どうして、どうして、どうして

アリスや久恵さんと数回いろいろな場所へ外出して外の雰囲気慣れたのち、私は小学校に通うことになった。

私の所属するクラスは三十人ほどの生徒と、担任教師ひとり成り立っていた。

緊張しながら、あくまで女子として私は自己紹介を終えた。誰一人、私が男だと思う生徒はいなかった。物珍しさに惹かれてきた女子生徒たちの質問攻めをなんなくこなし、私はクラスに溶け込む努力をした。小学校の段階でつまずいていては、これからの生涯、他人を欺くことはできないと、自分で自分を追い詰めながら、学校生活を送った。

ごくごく平和で、ごくごく普通に、小学校生活は送られていった。家に帰ればアリスと久恵さんがいた。学校にも友達ができた。男達は作ってはいけないというお達しがでていたので、私の友達は女の子だけであった。男と喋らないために、クラスのリーダー的女子から目の敵にされることもなく、本当にゆるやかな時間が流れていた。勉強も予習復習を欠かさずにやっている成果が出て、テストで悪い点を取ることがなかった。このまま、うまく小学校生活をやりぬけられると確信していた。

だが、父という名の絶対神は私に試練を与えた。

小学四年生のときだった。父の部屋に呼び出された私は、ちょうど男女逆転計画の実施を告げられた時のような構図で、

「瑠璃、お前は予想以上に可愛くなった、綺麗になった。それを利用しない手はない。計画を次のステップに進行させる。国民からも

女だと思われなさい。来週から瑠璃はアイドルとしてデビューする。ピアノを弾く繊細なキャラ付で行こうと思う。なあに、武鎧がバツクに着いているんだ、安心しろ、すでに、日曜朝、女児向けアニメーション枠でお前を主人公とした番組が製作されている。そのオーブニングテーマをお前が歌うんだ」

驚愕のスケジュールが怒涛のように私に押し寄せた。

レコーディング、ダンスの練習、撮影、アフレコ、キャラクター設定の暗記などなど、信じられない状況がぼんぼん舞い込んできた。幸いなことに、私は勉強以外で才能があるらしく、歌もダンスも思いのほかすぐに飲み込むことができた。武鎧の宣伝力は伊達じゃなく、デビュー前から街をアリスと歩いているだけで「あの子、今度デビューするアイドルらしいわよ」というヒソヒソ声が聞こえてくるようになった。

音楽番組に生出演も果たすことになり、その二日後にはアニメが開始と、誰がどう見ても仕込まれた編成なのだが、視聴者たちは疑いもせず私のCDを買い集め、アニメの視聴率も上々、劇中に出てくる変身アイテムなどの関連商品なども売れに売れ、私の預金残高も増えに増えていった。

ちなみに芸名『ルリカ』メジャーデビューシングルのタイトルは「被って！ ラピス ラズリ」である。タイトルにアイドルの実名を忍ばすというかなりの暴挙であった。日曜朝なのに魔法少女でも特撮ヒーローでもなく、変身ゴーストバスターズが放映されたのは快挙だったらしいが。

そんな輝かしいデビューを飾られた私だったが、突出した杭はそのぶん打たれてしまう。

特殊メイクもするでもなくデビューしてしまった私に待っていたのは、

日常の崩壊。

小学校の男子生徒たちが私の噂を聞きつけ、友達になってほしいやら、デートの誘いやら、真剣に交際してくれやら、下駄箱にラブ

レターやら、女子の反感を買い占めてしまう出来事が続き続けた。私のクラスのイケメンアイドルポジションの榎本くんまでもが、私に告白してきたときには、クラスの全員を敵に回してしまっただのである。「あの榎本様に告白されたのに、それに加えてフルなんて」。これがクラス女子の総意だった。フルに決まっているというのに。だって私は生物学上、男なのだから。

友人から顔見知り程度の女子まで敵にしてしまった私に待ち受けていたのは、イジメ。靴を隠されるという陰湿なものから、トイレに閉じ込められ、水をぶっかけられる直接的なものまで、執拗なイジメが繰り返された。

多忙を極めるアイドルとしてのスケジュール、たまに登校すれば総攻撃。父にイジメを告発することはできなかった。父のことだ、潰すときは徹底的にやっつけてしまう。児童の親が務めている会社ひとつ、造作なく消し去ってしまう。私は苦虫を噛み潰し、噛み砕き、飲み込みながら仕事のない日は普通の日常を過ごすフリを続けた。

そんな私がつがった相手はアリスだった。私は学校から帰ると真っ先に自室に行き、アリスに抱き着いて大声を出して泣いた。学校では泣けなかった、泣けなかった、泣いたら相手を喜ばせてしまうから。アリスは何も言わず、何も聞かず、私を抱きしめ返してくれた。彼女の体温が、暴力、嗜虐の視線、異常な好意などに恐怖し、冰山のように固まった私の心を癒してくれた。

アイドルとして忙しさに殺されそうな私に訪れた、終日オフの日。私はアリス以外の友達を失くした喪失感を埋めるために、新しい友達を得ようとこころんだ。成長した私は、「自分が人形であったアリスを動かした」という事実を理解したのである。私にはたとえ人形であってもアリスは私の友達だという信念もあつたし、自らの超常的な能力に確信も得ていたのだ。

ぬいぐるみの山、その山を構成する愛らしいモノたち。それらに手を触れ、二年前の感覚を呼び覚まし、頭で歯車を回す。

お気に入りの猫、ふさふさのウサギ、毒々しい模様のカエル。その三匹の意識を覚ますことに成功した。私は自分の力が本物だということを実感し、頬をほころばせた。私のそばで作業を見守っていたアリスも満面の笑みを浮かべた。猫はチエシャ、ウサギはシロ、カエルはミリタリー。どれも例の童話から名前を引用した。あまりに安直すぎるが、アリスの友達ならばそれが合うかと思ったのだ。「うわぁ……ぼく動いちゃってるよ……るりっちつてば魔法使いにでもなったのかい？」

チエシャがにやりとおどけたように笑って言い、

「しかもアイドルになってるしー、ルリルリってほんとにすごかったんだね〜」

シロがとぼけた口調でつぶやき、

「バカウサ！　ずっと見てたのにわからねエのか、瑠璃は好きで偶像やってんじゃねエんだよ！　ったくよ、わりいなバカなウサギがいて。まあ、バカが露呈しただけで前からバカだったんだがな」

ミリタリーが乱暴な語り口で私を気遣ってくれた。

「ご、ごめん〜。私、馬鹿なの治したいけど治せないの〜」

涙を流しながら私に駆け寄ってきたシロを抱き寄せて頭をなでてあげると、

「てめエ！　そういう態度で瑠璃一番乗りとか許せねエぞ、こら！」

「ぼくは猫だぞ、なでるならばこう喉元を執拗に執拗になでてくれ！」

ぼてぼてぼてと二人が私のところに走ってくる様子はとても微笑ましく、

「ふんっ！」

アリスの蹴りで曲線を描くように吹っ飛んで行った猫と蛙に私が驚愕するのは、微笑ましさを覚えてほんの二秒後の出来事だった。

「瑠璃に触りたければまず、わたしを越えていくんだな！」

そういつてふんぞり返るアリスに、着地を決めた二匹が、

「てめ、アリスう！　お前は良いじゃねーか！　ずっと動けてたん

だしよー！」

「ぼくをなでてくれるならばアリスでも構わない！」

ふはははは！ と豪快に笑うアリスと、ワンダーランド三人組は、じゃれあううちに、『不思議軍団』という絆で結ばれるまでになった。アリスはある種のカリスマ性をもっていた。彼女の発言には力が満ちていて、一言一言、魅力を凝縮した弾丸のように、聞く者の心を撃ち抜いていく。本当に輝かしく、はつらつとしていて、それでいて可憐なアリスは、友達としてとても誇らしい存在だった。

友達を増やす能力を、私はイキモノ化の力と呼ぶことにした。

たとえばホチキスでさえも私の力を使えば、

「瑠璃クン、どうだい、ワタシのフォルム、今日もキマっているだろっ？」

本性がナルシストだということを知ることでもできたし、

「シャーペンてのはね、残酷なのだよ、芯たちの犠牲なしじゃ、まともに生きていくこともできんのさ……。瑠璃よ、芯は大事に扱ってやってくれ、間違っても途中で折ってはいかん」

シャーペンがシビアな世界観の中で生きていることを知ることでもできた。

イキモノ化した文房具やオモチャたちは『不思議軍団』の一員として私の部屋でにぎやかに暮らしている。初代メンバーであるアリス、チェシヤ、シロ、ミリタリーは幹部として新メンバーの歓迎会を開いたり、ドッキリを仕掛けたりと仲良くやっていた。

外では虐められ独りの私は、家に帰れば人間以外の優しく、愉快な仲間たちに囲まれていた。外の辛さも、部屋のみんなが薄めてくれた、忘れさせてくれた。

だが、どんなに綺麗な思い出で何度上書きしても、

空想に深く溺れたとしても、

どうしたって忘れることのできないことがある。

死を、常に意識するほどの、傷は消失を知らない。

五年生に進級してもクラスは変わらず、女生徒全員を敵に回した私へのイジメはエスカレートし、一部男子、つまり私を憎む女子のことを愛している男子からの暴力が始まった。体に絶えず青あざができるようになった。教師にバレない部位を的確に殴ってきた。一番見られず、的の大きい背中では真つ青だった。女だと思われているから、急所への攻撃がなかったことは幸이었다。

殴られ、殴られ、殴られ、耐え、耐え、耐え、反撃はせず、流されるままに暴力の奔流を受け止め続けた。痛みはしだいに麻痺してくる、精神が、痛みをカットしてくる。肉体の痛みは、それほどじゃない、死ぬまでではないと精一杯の樂觀視。その体のセンサーをイカレサセル精神行動はもちろん衛生的ではない。

いつの間にか殴られても笑って返すようになっていた。アイドルだったから、作り笑顔は仕事だった。殴られる仕事を繰り返す、殴ってくるやつの家庭を守るために。他人の人生を簡単に崩壊させる権限を持っている父の脅威から……そう考えていた意識も埋まっていた。意識が埋まると、反応は無になる。

反応して面白がるなら、無反応をつらぬく、格好つけていうならそういう行為だ。しかし、無反応は、暴力の行使者たちの道徳ブレーキを緩め、アクセルを全開にしてしまった。

あの忘れられない、十二月の、寒い日。

行きつけの病院で怪我を治療するために、アリスに手を引かれて街を歩いていたら時だった。浄美と違い、武鎧のマスコットでしかない私にはSPなどついていなかったから、いつも外出するときにはアリスか久恵さんが着いてきてくれたのだ。すっかり心の機微の緩慢化がすすんだ私は呆然と視線を道路に落としていて、アリスの目の前に出現した脅威に気づくことが遅れてしまった。

「おい！ いたぞ！ あいつだあいつ！」

「ああ？ なんだよ、最近つまんねーリアクションしかしねークソ女だろ？」

「そうそう、だからもうさ、ぶっ壊しちまおうと思ってさあ。みたくなえ？ ゲームでもさ、敵キャラぶち殺すとスカツとすんじゃん。あいつは愛子ちゃんの敵なわけ、いいじゃんそんなやつやっっちゃってもさあ」

「俺もさんせー。アイドルだし金あんだからぶっ壊れても教会で蘇生し放題じゃんな、うは、壊した後は色々試そうぜ……もう加減なんてしらねエ」

クラスの暴力者三人組だった。三人とも体育でいい成績を取ったり、道場に通ったりしていて一発の拳が重たい奴らであり、己が力を発露させるオモチャが欲しくてたまらないイカレタ奴らだった。

私は奴らの声に気づき、体が固まってしまった。逃げたいのに、足が動かない。地面を蹴りだすことができない。

「るりっ！ 逃げるぞ！」

石像のようになってしまった私をアリスが思い切り引っ張り、走り出した。後方から奴らの怒鳴り声と激しい足音が聞こえる。私はアリスの手を放さないように、歯を食いしばって走った。脳裏に、まだ学校に行っていない頃、アイドルでもない頃、無邪気にアリスと屋敷を駆けまわった記憶がよぎった。涙がぼろぼろ零れてきて、止められなかった。どうして、あの頃みたいに、なにも考えずに楽しい毎を送れなくなってしまったんだろう。

「瑠璃、頼むからあきらめるな！ 今は憔悴したって、しょうがない！」

ぜ、は、と息を切らしながらもアリスが私の心呼び覚まそうと叫んでくれた。けれど、私は言葉を返せず、昔の記憶に意識を飛ばしていた。

「わたしが傍にいる！ 誰が瑠璃を傷つけたって、誰が瑠璃を嫌ったって、わたしは瑠璃が大好きなんだ！ 大切でしょうがないんだよ！ 許されるなら、わたしに力があつたら、あんな奴らぶっ飛ば

して、やりたいんだよ！」

前の方から、水のつぶてが飛んできて、私の顔ではじけた。

「いつかのお礼、言っただけじゃなかったな！ 瑠璃のおかげでわたしは人間として生きることができるようになった。自覚してるだろ？ わたしは瑠璃に感覚を与えられて、感情を出させてもらって、たくさん友達もできた……」

五分ほど逃げ続けてたどり着いたのは路地裏。その一本道の一番奥に私は追いやられて、壁を背にしてアリスを見つめていた。

「な、なんでこんなところに連れてきたのさ、もう、もう逃げられないよお……」

「泣くなつて、覚えとけよ、瑠璃は笑顔の方が可愛いんだぞ……だからこれからも」

泣きじゃくる私に微笑むアリスの言葉の途中で、路地裏の入り口に三人組がやってきた。

「ひやはははははは！ ばっかじゃねエの！ 行き止まりにわざわざご苦労さん！」

「あとはボコすだけだアアア！ 普段とは違うから覚悟しとけよオ？」

「コツチにや、これもあつからよ、パンチよりそーとー愉快的ことになんぜ」

バタフライナイフをちらつかせて、淫らに笑う、暴力者たち。私は壁に背を持たれ、アスファルトにへたり込んでしまった。もう、立つ気力も体力もなかった。

「アリスだけでも、逃げてよ……。いいよ、もう私は、もう……」

私に背を向けて仁王立ちをする少女に、私は懇願した。しかし、……瑠璃は妹のためにここまで生きてきたのだろうか。自分の本質を捻じ曲げてまで。その、友達の信念を、血反吐出るような努力をこんなところで、あんな愚者どもに終わらせられるわけに……いかなのだよ」

「アリス？」

アリスは息を目一杯吸い込みながら背をそらし、大きく息を吐いた。そして、ちらと私の顔を見てから、彼女は、

「アリスっ!？」

群青色のドレスをはためかせながら、あの三人の元へ駆けて行ってしまった。

「んだこのガキ! はなせ! 糞が!」

男の罵声が聞こえたのち、くぐもった聞きたくない聞きなれた音が聞こえた。

「……はあ? ボコしても血が、でねえ? ……んでだよ……何なんだよコイツ!」

「ば……化物……化物だこいつ、うわあああああああああああ
あ!」

「ハッ、やつちまえ! こんな化物ツ! 触んな! 離せや!」

ありとあらゆる暴力が、小さな体を蹂躪していく禍々しい声と音が、

「う、ああああ……」

耳をふさぐにも、目を閉じるにも、私の身体は滅茶苦茶な感情の渦にまみれ、指一本、まぶたひとつ動かせない。

「なんでまだ動いてんだよ、死ねよ! 死ねツ!」

終わらない、終わらない、終わらない。簡単には終わらない。彼女には臓器がない、血も通っていない、彼女は。人間が碎ける音を聴いたことがない私でも、彼女の破壊されていく音は、人ではないナニカが壊されている音だと、わかってしまった。

「う、ぷっ、んむっ……!」

胃からせりあがってくるモノを、私が吐き出してはいけないと堪える。

「も、もういい、いこうぜ、こんなの関わったら呪われちまう!」

男が一人、怖気づいた悲鳴をもらした。アリスはもう、マトモではなくなっていて、かろうじて繋がっている腕で男の腕をつかみ、

「ノロツて……ヤ……る……よ……! 瑠璃……キズツ、ダ……ユル……

…ナ」

私のピアノに合わせて清らかな歌声を披露していた喉から、擦り潰れた叫び声を出した。

「ひッ……………」

男は自らをつかむ少女の腕を払いのけると、年相応の泣き顔を見せながら、走り去っていった。他の二人も恐怖の色を顔に浮かべてから、その場から消えていった。

残ったのは、私とアリスだけだった。私は弛緩し、力の入らない体を這いずらせ、アリスの元まで近づいた。

「アリス……………」

路地裏には彼女の四肢のうち、三つが散らばっていた。私はまたしてもせりあがるものを、抑え込む。胴体と首と左腕だけがつながっているアリスを、私はそっと抱き寄せた。

「……………」

アリスの顔にはあちこちにひびが入り、薄く開けられたまぶたからのぞく瑠璃色の澄んだ瞳が曇っていた。頬には涙の筋がいくつもできていた。何年も、そしてついさっきまで感じていた、彼女の温もりが、その崩れた体には宿っていなかった。魂ごと、体に開けられた穴から抜けてしまったように。それなのに、なぜか、彼女は安らかな笑顔を浮かべていた。まるで初めて会った、あの日のように、アリスは静かに眠っていた。

言葉が出せなかった。彼女と私の数年間が、一気に頭脳を駆け巡った。寒い日も、雨の日も、晴れの日も、変わらなかつた私の毎日に、膨大な変化をもたらしたアリスという可憐な女の子。

どうして、どうして、私は、強くないのだ。どうして、恐怖などで体が動かなくなる。どうして、会社のことなど気にした、どうして、友達と共に危機を脱する方法を考えなかつた。どうして、どうしてひとりで、こんな、こんな別れ方。しかも、出会った月に。

（これが人間の感覚なんだ）

彼女は、昔、そう語った。ということは人形であつた彼女には？

痛覚？もあつたはずだ。全身をバラバラにされる痛みを、普通の人形なら感じずに済む痛みを、私は友達欲しさに、彼女に味あわせてしまった。腕をもがれ、足をちぎられ、地面にたたきつけられる痛みを。

全身を罪悪感が串刺しにした。アリスを一度地面に寝かし、路地裏の奥の壁に、我慢していたモノを全部ぶちまけた。吐いても、何も変わらなかつた。頭が異様に痛んで、視界が明滅した。私は袖で口元をぬぐい、アリスの元に帰った。目を放したら、元気なアリスがいるんじゃないかという一抹の思ひは、一瞬で掻き消えた。

私はアリスのバラバラになった体を集めた。きちんと一体の人形に見えるように、地面に体を並べる。並べた所で、どうにもならない。アリスだったモノの傍に崩れ落ち、私は、両手で顔を覆い、咳く。

「いやだよ……どうして、私は、ただ、友達と毎日、生きたかっただけなんだよ……」

これまでの私の人生は、随分と捻じ曲がったモノだったけど、アリスが、傍にいたからなんとかやってこれたんだよ。

「いなくならないですよ……ごめん、ごめん！　なんで、私……アリスを助けられないなんて嫌だよ……そんなの嫌だよ！　助けられて、それで、アリスが居なかつたら、ねえ、目を開けてよ、今朝みたいに微笑んでよ、豪快に笑い飛ばしてよ」

いつもなら泣きじゃくる私の身体を抱きとめてくれる腕は、砕けていた。

「うああああ、わあああああ！」

私は吠えた、両腕を地面に何度も叩きつけた、血が出た。痛い、痛い、けれど、目の前の友達は、こんな傷、比較にもならない痛みを負った。血が出ないだけで、視覚化されない、彼女の痛みはまだこの路地裏の空気に混じっている。

拳から血が流れ、頭が冷めてきた私は、ある確信にたどりつく。

「……人間じゃないんだ……アリスは、人間じゃない……だから、

治せるはず」

『人形師』に作られたのなら、治せる、モノは、治せる。人間は死んだら治せない。でも物は、人形は治せる。モノは大切にしないといけない。シャーペンの芯だって、意思を持つてる。私はそれを呼び覚ますことができる。でも、それだけ？ 違う、それだけじゃ、ダメだ。

「本当に大切に思うなら、大切にするんなら、このままでいいわけではない、友達を、このままにしたくない！」

私は、アリスを抱きしめる。強く、強く、私の温もりが伝わるように。

「人形だって、なんだって関係ない！ 返事、できなかつたけど！ 私だってアリスが大好きなんだ！ すぐくすぐく……大切なんだよ……」

話は聞こえているんだろうか。目覚めさせる前にもモノたちに記憶があることは知っていた。抜け出た魂が戻ってこれるように、私は思いを吐露する。

「このまま、こんな姿ではいさせない……アリスを傷つけたやつらを私は許さない」

頭がじんと痺れた。ガリガリガリ、と覚えのある痛みが私の頭に生まれる。あのときを越す痛みが、脳を掻き回されているような痛みが、私を襲う。

「こんなの、私のせいでアリスがつけられた傷とくらべらんない……」

体がどんなふうになってもいい。どうやったって普通の人間でいられないなら。命を売ってでも、彼女をもとに戻す。願った、誓った、望んだ。目の前の絶望をすべて否定するために。私は、私の希望になってくれていた彼女を取り戻す、それだけを脳に刻んだ。

すると、彼女の身体に白い光が宿った。それは、小さい頃から憧れていた、回復魔法に見えた。ゲームの中で沢山の命を救った、白く清浄な光。その光は路地裏中に広がり、彼女の全身を包み込んだ。

その眩さに、私はたまらず目をつむった。

そうして光がおさまるときには、アリスは元の姿に戻っていた。

「アリス！ やった……やった……」

私はアリスをもう一度強く抱きしめる。けれど、

「……………」

アリスの体温までは帰ってこなかった。きつともう一度動かせば、イキモノにすれば、元気に彼女は跳ね回るだろう。しかし、一度惨すぎる死を、自分の無力のせいで味あわせた人間が、彼女にもう一度感覚を与えることは、痛みを与えることは　　できなかつた。

世界は、アリスと私、二人だけでは回ってくれない。

『モノを治す』という能力を、友達の死を代償にして手に入れた私は、それからモノをより一層、愛するようになった。人間は愛せなかつた。友達を壊した者たちを愛することなんてできない。

アリスはまだ、屋敷の自室で眠っている。血まみれのドレスを着替えさせ、オートクチュールの瑠璃色のドレスを着せて、不思議軍団たちが見守る中にそつと寝かせてある。

こうして、私はズレにズレた異常側の人間となり、地球外生命体となつて、普通の人間との大きな差異を抱えることになった。

独りになり、異常者というその苦しみを存分に味わい、二十歳を迎え、彼女が死んだ日に、自らの肉体を滅ぼすことを決めていた。簡単には死ねない方法で、できる限り残酷に、そして唐突に、狂つたように楽しそうなフリをして自分を殺す。

そう、狂った奴らに殺された彼女の死を、可能な限りなぞるよう

に。

これが、私の死までの歴史。自分勝手な死までの理由。

そして現在。

アリスと私のように、外的要因からの残酷な破壊活動によって、かけがえのない関係を滅ぼされてしまいそうだった海尋と工藤さんを救ったこと。

その行為は、私にとって、いっとう大量の希望だったのだ。

十二月の深夜。アリスと出会い、アリスと別れた因縁の月の深夜。致死量の希望を集めた私は、彼女のように瞳を閉じ、静かに眠っていたひとりの少女。

触れた人間を殺す呪いの人形　和花の傍らで、
目前に迫る死を待っていた。

第17話 命の導き手が、下した決断

白い息が、視界をかすめた。ベンチに降り注ぐ、電灯の明かりの中で。

人生の一部を事細かにさらす説明は、たったいま終わった。私が過去を打ち明ける間、和花はたまにうなずき、静かに、じっと私の話を聞いてくれていた。

私が言葉を止めてから数分後、和花が口を開いた。

「お兄様はアリスさんの痛みを知るために、死を望むのですか」

「……俺が、あいつを殺したも同然なんだ。イキモノにしたから、あいつに、死が生まれた。イキモノじゃなけりや、死を味わうこともなかった。だから俺は苦しんで死ななきゃならない。罪を償う方法が、それしか思いつかないんだよ」

私は空の星を目で追いながら、言った。

「……お兄様の思いは、胸の中は、わたしにはきつと欠片ほどしかわかりません。数年間、溜め続けてきた絶望を数十分の話ですべて理解した気になるのは、おこがましいですから。でも、アリスさんと同じ人形として、思ったことがあります」

私は空を見るのをやめ、和花を見た。和花は、硬い笑顔をしていました。

「動けるのって、本当に楽しいんですよ。自分が今まで届かなかつた世界のすべてに手が届くようで。体温も感じられて、美味しいご飯を食べられて、お風呂にも入って、はいてくにも触れられて、星だって見ることができます。友達とゲームをすることだってできるのです。ましてや、今までは叶わなかった、誰かの助けになることまで、できました。それは、とても、とっても幸せで、一日ごとに

心がどんどん満たされていきました」

和花は、懸命な様子で私に言葉を伝えてくる。

「体に感覚がある、というのは、わたしも最初は驚きました。『痛い』という感覚に恐れを抱いたのも事実です。けど、そうですけど、それだけじゃないんです。痛いだけではなくて、嬉しいも、美味しいもあって、星空を初めて見たときのような、たつくさんの刺激は、お兄様がわたしを動かしてくれたから感じられたものなのです。ですから、アリスさんも」

「それでも！ それでもまだ！ あいつは、死んだ、一度死んだんだよ！ どれだけの苦しさだったか、俺には、自分を滅ぼすことできか、感じる事ができないんだ！」

和花相手に声を荒げる。和花は、そんな私に臆する様子を微塵も見せず。

「アリスさんは、最後に笑っていたんですね」

和花はそつと目を閉じた。

「きつとアリスさんは、痛みを選んだのです。痛くても、大事な人を守るのなら、その人が傷つかずに、済むのなら、どんな痛みにも耐えられます。苦しみも飲み込めます。生きて欲しいと、泣かないで欲しいと望めるほどの大切な人なら、人形の身体で楯になります。わたしは……アリスさんが笑っていたのは、お兄様を守ることができたからだと思うのです」

「そんな……それで死んだら……」

「それが間違いです。アリスさんは死んでいません。お兄様の家で生きていますよ。友達に囲まれて、ずっと、あなたの帰りを待っています」

武鎧家の自室に置き去りにしてきた、友達の姿が、頭に浮かんだ。

「そんなことない。俺のことを……恨んで……」

「お兄様！」

深夜の公園に響き渡る、ぴしゃりとした、和花の大きな声。私は言葉に詰まる。

「お兄様は人間でしょ！ 動けるんです、そして動かせるんです！
今あなたが動いているのは、友達が痛みを耐えて守ってくれたか
らなんですよ！ だれが守りたくて守った相手を呪いますか、わた
しでも呪いませんよ！」

怒っている。あの、笑顔ばかりで、優しさだけで出来ているよう
な、和花が。明確に、はつきりと私に怒りをぶつけていた。びりび
りと、全身に鳥肌が立った。

「人形は伝える手段を持ちません。どれだけ大切にしてもらって感
謝しようとして、人間に伝えることができないのですよ。それに多く
の人形やモノたちはあきらめ、絶望しているのです！ そんなモノ
たちを救えるあなたが、世界一個救えるあなたが、まず自分を救わ
ないでどうするんです！ 友達ひとりの想いを受け止めずはどうす
るんです！ 最後の最後まで、あなたを守り通した女の子を、信じ
てあげてください！ 今からでも遅くないです！」

和花の全身全霊の言葉が、涙を止めどなく流しながらの言葉が、
私を縛り付けていた、鎖をほどいていくように、束縛をぶち壊して
いくように、体を通り抜けて行った。気が付けば、私は思い切り泣
いていた。誰にも打ち明けられずにいた過去を、真摯に受け止めて
くれ、ここまで言ってくれた和花に、その本気の言葉に。

「大丈夫だろうか……ずいぶん……待たせて、しまった」

「だいじょうぶに、決まっています！ ずいぶんなんてとんでもない
！ 死んでしまつて永遠に会えないことに、永遠に話せないことに、
永遠に触れられないことに比べたら、数年間はほんの一瞬です！
相手が生きていてくれる限りは、人形は何年だつて待てるのですか
ら！」

真冬の空気に混じつてしまう前に、和花のまつすぐな言葉はすべ
て私に届いた。死、それは私を感じなければいけないもの。だつた。
終わらせる前に、終わつてしまう前に、

「おれ、は、この命が終わる前に……あいつに……たしかめ、たい。
おれと、一緒にいて、幸せだったのか」

アリスにもう一度、会いたい。もう一度、あの声を、笑顔を、ぬくもりを感じたい。

「……人間はすぐ終わってしまいます。人形は終わりません、人間より遅く、滅びていくものです。ですから、人間であるお兄様は、もっと正直に生きていいのですよ、もっと、人生を楽しんでいいのです。友達に、会いに行つたつていいんです」

泣きじゃくる私に、和花がそつと微笑む。冬の夜の冷たい風も、和花の言葉と微笑みの前ではまるで春風に変わってしまったように感じる。

「ありが、とう、のどか」

「いいえ、わたしは好き勝手にまくしたてただけです。お礼なんていいんです……ただ、ひとつだけ聞かせてもらえますでしょうか？」

和花は、ポツリ、ポツリ、涙の雨で着物を濡らしながら、私を見つめてくる。私も、ズボンに涙のシミを作りながら、和花を見つめ返す。

「わたしは、お兄様の友達、ですか？」

顔を真っ赤にして、すこしうつむいて、対面の少女はか細い声で言った。なぜかつられて、私も顔を赤くしてしまう。こんな泣き顔を直視されて、いまさら恥じるることなどないというのに。

「あたりまえだ、友達だよ、和花」

和花が大きな目を見開いて、赤い顔をさらに赤くした。

「っ ふふ、人形冥利に尽きます。これで、もう」

突如、和花の右腕から、紫色の炎が漏れる。その炎は彼女の腕を蝕んでいった。

「和花!？」

紅潮していた和花の顔色がみるみる青くなっていく。

「……えへへ。わたしは、とても幸せでしたよ……んぐっ!」

和花の右腕は炎に焼かれ、崩れ去ってしまった。

「和花！」

私は彼女に手を伸ばす。

「だめです！！ 駄目ですよ……お兄様。もう、わたしに触れてはいけません……行き場を失くした呪いが、暴れているのです……」

紫炎は和花の右腕を喰らうと、ふっと消えた。

「なん、とか……抑え込んできましたけど……そろそろ危ないみた……」

ドサリ、と和花がベンチから落ち、地面に倒れこんだ。近寄って呼びかけても意識を失っていて返事がない。額に汗を浮かべ、とても辛そうに呼吸をしている。

どうする、治すにも私は対象に触れなければ治せない。死にたがりから脱却した今、和花においそれと触ることは……。

「迷ってる場合じゃねえ！」

和花に触ろうとした私は背後から思い切り衝撃を受け、地面に転がった。

「蛮勇は愚かなだけよ！ 混乱紳士！ 和花さんは私に任せなさい。

私ที่บ้านまで運ぶわ」

私をぶっ飛ばしたのはメリーだった。体を起こしながら、魔法少女に声をかける。

「メリー、どうして」

「あんまり遅いから見にきただけよ、心配なんてしてないし、寂しかったわけでもないわ」

まだ聞く前から否定をしたということは、心配して来てくれたのだろう。

メリーは和花を両手で抱えると、瞬く間に消え、そして手ぶらの状態でまた現れた。

「和花さんは布団に寝かせてきたわ……あなた、死ぬのをやめたのね」

メリーは私のすぐそばに来て、私の顔を見つめながら言った。

「ああ……そのせいで、和花が」

ぼす、と私の腹にメリーが拳を当ててきた。

「……馬鹿言っつてんじゃないわよ、あの子があなたを殺して喜ぶと思っっているの？ 様子を見に来て、あなたがまだ死ぬ死ぬ言っつたら、声高らかに絶交を宣言するつもりだったわ。あなたと私は和花さんを救うことを考えるの、前に進むのよ、紳士」

「……そうだな、救いたいよ。和花が、俺を救ってくれたように」
メリーは私から拳を離して、にやりと笑った。

「……ふうん、なんだか変わったわね、けっこ男前だと思っつわよ。さて、どこかの神社からありつたけのお札をかつぱらつてくるか……脅して御祓いをさせるか……」

「キミはどうしてそう、淑女なのか荒くれ者なのかわからない発言をちよくちよくするかな……当てがあるよ、一度家に連れて行つてくれ。地図で場所を説明するから」

私はメリーに頼み、家に転移してもらった。六畳に敷かれた布団の上で、和花が苦しそうにうめき声をあげていた。

「和花……待っててくれ……絶対に助けるからな」

私は押入れをあさり、地元の地図を引っ張り出した。

そして該当するページをメリーに見せる。

「ここだ、この神社に飛んでくれ。俺の数少ない友達がいる。呪いとかに詳しいやつだ」

「自分で言っつて悲しくならないのかしら……いいけど、こんな遅い時間に平気なわけ？」

「平気だ……と思う。あいつはちよい厄介だけど、もうなりふり構うのは止めた」

「がむしゃらね、悪くないわ。それなら行きましようか」

メリーが私の手を握った。私はいつものように目を閉じる。

そして開いたときには、中学時代以来訪れていなかった神社が目の前に広がっていた。さびれることもなく、あの頃のままの姿をした鳥居が私を迎えてくれた。

「よし、行くぞ、ついてきてくれ」

「わかったわ」

私はメリーに声をかけると、記憶を頼りにもし更地だったなら野球ができるくらいはある神社の敷地内を進み、例の友人が住む家の玄関にたどり着いた。時間はすっかり深夜だが、迷惑をかける詫びはあとにすることにして、私はインターホンを押した。

すると、どたどたと廊下を走る音が薄い硝子戸の玄関越しに聞こえ、真つ暗だった玄関に明かりが灯った。そしてガラガラと音を立てて横開きの扉が開けられる。

「ふあいふあいどちらさまあ〜……って瑠璃ちゃん!？」

「久しぶり、石動いすぶき。悪いな、深夜に押し掛け」

久しぶりに会う友人に挨拶していたはずの私の身体が地面に倒れている。砂利が痛い。

「瑠璃ちゃん瑠璃ちゃん瑠璃ちゃんじゃ

ン!

そして私に乗っかる様に抱き着き、久方ぶりの再会をボディランゲージと雄叫びで表してくるパジャマ姿の友人。友人の方が私より背が高いため、体格的優位はつねに友人にあるので自発的に抜け出せない。

「る、り? 紳士って瑠璃っていうの? 見ただ目通り女子っぽい名前なのね……」

友人はメリーの方に首を向けて、私に質問する。

「ん……瑠璃ちゃん、あの子はだれ? 彼女? 彼女だとしたら物凄く犯罪チックだよ」

「あいつはメリー、俺の友達。てか、と、とりあえず降りて……あの頃の俺じゃないから、羞恥心を持ってくれ……」

「あ、あはは、ごめんごめん。ちゃんと二十歳の男だもんね、やー、習慣は恐ろしいやね」

「すすごい私の上から石動がどいてくれたので、私はやっと体制を立て直すことができた。」

「この開幕から全力で男を押し倒してセクシャルハラスメントをかましてきた女性を頼って平気なのか、はなはだ不安でしょうがないわよ……」

あきれ顔のメリーに、石動が長い黒髪をかきあげながら答える。

「うはは、いいのよー、セクハラは友人の特権なのさ。ほんとアレ以来、こっちに顔を出さないからあたしゃ心配で心配で……ついフラストレーションつつった。ま、それより、あたしに会いに来たってこたー、そっち方面の相談事なわけね。しかも深夜に、そんな必死な顔して……家、入んなよ」

手招きする石動にお礼を言い、私とメリーは石動家に足を踏み入れた。懐かしい木の床の感触が、昔の記憶を呼び覚ましてくる。三人は直線に並び、一番前に石動、中間に私、しんがりメリーという順で歩いている。私の視線の先には石動の長すぎる後ろ髪が、波うっていた。相変わらず、夜空をそのままくりぬいたような黒髪である。

「あたしの部屋に瑠璃ちゃんが来るねエ……怒られそー、お姫様に」
姫。私の馬鹿な後輩。甲冑変態娘。

「へ？ なんであいつが怒るんだ？」

「かあー。変わってねえーなあー、おい。それが瑠璃ちゃんかもだけどさー」

大きなため息を吐いた石動に文句を言われながら、石動の部屋に案内された。石動の部屋は畳部屋で桐箆笥やちゃぶ台など和風を一部屋に凝縮したような構成になっていた。私とメリーはちゃぶ台のそばに腰かけた石動にならない、座る。

「それで、要件を聞かせてくれるかい。超能力者が三人そろってるんだ。ただ事じゃないのは承知だからさ」

石動は力チューシャで前髪を上げているせいで丸出しの額をさりながらいった。

「……なんで私が超能力を使えるってわかったのかしら？」

メリーが呆けている。石動はためらうように、一度唇を噛んでから、

「……私はメリーちゃんが人形だっていうことも分かるし、呪い持ちだってことも分かる。そういう性質たぐなのさ、生まれつき。だからあのね、そんなに緊張しないで。メリーちゃんを取って食ったりしないから……瑠璃ちゃんと仲良くしてくれる子は、あたし、好きよ。好きよ、と微笑む石動に、メリーがきよどきよどし始めた。

「そ……そう、私も、あなた、嫌いじゃないかも」

石動はメリーの返答に嬉しそうな顔をしたかと思うと、私を見て、厳しい顔つきになった。

「さて……瑠璃ちゃん、あなた呪われようとしたのね。体に穢れが見えるよ」

「ああ、けど呪いの人形は、和花は俺を呪うんじゃないで、逆に救ってくれたんだ。だから、今度は俺があいつを助けたいんだ……」

第18話　ねじまげメガロマニア

そして私は、石動に和花と呪いのこと、そして私が死のうとしていたことをかいつまんで説明した。石動は私の頭を一発げんこつで殴ってから席に戻り、

「触った人間を殺す、かあ……しかも？殺す？力の応用で破壊することもできる……そうとう強いね、その子。力もだけど、精神も。抑え込んでいた呪いが暴走して自壊、か……瑠璃ちゃんはその子を治してあげた？」

「治せるなら、すぐ治したいさ。でも、俺は死にたがりじゃなくなつちまつた。和花の呪いを打ち消すことができなくなった……だから石動にお祓いを」

石動はぼかん、と口を開けた。

「必要ないよ。ちよつと怪我するかもしれないけど、いやちよつとは嘘、その子の呪いはめつさ強力みたいだから、破壊攻撃をちよくでくらつたら骨の一本、二本は持つていかれるかもだけど、瑠璃ちゃんは呪いじゃ死なないよ。死にたがりとか不幸が日常で呪いが消えるなら、不幸な人が、呪い返しの手配ないぜー！　って、呪いを使い放題になっちゃう」

「和花の仮説が間違つてた、つてこと？」

「いやー、希望を消すために呪いが出来てるっていうのはあつてるさ。幸せを妬む感情、恨みをぶつてたくてしょうがない負の思いを儀式で対象にぶつてたりするから……でもね、瑠璃ちゃんが、死にたがりだったから呪いが無効化されたんじゃないよ。瑠璃ちゃんの能力とかに起因してる」

ぺしぺしと額を叩きながら石動が説明を続ける。

「モノを治し、彼らの思いを無駄にせず、動かすことのできる力。」

それだけでもかなり、んー、仮に希望量としましょ。未来的に生み出す希望量がかなりのものとなるのね。それに加え……、んつと、ちよつとこつちきて」

石動の手招きに応じて、隣にいくと、私の耳に石動がささやいてきた。

「瑠璃ちゃん、アイドルやってたじゃない？ それってあの子に話してもオツケーなの？」

「……………関係あるのか？」

石動の顔を見つめる。石動は極々真剣な表情だ。そして一言、

「めっさ」

「……………許可します」

私は大人しく席に戻った。石動がこういう場で冗談を言うやつではないと知っているから。

「瑠璃ちゃんは昔、児童向け番組の主役キャラであり、テーマソングも何曲も歌ってたよね。それによって当時の小さい子たちは夢と希望を与えられたわけよ。あたしと同世代の女の子でアレを一話も見えない人は異端ってくらいだったんだから。かくいうあたしも瑠璃ちゃんのファンだったからなー」

石動は頬を指でかきながら照れたように話す。

「あ、アイドル？ 主役キャラ？ と、突拍子なさすぎよ……………」

メリーが私を見てすっかり硬直していた。フォローはあとでしておこう。

「それで、俺が昔アイドルだったことと、呪いの無効化にどんな関係があるんだ」

「瑠璃ちゃんが過去に生み出した、人間への希望とこれから生み出すモノに対する希望……………。つまり、瑠璃ちゃんには希望を無限に生み出す可能性が内在してるのよ」

希望を無限に生み出す可能性？ これまた、呪いよりも胡散臭く、とんでもない話だ。

「ちよつと頭痛くなってきたぞ……………」

「我慢してってー。あのアニメ、長寿で、今もシリーズやってるでしょ。それに初代は特に人気が高いらしいわ……現シリーズよりはるかに。大人になって初代の良さがわかる人も出てきたみたいで……」

「あ、これ誰情報かはあえて言わないけど」

「澄人さんすみひとだろ……あの人が起きる前に帰るからな……」

「兄貴は好きだからねー、日曜朝の時間帯オンリーで愛してるからねーっと、閑話休題……いい、これだけは憶えててね。どんなに不幸にさせられそうでも、呪われそうでも、希望はそれに打ち勝つための力になるんだよ。長々だべっちゃったけど、まとめると、瑠璃ちゃんがこの世に与える希望は常人じゃありえない量なの。無機質な物体の願いを叶えるプラス、超人気アイドルとしての歴史……ここから導き出されるのは、ひとつの真理。『瑠璃ちゃんにはどんな呪いも効果がない』、それがあたしの結論」

多大な情報量を一度に話されて、私は頭の整理に時間を取られた。私には呪いが効かない。それほどの希望量。無限。いやまで。

「俺に、異常に大量の希望が内在してるなんてありえないはずだ。

俺は和花から、致死量の希望を集めるように言われてたんだぞ、希望を集めれば、呪いであなたを殺せ……」

私は言葉を失った。そうだ、なんで、その可能性に気が付けなかった。私が言葉を紡げずにいると石動が、困ったような顔をして、「……それはその子の、嘘、だったんだろうね。最初から瑠璃ちゃんを救おうとしていたんだと思う。いきつく果てに、自分が壊れることも知ってて。すっごい優しい子だね……ちよつと、悔しいくらい」

和花の嘘。私が、死が娯楽だと嘘をついていたように彼女も嘘をついていた。ただ死に向かって日々をすり潰していた私に、希望を希求させるために、致死量の希望なんて嘘を。和花の笑顔が、いくつも、いくつも頭に浮かんで消えていった。

「私も、死にたがりには呪いが効かない、なんて聞いたことなかったから、おかしいとは思っていたけれど……そういうことだったの

……」

メリーがちいさく、呟いた。私は拳を固め、石動を見る。

「石動、ありがとう。お前が居なきゃ、俺は和花の真意に気づくこと、できなかつた。相談もせず……死のうとして、ごめんな」

石動はぷいと顔をそらして、

「ったくう、愛のあるゲンコー発で勘弁してもらえるなんて、瑠璃ちゃんほとんどラッキーボーイだっつーの……気が付かなかったあたしもわりいけど……ほれ、念のため、お札貼ったげる、こっちはいいい」

私は首で指示してきた石動の隣にいく。

「……和花ちゃんの呪いが、瑠璃ちゃんの治療作業中に、破壊能力をいかになく使ってくるかもだかね……触れたら死ぬ呪いと、破壊はちよつと別物の匂いがするし……これは、その防御用。数回しか防げないけどないよりいいっしょ」

石動は近くの桐箆笥からお札を取りだし、私のシャツの袖をめくりあげ、両腕に文字が書かれた紙を何枚も貼ってくれた。そして最後の一枚は、パチン！ と思い切り叩きつけるようにして貼ってき

た。

「いってえ……」

「にしし、鬨魂も注入してみた……終わったら、また遊ぼうよ、姫も呼んで、みんなで」

石動の切なげな瞳に、私は自分が選ぼうとした、自死という選択肢がどれだけ愚かだったかを、再確認させられた。

「うん……そうだな。お札、サンキューな。メリー、行こう、和花の元に」

「了解よ、絶対に助けましょう」

メリーは私の傍に近寄り、手を握ってきた。

「ん、石動さん……あなたも、来る？ なんだか、そんな目をしてるわよ」

メリーの呼びかけに、石動は肩をびくと震わせ、首をかしげる

と、

「えっ！ んんん！。深夜に出かけたら父さんに怒られちゃうしな
ー……。それに、ほら、パジャマだし。いまは着替え待つ時間も惜
しいでしょ？ あたしは待つてるよ。あたしにやれることは、やっ
たから結果を教えてくれれば、さ。あつと、瑠璃ちゃんはあとで変
更したアドレスを報告することも忘れないように、約束ね」

私は、鬼のような迫力を石動の最後の一言から感じた。

「睨まなくても、教えるよ。もう、死ぬ予定は寿命以外にないから
な」

「うんうん、それならよし！ 行ってらっしゃい、お二人さん」

私とメリーは威勢よく石動に送り出され、石動の部屋から消えた。

まばたきを終わると、私は和花の待つ、双葉荘二 一号室に帰っ
てきていた。

もう、触れることに恐れはない。話したいことがたくさんある。
和花を救うのだ。

私は六畳の布団のふくらみに近づき、掛布団を取る。

「なっ！」

「えっ……」

メリーと私は言葉を失う。そこには枕やパジャマ、雑誌が詰め込
まれていて肝心の和花が、

「どこ行っただ……」そこにはいなかった。

ズボンのポケットにいる私の携帯が、着信の振動を私に伝えてき
た。焦りを感じながら、携帯を取りだし、着信を見ると、海尋だっ
た。

「もしもし！」

『きみ！ 和花さんがネットに晒されているぞ、数分前に僕のサイ
トに届いた写真をメールで送る！』

海尋が言葉を切ると、メールが送られてきた。急いで操作し、メ
ールをメリーにも見えるようにして確認する。

「……和花だ……これは、あの廃ビルか！」

写真には、左腕から紫色の炎を出して闇夜を照らしながら、撮影者に向かって歩いていているように見える和花の姿が写っていた。背景として写りこんでいる苔むした壁、灰色の地面に落ちている雑多なゴミ。そう遠くない廃墟でこれだけ条件が揃えば、あそこしかありえない。

『知らせて正解だったかい？』

「愛してると言ってもいい、サンキュー、海尋！」

『はっは！ 愛か、友情愛なら大歓迎だよ。僕もそこに向かってる。きみも急げ！』

「おう！ 行くぞ、メリー！」

「まかせなさい！ あ、靴、はきなさいよ！」

シューズをはき、私はメリーと手をつなぐ。そして魔法で、視界が廃墟に変わる。

足にはガラス片の感触、視界は壁の隙間や窓から入り込む月光だけが明かりとなっていて、空気はジツトリと淀んでいる。地面に目を向けると、足元に火のついた煙草の吸殻が落ちていた。不良がたむろしていたようだが、和花の出現により、逃げたか、もしくは

後者ではないことを祈り、私はゴミを蹴飛ばしながら和花の探索を開始した。

最初に到着した階には誰も居なかったため、私は非常階段まで走った。

「紳士、ストップ！」

私はメリーに手をつかまれ、つんのめる。

「上る前にちゃんと下見なさい！ 崩れてるわよ、馬鹿っ！」

怒鳴るメリーの言うとおり、あと一步踏み出していたら、コンクリの隙間から夜の闇に真っ逆さまであった。

「すまん、この階、結構高かったのな……断面が風化してるし前から崩れてたみたいだ」

「まったくもう……となると和花さんは下ね、急ぎましょ」

崩れていない下りの階段をメリーが駆けていく。私はそれを追う。階段を下りて、初めの階に飛び込み、ビルに点在する部屋を探索している。古い事務机が通路を作る様に並んでいる部屋に、倒れている人間がいた。まさか、和花の呪いにやられてしまったのだろうか。私は倒れている人に駆けよる。しゃがんで脈を確認し、呼吸があることも確かめ、私は声をかける。何度か声をかけると、男性の目が開いた。

「大丈夫ですか」

「う……ん。大丈夫、です。逃げてたら、滑って頭を打って……記憶がありません」

「なにかから逃げていたんですか」私は核心に迫る。

「ここ、心霊スポットでしょう？ 怖いモノ見たさに来たら、本物がいたんですよ……写真を撮って、いつも見てる情報投稿サイトにそれ、送信したら注意がおろそかになってました……いつつ……」

男性は頭をさすりながら立ち上がった。私も姿勢を起こす。

「それは赤衣着物の女の子、でした？」

「あ！ そうですそうです！もしかして写真見てくれたんですか！」

男性が興奮気味で話す。

「ありがとうございます。とてもいい写真でしたよ。気をつけて帰ってくださいね」

「ええ、もう気を失うのはごめんです、起こしてくれてありがとうございます。嬉しそうにはいかむ男性を送りだし、私とメリーは探索を再開した。男性がここまで逃げていたということは、この階にいる可能性が高い。私とメリーは男性以外が部屋にいないことを確かめ、戸の外れた入り口から部屋を出た。すると、

ドゴォ！ となにかが破壊される音が聞こえた。しかも、結構近い。いる、彼女が。私は、不安と期待がないまぜになった感情を胸

にふくらまして、音の方へ駆けた。幾何学的な灰色の廊下をひたすら走る、助けなければ、死なせない、絶対に。

廊下の突き当り、会議室と書かれたプレートが崩れた壁の上にあった。和花は扉を壊して奥に進んだらしい。真新しい砂埃が空気中にもつうとまっついていて、視界が悪い。

「この先に、和花がいるのか」

隣にいるメリーに声をかける。

「注意しなさい、彼女が彼女でないかもしれないから。呪いに意識を奪われていたら、私にも、あなたにも容赦なくあの炎が放たれるわよ」

「そうか、じゃあ」

べりり、と私は左腕のお札を数枚はがし、メリーの両腕にぺたぺたと貼った。

「おさがりで、ごめんな」

「私はいいのに……まあ、貰っておくわ」

私とメリーは、崩れる壁の破片に注意しながら元会議室に入室した。窓の多い部屋で、月明かりが多量に差し込んでいた。私とメリーは部屋の奥へと進む。もう、人影は見えていた。後は、近づくだけだった。頼りなく揺れる、紫色の光の元へ。

夜空の星がよく見える大きな窓のすぐそばに

彼女はいた。

私とメリーは、すでに両腕を失い、崩壊しつつある和花の姿を、直線距離で二十メートルほど離れた場所から、黙って見ていた。紫陽花の通路のような、一本道の距離。

私たちは、すぐに声をかけることが、できなかつたのだ。

月光に照らされた顔に涙がたつていたから。光りの粒が、地面に落ちていたから。ぬぐえるはずの手を失くし、無抵抗に水が落ちてゆく。

「お兄様、メリーさん……どうして……どうしてここが、なぜ来てしまったのですか……わたしはもう、自分の呪いで終わります、もう、誰かを殺すのは嫌なのですよ……巻き込みたく、ないのでですよ」
ぼつり、ぼつりと、和花が言う。

「わたしは、お兄様に嘘をつきました。とてもひどい嘘を。どうしてか、わたしの呪いは、お兄様を蝕めませんでした。初めてのことでした、驚きました。わたしの呪いは幸せな人も、不幸な人も無差別に、殺し続けたのに……」

「嘘なんて、どうでも！ あれは俺を、俺に希望を探させるためについたんだろ！」

私は和花に駆け寄ろうとする、が、彼女の腕のあった部分から紫炎が飛び出し、私が踏み出そうとした場所を破壊した。下の階へ続く穴が開いた。明確な、拒絶だった。

無理して近寄ることも許されない、見えない心の壁が私たちと、和花の間を隔てる。

「人と、一緒にいたくて、わたしは誰かのそばにずっといられたかったから……。希望を探させるためなんて、そんな、そんなのわたしが嘘をつくのを正当化しようとして、自分に何度も言い聞かせた言葉です。わたしはそんな優しい人形じゃないです」

和花は喋りながら、泣き続ける。

「和花さん、聞いて。私だってあなたと同じよ」

メリーがいった。

「自分に施された呪いが効かない人間。そばにいられる人間、それは呪われた人形にとつて希望以外のなにものでもないわ……私も、紳士に無茶な報酬をねだったのよ。一緒に、いたくて、だから……だから！ お願い、紳士に治されてちょうだい！ お別れなんて、嫌よ！」

メリーは叫びながら、嗚咽を漏らしていた。

「メリーさん……違いますよ、メリーさんとわたしは違います。わたしはいるだけで、お兄様の迷惑になります。触れた人を殺してし

まうわたしを、外に出られないわたしを、一生、お兄様に面倒見させるなんて、できません、できないですよ……申し訳、なさす、んぐっ！」

ゴオツ、と和花の右肩からバーナーの火のように紫炎が噴出した。腕の次は、肩。彼女に残された時間が、少ないことを紫色は嫌でも如実に伝えてくる。

「は、はあっ、ふ、ふう……」

和花が苦しそうに息を荒げると、噴き出していた炎が少しおさまった。

「お兄様をわたしの呪いが呪えなくても、わたしの存在が呪いになつてしまふなら、わたしは自分を失くします。お兄様のおかげで、わたしはわたしを壊す方法を見つけられました。命と罪を溜めこんできたわたしの最後としては、ぬるすぎるくらいです」

和花は、私とメリーの方を見て、力なく笑った。顔には、ひびが入っていた。アリスの記憶が私の脳裏をかすめる。私は、

「ちがう、そんな最後は認めないぜ、和花」

和花の元へ、一歩踏み出した。

「っ……こないでえっ！」

紫炎が勢いよく飛んでくる。私はそれを右腕で受け止める。炎の消失と共に、お札が一枚破れて散った。

「もう俺には力がある。あの頃の俺じゃない。だから、俺はキミを救う。そのために、ここまで来たんだ。最初の夜に言っただろ？ 殺してきたのは呪いだ、キミじゃない。本当に罪を償うべきなのは、キミに呪いを施したクソ野郎だ。本当は人間に愛されるべき人形を、殺しの道具に仕立てやがった、クソ野郎がな」

私は和花に語りかけながら一歩一歩、少しずつ距離を詰めていく。「いや、いやあ！」

また一つ、飛んできた火球を右腕で殺した。お札がまた一つ散っていった。

「キミは俺の過去を背負ってくれた。そして、その呪縛を解いてく

れた。知ってるか？ 紳士の業界ではな、お礼もせずにさよならなんて言語道断なんだぜ」

次は二つの紫炎。両手でそれらを消し去る。左手の札はすべて散った。

「今度は俺の番だ。俺にキミの過去を背負わせてくれ。俺がキミの未来を切り開いてやる、どんな傷だって、どんな呪いだって！」

みつつの火球を右腕でまとめて受け止める。ついに両手の札がすべて散っていった。防ぐ手立てを失った私に、再び三つの紫炎が襲い掛かってくる。が、

「私だってこんな最後認めないわ！ 行きなさい！ ヒーローはあなたよ！ 瑠璃！」

私の前に転移してきたメリーが両腕で受け止めて守ってくれた。

私は走りだす。

「俺が、残らずまとめて治してやる！ 俺を信じて！ 和花！」

火球は、走り出した私に飛んでこなかった。

「……おに、さ、ま」

私を見て立ち尽くす和花の両肩が紫炎に包まれ、崩れていく。崩壊が進行し始めてしまったようだ。私は駆けよりながら、集中力を高めていく。超能力のコツを脳から引き出す。

師匠、私は、あなたには敵わないけれど、仙人にはなれないけど、

「 無力な現実を完全に否定し、無限の非現実を完全に肯定し、現実を蹂躪する力 」

大切な人を救うヒーローに、なると決めた！

「否定すべき現実を捻じ曲げる誇大妄想メガロニアッ！ それが、超能力！」

私は紫炎ごと和花を思い切り抱きしめる。味わったことのない激痛が全身を襲った。

私は大きく息を吸い込み、

「おおおおおおおおおおオオオオオオオオオオツツツッ！！」

吠えた、腹の底からすべてを出し切る様に。痛みを意識の外に飛ばすために。集中するための意識を保つために。

「お、に、い、さ……だ、めえっ……壊れ、ちやう、よお！」

すべてを否定する、彼女を苦しめる現実を否定する、忌々しいクソつたれな呪いを否定する、否定する、否定する、否定する、否定する、否定する、否定する、

和花と私の接着面から白い光が、あるとき、間に合わなかった無念を晴らすように、

(やってやれッ！ 瑠璃ッ！)

懐かしい少女の声が聞こえた気がした。不思議と痛みが体から綺麗に消えていった。

「うちに、家に帰ってこい！ 帰って、とつとと寝る！ 明日も早いんだ！」

「う、うえ……え……るり、にいさま、帰り、たいよ！ 明日も生きたい！」

涙や鼻水でまみれた和花が、私の胸の中で叫んだ。

「その意気だ！ キミの不安も、過去も、涙も俺が治す！ 背負う！」

真っ白な光が強くなっていく、闇を照らしだす超常的な光が私と和花を包んでいく。

視界が光で埋まり始める。彼女の深く深くに根付いた暗闇を凌駕する、強い強い白光。

「生きるぞ！ 和花！」

「うんっ……生きる！」

瞬間、元会議室をすべて余すことなく照らすような閃光が私の身体から放たれた。

うまくいった。

その放たれた光以上の確信が私の心を満たした。

だが心は確信だけで満たされたわけじゃない。

背骨が折れんばかりに強く抱きしめてくる温かな両腕が、

私をいつまでも離そうとしなかったのである。

朝はどんなに疲れていてもやってくる。それは全人類に与えられた宿命のようなもの。

窓からの日差しを感じた私は、布団から抜け出て、台所に向かう。三人分の朝食を作るために。

あの夜、和花を廃ビルで見つけた夜から、二週間が経っていた。年の瀬が近づき、田舎町も都会程とは言えないが、年末特有の慌ただしさを感じさせるようになった。

これまでの二週間、私は色々なところに奔走していた。

まず一週間は病院での入院生活を余儀なくされた。『触れた人間を殺す』呪いを完全に和花から除去するために密着した私は、いたいけな少女に密着した報いを受けたのである。全身が原因不明のひどい筋肉痛に襲われ、腕一本動かせなくなっていた。もっとひどい状態になることも覚悟していた私は、ある意味、拍子抜けしてしまったが、全身が超強力な筋肉痛に見舞われるのはなんとも、じわじわ全身を絞め殺されていくような痛みであり、ベッドの上から一歩も動けないことでトイレもままならなかった。必然的に、恥をかいた。

病院に連絡してくれたのは、廃ビルに駆けつけてくれた海尋だった。深夜にも関わらず、三駅を走ってきた海尋には感謝しているが、私が動けないのをいいことに写メを撮りまくった恨みは忘れない。

退院してからの七日間は、学校が冬休みとなったことで、その分、盛り沢山だった。

まず初日。和花とメリーと私で石動の元へ向かった。和花を視てもらいたかったのと、私の生存報告をするためだ。石動によると、和花の破壊能力は呪いではなく、自分を壊したいという和花の願いから発現していた超能力だったらしい。私の知らない場所で、電球を割っていた時代から、孤独に死を考えていた和花を思うと、胸が

苦しくなった。肝心の和花の呪いは、

「ばつちし！ もう和花ちゃんは呪われてないよ、よくやったよ、瑠璃ちゃん！」

とのことだった。自分が地球外生命体でよかったと、心から思えた瞬間だった。

二日目。紫陽花のオヤジさんに和花の呪いが解呪されたことを報告しに行った。

「がっはっは！ やるじゃねえか！」

と私の肩を思い切り叩きながら、オヤジさんは大声で笑い、ひとしきり笑ったのち、静かに和花を見つめた。

「嬢ちゃん、あんなところに閉じ込めて……本当にすまなかった……」

と和花に肅々と謝っていた。そんなオヤジさんに、和花は、

「いいえ、ずっとわたしを置いてくれたから、お兄様に出会うことができました。本当に、感謝しても感謝しきれません」

と泣いていた。そうか、と一言つぶやいて、オヤジさんは和花を抱きしめながら、大声で泣きはじめた。二人分の泣き声が骨董屋に響き渡った。

三日目は石動、それから甲冑後輩の姫宮ひめみやと地元を歩いた。姫宮は四年前に父親が海外出張した関係で、私や石動と離ればなれになってしまったのが寂しかった、と前置き、

「その分を取り返しますっ！ なんせ花の女子高生ですから、フルパワー全開ですよー！」

と赤い長髪を振り乱しながら、夕日に照らされた雪景色の神社の中を、犬も正気を疑うほどのハイテンションで駆けまわっていた。それを眺めて、私と石動は、

「馬鹿だなあ」

と声を合わせて笑った。「馬鹿とはなんですかー！」と抗議された

のは言うまでもない。

四日目は海尋主催のパーティに招待されたので、和花とメリーと共に参加した。

私の回復と和花の解呪記念のパーティとのことで、目を見張る料理がテーブルに隙間なく並べられていた。茉莉さんが、DSによくわからない謎の装置がカスタマイズされた物体から立体映像として原寸大に現れたときには、海尋の科学力のすごさを改めて思い知った。「これがホントの3DSだよ。裸眼立体視なんてすでに前時代的としか言えないね」

海尋が誇らしげに胸を張り、

「海尋くん、これっ、触れないの、すごっくっ、くやしーいだけ、どっ」

工藤さんが必死に料理に手を伸ばしていたのが印象に残った。

五日目、ショッピングセンターに出かけた。ゴスロリ少女と着物姿の少女に挟まれて買い物するのはかなり目立つ行為だった。和花の洋服を買ったり、和花が見てみたいと思う場所に突入したりと、かなりアグレッシブな買い物だった。ただのショッピングモールも、和花にとっては遊園地に勝るとも劣らない場所だったのだらう。その日の夜、和花は興奮して眠れない様子で、私が買ってあげた絵日記にぐりぐりと一心不乱に何か描いていたのだが、私が覗きこんだ刹那、和花が悲鳴を上げ、間髪入れず私の頬をビンタしてきたので彼女がなにを描いたのかは分からずじま이었다。和花がメリーの影響をうけて武闘派になりつつあるのを危ぶみながら私は眠った。

六日目は、華の湯に和花を連れて行った。お風呂好きな和花はメリーがする銭湯のマナー説明を数日間にわたって真剣に聞き、準備万端の状態で、初銭湯に臨むことになったのだ。風呂からあがった時には番頭さんとも打ち解けた様子で、

「メリーちゃんと和花ちゃんを悲しませたら一生出禁にするからな」と男湯の脱衣所にいた私は素晴らしく良い笑顔で言われたので、誓います、と返事をした。

「くく、冗談だよ。アンタなら言わなくても、んなことしねえってわかってるっての」

やさしく微笑む番頭さんに、私は心の中でもう一度、誓いを立てた。

七日目、つい昨日のことだ。

私は朝一でメリーに頼み、実家の自室に轉移してもらった。家を飛び出した頃から、家具も、なにもかも変わっていない、女の子の部屋にしか見えない、私の部屋が視界に広がる。

「じゃ、終わったら電話しなさい」

そういうとメリーは消えた。私に気を遣ってくれたのだろう。私は勇気を総動員し、不思議軍団の待つ、ぬいぐるみの山まで歩いた。「……みんな、久しぶり」

私が山に声をかけると、もぞりと山が動き、ギョロリとした二つの眼がこちらを見てきた。

「瑠璃！？ おい！ 瑠璃だぜ！ 我らの君主が帰還したぞ！」

山からミリタリーが飛び跳ねてきて、私の胸におさまり、

「何年ぶりかは忘れちゃったけど、ルリルリのは忘れてなかったよ」

シロが次いで私の胸にジャンプしてくると、

「さあなでるんだ、るりっち！ 執拗に！」

最後にチェシヤが無理矢理、二人の隙間に飛び込んできた。私は変わらない三人に、安堵し、顔をほころばせ、そっと床に彼らをおいた。彼らの周りには文房具やオモチャたちも続々と集合し、山がすべて私の背後にいる三人のところに集まった時、瑠璃色のドレスを着た少女の姿があらわになった。アリスは最後に会った時のまま、眠っていた。

私は、アリスの傍にひざまずき、手を握った。私の手はあの頃より大きくなっていて、彼女の手をしっかりと握ることができた。

頭の歯車を回し、集中する。そして、

「ひさしぶりだな、瑠璃。ふふ、随分と大きく、なったのだな」

白髪の少女は目を開いて可憐に微笑んでくれた。

「アリスのおかげだよ、なにから言えばいいのか……遅くなって、ごめん、それと……」

「いいからこい、ぎゅっとしてやるぞ」

上体を起こし、私にむけて両手を伸ばしてきたアリス。童心に帰って、私はアリスの胸に顔をうずめ、声を押し殺して涙を流した。アリスも、泣いていた。

涙が互いに収まったのを見計らい、私とアリスは、沢山の話をした。当時のこと、これまでのこと、そして、

「瑠璃、わたしたちは平気だぞ。もっと広い世界を見てくるのだ。

それからでよい、本当に帰ってくるのは。その時は我らが不思議軍団、一堂となつて盛大に歓迎するからな。うるしいもメイド長としてまだ屋敷にいるから……あーもう、本気で嬉しくて、顔がにやけてしまうぞ、どうしてくれる……」

「アリス……」

「ふふ、顔は相変わらず可愛いが、男の眼になつたな、瑠璃。それみんな、瑠璃が帰る時間までしっちゃんかめっちゃんかにしてやれ！」

「え、ちょ、うわ　　っ！」

私は不思議軍団式歓迎を全身に味わつてから、武鎧家を後にすることにした。

電話でメリーを呼び出したときにメリーもしっちゃんかめっちゃんにされ、軍団が彼女に集中したどさくさに紛れて、アリスがこっそり私に近寄り、

「しゅがめ」

頬にキスしてきた。それは私とアリスだけの秘密である。

そんな怒涛の一週間を過ごし、本日は晴天。朝食作りも邂逅の間に終わった。

「ほれ起きろー」

「むー」

「うー」

布団に寝転がる二人を起こし、布団を片付け、テーブルを設置し、料理を並べ朝食をとる。今日の朝食はサニーサイドアップとベーコン、それと卵サンドだ。寝ぼけ眼の二人はもくもくと食料を摂取していく。

「もうちょいで、今年も終わるな」

「そうねー……なんだか不思議な感じだわ……」

「ですねー……なんだか不思議な感じですよ……」

全く同タイミングで、全く同じことを二人が喋った。

「キミらは双子か。そっぴや、お年玉とか、用意した方がいいのか……いる？」

「いや、そんな、お年玉なんて」

「いえ、そんな、お年玉なんて」

二人して手を顔の前で振りながら返答してきた。

「キミらが双子じゃない方がミステリーだよ……お金はあるからちやんとあげるよ」

私はアイドル時代に稼いだお金を学費や家賃に当てているのだが、それでもお釣りが十分すぎるほどにある。しかし、あまり使い過ぎではいけないと自戒するため、一般的大学生と同じように低家賃のアパートで暮らしているのである。

そしてこれからも、ここで暮らしていくのだ。

「これからも、よろしくな、二人とも。大好きだよ」

「っー」

「っー」

なぜかゲホゲホと二人が激しくむせたのを眺めつつ、私はマグカップのコーヒーをすすった。不思議な出会いから始まったこの生活は、苦いコーヒーでさえ、とびきり甘いものに変えてしまえば、それほど幸せなものだ。もう、二度と、死のうなんて思わない。

私は生きていく、前を向いて活動していく。広い地球の中で、地球外生命体のような私と寄り添ってくれる、大切な人たちと共に。大切なモノたちと共に。そう、決めたのだ。

むせる二人の背中をさすりながら、私は心の底から笑い、そして二人を抱きしめた。

「……もう」

「……ふふ」

この現実には、誇大妄想じゃない。捻じ曲げたくもない。

私の愛すべき、そして愛おしい、宝物のような日常なのである。

第18話 ねじまげメガロマニア（後書き）

主人公がのっけから死にたい…という文章に引かず、ここまでお付き合いくださった方、本当にありがとうございます。

死にたがりの物語はここでおしまいです。これからもちよっとずつ、彼らの日々を掲載していきたいと思っておりますので、よろしくお願いたします。

第1話 ヒーロー部

閉じた窓から流れ込む隙間風が頬にあたる。

あくびをしたら冷えた空気を深く吸ってしまった。肺が凍ってしまいそうだ。

私はオンボロアパート双葉荘の自室で、珍しく勉強に精を出していた。勉強用の机をきちんとその用途のために使ったことなど無に等しかったが、これからはそうも言っていられないと、一念発起したしだいである。

二人の死にたがりが、生きることを決めたあの日、廃ビルでの奮闘から半月ほど。

過去からの呪縛をほどきあい、新たな日々を進むことにした私、武鎧瑠璃と、

元呪いの人形であり、今では超能力者となっている和花。

そして幾多の困難を蹴り飛ばしてくれた都市伝説人形少女、メリィ。

この、人間ひとりと人形ふたりの奇妙な、けれど幸せな暮らしは三週間目に突入。

今日の日付は十二月二十八日。

今年もいよいよラストスパートである。

私はシャーペンを動かし、ノートに文字を刻んでいく。ノートに書いたのと同時に脳みそにも内容が刻まれればテストなど恐れるに値しないのに、と考えても無駄なことを考えているうちは内容を記憶することは難しいだろう。うつつむ。

決意を新たにしてノートに向かう私の後ろでは、メリーと和花がゲームをしている。

「んー……あとちょっとで今年も終わるということでー、新年の抱負を二人からどうぞー、いい抱負を言った人には賞品があるぞー」
ひとりで勉強しているのもつまらなかったなので、そんなことをポツリとつぶやいた。

「えっ、ぐぬぬむ！　いま、それどこじゃないわよ！」

「……………」

「あ、和花無言モードなのか……悪い」

和花は普段ゲームをするときには、あ！　とか、うううー、などゲームキャラにシンクロして声を出すタイプのだが、対戦中に集中力が極限まで高まると、一切、言葉を発しなくなり、泣く子も黙る無言のファイターになってしまうのである。つまり泣いている子と和花を一緒の部屋にしたら、その部屋は無音になるのだ。

「がんばれー、メリー、応援してるー」

メリーに背中を向けたまま、左手をゆるりと振った。

「ずいぶん投げやりね！　あ！　待って！　死ぬ！　あつ、あああ
あつ！」

私はメリーの断末魔を聞きつつ、海尋から借りたノートを自分のノートに写す作業の続きにかかる。全身筋肉痛により病室のベッドから身動きできず、学校を一週間休んでしまったため、相当な量が溜まっていた。

友人をつくることを避けてきた私にとって、ノートを貸してくれる友人ができるとはなんとも僥倖であった。入院中に海尋が同じ学部だとわかったときの驚きは言葉にできない。だって、あの天才ときたら技術畑に就職したいくせに、バリバリ文系の学部に通っているのだから。しかも、取ってる授業も三分の二くらいかぶっていた。これは技術志望として不味いんじゃないかと問いたしたら、「理系行くと実験とかするだろう？　もうそういう実験は個人でとつくに済ましてるから、時間の無駄なんだよね。べつに同じ進路希

望を持った友達をつくりたくて大学に行っているわけじゃないし、教授に気に入られたくもないんだよ。いわばカモフラージュだね、才能を利用されるのは御免だ。サイト運営も文系の方がしやすい」
そう平然と語ってきた。わかるような、わからないような。個人で電腦世界を創り上げる頭があるのなら、ノートとる必要もないんじゃないかと思っただが、

「恩人のためにわざわざ取ったんだよ。話を暗記して、黒板の内容も暗記して、それで終わりになるのが僕の普通だからね。ありがとうは？」

私は当然、ありがとうとしか言えなかった。……妹の淨美も天才だったけれど、海尋も十分引けを取らない。二人で共同開発とかしたらとんでもないものが生まれるんじゃないだろうか。

だが、そういう世界は天才のための物語と決まっている。

私のような凡才は、ただ天才に憧れるのみ。夢想し、羨望する。秀才になろうにも、勉強にはいまいち身が入らない。今いる大学にしても学費の安さと、双葉荘から近いというだけで選んだので、ものすごくいい加減な選択なのだ。人生を上手く運ぶための努力の放棄。それには、つい二週間前まで二十歳の十二月に自分を殺す、という予定を立ててしまっていたことも起因している。むしろ、やつと将来について考える脳の空きスペースができたのだ。

「ふう……将来ねえ……考えたこともなかったなあ……」

私がシャーペンを唇に当てながら考え事していると、玄関からノックの音が聞こえた。娘っ子二人は白熱のバトルを繰り広げているので、退屈しのぎにちょうどいいかと、私は勉強机から離れ、玄関に向かった。

「どちらさまですか？」

私はドア越しに声をかける。のぞき窓なんて洒落た物、この双葉荘のドアには付いてない。

「あなたのセクスイな後輩です」

「発音が無駄に凝ってる後輩を持った覚えはない、帰れ」

「ごめんなさい……」

「いや、本気でへこむなよ……」

ドアを開けると、捨てられた子犬を髣髴とさせる表情と佇まいの姫宮がいた。白いダツフルコートを着ていて、姫宮の生来の赤髪が純白に引き立てられている。四年ぶりの再会が銀色のコテコテした甲冑姿だったことを思うと、このどこにでもいそうな服装がとんでもなくお洒落に見える。私が姫宮の服装を眺めていると、急に姫宮がにやつきだした。

「ああ、さては見惚れてますね！ そうなんですね！」

「お前のどこに見惚れる要素があるの、例を挙げてみなさい」

「……………んつと……………あ、私、指が綺麗ってパパに褒められます」
手袋をわざわざ外して見せつけてきた。さすが見た目だけは苗字負けしていない子。小さいながらも細くて長い、形のよい指であった。

「どれ」

おもむろに姫宮の指をつまむ。

「どうです？」

「……………いいハンドクリームとか教えようか？」

姫宮の指には所々いくつもあかぎれができていた。私はそれを避けてさする。この年の女の子には珍しい、継続した苦勞をしている手だった。真冬に鎧を着ても、しもやけにならないのに、どうして指だけは繊細なんだろうか……………。

「ぜひぜひぜひ」

「おう、ウチに余ってるやつあった気がすつから、今度それやるよ」

「ありがとうございます！ いやー、パパに家事やらせると、フアイアーな方になっちゃいますからね。この間、フランベやるって張り切って、大惨事を引き起こしたので料理を謹慎させていますし。いいんですけど、好きですし……………あ、この好きっていうのは家事をさしているの、あしからずです」

「なんだその注意事項は」

姫宮と私はちいさく笑った。こんなことを言っているが、姫宮は父親思いの良い子であったと思う。現在の家庭環境は、私の知るところではない。

「んで、今日はお前だけか？ 石動は？」

「つばさちゃん澄人さんと都会に行つちやいましたよ。明日、海の近くで恒例のお祭りがあるって。それで暇になってきちゃいました。ここに住んでるって教えてもらってましたし」

石動家は年末なのに大丈夫なのか……自分の家の年越し準備をしなくていいのか……。少々友人の家の事情を心配しつつ、私は姫宮に質問を重ねる。

「ウチに同居人がいるのって、石動から聞いた？ 人形が二人ほどいるんだけど」

「聞いてますよ。ですから挨拶に来たんですよー。先輩の友達は、私の友達です」

私を指差し、それから自分の胸に手を当てて、姫宮が誇らしげに笑った。

「斬新なガキ大将みたいになってるぞ……」

このとき、私は、思い出していた。姫宮と再会した時の状況を、彼女の捕縛した当人を。そしてその二名を鉢合わせさせてよいのか。かたや甲冑の隙間に無数の枝をねじ込んだ少女、かたやねじ込まれた少女。……どうしてメリーが姫宮を行動不能にしたのか、理由を聞いておけばよかったのだが、すっかり忘れていた。

「瑠璃？ お客さん、誰だったのかしら」

「おわっ！」

メリーが私の身体の隙間を縫って、ひょっこりと姫宮の前に現れてしまった。いけない。

「あら、綺麗な赤い髪の淑女さん。紳士とどういったご関係？」
にこやかな笑顔を姫宮に振りまいたメリー。二人は知り合いではなかったのか。

「いやいや、綺麗だなんて、えへへー。名前バラしてるってことは、

瑠璃先輩の友達で間違いないですね。私は姫宮。名前は五月じゃなくて花の方の、皐月さつき！ ヒーロー志望の高校一年生っす！」

「ヒーロー？ 変身とかするの？」

「そうなれたらいいんだけど、そこまで到達してないんです……。地道に町内清掃とかのボランティア活動してるんですけど……」

姫宮はメリーの興味津々な目つきにうるたえながら話した。

「ふうん、現実的なヒーローなのね」

納得したように微笑むメリー。

「この町の御当地ヒーローになれたら、ヒーロー部部长としても鼻高々なんですけどね、険しいですよー」

ヒーロー部？

「なんだそれ、部活動じゃないよな」

「部活動っすよ。私が設立しました」

エヘン、と胸を張る姫宮。

私の頭が猛烈な痛みを訴え始めた。なんでまた、この子は自分の容姿をマイナスに引き下げるような行為ばかり繰り返すのか。先輩として忠告しておくべきだろうか。

「まあー、実情はボランティア部なんですけどね」

「すまない」

私は姫宮に頭を下げた。私の忠告なんて全く不必要な立派な部活動であった。

「先輩、なんであやまるんです？」

小首をかしげる姫宮。

「いや、それより、その部活ってどんなことしてるんだ、さっき言ってた清掃とかか？」

えっと、と前置いて、

「普段は週二回、公園の清掃とか、通学路の横断歩道で黄色い旗を操ったりしてます。おじいちゃんとか、おばあちゃんとかママさんたち&ちびっ子ズと仲良くなれて楽しいですよ。そうそう、さっきおまんじゅう貰っちゃいました……ほら、これです！」

姫宮はコロコロと笑いながら、背負っていたリュックを下ろしてまんじゅうを取り出すと、メリーの手をそっとつかみ、メリーの手のひらにまんじゅうを乗せた。

「親睦のおまんじゅうだよ、えっと……」

「メリーよ、ありがとう臯月さん。お茶うけに丁度いいわ」

「どういたしまして、メリーさん。いつも瑠璃先輩がお世話になってます。だらしなんでしょう、先輩」

「そうねえ、学生の本分は勉強だというのにゲームばかりしててまいるわ……」

「いまさっきまで人のゲーム相手を奪って、そのうえ負けた人に言われたくないわ」

メリーが両手を「参ったね」という大げさなポーズで固めたまま、額にだらだらと冷や汗を浮かべはじめた。勝ったなら「もう一回！」と和花に再戦をせがむのだが、負けた場合は黙って泣きそうな顔をしたのち、そっと電源を切るのがメリーの常だった。

そんな風にして暇になって、私の方に来たのだらうという簡単な推理だったのだが、顔の汗を見る限り、その推理は的中していたようである。最初はメリーばかりが勝っていたのだが、和花の飲み込みの早さと、手先の器用さがゲームにいかんなく発揮されてしまい、二人の実力上下関係が今ではほぼ僅差になっている。

「あはは！ 仲良しさんですねえ。なんだか瑠璃先輩、お父さんみたいですよ、それが保父さん。どっちにしても、丸っこくなりましてね」

「丸っこい？ べつにメタボじゃないわよ見た感じ……触ってもプニプニしてないわ」

「やめい」

メリーが私の腹をつついてきた。くすぐりたい。それに便乗するような形で姫宮まで私の腹をつついてくる。

「たしかに。ついでいやいやそーじゃなくて、秀囲気っていうんですかね。すっごく変わってるんですもん。瑠璃先輩って昔はもつとク

「ルな人で」

「へえー、想像つかないわね……」

「たとえばー、あいたっ」

嬉々として人の黒い歴史を語りだす馬鹿たれにデコピンをして、話を止めさせた。メリーが不満を拳として私の腹に軽くぶつけてきたが、恥ずかしい過去が暴かれるよりはましである。

「次喋ったら、お前の白いコートに真つ黒なコーヒーをぶちまけてやるから覚悟しろよ。昔の俺がクールだったっていうんならホットなコーヒーをぶちまけてやるうか？」

私が睨むと、姫宮はメリーの耳元に手を当て、

「そうそう、こんなふうに意地悪ばかりするんだよー。メリーさんも気をつけて、ぶちまけられちゃうからね、女の子にも容赦ないからね」

「怖いわね……」

メリーが肩を震わし、怯えたようにしているが、目が笑っている。私は姫宮にデコピンのおかわりをお見舞いしておく。コレだから昔馴染みの知り合いつてやつは厄介なのだ。顔が熱くてしょうがない。これ以上暴露話を玄関先で繰り広げられる前に、姫宮を室内に連行することにした。

「あら、お客様ですか？」

寝転がってDSの愛犬と戯れていた和花がむくりと体を起こして、姫宮に目をやっていた。今日の和花は着物ではなく、この前ショッピングモールで買った洋服を着ている。着物とジャージだけだと気が付かなかつたのだが、私がパジャマを買う時にお世話になったやさしい店員さん（桃子さんというらしい）がコーデイネイトした洋服を和花に着せると、まるでモデルのような美しさを誇った。ゆえに、

「うひゃあー！」

姫宮の餌食になるのも、道理なのである。

「なんですか！ 可愛すぎ！ メリーさんは抱き着いたら怒られそ

「だったので我慢したけど、理性が決壊しましたーっ！」

暴走した姫宮は和花をギュウと抱きしめるとハイテンションのまま、私に質問を連発してきた。四年を経ても可愛いモノ好きは変わっていないようだ。

「とりあえず、和花から離れなさい、話はそれから、だっ」

私は和花にまわりつく姫宮の背中に掴み掛り、和花からひきはがした。姫宮は私の方に向き直ると、不満げに唇をとがらせて、

「先輩はまったく。なんでこんな美少女二人と暮らしているんですか……あやしー手段とか使ってません？ してたとしたらヒーローとして裁くつすよ」

頭ごなしに疑いの眼差しをむけられて、やましいことなど一つもないのにも関わらず、私は姫宮の顔から目をそらしてしまった。

「あのう……お兄様はわたしを住まわせてくださっているの……あなたの思っているようなことはないのですよ。むしろ、居候の身分なので……」

豪快に乱れた髪を手櫛で整えながら、和花は姫宮にいった。私は和花の傍により、髪型を整える作業を手伝いながら、

「大丈夫だ、和花。姫宮は全部わかってて言ってる。和花が欲しくて悔しくてたまらないから、理由をつけてどーにかして誘拐しようとしてんだ」

「ゆ、ゆーかい？」

私の言葉に和花が怪訝な顔をし、姫宮の肩がぴくんと跳ねた。

「な、なにを言ってるですかー。ヒーローがそんな誘拐なんて……そんな……」

じりじりと私から距離を取る姫宮。この狭い部屋でとれる距離など距離にも満たない。私は畳の上で足を動かし逃げる姫宮を壁際に追い詰め、なるべく重々しい声色で、

「……前科一犯」

「それは言わない約束でしたよお！ それにちっちゃい頃の事故ですーっ！」

姫宮が真っ赤な顔して私に掴み掛つてきた。この通り、姫宮は嘘をつけない子である。隠し事もできない。なぜなら、根本が馬鹿だからだ。しかし、馬鹿には馬鹿を補うように特殊スキルがある。それは、

「怒りのサツキナツクウ！」

「ボデイっ!？」

馬鹿力である。どれだけ馬鹿力かというと、鳩尾に衝撃を感じた私が瞼を開けたとき、腕時計の針が五分ほど進んでいたくらいである。まばたきつてこんな長かっただろうか。畳の感触が右頬にあり、

「私のキックより容赦がなかったわね……生きてる？ ねえねえ」
生存確認をするように、左頬をメリーがつついてきた。

「なんとか……馬鹿だから加減を知らねえんだ……」

「馬鹿じゃないもん！ 先輩が意地悪だからですっ」

ぷんすか、という擬音が見えてきそうなほど頬を膨らまして、姫宮がふてくされていた。

私は体を起こし、腹をさすりながら大きく息を吐いた。

「それで、俺の同居人とこんなファーストコンタクトになっちゃまった感想は？」

「いい出会いだったんじゃありませんか」

これまでのどの行動を顧みて、その胸は張られているのだろう。おかしいな。傷害事件をたった数分前に起こした犯人がこの部屋の中にいると思うのだが。

「姫宮、これからどうするよ。年末だからけっこーどこも混んでるぜ」

膨らませていた頬をしぼませて、キョトンとした姫宮が目をしぼたく。

「遊んでくれるんですか」

メリーと姫宮が敵対しているのかは今までのくんだりで、ない、と判断できた。この判断の裏付けはメリーと二人きりになったときに

聞いてみることにして、四年ぶりの再会を果たしたばかりの後輩を邪険にする先輩であってはならないと思うゆえ、遊びを企画することにした次第だ。

まさか、そんなただの遊びの予定が、とある騒動までの一歩とはつゆ知らず、私たちはこれからどこに行くのかを無邪気に相談しはじめた。

第1話 ヒーロー部（後書き）

お疲れ様です、お読みいただきありがとうございます。

第2章となります。

待っていてくださった方、遅くなってしまい本当に申し訳ありません。

新たに読んでくださった方、稚拙な文章ですがお付き合いいただけたら幸いです。

第2話 回避不能のスピードで

「んー……」

騒動というやつは、望まなくともやってくる。

それも、逃げきれないほどのスピードで。

「おい！ 金庫から金を全部！ 残らずだっつってんだろが！ 早くしやがれ！」

濁声で乱暴な言葉が紡がれている。私は他の客たちに混じるようにして、その声を聞いていた。遊びに行く資金を引き出してくる、と双葉荘を出て約一時間。

私は銀行強盗に命を左右される人質の中の一人と化していた。

「はー……」

さすがに最近運がよすぎると思っていたんだ。

反動があってもおかしくはない。

私以外に客は……女の人も年寄りばかりざつと十人といったところ。犯人グループは銀行内で視認できるのは三人。おそらく逃走の足を用意していないはずはないので、他にもメンバーがいる可能性は高い……と、全く無意味な分析を試みる。分析したところで私にはピストルに対する手立てがない。超能力者である私だが、能力が？モノを動かす？と？モノを治す？という直接戦闘にあまり適さない種類なので、ぐうの音も出ない。

もう警察が来てくれるか、犯人がパニックになって人質を殺しにかかるかを天に任せるしか、私に残された選択肢はないと言える。私は銃を手にした見張り役の気に障らないように、ちいさく息を吐いた。

「肝。すわってるね」

ぼそつと私の隣に座っている短髪の少女が話しかけてきた。ヴィジュアル系バンドでもやっているのか、左目を隠すように伸びた前

髪がゆれている。その髪は真っ青で、田舎町では目立ちすぎる風貌をしていた。私の後輩にも地毛が真っ赤なのがいるが、この子も地毛だったりするのだろうか。どっかの姫宮より幻想的な雰囲気だが、後輩の髪を思い出させる色彩のマフラーを少女が巻いているので口元は見えず、それがなおさらミスティアスな空気を演出していた。

「どうして？」

犯人たちとはいえ銀行員がもってきたお金をトランクにしまう単純作業に夢中になっている。いまなら小声で会話できるだろう。

「他の人は震えてたり、泣いてたり。でも、そのどっちでもない」
無表情で私を見る青髪の少女。

「いや。ちゃんと怖いけど、俺にやれることがないなら、慌ててもね……」

青髪の少女はうつむいた。ほんとなら、と少女のつぶやきが聞こえる。

「やれることがあるのに。いまだけできない。それが悔しい」
「やれること？」

私の問いは、興味と期待、その両方をこめたものだった。少女は唇を結び、着ているもこもことしたセーターの裾を持つと、いきなりめくり上げ始めた。めくられ、その結果見えたのは肌ではなく、

「……変身ベルト？」

青髪の少女はうなずいた。

たしか……これは私がアイドルをやっていた頃、毎週日曜、全国の男児たちを夢中にさせていたヒーロー、『シャイニング』に登場するものだ。ヒーローである彼が、人類を脅かす怪物と戦うために、自らの身体を変質させる重要アイテム、『シャイニングベルト』。そのベルトが紺色のセーターに隠れていた少女の腰にまかかれている。

「でも故障中、で」

少女の右目がしょんぼりとした声と同時に伏せられた。故障。そのワードは、私の前では無意味になる。そして私はこの世のどんな

不思議、非現実、超常的なことも心の底から信じ、肯定する人間だ。ならば、こちらから歩み寄る。

「あのさ、超能力って、信じる？」

私がそうささやくと、少女は伏せていた目をひらき、じっと私をみて、

「うん」とうなずいた。

これでわかった。彼女は同業者だ。見知らぬ男が、命の危うい非常事態にも関わらず、超能力など言い出したとき。普通の人間なら男の頭が狂ったか、もともとの狂人が変人か、それらを疑うだけで終わるだろう。しかし、青髪の少女は違った。ハッキリと期待の色を瞳に乗せて、臆することなく私を見つめ、肯定の返事をした。これは、彼女がこちら側の住人ということ。

「俺は、触ったモノを治せる超能力を持つてんだ。キミは？」

「私は、速く動くこと。それができる。ほんとに、治せる？」

速く動く。シャインガールの特異能力のひとつ、『光速移動』を模した力だろうか。少女はベルトを白い手でさすりながら私に訊いてきた。

「うん、大丈夫。かれこれ十年くらいは超能力者やってるから。キミは大丈夫なのか？ 相手は男三人だぞ、しかも銃までもってる」

私が問うと、少女はためらう素振りも見せずにならずいた。

「平気。じゃあ……治して」

犯人たちの様子をうかがいながら、青髪の少女は私に体を寄せてきた。

「ロープで結ばれたりしてないんだからベルト外して渡してくれりや……」

「ベルトは肌身離さない。たとえお風呂でも、海でも、水泳の授業でも」

「そうか……あ」

私は彼女のベルトに手を当てた瞬間に気が付いた。早くに気が付けなかったのは、こんな場面で能力を使っただけではないからだ。私

が、毎日とは言わずとも、幾たびの死線を日常的に潜り抜けられるファンタジー世界の住人ならばよかったのだが。

「治すとき、手から光が出るんだ……確実にあいつらに撃たれかねないくらい」

私がモノを治すとき、能力に目覚めたときにイメージしたのがゲームの回復魔法だったからか、発光現象が起きてしまう。師匠いわく、その光は、私の意思ではどうすることもできない癖のようなものだ、とのこと。

「平気。光りより速く。悪を討つ」

光より速く、悪を討つ。聞きなじみのある、決め台詞。その続きは、

「それがシャイニング、だったな」

少女が微かに、驚きの色みたいなものを顔に浮かべた。

「知ってるの？」

「そりゃ二十代の男はみんな知ってるさ」

同じ時間帯の女児向け番組の主演をやっていたことは言わずにおく。

「おい！ その女二人！ さつきからなにグダグダ喋ってやがる！」

犯人のひとりが私と少女に向けて銃を構えた。銃口が、私たちを睨む。

私は素早く集中し、彼女のベルトの故障の修復をイメージする。

刹那、白い発光が犯人たちの目を刺した。

「んだちくしょッ……！」

流星に驚いたのか、目だし帽をかぶった犯人は、目をこすっている。

「変身」

青髪の少女がベルトについていたボタンを押す。すると、懐かしい機械音声が聞こえた。

身体の変質を告げる声が聞こえた次の瞬間には、少女が私の隣か

ら消えて、

犯人グループが全員のびていた。

私は口を馬鹿みたいにポカンと開けて、その光景を見ている。

少女の動きは殆ど目視できなかった。残像、と言っているかわからないが動きの軌跡が所々見えたくらいで、実際にどうやって犯人を倒したのかもわからなかった。

ただ私の目の前に広がるのは、気を失っている犯人と床に落ちた銃、そして銀行員の人たちの呆然とした表情。加えて啞然としている人質たち。そこには私も含まれている。犯人グループ以外の人間はみな、たったひとつのものを注視していた。カウンターのの上に立ち、汗だくになって肩で息をしている、青い顔をした青髪の少女を。

銀行員が通報をすませ、銃は犯人たちの手の届かないところに置かれ、さらに念を入れて、受け付けのお姉さんが、持ってきたガムテープで犯人たちの手足をぎゅうぎゅうに拘束した。ひとりの少女の活躍により、形成は綺麗に逆転。銀行側の大勝利である。

私はカウンターに腰を下ろして苦しそうに息を整えている少女に近寄る。

「ほんとに早業だったな。大丈夫か？」

「うん……っ」

青髪の少女は一メートルほどのカウンターからぴよいつと床に着地した、ようにみえたが、まだ疲労が回復していなかったようで、ふらりと彼女の身体がゆれた。

「無理しないで、あそこまでいこう」

私はふらつく少女の身体をそつとささえ、脱力している彼女の腕を肩に回し、備え付けられている、待ち人用の椅子まで運ぶ。

そして椅子に座らせると、少女は背もたれに体を預け、ショートパンツのポケットからハンカチを出して顔の汗を丁寧に拭き始めた。

「肩、ありがとう」

まだ荒い息のまま、少女がつぶやいた。

「お礼を言うのはこっちだ、助けてくれてありがとうな……シャインガールの『光速移動』ってたしか疲労が蓄積されるんだっけ。そこまで忠実なんだな」

私が訊くと、少女は首を横に振った。

「ちよつと、急ぎ過ぎた、だけ。速くなっただけで、体力は変わらないから」

ヒーローの技を再現した能力かと思ったが、そこは変身していない生身の人間、体に大きな負担がかかってしまうようである。……おそらく、現実否定が？速さ？に重きを置かれているのだろう？体力？に否定は行われていない、と推測できる。

「んと、シャインガームみたいな『光速移動』できるけど、ようは滅茶苦茶体を速く動かしてるってことだから、体力が持つ限りの瞬発的な高速移動能力ってことなのか……なんか無理さしちまったみたいで、ごめん」

再び少女は首を横に振る。

「やりたいこと、やった。満足。それに」

ベルトを愛おしそうになでて、

「治してもらった。おあいこ」

目を細めた。猫が縁側でリラックスしているような微笑みだ。今まで無表情だっただけに、ベルトに対しての彼女の思い入れを窺うことができた。モノを大切にしている若い子がいるのは喜ばしい。

私が彼女の横顔を眺めていると突然、慌てた様子で彼女が立ち上がった。

「待ち合わせ！ もういく」

走り出そうとするも、足をもつれさせて、盛大にずっこけた。冷静な口調だが、自分の体力を無視して全力を出したり、自分の足でこけたり、この子は意外とおっちょこちょいなのかもしれない。私は彼女に手を貸して、体を起こしてあげた。

「なあ、待ち合わせってどこなんだ。あれだったら送ってくよ、命の恩人が困ってるのに、見捨てておけないしさ」

モノを大事にしている奴に悪い人間はいない、という私独自の方程式にあてはまるし。

「それはヒーローっぽくない」

なにやら少女の表情が硬くなった。

「私はヒーロー部だから、誰かを助けるのはあたりまえ。平気だから」

「ちょ、ちょっとまって！」

私は歩き始めた少女の腕をつかんだ。

「なに」

「姫宮皐月、っていえばわかるか」

見開いた少女の眼が語る。私はその人を知っている、と。

「俺はあいつの先輩。まさかこんなところで今日遊ぶ相手と会うなんてな」

「……びっくり」

あれは数時間前にさかのぼる。遊びの予定を双葉荘で立てていた私たちは、せっかくだから私の友達も紹介しますよ！ と意気込む姫宮の提案に乗っかる形で、ヒーロー部の部員たちと遊ぶ計画を立てていたのだ。わざわざ来てくれた後輩の友達たちにお金を出させるのも悪いと思い、そのためのお金を引きだしに来たら、そのヒーロー部部員に鉢合わせしたという形になる。

「んじゃ、目的地は一緒だ。助けるんじゃなくて、遊ぶ前から歩きっぱなしはきつい。俺がタクシーに乗りたい。キミはそれにたまたま乗る、それならどうだ。ヒーローがタクシー代の無駄づかいなんて、なんかカッコ悪いだろ？」

「でも。お金、私もある」

とまどい、迷い、それらが混ざり合ったような声で青髪の少女が言う。

「いいんだよ。後輩の友達は、俺の後輩でもある。んで、先輩は後

輩におごるって使命がある。ヒーローは使命を守るものだろ。気に入んな、俺もやりたいことをやってるだけさ」

私が笑ってそういうと、彼女は私の顔を見て、

「じゃあ、甘える」

と言った。それでいい。後輩は先輩に甘えるべきなのである。

私は青髪の少女と一緒にそくさと銀行を出て、道路沿いを歩く。年末だからか、普段より交通量が多い。田舎町だというのに都会ぶってしまって、妙な違和感がある光景だ。

だが、その光景よりも違和感があるのは今の私の状況かもしれない。姫宮の名前を出して通じたはいいが、現状では私はなにも証拠を示せていないので、女子高生をたぶらかす不良大学生といういかわしい絵面になっているのではなかるうか。素直についてきてくれている青髪さんも内心ではふつふつと疑心をコトコト熟成させているかもしれない。

「姫宮に電話するから、ちょっと止まって。さみーのに公園で待たせるのも良くないから、喫茶店とかに入ってもらおう」

焦って早口になり、意図せず不審者度が増してしまったが、青髪さんはコクリとうなずくだけだった。私の手汗がすさまじい。汗をジャケットで軽くぬぐってから携帯電話をズボンのポケットから出し、姫宮に電話をかける。

『怪我とかしてませんか!』

「うおっ」

姫宮が出たかと思ったら、開口一番叫ばれた。鼓膜が痛い。

「怪我はしてない、銀行強盗には巻き込まれた。けど、ヒーロー部の子が助けてくれたよ、青い髪の」

『赤いマフラー巻いてます?』

「巻いてるぜ。部員の子で間違いないか? もし違ったら俺、逮捕されちまう。最悪自首」

『はは、間違はなくウチの部員です。青葉葵あおばあおいがいいいます。よかったです……先輩、人と遊ぶとき絶対に遅刻しないから悪いことに巻き込

まわってるかもって思ってたんですけど、まさか歳末銀行強盗と鉢合わせなんて不運すぎですよ。つばさちゃんに魔除けとかしてもらったらどうです?」

石動の魔除けは効果抜群だろうが、彼女は今、澄人さんと共に都会に出かけている。彼女が祭事から帰ってこない限り、それはできない相談だ。帰ってくるのは少なくとも明後日だろうか。

「いないやつに頼るなんて無理だったの。んなことより、外で待たせて悪かった。そっからちよつと歩けば風見堂かざみどうに行けるの覚えてるか? そこに入って待っててくれ。好きなものなんでも頼んでいいから」

『覚えてますって……へへ、ミーティング場所を忘れるほど、馬鹿じゃないですよ。先輩、ちよつと葵に代わってもらえますか』

私は携帯電話を青葉さんに手渡す。彼女はこくこくとうなずきながら、姫宮に返事をしている。姫宮の声が無駄にデカイので聞こうとしなくても会話内容が少しだけ聞き取れてしまった。どうやら私の紹介をすませてくれたようだ。これで職務質問されても私がしよつぴかれることはなくなった。現実というものはシビアである。ゲームでよくある巻き込まれ型の主人公は、奇抜な格好の少女と共にいてよく職質されないものだと思うが、そんな現実を物語中に持ち込んだらきつと話が進まないのだろうな。

「るり、電話、終わった」

青葉さんが渡してくれた携帯をしまつて、私は道路際に立った。そして空車のタクシーが来るのを五分ほど待ち、ターゲットが現れた瞬間、まっすぐ腕を空へと伸ばした。

青葉さんを先に乗せ、私はそれに続く形で乗車する。運転手に目的地を伝え、私はやっと一息つくことができた。やはり、知り合つて間もない女の子とコミュニケーションをとるのは、得意じゃない。小学生の頃の体験が、どうしても体を強張らせる。

和花やメリー、工藤さんはモノだから平気だ。だが?人間?となると慣れるのに少しばかり時間がかかってしまう。緊張を紛らわし、

気まずい空気を潜り抜けられるマストアイテム、煙草も彼女の前で吸うわけにいかない。それに、そもそもこのタクシーは禁煙のようだ。

今日の一服は夜の散歩のときにでもすることにしよう。

私は煙の混じっていない空気をゆるりと吐いた。

「そっだ」

この機会に姫宮の高校生活のことも聞いてみるか。

「青葉さん、姫宮のことなだけどさ」

窓から車外を眺めていた青葉さんがこちらを向く。

「あいつ元気でやってるのかな、高校で。ほら、あいつ編入だろ、クラスにとけこめてんのかなって」

この前、石動と姫宮と遊んだ時に聞いた話によれば、姫宮は今年の夏に外国から帰ってきていたらしい。それで途中編入という形で今通っている高校に入学したようなのだ。あいつの家庭事情に深く首を突っ込んだことはないが、突然海外に行ったり、そしてまたふいに母国に戻ったりと、精神的に大変だということはわかる気がした。私は、怖い。姫宮は元気だ。しかし、たまにその元気が心配になる。無理して、笑っているのではないかと。

「さつきは大丈夫。みんな、さつきが好き。男子にも、人気」

ぼつり、ぼつりと青葉さんが言う。思春期真っ盛りの少年たちにとつて誰にでも気さくに話しかけてくる、お姫様のような美少女は貴重な存在なのだろうか。一般的な男子といささか乖離した思考回路を持ち合わせている私には、知識としてしかそれを感じる事ができない。感じ方も歪んでいるかもしれない。けどそれでも、

「そっか、いらぬ心配だったな。教えてくれてサンキュ」

姫宮は上手くやっているようだ、という知識は感じたかった。浅からぬ因縁がある後輩。そいつが不幸だとしたら、私は落ち着いていられない。今日の出会いに感謝すべきだな。

「青葉さんはヒーロー部なんだよな。あいつ、編入してすぐ部活作ったのか？」

「うん。さつき、悩むより動くから、尊敬してる」

青葉さんがマフラーで口元を隠しながら、言った。雰囲気からして、微笑んでいたのかもしれない。つられるような形で私は口元を緩めた。

「あー、無鉄砲だからなあ。猪娘っていうか……そこがすげえんだけどさ。あ、これあいつには内緒な……恥ずかしいから」

あいにく、私は顔を隠すものを持ち合わせていないので、青葉さんに熱くなっている顔を見られないようにするために、窓に首を向けた。

「うん。ないしょ」

「悪いね、ほんと」

降り積もった雪の下から花が芽吹くように、私が眺める窓に、青葉さんの微笑みが映った。

第3話 客観の五分、主観は永遠

青葉さんと世間話を交わし、十分ほど車内で過ごす。風見堂が見えてきた。

タクシーが風見堂の傍で停車する。私は料金を払い、タクシーから降りた。私のあとから降りてきた青葉さんの顔色は、すっかりよくなっていた。疲労はなんとか回復したみたいだ。

そして私たちは風見堂の前に立った。

風見堂。私が師匠と共にいた頃に足しげく通っていた喫茶店。

一見しただけではただの渋い民家なのだが、玄関に設置された今日のランチ、現在実施中のキャンペーンなどが書いてある黒板がこれでもかと喫茶店感を演出している。屋根にはその名前の通り、風見鶏がいて、冬の風にくるくるとその身を任せていた。

私は玄関のドアに手をかけ、来店を知らせるベルを鳴らしながら店内に入った。ドアを押さえて青葉さんの中に入れ、私も奥へと進む。

「おや、ウチで会うのは久しぶりね。いらっしやい」

店の最奥にはコーヒークップやティーカップが飾られている棚があり、その棚の前に笑顔のマスターがいた。白髪をオールバックにしている、着ているのは燕尾服。まさに紳士という出で立ち。私のようなエセ紳士とは違い、重厚な趣がある。紫陽花のオヤジさんも実年齢よりだいぶ若く見える人だが、マスターはピンとした背筋、計算されているかのような華麗な食器磨きの動作など、別ベクトルで若く見える大人である。

ちなみにオヤジさんとマスターはアンティーク好きという趣味が一致していて、しょっちゅう互いの店を行き来する仲だ。私は、ゆえあって風見堂へ足を向けることを避けていたのだが、和花に宣言

したあの夜を越えて、私は一生懸命生きていくと決めた。

どんな過去も、少しずつ乗り越えなければならぬと思う。
そうしないと、誰かの過去を背負えないだろうから。

これはその一歩だ。

「姫宮たち、二階ですか？」

私はマスターに訊く。笑顔になるよう努力をしながら。

「うん、やっぱりあそこが好きだよ……褪せないのだろうね。

さて瑠璃くん、ブラックは飲めるようになったかい。ブルーマウンテン、良い豆が入ったんだ。この国じゃ珍しく、本物のね」

マスターはカウンターに移動しながら私に語りかける。

「じゃ、それいただきます。青葉さんはどうする？ コーヒー飲む？」

隣にいる青葉さんは少し考えるように眉を眉間によせ、

「……お砂糖、いれれば」

硬い口調でなにか重大な決意をするように言った。

そんな青葉さんの様子を見てか、マスターが、

「お嬢さん、無理しないで。ウチは紅茶もやっているよ。それも苦手ならレモンスカッシュでも作ろう。お酒以外の飲み物なら大抵扱っているからね」

風見堂は本当に何でも出てくる。ドクターペッパーは基本として、ルートビアも楽勝なのでわざわざ専門店に行かずとも摩訶不思議飲料たちを堪能することができる。師匠はそういうニッチな飲み物ばかり注文していた。仙人だからなのだろうか。

「お紅茶に、する」

もじもじと体を揺らしながら青葉さんがマスターに注文した。

「はい、どうもありがとう。美味しいの作るから、上で待っててね」注文の二品を作り始めたマスターの言葉に従い、私たちは二階に上がった。優しい曲調のクラシックが流されていて、昼下がりの今の時間にまどろむにはぴったりの場所だった。

そんなまどろみが充満している空間に、彼らがいた。壁際の六人

掛けのテーブルに姫宮とメリーと和花、そして全身を黒系統の色彩でコーディネートしている服を着た、黄色髪の少年が座って談笑している。

「あ、お兄様！　こちらですよー」

私に気づいた和花が手を振ってくれた。私たちはそそくさと彼らに近寄り、それぞれ空いている席に腰かける。

長方形のテーブルに対面するような形で三席ずつ配置されていたので、ちょうどヒーロー部と瑠璃家でわかれた。右端の席に座る私の隣にはメリーがいて、その奥に和花がいる。私の目の前には姫宮がいて、その右隣に黄色髪くんがいる。和花の前には青葉さんが座る形となった。こ、これがコンパというやつなのだろうか……みたいな座り方でなぜだか面白い。男女比が明らかにおかしいが。

「紹介しますね、この子は山吹光司やまふき こうじくんです。ウチの部における白一点です。けど、コードネームはイエロー」

姫宮の隣に座る少年が私に会釈してくれたので、私も返す。

「山吹です、普段はレッドとブルーの保護者をやってます」

彼のその一言に相当な苦勞が込められていることが初対面にしてわかった。猪突猛進娘と、ドジっ子を保護するのは生半可な覚悟では勤まるまい。

「えっと、俺の名前はもう聞いてるかな。苗字、込みで」

私は名乗る前に確認を取る。姫宮が紹介してくれていればいいのだが。

山吹くんは不思議そうな顔をしてこちらを見ていた。

「あれ、瑠璃さんて男だったんすか。女の先輩って姫から聞いてたんすけど」

よし、姫宮にはあとで説教することにして、今は視線を投げつけるだけしておく……。そんな怯えた顔をするなら最初からイタズラを仕込むんじゃないよ、お姫様。

「残念ながら男だよ。よろしく山吹くん」

「よろしくっす。いやははは。すみません、美人さんだなんて思っ

てました」

頭の後ろをかきながら快活に笑って山吹くんが言う。

「なんか喜んでいいのかよくわかんねーやそれ」

私も笑いながら答える。会話の雰囲気というか、声の大きさというか、コミュニケーション能力が高そうな印象だ。おそらく新天地をすぐさま故郷に変えてしまうようなタイプの子だろう。

「んで、これからのことなんだけど、みんなどこ行きたいか決まった？」

私が問うと、メリーが、

「カラオケが得票数多かったわよ。なんだか高校生らしいわよね」
こちらを見て微笑んだ。彼女はにんまりとしたまま話を続ける。

「遊園地とかテーマパークも出たけれど、せつかくだから色々な場所を回ろうって。紳士が格好つけて奢るなんて言い出すからみんな遠慮しちゃってたわ。私なら迷わず、最大効率で紳士を絞りにいくのだけど……」

「笑顔で恐ろしいこと言うな、悪女か」

「淑女よ」

両頬をつねられる。そのまま左右に頬が引つ張られ、横に伸ばされてゆく。

「いへへ……ひやなせ、ひやなせへりー」

私はメリーの両手を振りほどこうとするが、この淑女、怪力であるからして全くビクともしない。

「まあー、そんなわけでこの町を巡りましょ。まったく。心配かけた分だと思いなさいね。ほっぺで済ますなんて私ったら寛大過ぎでもう菩薩になれちゃうかもしれないわ」

「ごへんごへんへ」

メリーが寛大な菩薩様に殴り倒されてもおかしくない発言をしていると、マスターがやってきて、私と青葉さんが注文したものを持ってきてくれた。さすがにメリーもマスターが現れると手を放してくれたのだが、マスターになんだか生暖かい目で見られたのが気に

なってしまうがよい。

私はマスターが淹れてくれたブルーマウンテンをすすり、メリーに受けたダメージを癒す。ふと青葉さんの方に目をやるとマフラーを首元まで下げて、目を閉じながら紅茶を嗜んでいた。一口飲んで、ほう、と息を吐く仕草がとても様になっている。

「先輩、葵をたぶらかしたら先輩でも許しませんよ」

気管に流れ込もうとしていた液体を吹き出してしまいそうになった。手でふさいだは良いものの、手が少し濡れてしまう緊急事態発生。

「お兄様、はい！」

「ありがと……！」

和花がすかさずテーブルの上にあった紙ナプキンを取ってくれたので、ありがたくそれを受け取る。手と口を拭きながら私は姫宮を睨む。

「……花の女子高生様をこの禍々しいオーラを常時体から放ってる腐れ大学生がたぶらかさそうとするわけないだろ。てかお前が許したとしても国家が許さねえし。そもそも青葉さんが俺にたぶられるわけないっての」

姫宮は私の睨みを今度には意にも返さず、

「うふふふ……四年も経って、こういうのに免疫ないんですね」
とにやにやし始めた。こ、こいつ。

「瑠璃さんって純粹そうっすもんね、ほら、雰囲気、すれてないっというか」

山吹くんがフォローしてくれているが、それはフォローになっていない。

「……………るり、ここコーヒー……………」

青葉さんが自らの白い頬に指をうずめて、私にサインを送ってきた。

私はあわててそこを紙ナプキンで吹く。

「ついて、ないよ」

最近の高校生はほんとに恐ろしいよ……！

*

喫茶風見堂から出た私たちはカラオケへと向かう。

高校生トリオに圧倒された私は、和花の隣で怯えながら道を歩いている。メリーは山吹くんと話していて、姫宮は青葉さんに抱き着いたり、避けられたりを繰り返していた。

通行人とすれちがっても、誰も和花を不審な目で見ることはない。誰も彼女を人形だとは思わない。人とすれ違うたびに、まだ呪いの人形だった頃の感覚が抜けきっていないのか、私に体を寄せてくる和花。

前に思い描いていた、和花と外を歩くこと。

それがしだいに普通のことになっていく。

異常だった光景が日常に溶け込んでゆく。

和花が歩きたびに鳴っていた下駄の音は、今は聞こえない。

けれど、和花がシューズを履いていても私にはあの軽妙な音が聞こえるような気がする。

軽やかな和花の足取りは、見ているだけで微笑ましい。

「今日はいいお天気ですねえ。昨日は雲しかなくて物足りませんでした。やっぱりお日様は気持ちがいいものです」

そよ風のような和花の声。両腕を後ろに組んでメトロノームのようにゆっくり揺れている和花。そんな彼女の声がさらりと私の身体に染みていく。

「そうだな。俺さ、冬の晴れた日、けっこー好きなんだよ。風の冷たさと、太陽のあったかい感じが丁度良くて」

雲のない空から降ってくる陽光は私たちを隔たりなく照らし、活力を与える。

「なるほど。寒いのと、暖かいの両方味わえますものね。あ、そうです」

びた、と和花が私の手を触る。私の手はすっかり冬の空気に浸されていたので、血が通っていないのではないかと思えるほどに冷たい。それと対照に、和花の手はぬくもりに満ちていた。和花は体温が高い。一緒に布団にいと、つい彼女の方に体が向く。この前なんて、寝ぼけたメリーが和花から離れず、二時間ほど和花が起き上がれなくなっていたらしい。

「こうすれば、わたしがお日様になれます。あなたのお体、すぐに冷えてしまいますから」

そうやって笑う和花は、体温なんてなくても太陽くらいに輝かしいと思った。

出会ったときから和花はよく笑顔を浮かべる子だった。それ以外ないくらい。

あの夜を越えてから、彼女はどんどん、明るさを増していったように感じる。

嘘を付いている罪悪感から、本人の無意識が影を作っていたのかもしれない。

明るくなっているということは、和花は安心できているのか。そうだといい。

「ほんとは、こういうの、男が女の子を温めるはずなんだけどな。俺じゃ無理みたいだ。無駄に細くて、脂肪付きにくいからさ」

「ご心配なく。ちゃんと、あったかいですよ」
「え？ どうして」

「それは秘密です」
人差し指を口に当てて、おそらくその秘密以上に真剣な顔をする和花に、つい、笑いがこぼれる。今日はずいぶんと秘密が多い日だな。

そうこうしているとカラオケ店が入っているビルの前に着いた。狭いエレベーターに六人が無理矢理収まり、ビルの三階まで上がる。そしてぞろぞろとエレベーターから降り、カラオケに入店する。

小ぢんまりとした店内だが、私の記憶に残るカラオケのイメージとの差異が大きかった。内装がとても綺麗で、ホテルの廊下をそのまま持つてきたような空間である。もっと荒れ放題というか、ヤンキーの兄ちゃんたちがくる場所とばかり思っていたが、時代は移りゆくみたいだ。

姫宮たちがよく来る店ということで、慣れた場所特有の空気感がヒーロー部の三人から漂っている。そんな世間一般的高校生と違うのが、我らがドールズ。喫茶店ではカラオケよりもっと絞れるスポットを所望していたメリーときたら、カラオケの店内を見て目を輝かせていた。姫宮が受付のお兄さんとやりとりをしているのを横目で見ながら、私はメリーに声をかける。

「妙に落ち着きないな、もしかしてカラオケ初めてなのか？」

「そ、そうだけれど、なにか文句があるかしら……もうここから音楽が流れているのね」

メリーは店内に流れるロックに合わせるように、足でリズムを取っていた。そのリズムが金髪に伝わり、ポニーテールがねこじやらしに似た動きをしている。

「せんぱーい、二時間くらいでいいですかね、他もいきますし」

姫宮が私を呼んだ。

「ん、任せる。あ、ドリンクバーつけて」

「了解です！」

身振り手振りを交えて受付のお兄さんとコミュニケーションしている姫宮。三十秒ほど待つと手続きが終わったようで、部屋番号の書かれているであろう紙を見ながら駆け寄ってきた。

姫宮の案内で通された部屋は、六人ということもあって双葉荘より、上等な部屋に通された。つまり、広い。ここで暮らせるのではないだろうかという思考がよぎるほどに。

六人はそれぞれ黒い革張りのソファに座っていく。

「俺の知ってるカラオケじゃない……」

つい、呟いてしまう。

「わあ、なにやら上にまああるキラキラがありますよ」

立ち上がり背伸びをしてミラーボールに手を伸ばす和花。しかし、さすがに届かない。

「和花ちゃん、見てて」

山吹くんが部屋の照明を消して、ミラーボールのつまみをいじる。銀色の球体から部屋の四方八方に光彩が飛散し、天の川のような世界が出来あがった。

「け、絢爛っ！ 山吹さんったら絢爛です！」

「だろー？ 光りを名前に持つ俺にかかれば軽いもんさ！」

和花と山吹くんがはしゃぎあっていると、青葉さんが私に謎の装置を渡してきた。大きさはカーナビくらいか。タッチペンが付いていて、まるでゲーム機のような。それにしてはずっしりとした重さがあつて持ち運びには不便そう。私は謎の装置を膝の上に置く。

「なにこれ？」

私が青葉さんを見て尋ねると、青葉さんがぽかんと口を開けた、のがマフラーに隠れていない頬の動きでわかった。

「これで、曲。入れられる。知らない？」

「ええっ！ そ、そんな！ いやまったく知らんかった……」

国語辞典より分厚い紙のカタログしかしらない私の認識に革命が起きた。ぴぴぴとどこか可愛い音を立てながら、私は適当に電子カタログをいじってみる。色んな企画とか、ボイスチェンジャーまであるのか……若い子たちがカラオケに足しげく通う理由が分かったかもしれない。私の知るカラオケは純粋に歌うだけだったし、膨大な量のページをめくり、曲を探すがわずらわしいというものであっただけに、かなりの衝撃である。

「珍しいね」

耳元で青葉さんがささやく。彼女の声はささやきでさえ、素直に耳に入る。深夜にひとりで聞くラジオみたい。そう、そのパーソナリティのような包容力のある声をしている。

「先輩は天然記念物だから。この前なんてファミレスのドリンクバ

「も知らなかつたんだよ」

メリーと一緒に傍にやってきた姫宮が言う。無制限に飲料が飲める奇跡のメニュー、ドリンクバーを知ったのはつい先日のことだ。

「正直、これよりビビった」

私の前に立つメリーが私に憐みの視線を投げかけてくる。唇の端が震えてさえいる。

「えっと……紳士、今度のディナーはファミレスにしましょう。私がおごってもいいわよ」

「な、なんで？ ありがたいけど」

「いいのよ、ファミレスにいく相手、今ならいるでしょう？ 行きましよ、せつかくだし」

ぼん、と肩を叩かれた。メリー……いいやつ。

「さあさ、時間限られてるし、先輩、トップバッター頼みました！ 私の手にはマイクをねじ込んでくる姫宮。」

「た、頼まれるの？ 若い子らが先に歌った方がよくないか？」
「るり、るり。歌って、これ、歌って」

なぜかテンションの高い青葉さんが例の機械を差し出してきたので、それを受け取り、画面を見る。

そこには、

「被ラピっ！？」

私のデビュー曲だった。『被って！ ラピス ラズリ』通称、被ラピである。

「どうして青葉さん！ どうし……あ！」

今日の出来事を脳内で早戻しし、問題のシーンを再生する。それは銀行強盗事件解決直後の一幕。私の携帯電話が青葉さんの耳に移動し、彼女の鼓膜を揺らした声、やけにでかい声。そう、いまカラオケルームからこっそり出ようとしている赤いロングの女子高生。

「その馬鹿宮！ ちょっとお話があります！」

「みんなの飲み物とつてきますー！」

私が言葉を飛ばしたのと全く同タイミングで姫宮が部屋から出て

いった。

それからのことは、羞恥と色々な感情がごちゃ混ぜになって、鮮明には憶えていない。子供の頃ならまだしも、成人した状態である歌を歌うのは不味い、と青葉さんに交渉するも、

「シャイニング。ルリカ。二人とも、私のヒーロー」

と潤んだ瞳で言われて、気持ちに応えようと思えないヒーローはヒーローではない。

そう、私は歌ったのだ。デンモクで曲を初めて入れ、デビュー曲を熱唱したのである。腹の底から声を出して、薄い壁から自分の声が隣室に漏れることもいとわず、女兒向けアニメの主題歌を。今でも私を慕ってくれている、少女のために。そして、私に無限の希望を生み出す可能性を与えてくれている一要素、『ルリカ』で居続けることを全うするために。

歌詞も、リズムも、音程も、リクエストされたダンスもオールパーフェクトに。

後輩の友達と、自分の同居人たちが見守る中で『ルリカ復活祭』は密やかに、カラオケの店内で行われた。私はドーム公演も経験していたが、アレは規模が違い過ぎて逆に緊張などぶっ飛んでいく、頭が真っ白になる、興奮だけになる。ファンを喜ばせたい、失敗したくないという強い気持ちを持てば、それを燃料に何時間でも動けるのだ。

しかし、このカラオケの一室、そして久しぶりの絶唱は簡単にはこなせない。

胸が軋み、冷や汗と汗の混合物が肌をなでていく。顔面がサウナの焼石のようになる。声が震える。言うなれば絶不調のコンディションだ。だがそれでも、元プロの意地がある。経験がある。記憶を呼び出し、トレースし、当時を再現する。約五分間が永遠に感じる。

山吹くんの熱いコールが聞こえる。

和花の愛らしい手拍子が弾ける。

メリーのにやけ面が見える。

姫宮のタンバリンが歌と絡み合う。

青葉さんの真剣なまなざしが注がれる。

私もノリに乗ってくる。

約一名を除いて最高のお客様たちだ！

笑顔が自然に出てくる、体のキレが増していくのが分かる。

Cメロを過ぎて、最後のサビに差し掛かる。

そこで溜めこんでいた声量を一気に爆発させる。盛り上がりを高潮にする。

「カンペキ祓除はらひでもう平気！」

「へいきー！」 姫宮と山吹くんが飛び跳ねる。

「悪霊たちすらメロメロさ！」

「めろめろーっ！」

「送り出しちゃう三途まで！」

「りばーっ！」

「祓って祓うよ！ ルリカちゃん」

膨張した盛り上がりの空気が沸点に達して、曲の終わりに空間を割るような感触がした。それはパズルの最後のピースをはめた感覚に近い。やりきった。ここちよい疲労感と数年ぶりの達成感が、体と心に湧いてくる。

「るり」

青葉さんが近づいてきた。

フルコーラス歌って踊ったので、息切れにみまわれ、青葉さんに返事ができない。下を向きそうな首を、なんとか青葉さんの顔が見えるように引つ張り上げる。

「ん？」

「すぐくかつこよかった。握手、して」

そつと差し出された青葉さんの手。抽選一名の特別握手会だ。

「へ、へへ、サンキュー」

私は青葉さんと握手し、ソファに腰かけた。姫宮が持ってきてくれたウーロン茶を一気に飲み干す。五臓六腑が元気になる。

全力を出し切った私は、あとのことを若い者に任せることにした。山吹くんは流行のバンドの歌を、姫宮はもちろん特撮熱血系、メリーは洋楽、和花はマイクを物珍しげに扱いながら渋く演歌を歌った。全員歌うジャンルが異なるバラエティに富んだカラオケとなっていて、曲調が変わったり盛り上げ役が二人いたりして飽きも来ず、二時間があつという間に過ぎていった。

第4話　もとは魔除けの鉄球遊戯

カラオケから出た私たちは、次の遊戯スポット、ボウリング場に向かった。未成年な高校生が健全に遊ぶスポットは限られてくるのである。それだけに、今だけしか味わえない心の機微があるのだろうと思う。そういった狭い世界で遊ぶことを知ることは、いざ広い世界で遊ぶときに自らの視野が拡張していくのを感じるためにあるのかもしれない。

ボウリング場に着いた私たちは1ゲーム遊ぶことにした。それぞれ扱いやすいボールをセレクトし、指定されたレーンに行く。

私はメンバー全員の名前が表示されたモニタに一度視線をやつて、最初の投球をする青葉さんを見守る。スマートなフォームの投球は十本のピンの元へすると吸い込まれていき、見事ストライクを獲得した。五人の歓声上がる。それでも当人だけは大きな声を上げることなく、あくまでクールに席まで戻ってくる。

「ナイスストライク」

「うん」

私が声をかけると、彼女の双眸がにこりと笑ってくれた。青葉さんは私がカラオケで歌を披露してからちよつとだけ、私に対して親しくなってくれたかもしれない。アイドルをやっついてよかった。と、何年もあとになって思えるとは。人生は過去から逃げられるようには設計されていないんだな。良くも、悪くも。青葉さんとの静かなハイタッチはもちろん、良くもに分類される。

「次は俺っすね」

山吹くんがボールを持って投球場所に立ち、目標めがけて転がす。保護者的立場に毎日立たされている彼のフォームは休日、娘たちと共に遊びに来ているかのような落ち着きがあった。その安定した投

球がガーターになることはなく、手堅くスピアを取っていった。

「ちよつとまつて、なんで二人ともカツコよく決めちゃうの！ 私
プレッシャーすごいよ！」

三番手姫宮が動揺しながら投球に入る。そこから誰もが予想するのは彼女の投球の結果。ストライクか、微妙な本数か、奥の二ピンだけを残しスプリットになってしまつか、はたまたガーターか。きつと姫宮以外の全員がそのことを頭の隅や中央あたりで考えていただろう。私もそうだ。結果しか予想していなかった。

「そおりゃー！」

まさかサイドスローするとは予想できなかったのである。過程は誰も予想しない。

まるで、モーニングスターのように飛ばされていくボウリングの球。彼は生まれてこの方、地面を転がる感触を熟知して生きてきたはずだ。空を飛ぶ日が来るとは、夢にも思わなかったことだろう。未知なる空。言葉の響きだけは綺麗なものだ。

レーンすれすれを低空飛行するようにしてピンに近づいていく。球速は衰えない。このままでは、ピンが倒れるは良いものの、そのままボールが吸い込まれていく場所を破壊し、多額の弁償金が発生する事態に！

「……つて、あれ？」

「止まった、わね」

メリーが端的に事実を述べた。

ボールはピンの目の前で減速、というか静止した。つまりほんの一瞬、宙に浮いたのである。ふいに翼をもがれたようにレーンに落とされたボール君は余力で転がり、パタパタとピンをすべて倒して闇に消えた。均一に放心している五人が、仁王立ちする姫宮に視線を送っている。

「ふっふっふ、びつくりしました？ たくさん修行して、いろいろ出来るようになったんですよ。師匠や瑠璃先輩には遠く及びませんけど」

てへへ、と舌を出して笑う姫宮。私は、言葉を紡ごうにも、言葉が出てこず固まる。

「凍結紳士。彼女、万能型ね。二つ三つ……くらい使っていたかしら。才能あるじゃないの」

隣で紙コップに入ったコーラをストローで飲んでいたメリーが話す。相変わらず、その些細な挙動さえ絵になる。そして、よく見ている。

「赤い髪は伊達じゃないってことかね。どっかの国民的配管工みたいだよ、お前の万能性」

「おじさんと一緒にしないでください！ あの人もヒーローっちゃヒーローですけど……」

「ヒーローにしちゃ、毎回、姫さらわれてっけどな。お前は気をつけるよ」

「え、それは、あの、私に対しての心配だったり？ 悪者に誘拐されないようにって？」

「そっちじゃねえよ、桃の姫さんの方だ。お前は、姫を守る方だろ、キャラ的に」

「それはそうですね、そうありたいですけどおー……はあ
ふてくされた顔をして席に戻った姫宮。

四人目は和花だ。高い学習能力を持っている和花にいまさら説明はいらないかもしれないが、一応全体のルールと基本的な投げ方を教える。

「……それにしても意外です」

和花が抱えたボールを手のひらで撫でながら言う。空調の風に黒髪がそよいでいる。

「ん、なにが」

「ぼつりんぐは悪魔を祓ったり、災いを遠ざけたりする儀式なのだと昔聞いていましたので、まさかこんな楽しそうなものだとは。百聞は一見にしかずですね」

和花が投げる。七本倒れた。

「すつらいく……」

悔しそうに自分のボールをとぼとぼとした足取りで回収しに行く和花。私も席に戻る。

「あいつら倒せればスペアだぞ」

「はい、頑張ります。コツはつかめましたので！」

意気込む和花を見送りながら、私の脳裏に進行形で蘇るエピソード。

「お被いストライクキャンペーン。ストラップ、欲しかった」

まるで私の頭の中を見透かしたように、青葉さんが言う。私は頬が熱くなるのを感じた。

「知ってるか、ちよつと、照れるな。でも青葉さんはリアルタイム世代じゃないもん、キャンペーンには参加できなかったか。できたら、会ってただろうし」

「うん」

爽やか熱血オカルトアニメと度々称される私主演のアニメ『霊媒少女ルリカ』は数年前、敷かれたレールの上を走る電車のように、売り上げ好成绩街道をばく進していた。その人気を利用しない父ではない。お被いを起源にしたスポーツ、ボウリングに父は目を付けたのだ。

スポーツ複合施設の中から幸運を勝ち取った一社と武鎧が手を組み、『小学生以下のお子様^{さん}に霊媒少女ルリカ人気キャラクターのストラップをプレゼント！』というキャンペーンを期間限定で始めたその期間中、一店舗一度きり、『みんなで被除タイム』というイベントが設けられ、そのイベント時の投球でストライクを取ると……私と握手し、サインを貰うことができる。

現在の私では考えられない価値が、当時の私の手のひらにはあったようである。

その実感はとうに薄れていて、あの頃より大きくなった手を眺める。

大きくなった私の手は、未来に何を作るだろう。

カココン。和花がスペアを取る音がした。

「わあ！ すぺあ、やったっ」

バンザイして喜びを口にした和花。五人分の歓声が和花を包む。アイドルの時のような価値はなくとも、この歓喜の瞬間を生み出したのは私の手、そして彼女の意思だ。

素直に、この現在を楽しもう。

「次、メリーちゃんだろ、はい」

山吹くんがボールをメリーに手渡す。

「あら、ありがとう」

それだけ言っつて、メリーは席から動かない。

「投げないの？ 疲れちゃった？」

「ううん、そうじゃないわ。あのね、私は魔法少女なのよ、だからメリーの手からボールが消える。「魔法が使えるの」

十本すべてのピンを、彼女の魔法がなぎ倒した。ボールはほんの一秒でレーンの終わりに転移していたのである。

「おいおい存在レベルとか気にしないでいいのか」

知名度のメリー語バージョンである存在レベル。それを気にして日中は超能力を野外で使うことを避けていたのではなかったか。あたりまえだが、周りのレーンのお客さんは、何が起きたのかわからないという顔をしてメリーと私たちのレーンを交互に見ていた。

「いーのよ。あれからもう一か月近く経ってるのよ。それにもう、公園で寝ることもないでしょうし」

「そうか」

公園よりは私の家がお気に召しているようだ。つい顔がにやけてしまう。

「す、すっげ……メリーちゃんも超能力者なんか……もしかして……」

山吹くんが驚嘆の声を上げて、私を見る。

「ん、俺もヘンテコ側だよ。あと和花も」

「はー！ 類は友を呼ぶんすね……もうこの面子で超能力戦隊組め

るじゃないっすか」

「はは！ 男女比がまるで逆だけだな。これじゃ男の子は見てくれないな」

「それだああああ！ それですよ先輩！」

姫宮が脈絡もなしに私と山吹くんの会話に武力介入レベルの激しい割り込みをしてきた。他のレーンにいますお客さんの視線が赤髪の少女に注がれているのだが、少女は一切意に反さない。かなり豪胆である。

「ど、どした姫」山吹くんは椅子からずり落ちそうな勢いだ。

姫宮はそんな山吹くんに向けて二カツつと笑うと、

「先輩、和花ちゃん、メリーさん。ヒーロー部、外部部員として入ってみませんか？ 三人戦隊もいいですけど、やっぱり大人数は憧れます。そうすればいつか現れる諸悪の根源にもきつと立ち向かえます！」

情熱的な部活動勧誘をしてきた。まるでライオンが間近で吠えているような、ものすごい迫力だ。

「ボランティア部が立ち向かう諸悪の根源ってなんだよ……」

私が迫力に押されながら姫宮に問うと、姫宮はばつの悪そうな顔をして、

「それは、まあ、なんとというか……いると言えばいるんですけど……いまいち悪じゃないしな……ま、細かいことは置いといてっ、こっちは遊んで遊んだのも縁ですよ。ヒーロー部はいつつも入部を生徒に募ってるんですけど、いまいち集まりが悪くて……」

活動内容がボランティアなのはいいとして、名前がヒーロー部ではあらぬ勘違いをして、ただの特撮同好会と思われるのではないだろうか。しかし、姫宮が？ ヒーロー？ に対してこだわり、もしくはそれさえ越える心情を抱えていることを知っているの、改名しろとは言わない。ボランティアだけがしたかったら、こいつはボランティア部を素直に立ち上げたはずだ。そういう分別だけは、馬鹿じゃない。

「ほら途中で新メンバー加入ってかなり燃える展開じゃないですか、燃えますよね。私は燃えたぎりです。なのでどうかなっ。三人がよければいいんですけど」

姫宮は和花とメリーの方に視線を向けつつ、話を続けた。

そんな姫宮に対し、律儀に挙手をして発言権を貰おうとする子がいた。

「ハイ、和花ちゃん！」

姫宮は教師チックに和花に声をかける。それに応じ、和花がひよこつと椅子から立ち上がる。なんだこれは、いきなりポウリング場が教室に見えてきたぞ。元休講貴族の血が、授業に対する拒否反応で騒ぎだしている。

「あの、ヒーロー部ってお掃除するんですよ。わたし、まえから一度本格的にお掃除の勉強を試みて……入部、してみたいです」

「ほんとっ！ もちろんできるよ！ まず間違いなく、この町のゴミの分別方式は暗記することになるよ。スパルタで教えてあげるから、そこは覚悟ね！ せんぱいつ、間違えるたびに、私、和花ちゃんハグしていいですか！」

姫宮が私に期待の視線を投げかけてきた。

「お前は色々と思っただけで先走り過ぎてる、なんかもー……いつそ清々しい。許可する」

「やったあ！」

「おにいしゃまっ！」

盛大にろれつの廻っていない和花が目元に涙を浮かべている。それはもう、保護欲をそえられるどこの騒ぎではなく、脳みその奥底から保護欲がドバドバ出た。

「すまんすまん。頭いい和花なら、間違えないと思っただからさ。ごめんな」

「もー、そんなことありませんのに……心臓にすこぶる悪いですよ」
頬を膨らます和花をほんわかとした気持で眺めていると、

「私メリー、今あなたの後ろにいるわ」

いつのまにか首もとに鉄を添えられ、命が危うくなっていた。

「め、メリー、どして……」

首を可能な限り曲げて、メリーの顔を見る。さらさらの金髪が私の顔にあたる距離に、メリーの細面があった。

「失礼、和花さんを泣かせるようなことしたら滅殺するよう、番頭さんに言われているのよ……体が無意識に瑠璃をキルしに……我ながら自分の戦闘スキルが恐ろしいわ……」

番頭さんとは、双葉荘から徒歩三分の距離にある銭湯、『華の湯』の看板娘である。メリーは彼女のことをなぜだか慕っている。その忠誠心が研ぎ澄まされた凶器に変わっているのだ。

「あ、この鉄、モデルハサミだから安心してちょうだい。プラスチックよ」

カチャカチャと私の首もとで鉄をいじるメリー。モデルハサミってなんだ……。

メリーは私の首もとから鉄を離し、姫宮に顔を向けた。

「皇月さん、私も入部するわ。公園には私も長い間お世話になったから、恩返しがしたいの」

「わあ！ ありがとうメリーさん！ 葵、光司！ 新入部員ゲットだぜー！ ひゃ っ！」

天井知らずのハイテンションで、青葉さんと山吹くんに立て続けにハイタッチする姫宮。

「でも、ふたりともお前の学校に通ってるわけじゃないのに良いのか？ 外部の部員って」

私は、自分の言葉になにか引つ掛かりを感じた。

それは私の胸をちくりと刺し、消えない。

和花もメリーも、学校に通いたい気持ちとか、あるのだろうか。

私は海尋の創造した世界、『I - d e a ^{イデア}』内の高校で、メリーが工藤さんに学校案内を頼んでいたのを思い出した。学校を歩いている間、どこか楽しそうだった魔法少女のことを。

「大丈夫つす。書類なんてなくたって、私が入部を認めれば、今日からヒーロー部です。あとは行動あるのみ、ヒーロー目指すのみ。たったそれだけです」

「そうか……うん、良いと思う」

私の六畳間以外を、和花が知覚できる機会が増える。

学校に思い入れがありそうなメリーが、学生活動に参加できる。

そして本人たちがやる気。否定する理由など、どこにもない。

「瑠璃先輩も入部します？　むふふ、そしたら先輩後輩関係が逆転しますけど」

姫宮は青葉さんと両手を繋ぎながら、私を見てきた。

「もちろん。このメンバーで保護者が山吹くんだけじゃ気の毒だ。

俺も一緒に行くさ。よろしくな、姫宮先輩」

私は姫宮に微笑む。いいきっかけをくれた、猪少女に。

「る……やっぱ却下です。先輩を呼び捨てすんのって、ちょっと難しいです。なんで、これからも先輩として頼みますね」

姫宮が私に近寄り、片手を差し出してきたので、私はそれに応じる。

ここに、記念すべきヒーロー部入部の誓いがなされた。

メリーと和花も、姫宮と握手を交わす。

まさに、ボウリング場で姫と握手！　という風に。

第5話 例外の素養と、恒久の安息

カラオケとボウリングをハシゴするという若々しい行為を通してわかったことは、確実に、翌日筋肉痛になるということ。つい先日、全身筋肉痛で入院したばかりだというのに少々、私は筋肉を痛めすぎているかもしれない。痛めても一向に太くならない腕は、自分が男らしく生きていくことの難しさを無言で、しかし雄弁に語る。

ボウリング場を後にすると、すっかり夜になっていた。

私たちは遊びの終わりに、骨董屋「紫陽花」^{あじさい}に立ち寄ることにした。シャイニンガーが好きな青葉さんを見て、ひとつ思い出したことがあったのだ。きっと、彼女が喜ぶであろう情報だ。

紫陽花のドアを開けて、ほの暗い店内を覗き込むと、カウンターの中でオヤジさんが新聞を読みながら煙草をくゆらせていた。

「おう、兄ちゃん。こりゃまたえれえ大所帯だな」

こちらに手を振るオヤジさんに私は笑顔で応じる。

「たぶん最高記録ですね」

「だな。まあ、適当に見てけよ。掃除終わったから幾分か小ギレイだぜ」

「そいえば、あんま埃つぽくないっすね」

「はっは、ふだん売り物の管理にかまけてサボってっからなあ。返す言葉もねえ」

店内に五人を案内する。紫陽花が繁盛している風に見える時が来るなんて。など冗談でも言ったら全力のげんこつが降ってきそうなので、早急に要件を告げることにする。

「オヤジさん、実はこの子がシャイニンガー好きらしくて、たしか、ありましたよね」

私がオヤジさんに話を通すと、倉庫の方へオヤジさんが歩いて行った。五分ほど待っていると、目当ての品をもってオヤジさんが私たちの傍へと帰ってきた。

「ほれ、これだろ」

「シャイニンガントレット……」

オヤジさんのフェロモンに吸い寄せられるかのように、ふらふらと青葉さんがオヤジさんの元に近づいていく。実際はフェロモンに吸い寄せられているのではなく、オヤジさんの腕の中にあるもの。シャイニンガーの腕に惹かれているのだが。

「触るか？ あんまり買い手がつかねえもんだから、カビてつかもしれねえけど」

「こ、これ。どうして。非売品」

青葉さんはオヤジさんからガントレットを受け取り、しどろもどろに話す。

「それな、主役が爆発するシーンで使われて、バラバラになったスーツの一部なんだと。お得意さんにテレビ関係者がいてよ、それで貰ったってえわけだ」

「すごい。第三十六話、暁に散る。そのときの」

すらすらと該当話数を言い当てる青葉さん。シャイニンガーへの愛が本格派だというのをより感じる事ができた。

「ああ、俺は詳しくねえが、嬢ちゃんが言っんならそうだろうな。」

持ち方、扱い、どれとっても嬢ちゃんがソイツを特別に思ってることとがわかるぜ」

「あの。いくら？」

青葉さんに問われ、オヤジさんは顎に手をやる。

「おお、買いてえのか。んー……少なくともあの赤いのと年代の子が買える値段じゃねえな。嬢ちゃん、学生だろ？」

私の隣にいる赤いのは、青葉さんを気遣うような目で見ています。

しゅんとしながら、青葉さんがうなずく。ポソリと、私の家、という言葉が聞き取れた。

「バイト禁止……」

「あー……そりゃ……。ま、これまで誰も買わなかったんだ。嬢ちやんが大人になっても俺の店がやってたら、そんなときにゃ、ばつちし売ってやるよ。だから、んな寂しそうな顔、せんでもいい。な？」
オヤジさんはうなだれる青葉さんの頭を豪快になでる。けれど、その手つきは乱暴ではなく、温かい乱雑さが宿っているように見えた。

「……うん。おじさま、ありがとう」

青葉さんがオヤジさんを見上げる。

「おじさまっ？ よせやい、ガラじゃねえ。俺はただの商売人。ほんとに優しいおじさまなら、そいつを嬢ちゃんにプレゼントしてるさ」

オヤジさんが居心地の悪そうにバンドナを巻いた頭をさすっている。照れているオヤジさんを見れるなんて……これも言ったら殴られそうなのでやめておく。

用を終えた私たちは、もう少し夜が更けるまで紫陽花で時間をつぶすことにした。

女子メンバーたちは、民族チックな人形が置いてあるエリアでかしましあっているの、私は彫細工の美しい家具を眺めることにした。

いつか買いたいと思って目をつけている箆笥ちゃんがいるのだが、あの双葉荘の部屋にこれ以上家具を増やすと、生活エリアが狭せままってしまつて、あまり具合がよくない。ゆえに、いつもこころして僅かな逢瀬を交わしあっているだけなのだ。三人暮らしになったのだから、引越しも考えるべきだろうか。

「瑠璃さん」

私が瑠璃家の財政会議を脳内で開いていると、ふいに山吹くんに声をかけられる。

「おお、どした？」

山吹くんは私の隣まで来て、箆笥ちゃんに触れる。

「さすがにあの女の子ゾーンには居づらいっす」

「はは、そうだよなあ。けど……いつもはどうしてるんだ？ 他の男子メンバーとかいたりするの？」

「いません。ヒーロー部はここにいるので全メンバーです。まあ、姫は気さく過ぎて緊張しないし、青は物静かで一緒にいて辛くないっすから。なんとかやってる……って感じです。なんとかっつーか、楽しくやってますけど」

へへ、と鼻の頭をかいて笑う山吹くんは、フランクな爽やかさを店内に振りまいている。男から見てもカッコいい造形の顔、体型、そして柔らかい人柄。

「モテそうだよな、山吹くん」

私が微笑むと、彼は顔をにわかになくして、顔の前で手を振った。「いんや全然っす！ それに、いまは保護者だったり、会計やったりももろもろでキャパが一杯で……第一、すきとかよくわかんねーっすもん」

男の子だなあ、と思う。高校一年生でこんなにしっかりしているのだから、心の余裕が出来たら、もっと深みのある男の子になるに違いない。そうなったら姫宮か、青葉さんと交際したりもするのだろうか。恋愛。人を愛せない私には遠いおとぎ話。どぎまぎしている山吹くんを、私はどこか、物語の登場人物を俯瞰するような目で見てしまっていた。

「変なこと訊いて悪い。キミのペースで分かっっていけばいいと思う。つっても、そういう人生経験が皆無な奴から言われても微妙か」

私が言うと、

「瑠璃さんは不思議っす」

山吹くんが真っ直ぐ私を見ながらいう。

「そ、そう？」

「男とは思えないっすよ、あ、もち良い意味っす。やっぱり大人だからっすかね……。ほら、青のこと、すごく自然に気い遣ってくれるじゃないっすか。それが嬉しいんす。学校の男どもは、あの二人

を見る目つき、なーんか粘っこいんで嫌なんですよ。ミエミエっ
ーか……」

粘着質のある目つきは過去に経験しているので、彼らの学校生活の様子がおぼろげに頭に浮かんだ。友達がそういう目で見られているのはスツとしない、そういうのもあるだろう。現に、私は和花が着物をタダでクリーニングしてもらったために写真を提供した時、似たような感情を覚えた。

キミの感情は嫉妬？ 恋慕？

私の頭に浮かぶ熟語はどれもきつと正しくはない。

私は、そういう感情を表す言葉を知らないから。受理したことがなかったから。

小さい頃から大好きなアリスへの愛は、そういう愛かと問われて私はうなずくのか。私の持っている愛とはなんなのだろう。やはり私は、歳だけとって、大人になりきれしていない。脱皮しきれしていない。捻じ曲がったまま、実に中途半端だ。けれど、

「どんなに粘ついた目で見られてもね、そうじゃない目で見えてくれる人がいたら安心するもんだよ。俺も、ほら、曲がりなりにもアイドルだったからさ。まいった時もあった。そんなときに、優しい例外がいてくれるとホッとできたんだ。姫宮とか青葉さんも、そんなじゃないかな」

逃げきることのできない視線が体に刺さっていた頃、私の心を癒したのはアリスだった、不思議軍団のみんなだった。その優しさに感謝する気持ちを愛というなら、私は彼らを愛しているんだと思う。

「優しい例外っすか……」

ふーむ、と息をついて腕を組んでいる山吹くん。

「俺、なれますかね？」

真面目な顔で訊く彼に、

「素養はあると思うよ」

私は彼の背中を叩いて応じた。私の言葉で真面目に悩む時点で、キミは充分優しい。

紫陽花でオヤジさんの手料理を御馳走になった私たちは丁重にお礼を言い、店を出た。

六人で道路を歩く。空は紺色。ぽつぽつと星が見える。人影は少なく、まるで動物が巣穴に潜って冬眠の準備を終えた後の森のように吐く息はすべからく真っ白になる。私は思う存分遊んだ充足感が体に満ちているのを確かめるように、ぐつ、と握り拳をつくった。

この、体が自然に浮ついてしまう気持ちを逃がしてしまわないように。

私たちは親睦を深める最終段階、銭湯をめざしていた。主に女子陣からの希望と、私の家に風呂がないことが合わさり生じた、本日のゴール地点である。ボウリングやカラオケの熱唱で汗をずいぶんかいていた私は今すぐにもサツパリしたく、早足になる。

華の湯の暖簾をくぐり、入り口で男女が分別された。私は山吹くんと脱衣所へと進んでいく。分別先には、

「どもつす、番頭さん」

「おお！ アンタか、いらっしやい！」

恒星のような明るさを放つ番頭さんがいた。

「おお、初見のお連れさんまで」

「こつ、こんばんは」

山吹くんが番頭さんの出現にとまどっている。うつむ、やはり男の子だ。

「こんばんはー、ゆっくりしてけよな」

なんだか番頭さんの様子が普段と違う。妙に上機嫌だ。なにしろ私に対しての開幕イジリがないし、いつもはガラガラとしているツリ目が鋭さを失くしていた。私は料金を渡しながら、番頭さんに話しかける。

「どしたんすか、なんか、違和感バリンバリンですよ」

「へっへへー。アタシは運を使い果たしたかもしれない……見ろっ！」
番頭さんは猫みたいに愛くるしい笑顔のまま、両手になにか紙をもって、私の目の前に突き出してきた。

「……試作アンドロイド発表イベント」紙はどうやら招待状のようだった。番頭さんが抽選に当たったことを知らせる記述と「武鎧重工主催、ですか」よく知っている名前が書いてあった。動揺を顔に出さないよう努める。

「すんげーだろー。ハズレてもいいやって応募したら当たったんだよなー。無欲の勝利ってやつかい。これのせいで年甲斐もなく朝からずつと上機嫌ってわけさ。まだまだガキだね、アタシ」

ふうー、と満足げに溜息を吐く番頭さん。幸せ、と顔に書いてあるようにすら見える。

「そんでさ、アンタ、メルアド教えるよ。アンタには世話になったし……ほら、ここ以外でも会いたいつーか、駄目か？」

急にしおらしい態度になった番頭さんが、招待状と入れ替わる様に、私に顔を近づけてくる。するどい目がにわかには潤んでいる。

「え、そ、そんな、なんで突然。ここで毎日話してるじゃないですか」

番頭さんの思いもよらぬコミュニケーションに揺れる私の心。

「だあーもー……察しわりいな……アタシはさ、ただ………あ、だーめだ。くくく、泣く演技しようにも、嬉しくって口がにやけちまっつて無理だーっはっは！」

屈託なく笑って、べしべしと私の頭を叩いてくる。

「そんなこつたるうと思いましたよー！」

「瑠璃さんが手玉に……あ」

しまった、という風に山吹くんが口に手を当てた。番頭さんが唇を突きだす。

「アンタ、るりってんだ。つか何年も通ってくれてるアンタの名前知らねえって……」

目をつむって眉間に皺を寄せる番頭さん。それは私が名乗らないようにしていたからである。けれど、死ぬことをやめ、過去と向き合うことを決めた今となっては、隠すことの不自然さの方が身に重たい。海尋にさえまだ、苗字も名前も教えていないのだ。今度会ったら話そう。

私は山吹くんを目配せで気にするな、という意思を伝え、
「いいじゃないですか、知れたんですから。大事なものはこれからっすよ」

笑って見せた。

「なんつーか、毒気抜けたな、アンタ。あの子らのおかげかい？
あ、いま皆かなりキワド」

「「実況しなくていいです！」」

私と山吹くんの一秒のずれもないシンクロボイスである。

「あはは、嘘だつーの。アタシがチケット見せびらかしてる間にそそくさ入ってたよ。わりいな、ひきとめちまって。あの子らの方が風呂上がるの遅いだろうから時間調節してやろうと思ってよ」

「ほんとっすかそれ……」

私はがくりと肩を落とす。

「へへ、どうだろうな。っと、冗談は置いて二人ともメル友になろーぜ。同年代のお客さん珍しいんだわ」

「たしかに常連さんは年配の人が多いつすもんね」

「うん。年上もいいけど、話合うのってやっぱ同年代なんだよ。大学じゃ男友達もなんでかできないし……ほんとなんでかね、女の子には困ってないんだがなあ。アタシ性格が荒いからかなー」

番頭さんは男気と姉御肌が混然一体となったような人なので、女の子に好かれるのも納得である。逆に男はその気高い精神に気後れしてしまうのかもしれない。私は精神構造の事情が特殊なので、そんなことはない。山吹くんはしっかりモジモジしている。

私たち三人は携帯の電話帳を交換し合った。番頭さんの本名は、
鷺崎華わしきはなというようだ。強さと華やかさを兼ね備えている番頭さんら

しい名前であった。

「っ……ふうむ。そうかそうか、なるほど……」番頭さんは携帯を片手に、もう片方の手で自分の唇に親指を当てていた。「アドレスさんきゅ、瑠璃、山吹」そして私たちに笑いかける。

「はい、華さん」

「よ、よろしくっす」

私は本名を彼女に送った。華さんを信じていたから。この人なら、事実の先まで理解してくれるだろうと。その信頼はやはり正しかった。

「おう！　じゃ、また風呂から上がったらな。骨の髄まで温まっ
こい」

私と山吹くんは華さんに送り出され、風呂に入った。

酷使した体に、お湯の温かさが浸透していく。

これだから冬場の銭湯はたまらない。凍りそうな体を一気に弛緩させてくれる。

私は緊張して鳥肌が立っていた腕をさする。もう、鳥肌は立っていない。

このお湯と、華さんの言葉は、いつだって安息を私にくれるのだ。

第6話 さすがお嬢様、機知に富んでいらっしやる

高校生トリオとは華の湯の入り口で別れ、私たち双葉組は六畳間への帰路についていた。時刻は午後九時。メリーが風呂上がりだから髪を解いていて、くせつ毛がびよんびよんと跳ねていたり、渦を巻いていたりしている。髪を下ろすと、幾分か大人っぽい。

和花はなにか考え込むようにして、自分の手のひらに文字を書くようなしぐさを繰り返している。いったいどうしたのだろう。

気の知れたもの同士の心地よい沈黙に包まれながら、道路を歩く。三人分の足音がする。ふいにメリーがハミングを始めた。それは例の私のデビュー曲だった。一番のサビまでメリーが奏で終わった頃には双葉荘の前についていた。

「いい歌だったわ、キャッチーで」

「子供番組の歌だからな。覚えやすくないと」

ドアに鍵を差して、開ける。窓からの隙間風のせいでも、部屋が外よりずっと温かいということはなかったが、やはり外よりは中の方が落ち着く。メリーと和花を入れてから、室内に入った。

鞆を降ろし、畳の上に胡坐をかく。二人が洗面所で手を洗っている水音が聞こえる。先ほど歩いているときに携帯が震えていたのでチェックしてみる。華さんからメールだ。

今日はありがとな、名前。アンタが名乗らねーから、アタシもタイミング逃してたよ。そんで、本題なんだけど、例のアンドロイド発表会、五人まで行けるんだと。よかつたら一緒に行かねーか？

和花ちゃん好きだろ、こういうの。年明けになっちまうけど、大学まだ休みだし。誘いたいやつ他にいたら誘ってもいいぞ

絵文字も顔文字も一切ない所が、華さんらしい、と思いながらメールを読んだ。

手洗い等をすませて和花がやってきたので手招きする。和花は、すたと私の隣に座った。

「なんですか？」

「番頭さんからメールが来たんだけど、ほら、俺の実家、武鎧重工主催のアンドロイド発表会こないかだってさ。和花、どうする？」

「行きます、ぜひとも」

「おお……即答だな」私は口をぽかりと開けたままになる。

「お兄様のご実家のお仕事ですからね。それはもう拝見したいです」
ふんふん、とうなずきながら和花が言う。その様子に、私はつい破顔してしまう。

「メリー、キミも来るだろ？ 番頭さんと出かけるなんて滅多にないぞ、かなりレアだ」

台所でマグカップを手に持っているメリーに話しかける。ココアの甘い香りが鼻に届く。メリーは優雅にココアを一口飲んで、

「愚問よ。華さんからの招待を断るわけがないわ」

なぜか誇らしげに胸を張りながら答え、ココアの付いた唇をなめた。

「了解、じゃあ返信しとくな……あ」

アンドロイド関連でちらつく眼鏡が一人。……こういう、誘いの電話、してもいいのか？

とりあえず番頭さんに電話してみる。

『ふあい』

「こんばんは、なんか食ってます？」

『わりー、アイス食ってた。どした？』

「俺の男友達誘ってみていいっすかね。アンドロイドとかロボットとかに熱心な奴で」

『おー、そりゃまた適材適所……あ、はいどもー、また明日ー……』

うん、誘ってみな。アタシは全然構わねえからさ」

「ありがとうございます、色々」

「んだよー、かしこまっちまっつてさ。礼を言うのはこっちだ……色々とな」

華さんの顔は見えないが、優しく微笑まれている気がした。

「……はは、じゃあ、おやすみなさい。また明日」

「へへ、またな」

電話が切れる。続いて私は、携帯を操作して数少ない男友達に電話をかける。

三回コールしたところで相手が出た。

「やあ、きみから電話とは珍しい。どうしたんだい」

「すまんないきなり。実はさ、武鎧重工アンドロイド発」

「当たったのかい!？」

「うひゃ、大声だすなよ」私はとっさに耳から携帯を離す。

「すまない、あやまる」海尋の声は急激に委縮していた。私は安心して電話を耳の傍に戻す。

「さては、お前応募してたんだな」

私の問いかけに、ため息が返ってきた。

「してたとも……外れたけどね。オークションだともう高騰してるし、いつそ裏口で行くのもアリかと思っただけど、ちょっと思うところあってやめたよ」

裏口をやるうと思えばできる海尋が恐ろしい。コレだから一歩間違えると、マッドな方向に傾きそうな才能を有しているやつは困るのだ。

「なるほどね。そこで朗報なんだけど、当選した人に一緒に行かないかって誘われてさ、海尋を誘ってみてもいいか訊いたらオツケーでたんだ。良かったら来いよ」

「なに、それは……ありがたい。これで大義名分のもとに武鎧の技術を観察することができるよ。茱子をこっちに連れてくる研究も進むかも」

海尋の声が喜びの色に染まっている。誘ってよかった。ちょっと胸が温まる。

「じゃあよろしくな。予定空けとけよ」

「うん、わかった」

「そんじゃまたな、おやすみ」

「僕は寝ないけどね。お休み」

海尋のそつと語りかけるような睡眠のあいさつの後、電話が切れた。ううむ、女の子が海尋に囁かれたら瞬時に落城するのだろうか……。女性化教育を受けてはいたのだが、恋愛禁止という、正に箱入り娘的教育方針だったので、そこらへんの感覚は解せない。まあ、箱に入れられなかったら、入れられなかったで、色々私の貞操が危うい事態になっていたかもしれないので、すこしは箱入り方針に感謝するべきだろうか。

それにしても、まさか年越し後の予定が年越し前にひとつ埋まるなんて。何年ぶりだろう。もし家に独りであるときだったら小躍りしていたかもしれない。私は携帯を勉強机の上に置いた。

今では、携帯が普通に着信を告げたり、誰かに発信したりする。もしこの子を動かしたら、私と感動を共有できるかもしれない。ようやくと、携帯くんは本来の使役用途を、自らの存在意義を果たせているのだから。いや、この考え方は少し上から目線過ぎだ。私の独断で、彼は力のやり場を失っていたんだから。携帯を置くときに、ほぼ真っ白のノートが入ったが、私は見なかったことにした。

明日だ、明日。明日から本気出す。

ジャケットを脱いだ私は手洗いをすませ、畳のうえにうつぶせにねっころがった。

今朝、姫宮に腹パンをくらって以来の畳と思うと感慨もひとしおである。

銀行強盗に遭遇したのに無事に帰ってきたというのも、驚嘆すべ

き事実だ。あの窮地を単身で救ってくれた青葉さんには、いくらお礼をしても足りないだろう。

和花は、だらけている私の横で、絵日記をつけていた。無理矢理覗くとビンタかパンチが飛んでくるので後姿を見守るだけにする。夢中になって書いているので声をかけるのも悪い。こうなったら最低、一時間は無言モードか。今までの統計的に。

ならば、ここが頃合いだろう。

私は体を起こしてジャケットをわざわざ着なおし、玄関から外に出る。

そして携帯を取りだし、電話をかけた。

『は、はい。私、メリーです。な、なにかしら』

「一服に付き合ってくれないか。それと、ちょっと訊きたいことがあるんだ」

『へっ？ う、うん。わかったわ。すこし待っていて』

電話を切って三分ほど待つと、隣にメリーが現れた。この前ショッピングセンターで買ってあげた、黒いゴスロリマントを羽織っている。自然に着こなしていて、伊達に淑女を名乗っているわけではないということがわかる。

「おろしてみたけれど、似合うかしら」

「もちろんです、お嬢様。お召し物と、ストレートな髪型、どちらもお似合いでございます。二重の意味でおろすを使うとは、さすが機知に富んでいらっしゃる」

メリーはふいと顔をそらしてしまった。

「別に、エスプリを利かしたわけじゃないわよ。あとその口調禁止なんだかむず痒いわ……。和花さんにはいつものように書置きしておいたから安心して」

「うん、ありがとう。歩いて公園に行くか、それともキミが魔法を使うか。どうする」

「魔法にはかり頼らないの。歩きましょう。瑠璃は運動不足なんだから、もっと歩くべきよ」

やれやれ、と首をふるメリー。連動して、ウェーブ気味の金髪がなびく。

「はい、すみません、お嬢様」私は胸に手を当ててお辞儀をした。

「だから禁止だってばあ」

出発前のやり取りを終えて、私たちはいつもの一服場所、近所の公園に向かった。

公園に着くと、入り口で酔っ払いの人が木にもたれかかっていたが、その人以外は誰も居ない。静かだ。このままでは生々しい嗚咽というノイズが定期的に入ってきてさうなので、いつものベンチではなく、入り口から遠い、パンダや象がデフォルメされた遊具に乗って話をすることにした。メリーが象、私はパンダに腰かける。

私は煙草をジーンズから取り出し、吸う。一日ぶりの煙が肺を満たす。

「いつも一本しか吸わないわね、煙草」

「ん、ジंकクスみたいなもんだから」

メリーに返事をしてから、吸い、また吐き出す。風向きを読んで、彼女に煙がかからないように気を付ける。

「細かいところがやっぱり紳士ね」

私の様子をじーっと見ていたメリーが呆れたような口調でいった。

「いや、最低限のマナーだよ」

「……訊きたいことって、なあに」

メリーは毛先を指でいじりながら、話す。私は灰を携帯灰皿に落とす。

「この公園で甲冑を捕まえたの、憶えてる？」

「ええ、憶えてるわよ。それがどうしたの」

「あれの中身、姫宮だったんだよ」

私がそう口にした瞬間、メリーの指の動きが止まった。そして、おおきな溜息。

「瑠璃が何にも言わないから、嫌な予感はしていたけれど……ぐぬう、臯月さんには悪いことをしたわね。今度謝らないといけないわ」

「やっぱり初めて会ったんだな。ちょっと肝が冷えたんだぜ、今朝」
「私はいま内臓が氷河期を迎えているわよ……分析紳士は、私がないで甲冑を捕まえたかを知りたいの？」

「ううん、言いたくなきゃ、言わなくていいよ。姫宮と敵対してるかしてないか、それを確かめたかったんだ」

「ふうん……あら、言わなくても済みそう。瑠璃、アレを見て」

メリーが指を差す先。そこに視線を送ると、

「……え、甲冑？」

「いいえ、ストーカーよ」

こぼれたメリーの言葉を脳が処理するより前に、視界からメリーが消えていた。

直線距離十メートルを一秒でゼロ距離にするメリーの魔法、テレポーテーション。

距離をつめたメリーはためらないなど一ミリもないと言わんばかりに甲冑を蹴飛ばした。ガシャガシャと金属音が鳴って、甲冑が激しく地面に打ち付けられる。アレは痛い。

夜の魔法少女は、容赦を知らない。彼女は夜になると選択した相手以外から姿を消すことができる。といってもこの能力の内容は、私の推論に過ぎない。それでも不可視の敵を相手にしている甲冑が一方的にやられているのは事実。メリーは地を這う甲冑を踏みつけ、踏みつけ、踏みつけ、とどめにもう一度踏みつけた。甲冑がピクリとも動かなくなる。

「ただいま。終わったわ。兜の隙間から見たけど、中身なし、よ。安心して」

中身なし？

「オカルト的な？」

「そう、オカルトね。いわゆる動く甲冑よ。襲われている私も正体がかからないし、瑠璃にも分からないだろうから動く甲冑って認識でいいと思うわ。なぜかつきまとわれていて、出会おうと襲われるのよ」

「なっ！ 襲われるって、聞き捨てならないぞ」

私は力任せに煙草を灰皿に押し込んだ。もし誰かにメリーが狙われているのだとしたら、私は狙ってきたそいつを許せない。

そんな私の心を見透かしたような、困っているような笑みをメリーが浮かべる。

「いいのよ、そんな顔しなくて。私は特別だって、前にも言ったでしょう。滅多なことじゃやられないわ。月イチの恒例行事みたいなもの。慣れっこなの、負けたこともないし」

「慣れっこって……えっと、たしか前、言ってたよな、俺ならアレの相手に丁度いいみたいなこと」

中身が姫宮の甲冑を捕まえたメリーが、そんなことを口にした気がする。

「そうね、試してみたいことはあるけれど……」

「それ、いまやってみようか」

私はファンシーな象の上に立つ少女を見る。それに応えるかのように、少女も、その綺麗な瞳をジッと、私に向けていた。そして、うつむき、首を左右にふる。

「……ほんとに、いいのかしらね。わからないのよ、私も。瑠璃は和花さんを救ったわ。これ以上、視界を広げなければ、もう、余計なことを考えないで済むじゃない」

「メリーは大切な友達だ。余計なんかじゃない」

「……そう……」

「俺さ、こんなでも超能力者で、本日からヒーロー部の部員なんだ。んでな、困ってる人は助けるのが、部長である姫様の活動方針なんだよ」

私は努めて、微笑みを作った。

すると、数秒とまどったような顔をしたメリーが、空を見上げ、
「なるほど。これが部活動なのね。初めてだわ」

「初回から物騒だけど、なんだかヒーローっぽいから悪くないだろ？」

「ええ、そうかも」

メリーは空から目線を落とし、私に無邪気な笑顔を見せてくれた。私はメリーの指示に従うために、仰向けに倒れている甲冑に近づいた。所々へこみができている。メリーの本気（まだ余力を残している）そうだが）キックは凶器になりえることが実証された。ひとまずその事実は脳の？絶対に怒らせてはいけないリスト？に詳細を記憶させておくとして、私は集中を開始する。

手のひらを温もりのない銀色に添える。私の温度がのりうつっていく。

それと同じくして、私の集中は『彼』の中に入っていく。頭の歯車が回る。

「完了だ。もう、こいつは動ける」

私がそう呟くと同時に、甲冑の首が動いた。そして右腕を私の傍にいるメリーにゆっくりと伸ばす。だが、その手は彼女には届かない。あきらめたのか、彼の右腕が地面に落ちる。

「今回もこちらが負けか。たまったものではない。主は甲冑遣いが荒すぎる」

深い、耳の奥で反響するような声。私より最低十年は年上に感じる声だった。

「はて？ いま、声が。もう力も残っていないというのに体が動く。これは……」

甲冑は自らの変化に戸惑いを隠せていない。カタカタと足が震えている。意外と小心者？

「毎度ご苦労様ね、ブリキさん。空っぽの身体で動ける気分はどうかしら」

メリーが不満をぶつけるように、はん、と息を吐いた。

「貴様、よくも幾度も足蹴にしてくれたな。高くつくぞ。主はお怒りだ。捕食者の癖に、平然とのさば」

メリーが甲冑の頭を地面にめり込ませそうな勢いで蹴った。

「あなたに発言権はないわ、捕虜。生かしているだけありがたいと

思いなさい。このままただの鉄くずに変えたつていいのよ。私にはそれができる。わかるわよね」

普段と違う、都市伝説な彼女の凄みを感じた。単語の一つ一つに、対象を恐怖させる念が込められているように感じる。その恐怖を甲冑も感じ取ったのか、彼の言葉は途切れた。

「いい子ね。でもポイントはあげない。主、だったかしら？ どうして私を狙うわけ？ あなたも何度も壊されかけるまで使われて、離反したくはならないの」

メリーが甲冑に問う。私は先ほどの甲冑の言葉を思い起こす。主、お怒り、捕食者。これだけではメリーがどんなことに巻き込まれているのか到底判断がつかない。わかるのは、毎月、命を狙われていることだけ。

「っふふふ。そうか、そうか、そうか。貴様とこうして話すのは初めてだったな。そうか。主があそこまで憤怒する理由。それは貴様の無知。貴様の無自覚」

甲冑の兜から嘲笑が漏れている。

「なにがおかしいのよ。適当抜かしていると、また蹴るわよ」

「無理はない。無理だ。貴様は知る由もない。捕食者は、捕食した者を気にも留めん。略奪者は奪ったモノにしか興味を抱かない。元の所有者には、一片の同情もない。それだけだ」

「真面目な口調でデンプ振りまいてんじゃないわよ。私が無知つていうなら教えなさいよ、私が知れば、主さんの怒りもおさまるんじゃない」

「貴様が貴様でいる限り、主は貴様を許さない」

公園の暗闇に、冷淡な甲冑の声がたゆたう。許さない、と言われた本人は意味をつかみかねているようで、ごくり、とつばを飲み込んでいた。細い喉元がちいさく動く。

「なんなのよ……どうして、許されないのよ」メリーの拳が固まる。「貴様が貴様でなくなれば、こんな遊戯は終焉を迎えるだろう。それも、貴様には無理な」

痛い。つま先が痛い。甲冑つてやつぱり丈夫に出来ているんだな。安物のスニーカーではなく、丈夫なブーツを履いてくるべきであつたか。メリーもブーツだもんなあ。

「なにをする、貴女がでてくる幕ではないぞ！」

「貴女じゃねえ、貴方だ。発音の具合で分かんだよ。メリーに好き放題言いやがって」

私は、つまり、ついカツとなって蹴つたのである。甲冑の胴体をためらいなく。自分でもびっくりしている。ほぼ無意識でもモノを壊さないように気をつけているのに、それを越えて攻撃が行われたことに。

「瑠璃、あなたモノは大事にするんじゃ」

メリーが私のジャケットの袖をつかむ。そこにはいつもの力強さがなかった。私はメリーの頭をそつと撫でる。すこし、震えていた心がそわりと黒く染まる。

「するさ。けど、俺はこいつを許せなかった」甲冑を睨む。「誰だか知らねえが、メリーのことを許さねえんなら、俺だってアンタを許さない。そう伝える、主ってやつに」

「愚かな。見た所、ただの人間だというのに、超常に関わるか」

「アホか。俺がお前を動かしたんだぜ。充分そつち側だろうが。変人なめんな」

我ながらまったく格好良くない啖呵である。

しかし、格好悪くても啖呵を切つた以上、いまより進展した関係になつてしまったのだ。

地に伏す甲冑、そしてまだ見ぬ主と。

もう、無関係ではいられない。

「ほう、貴方が動かしたと？ 興味深い。まじないの感触がなかったという事は、別のなにか、か。脅威になりうる。貴方を測位対象とするよう主に進言しておこう。自らの過ちを、泣いて後悔するがいい」

実にしみつたれたセリフを残して、甲冑は跡形もなく消えた。ぼ

こぼこにされて最後は逃げるといふ甲冑に対して、私は噛ませ犬の雰囲気しか感じなかった。自分がオカルト甲冑に脅されたというのに、泣くに泣けない。まったく、三流過ぎる悪役である。

「ばか。瑠璃まで狙われちゃったじゃない」

メリーに怒られた。もー、という深い憤りの声と、抗議の視線が私の顔にあたってくる。

「かまわない、これでキミが一人で俺と和花を置いて消えたりもしないだろうし」

「もっ、元々しないわよ、そんなこと……」

唇をむすんで私を上目づかいで見ってくるメリーは、その背丈相応の子供に見えた。けれど、見えるだけで、この子は大人だ。きつと私よりも。だから先手を取ったのだ。大人がひとりでも無茶をしないように。

私はメリーに甲冑についての話を訊きながら家に帰った。

気が付いたときには自分が狙われていたこと、

約月一回携帯にかかってくる謎の着信の後、動く甲冑が現れるということ、

そして狙われる心当たりも、主と呼ばれていた相手にも覚えがないこと。

以上三点、どれも明瞭な手掛かりにはなりえないものだった。

つまり、情報的にはこちらが圧倒的に不利ということだ。

「じゃあこの前の、変な電話ってというのは……」

和花と初めて公園に行った時に聞いた、メリーの？変な電話に出たでしょ？という言葉。あのときはてっきり自虐ネタかと思ったが、実情は全然違ったようだ。私に数回かかってきた無言電話。あのなかのひとつが主へと繋がっていたりするのだろうか。

「……ただその、暇だったから瑠璃を追跡能力で追いかけたのよ。そうしたら和花さんと一緒に話してるのを見て、帰ろうとしたの。でも、甲冑　　臯月さんが歩いていて、私があなたの部屋に泊

まったから、呼び寄せたかと思つて、えつとその……」

私の顔を見たり、地面に目をやったり、目をつむったり。忙しそうな拳動でメリーが話す。

私はなにも言わず、メリーの手をそつと握る。言葉がスラリと出てこない。誰かを慰めるとき、私はアリスに手を握ってもらっていた過去を思い出す。だから、こうして手を介した接触をしてしまう。悪い癖だ。

「心配してくれたんだな」

「違うわ、迷惑をかけたのよ」

拗ねたような口調のメリー。私は苦笑する。

「まあ、姫宮には謝った方がいいかもな。でもアイツのことだ、笑つて許してくれる」

「そうだといいいけれど……」

私の手を握り返してきたメリーは、それきりなにも言わず、ただ黙っていた。

家に帰ると、和花が布団にくるまって寝ていた。傍により、座ると、すうすうと静かな呼吸が聞こえた。唇を緩ませ、幸せそうな寝顔をしている。

「瑠璃、私も寝るわ。のぞいたら、飛ばすから」

隣にいる私を見ず、ただ畳を見下ろしながら、ぼおつとした調子でメリーが言った。いつも彼女の身体から放出されている覇気が全然感じられない。風が吹いたら、それこそ飛ばされてしまいそうな心細さしか、今の彼女からは感じない。冗談も通じそうにない。

「それは遠慮したいな」

玄関から外に出て、メリーが寝巻に着替えるのを待つ。

謎めいた甲冑の正体を明らかにしたい。だが、こればかりは来月の襲撃を待つしかないのだろうか。

こういつ時こそ、自分が戦闘に特化した超能力者ならばと思つてしまふ。

師匠に教わっていたから、戦闘向き超能力もやろうと思えば、で

きる。だが、初めからそれに特化した人間と比べれば、軽い。否定も、力も軽い。とつて付けただけの刃じゃ、きつとなにも切れやしない。子供の喧嘩には使えても、非常時には、足りない。戦車に槍で挑んでも、結果は見えている。

不審者に襲われた番頭さんを、私単独では、救えなかったように。人を殺すスイッチを手にした強盗たちを前にして、誰一人、救えなかったように。

私は、ことさら命がけの非常時において、無力だ。

ジnkスを破って、もう一本煙草を吸いたくなる気持ちを抑える。頭が痛い。超能力者であるから、己の無力さがわかる。私が仙人ならば、こんな悩み、味のおかしな飲料を飲み干しながら、飄々と、そして軽々と乗り越えるだろうに。

私は空から月に見降ろされている。こうして独りで考え事をする時間が最近では著しく減少していることに気が付いた。今月の初めの頃は、ずっとそれだけしかしていなかったのに。他人のことを考えず、ただ、自らの死と、アリスへの贖罪だけ。それだけだった私に、随分と懸案事項が増えたものだ。その増量加減を今一度整理してみよう。

和花の呪いを解呪することはできたが、彼女の過去もクソ呪術師の正体も知らない。

メリーのことを許さない謎の主についても、甲冑の思惑もわからない。

彼女たちと一緒にいるは良いが、その実、まだ私はふたりをよく知らないのだ。

それから海尋の世界「I - d e a」^{イデア}を襲ったウイルスの作成者も気になる。天才と拮抗するあの技術力は、私の実家にとつても脅威になりえるんじゃないだろうか。実家のことはすべて浄美^{きよみ}が受け持っているので、私がとやかく言う資格はないのだが。

私は顎に手を当てながら考える。
だめだ。

まったくなにも見えてこない。

電灯一つないトンネル、それも、出口があるかもわからず、歩いても歩いて進んでいる気のしないトンネルに頭から飲み込まれてしまっているみたいだ。

下手な考えは休むに似るといっが、こんな行為、気休めにもならない。

憎々しいことに、いくつもの謎たちは私の脳髄にはいない。

やつらはまだどれも等しく、真っ暗闇の中にいるのである。

ても、

「ぐう……すむ……んむあう」

と謎の言葉を発しながら顔をしかめるばかりで、黒い瞳が見えることはない。昨日メリーと部屋に帰ってきたときには寝ていたので十分に睡眠はとれていると思うのだが。私が眠っているときに、夜更かしてもしていたのだろうか。

「ん？」私は和花とメリーの頭の間になにかを見つける。

二人の頭が乗っているの、その詳細は分かりかねる。どうやら薄い冊子のような。赤い紙に黒い字で？アルバ？と書いてあるのが見える。

「……もしかして求人雑誌か？」

双葉荘の近くにあるコンビニの店頭で、毎週無料配布している求人雑誌に酷似していた。いや、酷似というより、これは殆ど確定ではないだろうか。和花とメリーには、この部屋の合鍵を渡しているの、双葉荘から自由に外出ができるようになっていた。どちらかが、働こうと考えて、コンビニまで取りに行ったのだろうか。

まあ、それはいずれ分かるだろう。根掘り葉掘りきくべきではない。彼女たちには、彼女たちの生活があつてしかるべきだ。これはとても好ましい兆候と言えよう。娘の成長を間近で感じたような気がして、私の心の温度が、ほんわりと上昇した。

そんなふうに、朝早くから穏やかな気持ちで過ごしていると、突然に相手が行動に出てきた。朝食が終わり、片づけをしていた時だ。決心を宿らせた、黒い大きな瞳の持ち主、

「働きたいのです」

水で泡の付いた皿をすすいでいる私の横で、洗い終わった食器を布巾で拭いている和花からの言葉だった。私は蛇口の水を止める。ラスト一枚だった皿を和花に手渡す。彼女は淀みなくそれを拭き始める。

「どしたいきなり」

私はちゃっちゃとシンクの上で手を振り、水を払い落とし、そばにいたメリーからタオルを受け取った。なるほど、どうやら求職していたのは和花だったようだ。

「ええとですね。昨日、姫宮さんから聞いたのですが、わたしほどの年齢なら働くことができます。それなら、お兄様に御家賃などを払うこともできるのではないかと思ひまして」

和花の見た目年齢は、多く見積もって高校生といったところ。たしかにアルバイトのひとつやふたつ、やっつけていてもおかしくはない。

「んー、べつに家賃なんていらなだけで……和花は働いてみたいの？」

家賃などのお金の心配は全くいらぬ。私の貯蓄があれば死ぬまで働かずに双葉荘に住める。つい昨日、引越しが頭によぎったので一生住むなんてことはないと思うが。

「はい。まだまだ知らないことが多いので、労働というものを体験してみたいのです」

拭き終った皿を食器置き場にしまった和花が笑う。

和花が自らの知識欲を満たしたいのならば、反対する理由はないが、その体験をするには大きな壁がある。それは彼女の身元が不明であること、そして面接で変なことを言ってしまうかということ。なにかの拍子で彼女が人形とばれたらやっかいだ。

メリーが和花の持つ布巾を受け取り、洗濯物を入れているカゴに転移させ、

「私たちには社会的存在証明がないから、アルバイトするの、難しいかもしれないわね。私も昔、よく行くゲーセンで働こうとしたんだけど、やっぱり門前払いされてしまったの。こっちは悔しい思いをしてるっていうのに、相手方は生温かい視線を向けてきたから、不気味でしょうがなかったわよ。あの笑顔が忘れられないわ」

メリーの話にこくこくと小さなうなずきを返す和花。

「それは不気味ですね……百物語の中のひとつとして語っても遜色

ないと思います」

メリーの外見年齢がどう見積もっても小学校高学年レベルだということに尽きる話だと思うのだが……。こと現代の話となると、オカルト娘たちは知識というか認識がずれている。そもそも人形と人間という生まれの違いも、価値観や判断基準に差異を生んでいるのかもしれない。私は年月と共に外見が変わっていく人間共通の現象、肉体的成長という過程を経て大人になった。しかし彼女たちの肉体は成長しない。作り変えない限り形も変わらないし、身長が伸びることもない。育つとしたら、中身。つまり心だろう。

彼女たちの精神年齢は、あるところでは人間の女子よりも上だと思いつ時もあるし、あるところでは外見相応の反応を見せるときがある。これは、彼女たちの姿が年を経ても変わらないゆえの現象なのだろうか。成長の認識が可視化されないというのは、私が思うよりも異質で、また、人間とは違う心の形成を促しているのかもしれない。

「どうしたんです、難しそうなことを考えているお顔をしていますけど」

和花が私の顔をしげしげと見ていることに、声をかけられて初めて気が付いた。

「ああいや、キミらって何歳なんだろうなって、ふとね」

「あらやだ、紳士ポイント減点ね。淑女に年齢は尋ねるものではないわよ。そういう慣習が社会にはあるのではなくて？」

メリーはあきれてものが言えないという顔をしている。

「そりゃあるから黙って考えてたんだって。メリーは確実に俺より年下だとして」

「んなあつ、人を外見で判断するんじゃないわよ！ あなたよりは年上よ……きつと」

自信満々に答えた顔つきが時と共にしぼんでいった。

「希望的観測は聞いてませーん。それに若く見られてんだからいいだろ、淑女的には」

それもそうね、とメリーは笑った。くいくいと、後ろから服を引っ張られる。

「わたしは、いくつだと思えますか？」

興味津々な目で見てくる和花。難しい。物事を飲み込む早さ、打てば響くオカルト知識、そして私の長年の悩みを受け止めてくれた包容力。私と同年代か、少し上くらいだろうか。

「うーん……年上、かなあ。和花ってしっかりしてるし」
にんまりと、和花の口に笑みが浮かぶ。

「うふふ、それはわかりませんが、お兄様より年上なのは正解です。正確な年齢はさすがに伏せますが、生誕してからの時間は大学生のお兄様よりもずっと長いですよ」

すると、彼女は二十年前からこの世界で生きていたということだ。
「そっか、人生の先輩なんだな」

私がそういうと、和花はむむむ、と眉間に皺をよせ、前髪に隠れるおでこにひとさし指を当てながら唸った。

「……お姉さんって呼んでもいいんですよ？ わたしのこと」
ゾクリ、と体をなにかが貫いていく感覚。和花は妖艶な微笑みをたたえている。現時点の兄妹のような関係が一瞬で逆転してしまつたような情景に、私は動揺を隠せない。声にもつややかな色気が宿つていた。しゃかりきに働いているサラリーマンを一秒で骨抜きにして、墮落させてしまいたいそうだ。

「ふふ。どうでしょう、年上のお姉さんを演じてみたのですけれど」
途端にパツと表情をくずし、声色も元に戻し、綺麗サツパリあつけらかんと和花が尋ねてきたので、私はガクリと肩を落とした。どうやら才媛は、演技派女優でもあつたらしい。

「いやあ……頼りない駄犬を飼いならす魔性の姉貴って感じだったいやまで、だいたい本題から逸れちまつたな。どうすつかなあ……ツテって言うていいかわからんが、アテはあるぜ。働き口のさ」

「本当ですか！ いったいどのようなお仕事なのでしょうっか？」

「うーん、系列としちゃ……癒し系、かな。リラクゼーションとい

うか。日々の生活に疲れてしまった人がちよつとだけ現実を忘れられる仕事だよ。うん……和花なら大丈夫。たしか店長、和花くらいの子が働けるようなお店もやっていたと思うし。俺の紹介なら、きっと、面接も免除になるんじゃないかな」

「瑠璃……あなたの言葉だけ聞いていると、とつてもいかがわしいわよ、変態」

メリーの目つきは路上に落ちたゴミでも見ているかのように冷ややかだ。これには反論せざるを得ない。それに私は変態ではなくて、あくまで紳士を志望したい。

「変態なのはキミの思考回路だつつの！　　ったく。俺が働いてたとこ、もう忘れたのかよ。工藤さんにまでバラしたの、忘れてないんだからな。耳年増おませさんめ」

頬を真っ赤に染めてメリーが震えている。凶星なんだろうか。

「みつ、耳年増か、ませてるのか罵倒はどちらかにしなさいよね！　　ま、まあ、和花さんなら向いていそうね。癒しの波動が常に出て

いる気がするもの」

「だろ、仕事も和花ならすぐ覚えるだろうし、適職かもな」

私が持っている就職のツテ、それは。

「あんな和花、俺が昔働いてた、執事喫茶の店長が経営してるメイド喫茶があるんだけど。そこならきつと働けると思う」

昔馴染みの色物喫茶店である。マスターの喫茶店が王道ならば、こちらは限りなくニツチ。だがしかし、世間一般に浸透しているメイド喫茶のイメージとは程遠いことを、先に述べておくべきだろうか。無邪気に笑う和花に、無駄な期待を持たせるのは酷な気がしてきた。

「めいど……西洋の女中さんですね。やります、やらせていただけるのなら、やります！」

そんな私の葛藤も知らず、和花は私の提案を受け入れた。

実にいい返事でメイド喫茶バイトを志願した和花を引き連れ、私は元職場の従業員入り口前に立っていた。店長に電話でアポを取ったら、少々の沈黙の後、「すぐにこい」とのことだったので早速やつてきたというわけだ。

私の元職場、『執事喫茶・アンダンテ』はこの田舎町が都会に對抗するために開店された、地元民の希望のような店舗である。都会に行きたくても、電車賃をかけるのが嫌という儉約家な女学生たちが常に来店しているため、大学のカフェテリアよりも断然賑わっている。店名は、店長が音楽好きなために、音楽用語からとっている。実際に店内が歩くような早さなのは……ノーマコメントでお願いしたい。

数年ぶりの職場訪問にすこしばかり緊張する。だが、言いだしつpegが止まるわけにいかん。

「こんにちはー」

私は灰色のドアを開ける。懐かしく、冷たい金属製のドアの軋む音が聞こえた。

「ごちゃごちゃと備品がそこかしこに置かれている廊下を歩き、店長の待つ休憩室へと向かう。従業員とは遭遇しないまま、労働時の憩いの場へと続く扉までたどり着いた。和花はどこかそわそわしている。

「失礼します」

本日二度目の緊張ドア開閉を終えると、

「オメエが失礼するところ、見てみてえっちゃん、見てみてえかもなあ」
外敵を威嚇しているような銀髪のツンツン髪と、会っていないかった期間を感じさせない距離の詰め方。お屋敷というより、カジノの方がじっくりくるセンスのスーツ、ネクタイをしていないせいで胸元がはだけているシャツ、年齢不詳の若々しい風体。

彼こそが店長の越坂部桐彦さんだ。彼はパイプ椅子に足を組んで

座り、獣じみた金色の三白眼をこちらに向けている。笑顔の口元からのぞく白い歯、特に犬歯がざらりと光っている。

狼のようだ。孤独な動物を思わせる瞳の鋭さは変わっていない。「オオ、そいつが例の娘っ子か。良い面構えじゃんよ。それになんてえの、大正ロマンをビシバシに感じるねエ。着物が似合う大和撫子なんてまだ現代に居たとはよ、驚きだア」

和花には着物を着てもらっていた。この店長に気に入られるにはインパクトが大事だ。むしろ、インパクトがなければ歯牙にもかけてもらえない。第一関門はどうやら突破したようである。店長が立ち上がり、私のすぐ前までやってきた。

「そんなことを言いつつオレは頭からつま先まで現代人もんで大正なんて知ったこっちゃねエんだが。ま、そこらは言葉のあやつてエことで勘弁してくれてなもんでよ、久しぶりだな色男。死んだかと思っただぜ」

白い歯をむき出しにして笑う店長。実際死のうとしていたことは言わないでおこう。

「なんとか生きてましたよ。繁盛してますか、アンドンテ」

「おおーよ、繁盛も繁盛。連日お客様が途絶えないってもんだがよ、多すぎるってのも困りもんでよ。今のメンツ、地方出身者が結構いてなア、年末だから欠員が著しいんだ。そんなときにオメエが来てくれるとは、全く、人事を尽くした甲斐があつたってなもんだな。天はオレを見捨てなかつたッ」

ガツシ、と両肩をつかまれる。獣のように鋭利な爪は生えていないものの、店長の握力は、執念のようなものが込められているのか、頑なに私を離そうとしない。

「いやー、あの一、店長？俺じゃなくてですね、そこにいる和花がですね」

「モーツチロン。ノドカにも働いてもらうぜエ。アンドンテじゃなく、リベラメンテでな」

『メイド喫茶・リベラメンテ』とは越坂部さん経営の男性層をター

ゲットにした店舗のことだ。その音楽用語由来の名の通り、自由な店構えをメインテーマとしている。メイド喫茶の名を冠してはいるが……冠しているだけの日もある。

危険な店ではないということ承知だが、そこまでの過程に危険があるかもしれないし、親心ではないが、バイトを紹介した手前、労働する姿を見届けたい。私は無謀にも、店長に対して弱めの抗議をすることにした

「でもえっと、リベラまで電車で三……四駅くらいあるじゃないですか。この子まだこっちにきて日が浅くて、遠いところに一人にするのはちよつと……」

「あーんししろおー、イカした執事をひとりつけてやるって。タダでイケメンと同伴だぜ。得したな、お嬢さん（フロイライン）」

和花は店長の威嚇要素がありすぎる凶暴な笑顔にビクツと肩を震わせた。店長はくつくつと笑いを噛み殺していて、それも我慢できなくなったのか口を大きく開いた。

「かああああ、イイネエ！ 初心だ。いまいる娘たちとはア、んー、五味ごまいくらいちげえな。良い人材だぜ。普通は店の色に染めちまう所だが、あの子は天然色のままで良さそうだ」

「いやだからその」
店長は自分だけで話をどんどん進めていく。やばい置いていかれる！

「いまは人手優先かつ、オメエの紹介だろうがよオ、断るリユウが見つからねエ。おーい、ヨシダア、フロイライン一丁をリベラメンテにエスコートよろしくウ！」

バン、と大きな音を立てて休憩室のドアが開くと、そこには見目麗しい執事がいた。

「どこの組だよ、ここは。越坂部さん、背中に彫り物とかなかったよな、たぶん。」

「ただいま参りました越坂部様。ご案内するのは、こちらのお嬢様ですね」

吉田さんの確認に店長は首肯する。店長にうなずきを返した吉田さんが和花を手招きした。

和花は吉田さんを見て、私を見て、店長を見たあと、

「ええつと……お兄様、いつてきますね。頑張つて御家賃を稼いできます」

「エライツ、素晴らしいツ！ ドカンと稼いで来い！」

店長は親指を立てて和花にエールを送った。二カツと笑った口からは尖つた犬歯がのぞいている。

「はい」

パタパタと小さく手を振りながら和花は吉田さんにドナドナされていく。いやだがこの言い回しは間違いだ。売られた子牛は和花ではなく、

「サアテエエ……」

「な、なんでしょうか」

「元売れっ子アイドルの稼ぎっぷりを見せてもらおうかねエエエエエ！？」

「ひいひいひいひいひいひいひい！」

樹齢三百年の巨木すら薙ぎ倒しかねない、暴風のごとき威圧感の直撃を店長から浴びせられている、私の方だ。狼に睨まれ、鋭い爪で掴まれた鈍重な子牛は、ライオンに追いかけるインパラと違って逃げる行動すらできず、ただ、肉食獣に捕獲された事実を受け止めることに、労働を果たす覚悟を固めることに躍起になるしかないのである。

「でででででも、店長、俺の制服、もう前のじゃ入りませんよさすがに」

「そんなんノープロだ」

私の顔の前で人差し指を振り子のようにする店長。ブレムくらい略さずに言えばいいのではないだろうか。

「後藤！ 後藤はいるかア！」パンパン、と店長が両手を叩いて大きな音を出した。

「どうなされましたか」

よく訓練された執事二号、後藤さんがドアを開けてやってきた。
対応早っ。

「オウ、こいつを採寸しろ」

「かしこまりました」

どこからともなくメジャーを取り出した後藤さんが私に接近してくる。いったいどうして健康診断が始まったのか理解しかねていると。店長が携帯をポケットから出してどこかに電話をかけた。始めたと。御手洗みたくいかア？ そうだ越坂部だ。わりいな、いま女おんなつ気のないところにいるもんでよオ、オレが電話しちゃった。ああ。そうだ。いつも通り頼む。もうそろ採寸終わっからよ、データ取れたらメールするな。いつもありがとよ、じゃあな……うし、後藤データよこせ」

「こちらになります」

後藤さんが私の身体データが記された紙片を越坂部さんに渡した。
「どれどれ……… 相変わらずホッセエー、ちゃんと肉食ってんのかよ。これならリベラでも通用すんじゃないの？」

わりと本気っぽい目で越坂部さんがにやにやしている。

「それは勘弁してください………」

「働き様によるなア……… つとよしソーシン。おйлリイ、ちよつとひとつ走り行って来い。そう遠くねえし、御手洗にも連絡してあるし……… それにオメエなら平気だと思っしな」

私があつたく事態を把握できないでいると、越坂部さんが私のデータが書かれた紙の裏になにやら書き込み、それを渡してきた。

「制服を取ってこい。遅刻したらリベラ行きだからよ、気い付けろ。オレとしちゃ、そっちのが稼げっからありがてエ話なもんだが………」

「喜んで取りにいかさせていただきますっ！」

私は越坂部さん即興の地図を相棒に、冒険の旅に出ることにした。
世界を救うでもない、姫を助けるでもない。

ただ、自らの女装を回避するためのアドベンチャーだ。

RPGの勇者のお使いイベントは、あんなにも面白いというのに！

なぜ一般市民である私のお使いは、こんな自分の尊厳みたいな何かがかかっているんだ！ 最初の村でラスボスにブチ当たった気分である……。

第8話 白い車のワイルドアニマル

「ここ、か……っだあー、今度自転車買う……決めた」

私はフル回転させていた足を止め、呼吸困難になりかけていた体を休ませつつ、つぶやく。そして目的地であった場所を眺めた。

「ほんとここなのか……地図、あってるよな」

私は頭の中でここまでの道程と、越坂部さんにもらった地図を照らし合わせる。制服を取りに行けと指示されたからには洋服店を想像していたのだが、どうも外觀がおかしい。

どうおかしいのか詳しく述べると、車が何台も駐車されていて、一時間の使用料金が書かれた看板がある。つまり、ただの駐車場だ。ということとは、

「は、ハメラれた?」

越坂部さんはこんな手まで使って私をメイドにしたいのだろうか。悪趣味にもほどがある。

「あら? 紳士じゃないの」

声の方に振り返ると、金髪ポニーテールを風になびかせ、不思議そうにこちらを見ているメリーがいた。和花とバイト面接に出かけることになった時、「私もちよつとでかけるわ」と言っただけで別行動をしていたのだが、まさか私が謀られた先で出会うとは。おもわず泣き言を漏らしてしまいそうだ。メリーに転移を頼もうにも、ここは通行人が多くて、いくら存在レベルをメリーが気にしなくなったとはいえ頼みづらい。もう泣くしかないのか。

「どうしたのよ、子犬みたいな目をして。いつにも増して男らしさが欠如しているわよ」

これからもつと欠如することになるかもしれないが、言葉に出したら実現しそうなので、私はただ下を向いた。メリーが近づいてくる足音が聞こえる。

「ここに用があるのかしら。あるとしたら今度ドライブに連れて行ってほしいものね。私はどこにでもひとつ飛びだけれど、地を走るのもまた一興なのよ。勿論、お弁当を持ってね」

弾む声で語るメリー。私の心はどんどん沈む。

「ごめん、俺、車持ってないよ。出掛けもしないのに維持費がもつたないだろ」

顔を上げ、メリーに応える。

「あら残念。ならどうしてここで立ち尽くしていたのかしら」

私はもうあきらめた。観念した。メリーに愚痴を聞いてもらってから、魂を売りに行こう。

「和花の働き口を掴み取ったのは良いんだけど、俺まで働くことになってさ。んで俺の制服を取りに行けって言われたから地図の通りに全速力で走ったさ。遅刻したらメイド喫茶に左遷されるからな。そしたらココってわけだよ。見ての通り車しかないだろ？ 店長に八められたんだ……」

言葉を発しながら膝を落としそうになる。悲劇の主人公をきどりたい気分だ。

「あつてるわよ」

「へ？」私は耳を疑う。

「紳士にお使いを頼んだ人、御手洗って言ってなかったかしら？ だとしたらココであっているわ、泣かないで平気」

ふふふ、とメリーがちいさく笑った。一体どういうことだ。

「確かに御手洗って言ってたけど……」

「なら私と来れば万事解決するわ。ほら、手を出してごらんさないな」

私はメリーに従うがまま、彼女の手を握る。するとそのまま一台の車の傍まで連れられた。

至って普通の白い乗用車だ。大きさは八人乗りくらいである。窓には黒いフィルムが貼られていて車内の様子は窺い知ることができない。

私の手を放したメリーが車の助手席側のドアを開ける。

「すぐに入って」

「あ、ああ」

外見と打って変わって、車内は異質だった。どこにもシートがない。ダンボールで作ったハリボテみたいの中には空間があるだけ。乳歯が抜けたばかりの歯茎のような感じだ。あるはずのものが無い強烈な違和感。なぜか後部座席がなければならぬ部分に、ふくらみのある毛布が転がっている。

最初に私が車の中に入り、続いてメリーが車に乗り込み、ドアを閉めた。

「ユキ、お客さんよ」

メリーの声に反応するように、ゆったりと毛布が蠢く。

「のわっ、な、なんだ」

「しーっ、ユキは野生動物のように繊細な子なの。刺激しちゃダメ」メリーの注意にうなずきを返す。それから五秒くらい経った時か、毛布のはじが持ち上がり、毛布の住人の手が見えた。それからまた五秒ほど経って、「女の子」というポソツとした声が聞こえた。私の危機感地センサーが告げている。これは私が性別をバラすとやっかいなことになるパターンだと。あの漫研の悲劇を繰り返してはならない。

「いらっしやいませ」

寝息のように極々小さな声。その声と一緒に毛布から這い出てきたのは、毛布にくるまっていたからか、頬を真っ赤に染めたメリーより少し年上くらいに見える女の子だった。女の子は毛布に足を隠したまま、上半身だけを起こす様に座っている。パーカーのフードをかぶっていて、その隙間から髪がこぼれていた。

「ええっと、御手洗さん、ですか」

コクリ、とフードをとり、頭をあらわにした御手洗さんがうなずく。彼女は手を足の上に置いて、忙しそうに結んで開いてしている。「越坂部さんに言われて制服を受け取りに来たのですけど……」

私だつてこの状況の不自然さに気が付いている。普通なら受注した制服がこんな短時間で出来あがるはずがない。ということは、御手洗さんは普通じゃない。そうであつてほしいとさえ思う。もし店長の罫だとしたら制服が私の手元に現れることなどないだろう。

「はい、うかがつております」

御手洗さんが一度後ろを向き、包みを両手に抱えて私の方に向き直つた。

「こちらでよろしいでしょうか」

微細にうわずつている御手洗さんの声を聞いていると、なんだか申し訳なさが湧き上がってくる。立ち入り禁止と書かれているのに無理やり押し入ってしまったかのような罪悪感。さつさと済ませよう。私は御手洗さんが持つている包みを貰い受けた。大きめの紙製カバンの中に、紺色の包装紙で梱包された物体が入っている。この物体こそが制服だろう。

これでお使いは終了だ。怯えさせるのも悪い、御代を払つて車から出よう。ジャケットから財布を出して御手洗さんを見る。

「おいくらですか？」

「.....」

御手洗さんは私の顔をじーつと見て、固まっている。誇張なしに真っ白な肌をしている彼女の顔は、頬だけずっと真っ赤だ。私に来るまでこの中で寝ていたのか、目がとろんとしている。まだ半分寝ているのだろうか。というかまさか目を開けたまま寝ているのか、これは。

「むりょうです」

起きていた。しかし、言動がどつぷり夢の中にトリップしている
としか思えない。

「いや、服一着つくつてもらつたのにタダつてそんな」

「びしょうじよは、むりょうです」

美少女無料。どこかで聞き覚えのある言葉の並び。いつだったか
いや、そのまえに私は美少女などではなく、二十歳の男子大学生な

のだがこれは詐欺行為になるのではないか。

数秒苦悩しているとジャケットの袖をメリーが引つ張ってきた。

私の耳元に顔を近づけてきた彼女は、ぼそりとささやく。

「ユキは和花さんの着物を洗った超能力者よ。男の子はちょっと苦手なの。だから紳士の正体はバラさない方がいいわ」

なんと。目の前でモジモジしているパーカーの少女が例の店主だったのか。和花の着物を洗濯するときの一悶着で私のなかに生まれしていた「美少女の服を無料で手洗いげっへっへ！」といやらしく笑う変態像が崩れ去る。いいことだ。メリーの一言のおかげで、清らかで微笑ましい洗濯風景しか浮かばなくなった。

「じゃあ、ありがたく」

私は御手洗さんから荷物を受け取り、会釈をする。

「いいえ、たのしかったです」

御手洗さんはうつむいて両手を噛み合わせながら、

「私がつくった服が美少女の肌に直接触れて、甘露のような汗に濡れると思うと楽しくて仕方ありませんでした。あなたの身体を想像して想像して、頭の中の型紙を生地に落とし込む作業は幸福以外になんて言ったら、ああ、できれば私が直々にあなたに着させたいです。駄目ですか、あのおう、駄目でしょうか、この車、外からは中の様子、見えないですよ？」

私の全身の毛穴から嫌な汗が噴き出す。さっきまでの口調とくらべて五倍速ほどのスピードで御手洗さんにまくしたてられた。崩壊したはずの変態像がいま少し形を変えつつも再生され始めた。御手洗さんはハアハアと荒い息を吐いて、私との距離を縮めてきている。「なあ、これどういうこと！」ワイルドアニマル「すぐるようにメリーに話しかける。「言ったでしょう。ユキは野生動物よ、それも肉食の。本能に火が付いたらそのまま止まらないわ。ああ見えて肉食な女なのよ」

「いやいやいや！ いや！ ほら、その！」

もし私が真正銘の女性だったならば服を着せてもらうくらいお安い御用なのだが、私は男。幼少期に久恵さんに着替えさせてもら

ったことはあるが、今回は事情が事情。男だとバレてしまったら一体どうなってしまうのか。思考を軽く巡らすだけで、およそ二十通りのバッドエンドが想像できた。パターンはいくつもあるが、結末はどれも『逮捕』だった。

「わかるだろ、メリー、頼むよお！」

メリーは考え込むように腕を組んで、

「ぐぬう。ユキのほうが紳士より付き合い長いのよねえ……ねえユキ、こんなに可愛い子が男の子だと思つかしら？ もしそうだとしたら、どうする？」

「ええっ、どうしよ、そんな。髪も眼も綺麗でまつげも長いでしょ。ヒゲも、ないし、肌もむきたての卵みたいだし、ありえないよ。でも、もし、この人が男の子だったら……いや、そんなのあるわけない。こんなに可愛いのに。ねえメリー、私、もう抑圧してた気が爆発しそうなんだ。まどろこっしいよお、ちゃんと女の子なんでしょう。優しくしますよ」

うふ、うふふふふふ。と口元に拳をあてがって御手洗さんが笑う。

口元からよだれたらしてる。怖い。

いまなら学校の七不思議を平気で殴り飛ばせる。不思議よりも現実の方が、怖い。

「だ、そうよ！ 身を任せて見てもいいんじゃないかしら。裸にひん剥くわけじゃないし、そこらへんは理性を保ってくれるはずよ……」

おそろくね、というメリーの虫の鳴くような語尾が聞こえたのは気のせいか。目を合わせてくれ、魔法少女。

「いやあの迫力……任せたら絶対骨が見えるまでひん？ かれるって……」

虎穴にはいらずんば虎子を得ずとはいうものの、私は虎というかドラゴンに出会ってしまったようだ。そしてそのドラゴンは、四つん這いの恰好で、私の元までじりじりと歩みを進めている。私の頭

の中では警鐘が鳴りっぱなしだ。

「あ、あのね御手洗さん、お、いや私、これから越坂部さんのお店まですぐに戻らないといけないの」

久方ぶりの女喋りに頭痛がしてきた。アイドル復活の次は、女言葉復活とは私はいったいどこへ向かおうとしているのだろうか。良い方向とは言い難い。ああ、さぶいばがすごい。体中が悪寒に包まれている。

「……そうですか。ざんねんです」

おや？ 御手洗さんが急に落ち着いた。彼女の荒かった息は、微かな吐息に戻っている。

「どうぞ、おかえりください」

パーカーのフードをかぶりながら御手洗さんがお辞儀をしてきた。仕事に私情は持ち込まないタイプなのだろうか。

拍子抜けしたまま、私は車内（店内？）から降りる。メリーが後からついてくる。御手洗さんとの交流は、ほんの数分間の出来事だったが、濃度は一時間くらいあったように思えた。殺風景な駐車場の景色が懐かしい。私たちは御手洗さんの車から離れ、駐車場前の道に出た。

「メリー、案内してくれてありがとう」

振り向いてメリーにお礼を言う。

「ふふ、お仕事なもの。ビジネスライクよ」

髪を指ですきながらメリーが答えた。

「御手洗さんの対応は、全然事務的じゃなかったけどな。本気で我が身の危機を感じた」

私は笑いながら肩をすくめた。

「それは否定できないわね、ごめんなさい」

私を見て小さく笑うメリー。メリーは御手洗クリーニングの従業員なんだろうか。私と出会う前の資金源がどこにあるのか謎だったが、こうして働いていたと知ると、すこしだけメリーへの理解が深まった気がして嬉しい。

「でもあの子、悪い子じゃないの。だから、よかつたらまた会ってあげて。コインランドリー代も浮くわよ」

それは非常に魅力的な提案だが、ううむ。

「俺は男なのに、あの子に何回も会っていいのか？俺はほら……女性がさ、男に比べて苦手だから、ちょっとだけ、あの子の気持ちわかるかもしんないんだ」

女性特有の嗜虐の視線、粘性の暴力性。小学生の頃の記憶は、私の中からまだ抜けない。なにかを苦手になるということは、なにかを苦手になるきっかけが、原因がないとできない。ゆえに、御手洗さんにも男を苦手になった原因があると推測するのは当然であろう。「だからこそ、会ってほしいのよ。あのまま、あの子が、本来得るはずだった思い出を得られないで、大人になってしまつのを防ぎたい。……苦しめられただけで、あの子の子供時代が終わってしまうなんて、ひどすぎる」

事情はわからないが、なにか嫌な想像しかできない発言である。御手洗さんがあの頃の私のように、重く否定した現実。そして目覚めた超能力。

洋服の作成、そしてクリーニング、か。

私は、思考を雑踏のざわめきに散らす様に、額をなでた。

「ん、わかった。また会いに行くよ」

「うん、ありがとう。きつと喜ぶわ」

触れるにはまだきつと、時間が足りない。私が十年越しにやっと傷口を和花にさらけさせたように。御手洗さんの苦手意識の根幹に触れるにはまだ早い。それなら、せめて、メリーの願いを聞くくらいはやってみようと思うのだ。

その前に私は、自分の懸案事項を解決しなければならぬ。

「さて、またひとつ走りしないと。あ、メリーはまだ御手洗さんのところにいるか？」

「いいえ、もう今日の仕事は終わりよ。ユキを家に送ったら双葉荘に帰るわ。どうして？」

「ん、いや和花の様子が心配だから、見に行ってもらえないかと思
つてさ」

「お安い御用よ。それに、ちょっと……」

「ちょっと?」

メリーは頭をぶんぶん振る。

「ううん、なんでもないわ!　じゃあ、私行くから、瑠璃も頑張り
なさいね」

金色の尻尾が白い車へと吸い込まれるのを見てから、私は大きく
息を吐いた。

彼女は彼女の仕事が、そして私も今日から晴れて労働者か。

いや、まだ長期で働くと決まったわけではないし、ここで立ち往
生していると最悪のケースへと事態が進行する恐れがある。急いで
アンダンテまで帰らなければ。

第9話 オメエ相手なら、男色にならないかもなア

鍛え上げられていない肉体を酷使して、なんとか指定された時間より、五分早くアンダンテの従業員入口まで到着することができた。だが、まだ油断はできない。越坂部さんのことだ、「着替えるまでが時間制限だア！」とか言ってくる可能性が残っている。

私は目の前のドアを開け、廊下を走り、休憩室に勢いよく滑り込んだ。

「早かったなア。でも、着替えるまでが制限時間だぞオー。あと三ぶん」

ザザアツと血の気が引く。

私の予想とテンションは違うものの、ほとんど同じ台詞をこともなげに越坂部さんが言った。片手で携帯をいじりながらの余裕な態度。それに対して、私には余裕も、猶予もない。こうして思考していることすら削減したいほど、無駄な時間は残されていない。油断していても、覚悟していても、自分の置かれた立場は悲しいほど変わらないのだ。

私は越坂部さんの言葉から逃げるように、更衣室まで走った。体力もそろそろ限界である。

細長いロッカーが列をなしている更衣室にはだれも居なかった。圧迫感のある無音と暗闇が、私の焦りを加速させる。

紙カバンから紺色の紙に包まれた物体を取り出す。そして、包装紙を丁寧に開封する。ここで焦って、クシャクシャになった制服を着て接客するわけにいかない。

そして緊張やら恐怖が心に湧いてくる中、紺色の包みを開けると、透明なビニールに包まれた制服の上下が姿を現した。まさにクリーニングから帰ってきたスーツのようだ。

まずい、ドキドキして、手の感覚が頼りなくなってきた。手の中身がゾワゾワとこそばゆい。まるで腕の中に小人がいて、そいつからくすぐらわれているみたいだ。頭が真っ白になり始める。越坂部さんは後三分と言っていた。ということは、残り一分ちよつとしか私に残された時間はないのでは。そう思うと、さらに気が動転してくる。定期試験中に、憶えていたはずのことを全く思い出せなくなつたときに出てくる嫌な汗。それに似たものが全身から噴き出してきた。まるきりパニック状態だ。

急げ、急げ、はやく袖を通せ、時間がない、やばい、まずい。

いやまて、袖を通す前に今着ているものを脱がなければ、なにをやっているのだ私はっ！

ああもう、こんな状態になるのならば、いつそ着替えさせてもらった方がよかつたか。

いやいやいや、そんな考えが出てくる時点で私はどうかしている。よし、上を脱いだぞ。

んで、上着を着て、よし。後は下っ！

とつとズボンも脱ぐっ！ベルトが煩わしい！

着替え終了……む、すごい、完璧だ！

私の体に物凄くジャストフィットしているっ！

御手洗さんの能力の精巧さに感銘を受けつつ、私は更衣室から飛び出した。

ゴールまであと五秒といったところ。間に合うか、もうアウトか、私にはもうわからない。

休憩室のドアを開け放つ、

視線の先には笑顔の越坂部さん。

ああ、やりきった、私は全身の力が抜けていくのを感じた。

脱力を感じたときには、体が崩れ落ち、ぺたんと尻餅をついたよな格好になった。

「オオ、超似合うにあうッ！」

立ち上がり、椅子から離れた越坂部さんが、拍手をしながら私に

近づいてくる。

私は疲労と脱力で、呼吸をすることしかできない。息がまだ整わない。肩を上げ下げするのもつらい。

「ほんツと御手洗は相変わらず良い仕事をする奴だなア。うんうん、一から十まで指示通り。ちょっとアレンジが加わってるが、それがまたいい」

満足げに私を観察してニヤニヤしている越坂部さん。

「あとはこれでパーフェクトだぞツ。制服に続いて、装飾品も特注なんてマジVIP待遇だな、ルリイ、至れり尽くせりだなア、ルリイ」

越坂部さんはどんな装飾品を特注したというのだろうか。意味が分からない。制服以外に、なにか身に着けるべきものなんてあったっけ？ それとも、私がいなくなっていた間に、新しく決められたものなのか。

「プレゼントオオオフオーオーユウウウウウ！」

越坂部さんのシャウトに驚き、反射的に目を閉じると、

ふあさっ、っと頭になにか柔らかい動物の毛のようなものが当たった。

おずおずと目を開ける私。

その毛は長く、私の肩に垂れ、胸まで届いている。キャラメルのように鮮やかな茶色で、つやつやとしている。

「なんですかねこれ……」

「見てわかんねエのか、ツラだよツラ、カ・ツ・ラ。お洒落に言うと、ウィッグな」

「は？」

「いや、は、じゃねエよ。お前、自分で着といて、そこまで似合っとして、その反応はおかしいだろウ。やー、ずいぶん、男らしく潔くなったもんだなアと、感心したもんよ。百パー着ないと思ってかけたドッキリだったんだが」

ドッキリ？ ウィッグ？ 潔く？

嫌な予感がした私は、ゆっくりと、自らの、下半身に、目を、向けた。

そこに、あったのは、黒い、布。ひらひらとした布、プリーツがある。

その先に、ふともも。ん？ んんんっ？

「え、これっ!？」

声が裏返る。なんで、どうして！ 履いた感覚はズボンだったのに！ いや、執事なのに長ズボンじゃないなんておかしいよな！ てかもう、色々おかしいぞ！

「いやー、年食ってまた違った感じになったなア。ガキン頃は可愛い系だったが、今じゃ可憐系？ 目指せんじゃねエかな。どっちにせよ、もらってきた制服がソレじゃあ、コッチじゃ働けねエってことわかるな？ わかるよなア？」

ずずいと、私の顔面スレスレまで越坂部さんのいかついスマイルが接近してきた。

「ちよちよ、ちよーっと待ってください、責任者に電話を掛けさせてください」

「責任者は、オ・レ、だが？」

なんか誇らしげにポーズ決めてふんぞり返ってやがるぞ、この店長。

「いや、喫茶店のじゃなく、制服屋さんです、御手洗さんですっ!」

「あーいーつーに、電話してどうすんだよオ。無駄な抵抗は見苦しいぜ、ルリカア」

私の隣に座り、肩を組んできた。

「ひつつきながらその名前で呼ばんでくださいませんか！ 身の危険を感じます！」

「あー？ なんで危険感じるんだよ、オレアそっちのケはネエぞ。

あつたら、お前とつくのとーにオレに喰われてんだろ、ん？」

そっちの意味じゃねえよ！ ド変態が！ という罵倒が出そうに

なるのを必死にこらえた。

「越坂部さんめっちゃパワフルじゃないですか！ 肩組まれると、僕が逃げれないんですよ。それに暑苦しいです、もう、まじで離れてくれませんか、まじで」

必死に身じろぎしても、越坂部さんのガッツリホールドを攻略することができない。

「ウワァー、時の流れは残酷だなア、おい。あれだけ子犬みてエに懐いていたルリがよ、いまや反抗期まっさかりたア、涙でてくらア……」

「とんでもなく棒読みだし、滅茶苦茶にやにやしてるように見えるのは、僕の脳みそがぶっ壊れちまったからですかね」

「そうじゃねエの？」

「皮肉だっつもの！ わかれよバーカ！」

「アハーツ、敬語じゃねエのって、ルリ子犬時代を思い出すなア、シミジミくるぜエ」

だ、駄目だ、失礼をして怒られて、それで抜け出し、和花の様子を見に行くという作戦も失敗に終わった。なぜ私は精一杯怒った風にしても、本気で怒っていると受け取られないのだろう。番頭さんしかり、海尋しかり、越坂部さんしかり……。

「うし」

私の肩から腕を放し、越坂部さんが立ち上がった。スーツに付いた埃をはらう動作をして、

「じゃあ、そのカツコのまま、リベラメンテに行つて来いよ」

不敵な笑みを浮かべて、私を見下ろす越坂部さん。

「な、なんでメイド服のまま外行かなくちゃいけないんですか……」

そう、私が着ているのは、女性ものの制服だった。極度の緊張状態で、注意力が散漫になっていたのが敗因だ。

「こつちより、あつちのほうが人手足りないもんでよ。それに、昨日近くで銀行強盗あったっていうじゃねエか。ちいとばかり男手を増やした方がいいと思つたもんでな」

悪だくみしてそんな笑みは消え、硬い表情になる。若い男が殆どいない銀行で、実際に強盗に遭遇したので、私も表情が固まる。

「お前はよ、今のカッコじゃどっからどう見ても女の子だが、いざというときはな、ちゃんと男見せるってこと、オレアよく知ってっからよ。適任だろウ」

「いや、そんなこと、わかりませんけど……。女装で外に出る意味もわかりません」

「いやいや。男のカッコで行ったら、逮捕されんぞオ。想像してみろ？ 従業員通路に知らない男がいたら、ウチの危機管理能力が優秀な娘たちはすぐ通報するだろうさア。けどよ、そのカッコならなんの問題もねエ。新人だと思われて、先輩から指示ももらえろ。最高の労働環境が待ってるぜエ？ ノドカの様子も見れるしなア」

変態前科がつくのは勘弁願いたい 過失とはいえ、もうついている気もするが し、和花の様子も気になる。そしてこの服ではアンダンテで労働することは不可能。向けられた信頼に応えるべきだという思いと、事情をなにも訊かずに和花を雇ってくれた恩に報いなければという気持ち、私の中にはある。こうなるともはや、選択肢なんてものは、最初からないんじゃないか。

私は拳を握りしめた。こういふときこそ、覚悟が必要だ。

「わかりました……。バレないかが不安ですけど、リベラ、行きます

……」

喉がすごく乾いている。口の中が乾燥して、声が上手く出なかった。

「オオ！ それでこそオレの相棒！」

サムズアップしてきたので、私も弱々しいサムズアップで応える。

「いつから相棒になったのか知りませんがね」

「つたく、憎まれ口叩きやがってエ。素直じゃねえなア」

「僕は常に素直ですよ」

「……可愛いけど、可愛くなくなったな、オメエ」

越坂部さんはげんなりしている。

「可愛くなくて、全然、まったくもって結構です。むしろ、そつちが望ましい」

「又アアー……言葉少なな素直クールだったのになア、いまじゃ生意気ツンデレかア」

越坂部さんは顔に両手を当てて、天井を見ている。何世紀か前の絵画みたいなポーズだ。ニツチな喫茶店を経営しているからか、越坂部さんの口からはしばしば、というか割と頻繁にオタク用語が出てくる。私もここで働いていたので、その分野には明るい。

「誰がツンデレだ、誰が。てか僕がいつあなたにデレるっていうんです」

私は声を張り上げた。越坂部さんは腕を組む。

「ノー、いまオレに対しての好感度教えてくんねエ？ それによって攻略フロチャ変わってくるだろ。正確なデレポイント割り出すには、現状を知らないとなア」

うなりながら真剣な様子で考え込み始めたので、私の背筋が凍った。

「男にデレられる算段を、そんな顔して立てない方がいいと思いますよ」

「オメエが訊くからだろーが。訊かれたことには常に真剣に答える、それがオレのポリシー」

「そうですか……てつきり会わない間に男色趣味になったのかと」

「ハッ……オメエ相手なら、男色にならないかもなア」

沈黙。

そして重たい空気。

ふたりで数秒睨みあい、そして、ふっ、とどちらともなく笑い声をもらした。

「ククク、姿は変わってもルリはルリだなア。オレに物怖じしない若い奴なんて、やっぱオメエくらいだ。久しぶりに会えて、スツゲエ、嬉しかったぜエ」

真正面から純度の高い好意の言葉をぶつけられると、頬が熱くな

る。

「あ、いや、こっちこそ。なにも連絡しなくて、ごめんなさい」

越坂部さんの顔を直視できずに、私は床を見てしまう。良く磨かれていて、きれいだ。

「いいさア、音信不通になるくらいだ。オメエ自身、なんかケリつけなきゃいけねエことでもあつたんだろ」

ケリをつけること。それは本来、私が私を殺すことだった。

不思議な縁と友人たちに助けられて、私は別の形でケリをつけることができた。

そうして、いま越坂部さんと再会している。

胸になにかが渦巻いてきて、涙が、こぼれそうになってくる。

「ケリ、つきましたよ。お陰様で」

「そうかア。そりゃ最高だな」

私の足に、高そうな、刺しゅう入りのハンカチが降ってきた。

「そいつは饞別だ、涙拭いたらいつてこい」

そんなことをやさしい声で言われたら、ダムが決壊するに決まってるじゃないか。

おかげで、貰ったばかりの制服が濡れてしまった。

ああ、これだから、昔馴染みは、やっかいなのだ。

第10話 無邪気な笑顔と、メイドの将来

覚悟を決めた私だが、さすがに本気でこの格好のまま外に出るほど正気を失ってはいない。私は越坂部さんの言うことを一から百まで素直にこなす、真正直人間などではないのである。流石にもう、自律した思考をすることくらいできる。

私は更衣室まで戻り、脱ぎ捨てたジャケットから携帯電話を取り出した。そしてとある人物へと電話をかける。五秒ほどコールすると、相手が出た。

『ん、ん。も、もしもし？ 私メリー、いまリベラメンテにいるわ』

店内のせわしない雑音が、現在位置を説明するメリーの声と合わさって聞こえてくる。本当に繁盛しているようだ。

「よかった、和花のことも追跡できたんだな。さつき店名も場所も教えてなかったからちよつと不安だった」

その私の言葉に、雑音を覆い隠すくらいの大きなため息が返ってきた。

『おばか紳士に講釈をしてあげる。いきなり和花さんがいるところに瞬間移動したら、お仕事の邪魔になるじゃないの。ユキからあなたの服を依頼してきたお店を聞いて、ネットで検索してね、リベラメンテって店名を見つけて……店の裏手の路地裏に転移したの。地道にたどり着いたのよ。褒めてちょうだい』

私のミスで余計な手間をかけてしまった。これからお願いをしようというのに……。

「それは、かなりすまないことをした……えつと……そういうことをしておいた分際で言いづらいんだけど……すまないことが重なっ

てしまいそうです、お嬢様」

『……言つてごらんさい』

予想外の返答にとまどう。メリーのことだから、私に頼りすぎよ！ と叫ばれるのを予想していたのだが。

「いま、俺がいるところに転移して、そんでリベラメンテまで連れて行つてもらえないかな」

三秒ほどの沈黙。

『はー……さては、あなたまた面倒くさいことになっているのね。』

姫宮さんじゃないけれど、石動いしずくさんの御被いをおすすめしたいわ』

「その件については後でちよつと真剣に考える。なんにせよ、このままじゃ外に出れないんだ。来て、くれないか」

私がそうつぶやいて数十秒後。私の視線の先。扉があいたままのロッカーの中にメリーが現れた。携帯を片手に持つて、キョロキョロしている。ちよつと慌てているような顔だ。

「おかしい……失敗かしら。私が間違うなんて……もう一度……」

ぶつぶつ独り言を漏らしているメリーが目をつむった。

そしてすぐさま両目が開かれる。

「……………そのあなた」

細い腕が、ゆっくりとこちらに伸びてきた。

「このあたりで、ちよつと頼りなげな男の子を見なかったかしら

? 細くて、色白の」

「……………メリー、俺だ」

ぎよつ、とメリーのただでさえ大きな瞳が、見開かれることによりサイズアップした。

「その声は、というよりその姿……外に出られないわけね……変態」
パシヤ。

「撮るなよ！ っと……大声出しちゃまずいんだった」

越坂部さんにバレたら面倒だ。私はとっさに両手で口をふさいだ。「いいじゃない。ちゃんと運んであげるのだから。これはその対価だと思つてちょうだい。それにしても……キュロットスカートとは

考えたわね」

私が着用している謎のボトムスをさわりながらメリーが言う。

「なんのことだ？」

「いいわ、知らなくて。とつとと行きましょ。脱いだの、その紙袋にいれて、ほら」

着ていた男物の服を、制服が入っていた紙袋に詰め込み、いつもどおりメリーの手を握る。もうすっかり慣れたものだ。

まばたきを終わると、視界は期待通り一変していた。

「ここはトイレか」

私とメリーがおさまっても、まだ余裕のある広さの個室だった。パツと見ただけでも清掃が行き届いていることが分かる。

「……とつとと出るわよ。誰にも見られないうちに。男ってばれたとき面倒になるから」

メリーが個室の鍵を開けてそつと外に出る。メリーの言動から察するに、ここはおそらくリベラメンテの女子トイレなのだろう。これ以上は分析するのも恥ずかしいし、失礼なのでやめておく。

私はメリーに手を引いてもらい、目を閉じ、そろそろと歩いた。なんとか誰にも目撃されずにトイレから離れることが出来た。私を安全圏まで送ってくれたメリーは、とてととと急ぎ足で客席に戻っていった。邪悪な笑みと共に。

例の写真が悪用されないといいが……。

とりあえず、従業員の人に声をかけてみよう。越坂部さんが私のことを電話かなにかで知らせてくれているだろう。

洋風の雰囲気でもとめられた廊下を歩く。絨毯はもちろんフカフカだ。体重に負けず、自らの強さを私の足に示してくる。

そうして、しばらく廊下を歩いているとスタッフオンリーと書かれたドアを見つけた。うる覚えだったのだが、なんとか道順は正しく思い出せていたようだ。ノックをして、返事を待つ。

「はいはい、どちらさまでございましょうか」

ゆつくりと開けられたドアから姿を現したのは、

「あらまあ、瑠璃様ではありませんか。お久しぶりでございます。随分とご無沙汰でしたが、まさかこんな形で再会できましようとは。人生はなにがあるかアンノウンですねえ」

にこにここと笑う、かなり親しげなメイドさん。

「は……へ？」

いやまで、おかしいだろう。確か最後に会った時は……ええと。

「年齢計算は止めていただけるとハッピーなのですがねえ。うーん、ですが久方ぶりに私からお仕置されたいとかー、そういうマゾヒスト的思考をしているのならば、私はストツプ推奨をストツプしますけれど」

えへへへ。と真つ白な笑顔を浮かべるメイドさん。笑顔と裏腹に言動は真つ黒。そう、彼女には悪気がない。素なのだ、これが彼女の通常運転。

「久恵さん！？　なんで、どうしてここに？」

メイド服を着こなし、やんわりとした空気を漂わせている、一見すると少女のような女性。漆原久恵さん。私が武鎧家にいた頃に、親身になってお世話してくれた恩人であり、私の精神構造の上書きを遂行した教官でもあるメイドさんだ。彼女の年齢はプライバシーに配慮し、ふせる。ただ一つ言えるのは、着ているメイド服が違う以外、彼女には変化ひとつ見えない。そっくりそのまま、当時のままの久恵さんだ。老いを知らないのか、この人は。

「副業です。瑠璃様は家出中でございますし、浄美様には専属の執事がいらつしゃいますから。メイド長である私は……このように、久恵さんはメイドエプロンのポケットから携帯を出して操作し、その画面を私に見せた。そこには、世界中で使用されているSNSサイトによく似たデザインの

「め、メイッター？」

とやらが映し出されていた。家事や庭の手入れなどに関する質問がいくつも寄せられている。私が見ているちよっとの間にも、仕事

を済ましたという旨の報告が飛び込んできた。

「はい、浄美様きよみが武鎧メイドの為に手作りになられた、セキュリティ性ガチガチのプライベートネットワークツール、？メイッター？です」

「パクリ丸出しなのは、きよの遊び心なのか？」

「どうでしょうねえ。浄美様が暇つぶしでこさえたものですから。テスト版はネーミングのオマージュ元より生まれが早いとかうんぬん仰られていたような。まあさておき。私は、このように部下メイドたちの質問に答えるお仕事をさせていただきます。お屋敷の作業効率は上がりましたけれど、そのおかげで、私個人としましてはめつきり退屈なのですよ」

悩ましげに眉をひそめる久恵さん。情報化社会がメイドの業務形態にまで影響をあたえているのか。介護施設などでロボットも普及し始めているし……人の手伝いを職とする彼女らの将来は、どういう展望をみせるのだろうか。

「って、その疑問の答えがこれか……」

メイドが好きな一定の層がいる限り、この商売は衰退しないだろう。

「あの、瑠璃様？ 物思いにふけるのは良いですけど、例の元呪いの和服人形の女の子、ここで働かせるんですか？」

久恵さんは和花のことを知っているのか。アリスから聞いたのだろうか。

「うん、アリスから聞いたかもしれないけど、和花は呪いが解けて、外に出られるようになった。けど、まだ俺以外の人間に慣れていないみたいでさ。わが子を崖から突き落とすみたいで心苦しいんだけど、人間に慣れさせるために接客業やらせようかなって。和花は西洋のモノに興味あるみたいで、そっちに頭がいったのか二つ返事で承諾してたよ」

「……道理でというか……瑠璃様は、肝心なところでは女性に気が利きませぬのね。浮いた噂のひとつもアリスちゃんから聞き出せなく

て私としてはがっかりです。まあ、女の子二人と同居しているという面白おかしい情報はリークしていただきましたが」

ふう、と物憂げにため息をつく久恵さん。

「和花ちゃん、接客が出来なくてキッチンでお皿洗っていますよ。応援に行くなら可及的すみやかに、かつ、最大限優しく労わってあげてくださいね。そのあと、桐彦さんからのお達し通り、馬車ウマのごとく労働していただきますので、ご覚悟を」

ああ、魔獣が牙をむいている……。笑顔がこれほどまでに恐ろしく感じる経験は、人生において少ない方が建設的であろう……。というより、自分の保身よりも、いまは和花だ。私の勝手な判断でかなり無理をさせてしまったようだ。久恵さんの言うとおり、早く声をかけに行こう。紙袋は、無人のスタッフルームの中におかせてもらった。

キッチンの入り口まで久恵さんに案内され、それから和花を呼び出してもらおう。すると、見慣れた顔が、見慣れない姿でやってきた。「あ、おに……?」

とっさに和花の口を手でふさいだ。当の和花はキョトンとして、私の顔を見つめている。和花はいつもの着物姿ではなく、黒と白を基調とし、アクセントに赤いリボンがしつらえてあるメイド服で身を固めていた。その姿まさに、メイド・オブ・メイド。日頃からおかしい私の脳内言動がよりおかしくなるくらいに魅力的だった。洗い仕事をしていたからか、長い髪を後ろで束ねているのも新鮮だ。「すまん、今は他の呼び方で頼む」

和花がこくこくと頷いた。聡明かつ、頭の回転が速くて助かる。私を一目見ただけで正体を見ぬいてくれたことは、本来、胴上げを全力でやったのちに抱きしめてやりたいくらいに嬉しいのだが、今この状況で？お兄様？などと呼ばれようものならば、この店のメイドたち（久恵さんを除く）に変態扱いされること必至。

すでにこの状況をキッチンの奥にいる眼鏡メイドさんに睨まれてしまっているため、和花を連れて、そそくさと、久恵さんと出会っ

た部屋に行くことにした。

スタッフルームは、いまだ無人だった。三人で横一列に、和花を間に挟むようにパイプ椅子に座る。そして私は、和花にこのバイトを推薦した本当の理由を話し、

「和花、すまない。キミのためと思ったんだけど……だいが無理させて」

和花に向けて頭を下げた。

「いいえ、わたしがまだ人に慣れていないって、わかっていたんですね。おに、お姉さまには隠し事、できないみたいです」

眉を下げて、和花が微笑んだ。

「わたしの呪いを解いてくださって、その後の生活までお気になさらずとも良いのにと、ちょっとだけ思いましたけど。その遠慮もしたくないくらいに、嬉しいのです。なので、がんばりますよ！ お皿洗いは毎日お姉さまと一緒にしていますから、得意分野ですしね」
「和花ちゃんの洗い方は早くて丁寧って、キッチンの子が話してたよ。初めてのバイトらしいのに即戦力になってるなんて。ウチに欲しいくらい」

久恵さんが柔らかな手つきで和花の頭をなでた。最後の一言に本気の色が宿っていたのが大いに不安である。

「え、えへへ」

和花は顔をほころばせている。久恵さんのあまりに警戒心のない手つきに、喜んでいいのかもしれない。久恵さんは和花が元呪いの人形だということを知っている。けれど、平気で触る。そういう人だから、アリスも、超能力を手にした私もすんなりと受け入れてくれたんだろう。

久恵さんがいるなら、和花を安心して任せられる。

ならば、私は自分の戦場に赴かなければなるまい。

私は久恵さんから伝票を受け取り、部屋の隅にあった姿見で身だしなみを整える。久恵さんと和花の女性陣による監査も入ったので、より万全のものとなった。いざ、出撃である。

私は背筋を伸ばし、努めてメイド然とすることに集中した。廊下を歩くときでさえ気を配る。どこでご主人様に見られるかわからないのだ。お客様の夢を壊してはいけない。

「らっしやーせー！ 旦那様三名追加ですー！」

「らっしやあーせえー！」

テーブルがいくつもあるフロアに着いた途端に響く、必要以上に愛らしい声。内容が居酒屋レベルなのはどいう事態だと問いたたしたくはあるが、ここはリベラメンテだ。そうだった。清廉なメイド像を演じる必要なんて皆無だった、そうだった。

「おしほりいかがつすかー？」

「鳥のなんこつ揚げつすねー！ かあしこまりいー！」

「生みつつ入りましたあー！」

「らっしやあーせえー！」

店内は混雑し、まるで忘年会が開かれている居酒屋のようなムードである。ただ、店員のボイスが総じてフニヤフニヤと気の抜けてしまうような声であることを除けば、だが。酔っ払い旦那様の顔はそろいもそろって真っ赤でクニヤクニヤである。メロメロである。

あれか、越坂部さんのことだから？ 年末だし、忘年会マネしてみつかア。オレも麦酒のみてえシイ？ とか適当なこと言ってるリベラがこうなってしまったのだろう。和花には辛い仕事をさせた……。しかし、本当に繁盛してるのだな。喫茶の原形をとどめてないけど。そうして私がぼーっと突っ立っていると、

「そのきみ、注文を頼むよ」

と呼ばれてしまった。初仕事だ。無礼のないようにしなければ。

「いらっしやいませ、旦那さ……ま……」

「こんにちは、新人さん。こんな大変なキャンペーンの時に初出勤とは、きみもついていないね。アイスコーヒーを頼むよ」

「海尋^{みひろ}てめえ……、工藤さんがいながらなに浮気してやがる」

脳でろ過する余裕もなく、言葉が喉から漏れていた。

私を指名したご主人様第一号は、大学での友人第一号でもある眼鏡美男子、海尋であった。隣席におかれているリュックの中に恋人がいながら、現実の女性（私は男だが）にうつつを抜かすとは。しかも口ぶりからして常連さんか、こいつ。

「うん？ 僕の名前を知ってるのかい？ それに茉莉のことも……さては、たびたび僕にクラッキングを仕掛けてくる身の程知らずか、それとも茉莉の存在を嗅ぎ付けてきた企業のスパイかい？ やれやれ、前者ならともかく後者なら、完膚なきまでに社会生活を送れないようにしてあげよう。さ、きみはどちらなんだ」

「見当ハズレだ。どちらでもない。分からないか？」

「……いや、まったく。僕は現実の女の子の顔をあまり憶えないものでね。それから、僕には大切な彼女がいる。もし僕に恋しているのであったら、あきらめた方が賢明だよ」

「くっ……」

顎に手を当てて首をかしげるといふ、すかしたポーズを決めながら煌めく笑顔が腹立たしい。海尋には名前を教えていなかったので、正体を伝達するのが難しいことに気が付く。あれ、というか、つかつかとなつて声をかけたはいいが、正体なんてばれない方がいいのではないか！？

「海尋さん、相席良いかしら」

「おっ、どうぞ。偶然だね」

私が狼狽していると、メリーが海尋の正面の席に座った。

「偶然じゃないわよ、ひ・つ・ぜ・ん。私は誰かさんに頼まれてここに来たんですもの。和花さんがこのお店で働いているの」

「和花ちゃんが！ それは見てみたい……」ということは、彼に頼まれたのか。昨日電話を貰ったが、彼は元気か？ ちよつと声がかすれていた気がするんだ。あの細身だとすぐに風邪を引きそうだからね。今頃顔を真っ赤にして苦しんでいないだろうか、気が気でないらしい」

ちら、とメリーが私に視線をやって。くふふ、と声を抑えて楽し

そうに笑った。

「顔を真っ赤にしているのは事実ね。心配なんてされて照れているんじゃないかしら」

「ん？ 彼とテレビ電話でもしているのかい？」

メリーは携帯をいじりながら海尋と話していた。壮絶に嫌な予感がする。

「ふふー、安心して、紳士は元気よ、ほら見てっ、これが撮りたてピチピチの写真」

私が、あっ、と声を出した時には遅かった。携帯のモニタは海尋に向けられていた。

そしてメリーが先ほどしたのと同じように、海尋が私に視線を送る。

「く、くくく……め、メリーちゃん、だめだろう……本人の前で正体を明かすとか、だめだろう……ふ、ふふふ。きみ、アイスコーヒを、ゆっくりでいい。笑いがおさまるまで、しばらくかかりそうだ、ふ、ふふつ。まさか、ホントにきみだったとはね、くく、ふふふ」

「ぐぐううう、かつ、かしこまりましたあっ！ アイス一丁っ！」

「……あざーっすう！」「……」

私の感情が入り乱れた怒号は、即座にガムシロップより甘い声に上書きされてしまった。

第11話 作為的な勘違い

「お待たせしました、旦那様、すぐに飲んで、すぐにお帰りなさいませ。むしろ帰れ」

私は注文されたコーヒーを力強くテーブルに置きつつ、言う。

「きみの態度までアイスになってないかい？　なんだ、変にトゲがあるなあ、今日のきみは。接客をするにあたってツンデレ属性でも付与されたのかい？」

ペしりとストローで頭を叩いてやってから、ガムシロとミルクをテーブルに置いた。ツンデレじゃないってのに。

「海尋」

私は少しの緊張と、今まで隠していた後ろめたさを感じながら、声をかけた。

「ん？」

「私の名前、知りたい？」

「おお……一人称まで女の子になるとコレはもはや。ほんと、茉莉子に見せてあげたいなあ」

「ちやかすなよ……こちとら真剣に緊張してんだぞ」

「知りたい。僕はきみの友達だから。教えてくれるのなら、知りたい」

ストレートなまなざしに、顔が火照る。同世代の人間からの真っ直ぐな好意というものを受け取りなれていない私は、心臓を跳ねさせてしまった。体が熱い。この格好のせいもあるのだろうが、精神が少し女性寄りになっているのかもしれない。移ろいやすい難儀な精神だ。

私は海尋の耳に口を寄せて、

「武鎧、瑠璃」

忌々しい五文字をつぶやいた。肩から重たい荷物を降ろしたよう

な感覚がした。騒がしい店内、傍にはメリーと海尋しかいない。カミングアウトにはちょうどいい状況だったのである。予想通りというか、海尋は私の顔を見て、口を開けたまま動かなくなってしまった。

と、思いきや。爛々と目を輝かし、ガツシと私の腕をつかんでくる。そしてそのまま、私の耳元でささやく。周りのお客様の目線と先輩メイドたちの不審な目が怖い。

「ぶが……きみがあの……ルリカ、なのかい？」

「……うん、その、痛いから、離せ」

「すまない、と言って海尋は手を離れた。そして、そうか、と一言おいて、

「瑠璃ちゃん、きみに話すべきことがある。武鎧の人間なら、知って損はない話だと思う」

武鎧が知って損はないこと……。私は、ごくりと唾を飲んだ。

浄美の力に、なれるかもしれない。

「わかった、仕事が終わったら、話してくれ旦那様」

「ああ……名前、ありがとう、瑠璃ちゃん……男だ男だって言うだけ、きみはやっぱり女の子だったんだね」

ぎりぎりぎりぎり。

「いった！ いててて！ 手の甲をつねらないでよ！」

「メイドに失礼を働くからでございませう。デートのお誘いならもつと丁寧にしないと、乙女は逃げちゃいますよ？」 旦那様」

「やっぱり女の子、とか何を言うかコイツは。」

でも、海尋はルリカ＝正体が男というのを知らないのです、この反応が自然なのか。

なんだか変な誤解が誕生したような気がする。

しかし、この誤解はさすがにここで撤回できない。

私と浄美は性別を世間的に入れ替えている。

現在、私は表舞台から抹消されているし、きよは男として世間に認知されている。

私が性別を偽る意味は、すでに形骸化している。

ゆえに、ヒーロー部の面々のようにただの高校生などになら、

私の正体と性別どちらも知られたとして、問題にはならない。

だが、海尋は日に何百万アクセスの情報サイトを運営する管理人特別な人間。

素性を明らかにした以上、海尋には勘違いさせたままの方がよいのかもしれない。

私は、友人をだまし続けなければ、ならないのか。

「メリーちゃんもどさくさに紛れてつねらないように」

「ちえ」

メリーがあわてて身を引っ込めた。男二人の会話に退屈していたのかもしれないな。

「ちよつと！ 新人ちゃん！ みーくんとなにイチャイチャしてるの！」

「ぐぶっ！」

私は突然、首根っこをつかまれる。引っ張られた襟元が気道に食い込んでむせる。どうやら私より低身長の人から引っ張られたようで、危うく仰向けにすっころんでしまいそうになった。

み、みーくん？

「サチ、今日も元気だねえ」

私が後頭部を床に激突させるかもしれないなかったというのに、海尋の声は呑気なものだ。私の後ろから移動し、海尋に詰め寄ったメイドの、丁寧に編まれた三つ編みが私の腰を直撃した。痛くないけど、

髪の毛ながっ！

「みーくん！ サチを無視してなんで新人ちゃんと話してるのよお！」

「この子、僕の友達なんだ。それにサチを無視してたわけじゃないでしょ。サチのシフトはこれからなんだから」

「そつ、それはそうなの……でも、ほんとに、友達なの？」

猜疑心なごぎしんモ口見えの視線が、私の頭あたまの先からつま先までねぶるよう
に移動している。勘弁だ、恋愛系の女性の嫉妬は怖い。本当に、怖いのだ。否定は早い方がいい、なにごとくも。

「同じ大学の、友達で、その好きとか全然まったく、塵ちりひとつ、毛ほどもないので。ご安心なさってください……ええと」

「サチって呼べばいいの、先輩をつけるとさらにベストなの」

睨みつける両目の鋭さは変えずに、サチ先輩が言う。三つ編みがたゆたっている。なげえ。

「サチ先輩が思うような、不埒な間柄ではないので、どうか、ご勘弁を……」

「……ふーん、なかなか丁寧な謝罪なの。許してあげてもいいの。でもでも、デートっていうのはなんなの？ 聞き捨てならないの」

怒ってらっしゃる。ののの、の連打波状攻撃である。サチ先輩の口調は相手を脱力させる効果、もしくは私は免疫があるタイプだが、ない人をひっじょうに苛立たせる効用があるだろう。イコール、私は攻められながらも、どこか気が抜けていた。

「アレはからかいついでに言っただけです。好意を持った男女が遊びに行くのがデートですよ。それなら、私はあらゆる意味で該当しませんので。聞き捨ててください」

「むー……新人ちゃん、サチより大人っぽくて、みーくんの好みそ
うなの、不安なの」

「あー、可愛いよねえ、瑠璃ちゃん」

海尋よ、空気を読もうな。あとで、憶えとけよ。まじで、恨むからな。

「可愛いつて言ったの！ 聞き逃さなかったの！ な、殴るの！」
「ちよ、いやその、サチ先輩の方が断然、スーパー可愛いです！」
拳を、どうか拳を降ろしてくださいませ！

「そんなの知ってるの！ みーくに言われなきゃ意味ないの！」
そうして私が三つ編み魔人に詰め寄られていると、

「紳士つたら受難ねえ」

「あつははー」

畜生、ドサドコンビは頼りにならんぞ！

どうする、どうする、どうする　　つぐえ。

「はいそこまでー」

「じよ、女王様なのっ」

私の隣でサチさんが、宙に浮いた足をバタバタさせてもがいている。
る。

「ふたりとも、お仕事しないと、清掃用のバケツにドタマ突っ込み
ますよ」

一日に二度も首根っこをつかまれるとは、知る由もない。背後に
いる人物の心当たりなんて一つしかないので、私は振り返らず、す
みませんでした！ と叫んで仕事に戻った。サチ先輩も同様だった
ので、久恵さんの人心掌握は、よく行き届いているようである。

「ご、ごめんなの。新人ちゃんに女王様の恐怖を味あわせちゃった
の」

「いえ、慣れてますので……」

仕事に戻って、すれ違いざまにサチ先輩が謝ってくれた。海尋の
ことを抜きにしたら、いい人かもしれない。だが、警戒は怠らない
ようにしよう。油断は大敵だ。

それにしても、女王様か。妙にしっくりくるのがすごいな。正体
は本物のメイドなのに。

「なにか失礼な考えをしている電波を受信しました」

ワタシハ、チュウモン、トル。リヨウリ、ハコブ、ソレダケ。

「あら、急に圏外になりましたねえ。よきかなよきかな」

コワイ、チヨウ、コワイ。ア、ナンカ、リクエストサレタ。

……………ダンナサマニ、ニヤンニヤン、イウ、ソレダケ。

「ニヤン、ニヤン」

「きみ、新人だね。硬いよ、笑顔お。もっと柔らかくニヤンニヤン言わなきゃ」

オマエ、イツカ、ミテロ。グタイテキニ、ヘイテンゴ、ミテロ。

「ニヤンニヤンなの」

「ひゅーっ！ さすがサッチー！」

ダンナサマカラ、ハナレル、ワタシタチ。

「フオロー、アリガト、サッチー」

「お詫びなの。どうして片言なの」

恐怖から、と口にしたらさらなる恐怖に襲われる気がした。

「あらあ〜？」

オット……………テーブル、フク、ソレダケ……………。

無心になること数時間。おやつ時間に差し掛かった頃。

「サチちゃん！」

「わあ、来てくれたの！」

サチ先輩の？の？のアクセントに慣れてきた私は、遠くでかわされるファンとおぼしき人とサチ先輩の会話を聞き流していた。お帰りなされた旦那様が座っていたテーブルを一生懸命拭く。こういう単純作業は無心になれていい。

端から端へー、キュキュキュ。

「サツキちゃん、今日は、部活終わりなの？」

「ううん！ これからだよ！ 近くの公園でやるから、ちょっと会いたくて来ちゃった！」

いや、いやいや……………いや。まさか、そんな。海尋に続いて、なあ。ありえん、ありえん。

「これ。差し入れ」

「ありがとうなの、アオイちゃん！ アオイちゃんのクッキー、サチ大好きなの！」

「……さち、あの人」

「ん？ あっ、そうそう！ 新人ちゃんなの。お仕事そつなくこなしててね、すごいの！」

「そう」

なにやら足音が近づいてきているような気がするが、気のせいだ。気のせい気のせい。よし、五番テーブルはピツカピカである。やはり、私の身体に染みついた掃除スキルは死に絶えていなかったようだ。むかし培った杵柄に感謝してやまない私は、一テーブル拭き終えたことだし、そそくさと休憩室に逃げようかと思うのですが、久恵様、許可を。近くでパフェと生ビールを運んでいた久恵さんにアイコンタクトを試みる。

「サボりって、よくありませんよね。私、真面目な人が大好きですわ」

許可を つ！

ぼむん、と優しく肩を叩かれる私。背後には、人の気配。振り返ってはいけないと、首の骨が可動を許さない。ボタンを押された目覚まし時計のように、私は一言も発することが出来なくなっていた。「ゴミ、ついてた」

気づいてない、のか。ただ親切心でゴミを落としてくれただけなのか。ならば、まだ回避できる可能性がある。このまま、お辞儀をするふりをして顔を伏せながら、休憩室にいったん逃げ込むという選択肢ツ！ あとで久恵さんに絞られることを考慮すると、あまりに無謀すぎる作戦だが、男には、やらなきゃいけないときがあるのだ！

実行！ お辞儀、駆け足、いける、これはいけるぞ！ ついてきている様子もない！

じゅ、順調すぎて自分の強運が怖いぜ！

「うあっ」

突然、頭頂部に衝撃。まずい、お客様が誰かにぶつかってしまった！

今度こそ、すっころぶ！　そしてすべて終わる！

「おっと」

男なのに、腰に手を回されるとは……早くお礼とお詫びを……っ、のわああああああああああああ、まじかああああああああああ。

あああ。
私はとっさに、私を助けてくれた男性から離れ、顔を伏せた。

「大丈夫？　よけなくて、ごめん」

「……………」

この声、そして、一瞬顔を上げたときに見えた黄色髪は、どう考えても。

「光司？　新人さん怪我してない？」

「新人ちゃん、平気なの？」

心配してくれるのはありがたいのだが、そして申し訳ないのだが、逃げ場が、どんどんなくなっていく。後輩に女装復活がバレ、新しくできた後輩二人にも女装がバレ、とどめにサチ先輩に女装がバレて、リベラメンテ追放、そして留置場へ……。

「あー、なんだあ、へっへー」

「っ！」

いつの間にか素早く、私の懐に潜り込んだ、真っ赤な髪の毛少女が笑う。この笑顔と頭髪を、見間違っわけなどない。姫宮皐月その人である。しゃがんで上目づかいで私を見ている。

そして五秒の沈黙後、

「ルリカちゃんじゃないですか」

にんまりににんまりしている姫宮。

「違います」

「ああ、瑠璃さんかあ！　サチと同じとこで働いてるんですね」

私の前にいる山吹くんがなにやら普通に納得している。私の否定

は無かったことのようにスルーされた。私は観念して顔を上げることにし、苦笑いしながら山吹くんと目を合わせる。山吹くんは、似合ってますよ、と言ってくれた。複雑である。

「んつと、新人ちゃんって、みんなと知り合いなの？」

サチ先輩が、ヒーロー部の面々、そして私を見てから姫宮に尋ねた。

「うん！ 私の先輩かつ、ヒーロー部の後輩だよ！ 私たちにとっても新人ちゃんだねー！」

「ほわー、何だかすごい偶然なの。……む、コレ以上立ち話していると怒られるの、新人ちゃん、お仕事に戻るの」

「はい、サチ先輩。冷静な判断、お見事です」

「ふふーん、褒めても何も出ないの」

私はウインクするサチ先輩の指示に従い、メニューを眺めているお客様の方へと歩こうとした。しかし、姫宮に呼び止められる。

「その、あのね、私たち、お店の近くの公園で活動してますから、仕事終わりにでも見に来てくれたら嬉しいですよ！」

こんな年末にも活動しているのか。先輩かつ後輩の部活動風景を、年末の思い出に記憶するのも、悪くないだろう。

「……余力が残ってたら見に行きます。店出てすぐ右にある公園ですよね、お嬢様」

「そうです、ありがとうございます！」

そして仕事に戻った私であったが、メリー&海尋のいるテーブルに自然と合流し、ちらちら私を見ながらティータイムを楽しんでいたヒーロー部諸先輩方に羞恥を感じて、めっきり仕事の効率を落としてしまったのである。

この世に、？ドジっ子メイド？という属性が存在していなかったら、いまごろ数人の旦那様に殴られている所であった。特に、私水を洋服にかけてしまっても笑顔を崩さない旦那様には、大粒の涙が出た。本当にいるのだ、こんなにも寛容な御仁が……世の中は、捨てたものではない。

第12話 悪意の存在と、善意の涙

結局、一時間くらい羞恥タイムは続いた。

たったいま、割れていたグラスくんやお皿さんをこっそり集めて治療し終えたところだ。不審に思われてしまうかもしれないが、やはり、壊れたモノを見て見ぬ振りすることはできない。スタッフルームに食器が点在している光景は変だが、これほど変なら誰かがキッチンに持って行ってくれるだろう。私をもって行って、怪しまれたら面倒だ。

スタッフルームの窓からは、強い夕日が差し込んでいる。自分の着ているメイド服の白い部分に光が当たり、ノスタルジックな雰囲気を感じた。

姫宮たちはすでに店にはいない。部活動を公園で行っていることだろう。

そしてとうとう、私と和花の勤務時間が、終わりを告げることとなった。私は和花と互いに健闘をたたえ合い、ハイタッチを交わした。

勤務終了となったが、思わぬ形でダブルブッキングになってしまった。海尋から話を聞くか、姫宮の部活動風景を見学するか。この二つの約束のどちらも破りたくないのだが、現状の体力と、海尋が言っていた？武鎧の人間なら知って損のないこと？が気になる。もし、よっぽど重要なことなら、自分に着けていた枷を外して、きよに連絡しても、許されるだろうか。わからない。でも、いまは話を聞きに行こう。

私と和花は、待っていてもらったメリーと海尋に近づき、声をかける。店内はまだ賑やかだが、周りを気にせず会話できる環境の都合のよさに、またお世話になることになりそうだ。

「瑠璃ちゃん。お仕事、お疲れ様」

「サンキュー。でもお前のせいで余計な疲労を積み重ねた気もする」
私は文句を言いながら、メリーの隣に座った。六人掛けの座席なので、私の隣に着物姿に戻った和花が座る形になる。対面には、いっになく真剣な顔をしている海尋の姿がある。

「臯月さんと約束していたみたいだけど、そっちはいいのかい？」

「お、海尋って姫宮と知り合いなのか」

「うん。臯月くんたちはサチの友達だからね。きみの後輩だとは思わなかったよ」

「変なところで繋がってんだな、俺たち。つと悪い、話逸らした。先に海尋の話を知りたいんだ。何時間もかかったりはしないだろ？」

「そうだね、すぐ終わらせる。えっと、話っていうのはね、この前キミたちが僕と茉莉、そして？もう一つの世界？を助けてくれたことについてなんだ。あれから、僕の世界を壊そうとしたウイルスを解析した。その結果わかったのは、あの技術は？ただの個人ではなしえないもの？だったってこと」

個人では無理な技術、ということか？

「でもでも、海尋さんは、おひとりで茉莉さんやI - イデアdeaを制作したんですね。ひとりでも、すごいもの、つくれるんじゃないですか？」

和花が率直な疑問を海尋にぶつけた。

「それは、僕が天才で、莫大な資金、そしてとあるパトロンがいるから。こんなに開発条件に恵まれた個人が何人もいたら、この世界では日夜、技術革新が起こってしまうよ」

大層な自信だが、実力に裏打ちされているので、突っ込む余地はない。事実だろう、と納得してしまう。羨ましいな、コイツのこの自信は。

「僕レベルの天才、そして個人という枠に収まらない開発環境。それに符合する人物と言ったら、僕はたった数人しか知らない。そのなかには、武鎧淨ぶがいじょうという名前が挙がる。きみは、彼を知っているね」

「ああ、よく知ってる。俺は、ジヨウの兄だから」

海尋はこくりと、うなずき、わたしの顔を真っ直ぐ見る。

「率直に言う。彼の名前が、ウイルスの中に隠されていた。彼はプログラムミングからロボット設計など、すべての？技術？に精通した類まれなる天才だ。ゆえに」

「あいつは、誰かのことを傷つけようとするやつじゃない」

そうは言いつつも、私の心は揺れていた。私は、男女逆転計画以降、きよと会話を交わしたことがない。心が変貌していたとしても何もおかしくはない。

「そう怖い顔をしなくていい。僕は、彼自身がウイルスに自分の名前を隠す、なんて行動をするわけがないと思っっている。僕が思うに、これは宣戦布告のようなものかもしれない」

「宣戦布告？」

「ああ。僕が攻撃を受けた日、僕の知る技術者たちも攻撃を受けていたんだ。全員、なんらかの損害を負った。……その攻撃の痕跡にはどれも等しく、武鎧浄の名前があった。これはね、武鎧重工を陥れるための陰謀なんじゃないかって」

「ふうん。いわば悪意的なステルスマーケティング、みたいなものかしら。武鎧の評判を貶めたいどこかの天才が、武鎧の名前を使って破壊活動をした、ということね」

そういうとメリーはメロンソーダを飲み、しかめっ面をした。

「失敗とは言い切れないかなあ。現に疑り深い技術者が、武鎧浄の存在について不平を漏らしているよ。日頃の嫉妬が噴出しているのかもしれない。これは悪意ある何者かの行為が、一定の効果をもたらしたことを意味してる。それで、ここからは完全に僕の憶測なんだ。憶測だから、はっきりとは明言できないけど」

「……けど、なんだ」

「天才は、個人ではないかもしれない。悪意は、ひとりのものではないかもしれない」

「……企業、か？」

私の言葉に、海尋はうなずく。

「天才が集団を指揮する軍隊、それが企業のひとつの形だね。天才が悪意を持つ者だとしたら企業の行動はそれに準ずる。武鎧重工とタイムンを張れる企業、それはどこだかわかるかい？」

「……………」

武鎧がいなくなつて、一番得をする企業の名前がちらつく。

ヨーゼフ・ファクトリー。

武鎧とともに技術畑最高峰の双壁をなす、巨大企業。

そして、裏社会系都市伝説の温床でもある。

「僕もいろいろ警戒したいし、言葉には出さない。きみの顔、どうやらわかつてくれたようだし、これで僕は満足かな。武鎧も、まあ、こんなことで揺らがないだろうけど。知っておいてもいいだろう？ 悪意の存在を」

私が見つけたところで有効活用できそうにならない情報だが、これは淨美にとっては意味のあるものになるのか。自分の無能さが、悔しい。

「ふふ、たんに僕が武鎧に恩を売りたいだけなんだけどね。ウィルスの解析データを売り渡したりしたら、茉子の素体開発費用にあてられるし！」

グツとガッツポーズを決めながら欲望を解放している眼鏡野郎。

まあ、その正直なところは嫌いじゃない。

「現金なやつ。今度、伝える機会があったら、ジョウに言ってみる」

「うん……さ、僕の話は終わりだよ。みんなのどこに行くといい」

私は海尋にお礼を言ってから席から立ち上がり、スタッフルームへと向かった。

すでに懐かしさすら感じる男物の服を回収し、メリーと和花と共に、裏口からリベラメンテを出た。

鉄の扉がしまると、さて、とメリーが一言発して、

「んじゃ、仕事にいじめたお返しに、秘技、見せてあげるわ。瑠璃の着ていた服を貸してちょうだい」

「……なんか悪いこと企んでないよな」

「あらあ？ そんな口きいてしまうのね。いいのよ、べつに。これから公園のトイレで着替えようとかな、甘い魂胆を胸に秘めているのだと思うけど。公園沿いの道路、交通量多いわよ。不特定多数の変態さんに、変態紳士の痴態がもくげ」

「オーケー。わかった、わかりました、はい、どうぞ」

手に持っていた紙袋をメリーに渡した。メリーは嬉しそうに受け取った。

「お兄様ーっ、なんだか、わくわくしますね。秘技ってなんなんでしょう、ふふ」

和花は仕事を終えた解放感からか、いつもの三割増しくらいのハイテンションだ。両手を合わせて、楽しそうに体を揺らしている。

「ああ、ドキドキするな。色んな意味で」

正直、ものつすぐおおく、不安である。

「ほいじゃ、やるわよ」

メリーは紙袋から私の着替えをひつつかむと、私のはいているスカートに手をかけた。

「うえっ！」

私が驚嘆の声をだしたときには、メリーが手に持っていたものと、私が着用しているものが入れ替わっていた。本当に一瞬、まばたきの間。いつもの瞬間移動を、文字通り肌に触れるような、ごく間近で見ると、すさまじいものがあった。

「まるで忍者ですね。へ、変化の術というやつですか？」

「ちがうわ、秘技よ」

「キテマスね……」

「でしょう……」

メリーは、わなわなと感動している和花に両手を、手のひらを見せるようにして向けた。和花もふるふると同じようにしている。年末特番にここまで影響されるオカルト人形たちは、おそらくこの子らだけであろう。……アリスは、多分平気……。今度、百均でメリ

ーと和花ににサングラスでも買ってやろう。あと、デカくなる耳も。店を出て徒歩三分もしない距離に、活動場所とっていた公園があった。三人でぞろぞろと公園の中に入ると、中心にある大きな木の傍で姫宮がトングを片手に、小さな子と喋っているのを見つけた。姫宮の足元にはゴミ袋があつて、そこには空き缶、お菓子の空き袋などのゴミが詰められている。ずっと清掃活動をしていたのだろう。「おーい！ 姫宮あー」

私は離れた場所にいる姫宮に手を振ってみる。そうすると、すぐに反応を返してくれた。私たちは姫宮と子供のいる場所まで歩いた。「その子、どうしたんだ？ 友達か？」

「はいっ、たつたいま友達になつたばかりですっ。ねー、ユウキくん」

ユウキくんは黙りこくり、うつむいている。背丈からして小学生だろう。なぜか服に汚れが目立ち、ひざをすりむいている。

姫宮は返事をもらえなかったからか、ちょっとだけ残念そうな、悩ましげな顔をして、

「ユウキくん、もうすぐ夜になっちゃうし、そろそろお家に帰えりなね。冬はねー、すぐ暗くなっちゃうからね。お姉ちゃんねえ、ユウキくんくらいの頃、迷子になつて泣いちゃったもん」

「……お姉ちゃんも、泣くの？」

ユウキくんは地面を見たまま、姫宮に尋ねた。姫宮は地面を見ているユウキくんの前にしゃがんで、満面の笑みを浮かべた。

「泣くよーっ！ うーんと悔しいときとか、すっごい悲しいときとか、お化けが怖いときとか！。理由はいっぱいあるけど、泣くよっ」

「そっか……お姉ちゃん、また、ここ来てくれる？」
ちいさな、願いのような質問の声に、

「うんっ、ぜええったい、来る！ ヒーロー部の姫宮皐月をだせーっ！ っってお姉ちゃんの学校までユウキくんが来てくれてもいいからね」

姫宮は相変わらずの大声で、大ぶりのジェスチャーを交えながら

応えた。

「わかった。またね、お姉ちゃん」

ユウキくんはそれだけ言うと、公園から走り去ってしまった。少年の足音がトタトタと遠ざかっていくのが聞こえる。

私は、ユウキくんの後姿を見送るように、立ち上がった姫宮の顔を見た。

笑顔だ。

だが、晴れていない。

「メリー、和花、すまない夕飯の支度をしてなかった。部活動は俺が担当するから、ふたりは夕飯の準備をしておいてくれないか」

「えー！ もう、早く言つてよ。なんだか一日中、紳士に振り回されちゃったわねー、私。その紙袋よこしなさい。持つてつてあげる」
メリーは半ば強引に、メイド服の入った紙袋を私からひったくると、和花の手を握った。

「あつたかいもの、作つて待つてますからね。姫宮さんも、よかつたら」

「くはあ！ 和花ちゃんは優しいなあ。光司と葵も誘つていいかな」
白い息を吐いて身もだえしながら、微笑む姫宮。

「ええ、ぜひぜひ。じゃあ、お鍋にしましょ。あれならみんなで楽しく食べれます」

ふふ、と口元をおさえて和花が笑った。和花の鍋は、とびきり美味い。

「それじゃ、いくわね。風邪ひかないうちに帰つてきなさいよ」

メリーの言葉が私に届くと同時に、二人の姿がこつぜんと消えた。「さ、姫宮。なにがあつた」

「いやあ、ユウキくと昔の私が重なつて、大人げないことをしました。私の超能力、憶えてますか？」

「憶えるっていうか、師匠に弟子入りしてたんだから、程度の差はあれ何でもできるだろ。特に姫宮は」

「違います。コレです」

姫宮は右の拳をかためると、自らの顔面に、勢いよく打撃を浴びせた。

バチィ、と火花が姫宮の頬で爆ぜた。姫宮の上気した頬から白い煙が立ち上っている。

だが、姫宮の頬が腫れあがることはない。姫宮の身体が揺らぐこともない。

これは、姫宮が最初に手に入れた超能力。

特撮ヒーローのごとき防御力と、力強さを手に入れる超能力である。

ダメージを受けたときは、特撮ヒーローらしく火薬が炸裂するエフェクトが発生する。

「これを使って、ユウキくんを虐めてた子たちを怯えさせちゃいました。相手が鉄パイプだったんで、力、使っしなくて」

虐めていた子たち。小学生。そして、あのユウキくんの年頃。私の中でパズルが完成する。

姫宮の声は震えている。肩は、声以上に震えている。姫宮はよれよれだった。上着のボタンがとれていたり、黒いストッキングも伝線していた。

「先輩に憧れて、ヒーローなんて名乗ってますけど、ダメダメっす。もういま、体に、力、入らなくて……っ……ぐ、すっ」

「姫宮……」

姫宮が、声押し殺して涙を流している。さっき、少年の前では笑顔だけを浮かべていた赤い髪の快活なヒーローが、いまは悔しさをにじませる、高校生の女の子になっている。

「駄目なんて、いうな。駄目なんかじゃない」

「……ぐす……ひっく……」

私は姫宮のそばに近寄った。端正な顔は涙にぬれ、強さと、威勢が削げ落ちていた。

虐め。私にも経験がある集団暴力のこと。

そう、私にも。

姫宮、にも。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8521r/>

ねじまげメガロマニア

2011年9月30日03時21分発行